

『新古今和歌集』の配列に対する修辞技巧の役割
——歌枕・体言止め・本歌取りを中心に——

同志社大学大学院文学研究科
国文学専攻博士後期課程
ジョルダノ・ジュセツペ

目次

凡例	一
序文	三
第一章 『新古今和歌集』における歌枕	
はじめに	七
第一節、歌枕の広義と狭義	八
第二節、「新古今時代」の「名所歌枕」の意義	一〇
イ、土地に関する伝承に起源がある歌枕	一二
ロ、場所の地理的な特徴または、場所の名に起源がある歌枕	一三
第三節、歌枕の意義変化と歌風変遷	一六
第四節、先行研究の再検討	一九
第五節、『新古今集』の歌枕	二二
第六節、『新古今集』に於ける歌枕の配分と配列	四九
イ 歌枕を使う和歌の配分	五〇
ロ 歌枕を使う和歌の配列	五二
まとめ	六〇
第二章 『新古今和歌集』における体言止め	
はじめに	六三
第一節、『新古今集』の歌人と体言止め	六四

第二節、体言止めを使う和歌の配分と連続	七〇
第三節、体言止めとして使われる言葉——その一・語彙の分類を中心に	七九
第四節、体言止めとして使われる言葉——その二・配列を中心に	八九
第五節、体言止めの構成要素——「時」・「場」・「物」	九七
第六節、体言止めを使う和歌の統語論上構造	一〇六
まとめ	一一五

第三章 『新古今和歌集』における本歌取り

はじめに	一一八
第一節、本歌取りの定義	一一九
イ 文学的的技巧としての本歌取りの発展	一一九
ロ 「本歌」と「参考歌」	一二二
第二節、『新古今集』で見られる『古今集』の痕跡	一二四
第三節、本歌としての『古今集』の名歌	一二七
第四節、二首の本歌を取る和歌	一三三
第五節、和歌連続の配列基準としての本歌取り	一三八
まとめ	一四六

結論	一四八
----	-----

資料

①	新古今和歌集の歌枕——五十音順	一五一
②	歌枕を使う和歌一覽	一五九
③	新古今和歌集の歌枕——頻度・五十音順に	一七八
④	体言止めを使う和歌	一八五
⑤	体言止めを使う歌人	二〇一
⑥	体言止めとして使われる言葉	二一四
⑦	体言止めの構成要素——「時」・「場」・「物」	二二四
⑧	体言止めを使う和歌の統語論上構造	二三三
⑨	『新古今和歌集』における本歌取	二四九
⑩	本歌の出典	二六三
参考文献		二六八

凡例

本調査は、伝蜷川新右衛門尉親元筆『新古今和歌集』列帖装写本二帖を底本とした、久保田淳校注『新古今和歌集』二冊、新潮社、1979.3・9、による。

・ 『新古今和歌集』以外の和歌の本文は、次のテキストによる。

・ 『伊勢物語』、片桐洋一校注・訳『竹取物語』福井貞助校注・訳『伊勢物語』、高橋正治校注・訳

・ 『大和物語』清水好子校注・訳『平中物語』（新編日本古典文学全集）小学館、1994.12

・ 『金葉和歌集』、川村晃生、柏木由夫、工藤重矩校注『金葉和歌集・詞花和歌集』（新日本古典文学

大系）岩波書店、1989.9

・ 『源氏物語』、阿部秋生「ほか」校注・訳『源氏物語』（日本古典文学全集）六冊、小学館、1994.3-

1998.4

・ 『古今和歌集』、小島憲之、新井栄蔵校注『古今和歌集』（新日本古典文学大系）、岩波書店、

1989.2

・ 『後撰和歌集』、片桐洋一校注『後撰和歌集』（新日本古典文学大系）岩波書店、1990.4

・ 『詞花和歌集』、川村晃生、柏木由夫、工藤重矩校注『金葉和歌集・詞花和歌集』（新日本古典文学

大系）岩波書店、1989.9

・ 『拾遺和歌集』、久保田淳、平田喜信校注『後拾遺和歌集』（新日本古典文学大系）岩波書店、

1994.4

- ・ 『千載和歌集』、片野達郎、松野陽一校注『千載和歌集』（新日本古典文学大系）岩波書店、1993.4
- ・ 『万葉集』、佐竹昭広「ほか」校注『萬葉集』（新日本古典文学大系）、四冊、岩波書店、1999.5-

2003.10

序文

『新古今和歌集』の編纂過程は、後鳥羽院（在位・寿永二年（一一八三年）八月二〇日・建久九年（一一九八年）一月十一日）の勅命によって、建仁元年（一二〇一年）十一月三日に開始した。本歌集の編纂事業のために、先に設立された和歌所の寄人中から、六人の撰者が選ばれた。しかし、撰者よりも後鳥羽院の方が編集権は強かったと藤平春男氏は指摘している。

最初の選歌草稿は約一年余院の厳密な詮衡を経て部類に廻され、その部類も屢々院の指示を得て行われており、かつ部類終功前から切り続きが概ね院の指示で行われて、「出入如反掌」（『明月記』承元元・一・一・八）であったから撰者の直接の編集権は甚だ弱かったと想像される。（藤平春男『新古今和歌風の形成』明治書院、1991、p.32-313）

小島吉雄氏は、源家長の『家長日記』や藤原定家の『明月記』などの当時の資料を調査し、『新古今和歌集』に精選した和歌を部類する時、撰者たちが後鳥羽院の決めた幾つかの特定の規則を実行しなければならなかったと述べた。詳しく言うと、①前の勅撰和歌集の和歌を入集してはいけないこと。②編纂当時の和歌を豊富に入れること。③前の勅撰集と私家集の例に従って、季節部と恋部の和歌配列に特に注意を払うこと。④季節部の和歌配列を決定するとき、それぞれの和歌の要素を利用し、四季折々のリアルな移り変わりを忠実に再現すること。

（参考・小島吉雄『新古今和歌集の撰定と後鳥羽上皇』、『新古今和歌集』、日本文学研究資料叢書、有精堂、1980、p.148）

十世紀から十四世紀までの歌集と百首歌の配列基準を論考した小西甚一氏は、『新古今和歌集』の撰者たちは、和歌配列が本歌集の享受者に時間の流れの印象を与えるように、和歌を並べたということを述べた。（Konishi Jun'ichi, Robert H. Brower and Earl Miner

（ed.）, "Association and Progression: Principles of Integration in Anthologies and Sequences of Japanese Court Poetry, A.D. 900-1350", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 21, pt. 1, 1958, p. 67-127）周知のように、和歌配列基準の立場から考察すると、『新古今和歌集』の最初の六卷（四季部）は古典和歌の並べ方の技術において頂点に達したと見なされている。（参考・Brower H. Robert, Miner Earl, Japanese Court Poetry, Stanford University Press, Stanford, California, 1961, p. 324-329）

その事実は、藤原俊成の教えに沿ったものと考えられるであろう。それは、俊成が名作の誉れ高い『古来風抄』で次のように述べたからである。

歳月の改まり変る花紅葉につけても、歌の姿詞は思ひよそへられ、その程、品品も見るやうに覚ゆべきものなり。春の初め、雪のうちより吹き出でたる軒近き紅梅、賤の垣根の梅も、色はことごとながら、匂ひは同じく手折る袖にも移り、薰り身にしむ心地するを、花の盛りになりぬれば、吉野の山の桜は残れる雪にまがひ、まして雲居の花の盛りは、白雪の重なれるかと心も及び難きを、春深くなるままには、井手の山吹に蛙の鳴き、岸の藤波に夕べの鶯春の名残惜しみ顔なるなども、さまざま身にしむ心地するを、岩垣沼の杜若、山下照らす岩躑躅などまで、程につけては心移らぬにあらず。

卯月にもなれば垣根の卯の花に郭公のうちしのび、籬の撫子の朝露に開けたる程などは、また類忘れぬべきを、さまざまならぬ道の辺の棟の花の風にうち薰り、庭の紫陽花のよひらに置ける露に、夕月夜のほかに宿れるなどはいみじく捨て難く見ゆるを、五月の三日、九重のうちを思ひ出づれば、橘のうち薰れる軒近く、菖蒲の御輿かきたてたるに、御階の前より南ぎまに、何となき時の花を左右に立て渡したる程、菖蒲の香に薰りあひたる程など、たとへんかたなきものなり。夏深くなりぬる夕暮に、池の蓮の色々開けたるは、水さへ薰る心地するなどは、この世のほかまで思ひやらるるものなり。

秋の風立ちぬれば、籬の女郎花に虫の声々露けく、野辺の秋萩に鹿の妻問へるなどは、さらにいふべきにもあらず。紫苑、藤袴などはさまざまならぬも、昔を忘れず夢の枕に通ひけんもあはれ浅からず。秋深く、やうやう時雨ゆくままには、四方の山の梢色深くなりゆき、籬の菊、霜に移ろひゆくなどは、いふべきにもあらぬを、外山の時雨もことに濡らしけるにや、白膠木の紅葉の分きて色深きを折りて見れば、枝ざしなどはなつかしからずながら、色の深さもあはれに、櫨の立枝、檀の紅葉などは、安達の原まで思ひやられ、まして楓の紅葉は、葉の様、枝、茎まで、近くて見るさへあはれになつかしくぞ見えたる。

冬になりゆくままには、蘆の枯葉に霜置き迷ひ、水際の氷に閉ぢられ、まして雪降りぬれば、巖にも咲く花と疑はれ、終の緑の松の上の雪などは、年さへ残りなくなるにつけても、袖の氷も見にしみまさる心

地してこそは覚ゆるやうに、歌の姿心も、ただかやうによそへて心得れば、まことに姿高く、清げにも、艶にも優にも、またさまでならねど、ひとふしをかしき様も、ほどほどにつけつつ、よそへられぬべき事なり。(楠本不美男、有吉侯 藤平春男校注・訳『歌論集』
日本古典文学全集 小学館 1975.4 p.371-373)

小西氏は、『新古今和歌集』の配列で他の特徴も見られると論考する。例えば、或る意味で、羈旅部では空間的な動きが感じられ、恋部では人間の心の動きが感じられる。(Konishi Jirichi Robert H. Brower and Earl Miner (ed.) "Association and Progression: Principles of Integration in Anthologies" and Sequences of Japanese Court Poetry, A.D. 900-1350" Harvard Journal of Asiatic Studies 21 (1958) p.67-127)要するに、『新古今和歌集』とは単なる和歌アンソロジーではなく、強い一貫性を持ち、最初から最後まで通読することが出来る優れた作品だと認めなければならない。

しかし、『新古今和歌集』を詳細に調べると、撰者たちが和歌配列を決定した時、小西氏の割り出した基準(時間の流れの印象・空間的な動き・人間の心の動き)に限ったわけではないという強い印象を受ける。それは、幾つかの和歌連続、すなわち連続的に並べられた和歌、の一貫性を高める他の要素も認められるからである。本集に対して特に重要な役割を果たすものは、三つあると考えられる。それらは、「歌枕」と「体言止め」と「本歌取り」である。その修辞技巧の痕跡は古代和歌にも見られるが、いわゆる「新古今時代」をその修辞技巧の最高峰と見なしてもよからう。

本研究において、『新古今和歌集』の和歌の配列に対する上記の修辞技巧の効用を分析し、それらは撰者たちの撰定に影響を及ぼしたかどうかを明らかにする。

さて、本学位論文の構成を説明する。まず第一章では『新古今集』における歌枕を調査し、どのような歌枕が詠まれているかということ明らかにする。そして、その歌枕はそれぞれの使い方によって分類されるかどうかということも解き明かす。このように、どのグループの歌枕が詠まれているかということによって、それぞれの和歌連続の調子が変わるか変わらないかということを確認にする。すなわち、歌枕の存在は『新古今集』の和歌配列にどのような影響を与えるかを明らかにする。

第二章では『新古今集』における体言止めを考察する。より詳しく言えば、『新古今集』における体言止めを使う和歌はどのように配分されているか、体言止めの語句として使われる言葉は基本的にどのような言葉であるか、そして第五句で同じ言葉やイメージを使う和歌が連続する場合、その連続する和歌が本歌集の享受者にどのような印象を与えているか、さらに、統語構造、すなわち文中の単語・語群の配列様式とその機能を中心にして調査をし、統語論上構造が共通する和歌が連続的に並べられる場合は単調な和歌配列になるか、あるいはダイナミックなそして感動させる和歌配列になるか、というような点を明らかにする。

最後に第三章では、『新古今集』における本歌取りを考察する。先ず、『新古今集』で本歌としてどのような和歌が採られたか、そしていわゆる新古今時代になると前時代の勅撰和歌集の中で特に重視された勅撰集があったか、ということ明らかにする。その後、本歌取りが『新古今集』の配列に対してどのような役割を果たしていたか、つまり撰者たちが和歌配列を決定した時、本歌取りの存在にも注目したかどうかを明らかにする。

このように、『新古今集』の和歌配列に「歌枕」と「体言止め」と「本歌取り」というような修辞技巧はどのような影響を与えたかということを確認にする。

第一章 『新古今和歌集』における歌枕

はじめに

本章の主な目的は、『新古今和歌集』（以降『新古今集』）に於ける歌枕が本勅撰集に対してどのような役割を果たしているのかを解明する。それを明らかにするためには、調べなければならない点が二つある。一つは、『新古今集』の歌枕の一覧を作りながら、一番代表的な歌枕はどれか、さらに、それらを使う和歌の特徴は何かということだ。もう一つは、歌枕は和歌を撰入・配分・配列した寄人の選択に対してなんらかの役割を果たしていたかどうかということである。

歌枕は平安時代の初期から歌詠みの大切な要素として考えられていたものの、当時の歌学書では歌集に撰入された和歌の配列・配分と歌枕との関係は殆ど論じられていない。しかし、『新古今集』を通読してみれば、歌枕が他の技巧とともに、和歌の配分と配列に大きな影響を及ぼしているという印象を強く感じる。

詳しくは後述するように、「歌枕」とは和歌的な意義を持つ地名だった。その意義は、地理的な特徴があるということ、または名前が特徴的であるということ、そしてその場に関する民話があるということに由来するものである。それを、『新古今集』を編纂した歌人は、和歌の配分と配列を定めた時、どの点まで認識して生かしたのだろうか。残念だが、その質問に答えるのに当時の文献は余り役に立たない。なので、歌枕を中心にし、『新古今集』の和歌の配分と配列を具体的に分析することしかない。もちろん、歌枕の役割を考察する前に、歌枕の本質を論究しなければならぬと思う。

さて、本章の構成を次に述べる。第一節では、『能因歌枕』などのような当時の作品を通し、歌枕を定義する。第二節では、いくつかの例歌を挙げながらいわゆる「新古今時代」の「名所歌枕」の意義を明確にしてみる。そして第三節では、時代が経つとともに歌枕意義と宮廷の歌風はどういう風に変わってきたか、ということ論じ

る。第四節は、先行研究の再検討を中心にする。第五節では、『新古今集』に於ける歌枕に関する調査の後、本勅撰集の代表的な歌枕を考察する。最後に、第六節では、『新古今集』に於ける歌枕の配分と配列を詳述する。このような過程から『新古今集』に対する歌枕の影響を明瞭にしようとする。

第一節、歌枕の広義と狭義

歌枕とは日本古典和歌の特有の要素である。歌枕が使われるようになったのは「万葉時代」からだと考えられているが、和歌技巧としての発展が頂点に達したのは、いわゆる「新古今時代」だと言えるだろう。(参考 小原幹雄「新古今時代の歌枕」『國文學解題と』)

『新古今集』
1974、p.336f)

現在、「歌枕」という語は和歌に詠まれる名所を意味する。しかし、平安時代の『能因歌枕』や『梁塵秘抄』などの作品を調べると、当時は「歌枕」の意味範囲はこれよりもっと広がったことが分かる。すなわち当時「歌枕」とは歌に詠まれた「名所」という狭義に限らず、単なる歌語という広義でも使われていたのだ。

このことを明らかにするために、歌枕に関する一番古い作品である能因法師の有名な『能因歌枕』という歌学書の一節を挙げる。能因は、

関をよまば、あふさかの関、白河の関、衣のせき、ふはのせきなどを讀べし。

河をよまば、よしの川、たつた川、おほ井川などをよむべし。

橋をよまば、はにはのはし、はまなのはし、さのゝ舟はしとも讀べし。

山をよまば、吉野山、あさくら山、みかさ山、たつたやまなどをよむべし。

森をよまむには、神なびのもり、いく田のもり、しのだのもりなどよむべし。

瀧をよまば、いはなみのたき、おとなしのたきなどよむべし。

野をよまば、さが野、かた野、みやぎ野、春日野などよむべし。

里を讀ば、しのぶの里、伏見の里、いくたのさとなどよむべし。
と書いたが、

天地をば、あめつちといふ。道 たまほこといふ（略）。夜 むばたまといふ（略）。山 あしびきといふ（略）。日 あかねさすといふ（略）。朔日（ツイタチ）ゆみはりといふ。月ひさかたといふ（略）。晦（ツゴモリ）ありあけといふ。風 はるかぜ、あきかぜ、ときにしたがふ。
（参考）片桐洋一編『歌枕を字づる人のために』世界思想社、1994年、p.35

この能因の教えによると、一方では関、川、山のようなところを和歌の題にする場合、それぞれの場面に相応しいとされる名所はある程度限られていたという。例えば、関の場合は「逢坂の関」や「白河の関」などが使える。或いは、川を詠む時、「吉野の川」や「立田の川」などが使える。しかし他方で能因は、天地を示すなら「あめつち」、道なら「たまほこ」などのような表現を使った方がいいと指示を下している。同様に、後白河天皇の撰による『梁塵秘抄』にも

近江にをかしき歌枕 老曾 轟蒲生野 布施の池 安吉の橋 伊香具の野 余吾の湖の 志賀の浦に 新羅が建てたりし持仏堂の金の柱（卷二・三二五）
というような指示がありながら、

春の初めの歌枕 霞たなびく吉野山 鶯 佐保姫 翁草 花を見すてて帰る雁（卷一・一三）
という歌も載せられており、平安後期では地名と地名以外のものが、一括して歌枕と呼ばれていたことが分かる。なぜなら、後者の歌によれば、「霞たなびく吉野山」はもちろんだが、「鶯」「佐保姫」「翁草」「花を見すてて帰る雁」という歌語も歌枕と呼ばれるからである。

しかし、本研究の目的は『新古今和歌集』における「名所歌枕」とその影響を調べることであるため、ここでは、片桐洋一と他の学者の例に倣い、狭義の歌枕、すなわち「名所歌枕」を歌枕の定義とする。
（片桐洋一「歌枕・吉野」『古典文学に見

第二節、「新古今時代」の「名所歌枕」の意義

平安時代より、名所歌枕（以後「歌枕」）は歌詠みの重要な要素となったと断言することが出来る。古典和歌における歌枕の重要性は、和歌本来の構造から来るものであると考えられる。周知のように、短歌は三十一字に過ぎない短い歌であり、それは詠み人の悲しさや嬉しさ、希望や失望、恋や恨みなどの複雑な感情を完全に表そうとするには非常に狭苦しい空間だ。加え、古典和歌の世界は美的側面から見ても非常に閉鎖的であった。このことに関して、佐佐木忠慧は次のように述べている。

和歌の美的世界の成熟の予見は伝統の内部にのみ保障されていたといえる。閉ざされた和歌史の伝統が和歌の制作そのものを規定していたのであるから、和歌史は和歌自身の自己目的性の要請実現せんために、和歌史の発展は一種の詩的合理化（integration）の過程を歩まざるを得なかった。かかるシステムのなともいえる詩的合理化が可能であった与件として歌枕の心象風景の固定という要因が考えられるのである。（佐佐木忠慧『歌枕の世界』桜楓社、1979年、p.3031）。

したがって、古代から歌人は数多いイメージと人の心の中での感情のニュアンスを限られた空間に凝縮するために、できるだけ意味深いことばと表現を利用するようにしてきた。

本歌取り同様に、歌枕も和歌の三十一字の窮屈な限界を巧みに広げるための不可欠の手段となったと言えるだろう。なぜならば、歌枕は各地の特質を生かしつつ、様々な意味の響きを表す文学的なテクニクだからである。そもそも、名所歌枕は何であろうか。答えは一一一三年に源俊頼の書いた歌論書『俊頼髓脳』の一節で見つけることができる。

世に歌枕といひて所の名書きたるものあり。それらが中にさもありぬべからむ所の名を、とりて詠む常のこ

源俊頼『俊頼髓』、橋本不美男、有吉保、藤平春男校
注・訳『歌論集』(日本古典文学全集)小学館、1975、p.115)

となり。それは、うちまかせて詠むべきにあらず。常に、人の詠みならはしたる所を、詠むべきなり。

俊頼によると、自分が実見できない名所を詠むことは普通であると考えられる一方で、歌人が自分勝手に名所を選んではいけなとしている。つまり、和歌で歌枕として詠まれる名所は、伝統的に他の歌人によって詠まれてきた名所しか使ってはいけないとあるのだ。逆に言えば、あまり評判を得ていない地名は、慣れない印象を与えてしまうので、歌詠みの対象として許されない。このことに関し、安田純生は以下のように述べている。

地名を詠み込むときや、その地名と、ある景物、ある発想とを結びつけるときには、しかるべき典拠が必要なのです。典拠になるのは、先例となる歌です。いいかえれば、以前に作られた歌によって、いわば和歌の世界に登録されている地名、登録されている歌い方に拠らなければならぬわけで、その登録された地名、歌に詠みこんでもいい地名が歌枕だと言えます。ですから、歌枕は、和歌に詠み込まれた地名ではなく、歌に詠み込むのが可能な「よみならはしたる」地名だといったほうが、よりの確なものです。そういった地名の一覧が、俊頼のいう「歌枕といひて所の名書きたるもの」であつたでしょう。(安田純生『歌枕の風貌』(安田純生全集)千原書房、2009.12、p.10)

この事から、「本歌取」と「歌枕」の間に密接な関係があることが分かる。

第一章の冒頭で、歌枕を「和歌に詠まれる名所」と定義したが、各地名全てが必ずしも歌枕になるわけではなかったということに留意しなければならぬ。地名が歌枕になるためには、その土地が何らかの和歌的な意義を持たなければならぬのだ。換言すれば、歌枕となるべきその土地は和歌のために相応しい景や情が必要だったということだ。(参考)谷知子『和歌文化の基礎』(『和歌文化』2006.5、p.101-106)

しかし、和歌的な意義を持つ地名とは何であろうか。それは、和歌的な隠喩を作るのに相応しい地名であるということである。つまり、地理的に何らかの特徴があるということ、または名前が特徴的であるということ、そしてその場に関する民話があるということなどである。

『新古今和歌集』における和歌を通じ、この三点のケースを考察したい。

イ、土地に関する伝承に起源がある歌枕

土地に関する民話に起源がある歌枕の中に「塩釜の浦」という興味深い名所がある。まずは次の藤原兼実の和歌を参照されたい。

降る雪に炊く藻の煙かき絶えて寂しくもあるか塩釜の浦（新・六七四・藤原兼実）

「塩釜の浦」は陸奥の歌枕であり、現在の宮城県のおぼ中央に位置する塩釜市を指す。

この地名が頗る有名になったのは、源融のおかげだ。嵯峨天皇の十二男である融は塩釜の浦に強い愛着を抱き、京都にこの土地の風景を模して作庭した六条河原院を建てたと言われている。

このことは『伊勢物語』の八十一段で以下のように語られている。

むかし、左のおほいまうちぎみいまそかりけり。賀茂河のほとりに、六条わたりに、家をいとおもしろく造りて、すみたまひけり。十月のつごもりがた、菊の花うつろひさかりなるに、もみぢのちぐさに見ゆるをり、親王たちおはしまさせて、夜ひと夜、酒飲みし遊びて夜明けもてゆくほどに、この殿のおもしろきをほむる歌よむ。そこにありけるかたぬおきな、板敷のしたにはひ歩きて、人にみなよませはててよめる。

塩竈にいつか来にけむ朝なぎに釣する船はここによらなむ

となむよみけるは。陸奥の国にいきたりけるに、あやしくおもしろき所々多かりけり。わがみかど六十余国のなかに、塩竈といふ所に似たる所なかりけり。さればなむ、かのおきな、さらにここをめでて、塩竈にいつか来にけむとよめりける。

（片桐洋一校注・訳『伊勢物語』、高橋正治校注・訳『天和物語』、清水好子校注・訳『平中物語』、『新編日本古典文学全集』小学館、2012、p.183-184）

融は、現実の景色を元にして人工的な景色を再現した。だがそれは、人造の場所というだけではなく、特別な感情を味わうことのできる理想的な場所として考えられている。後述するが、このような現実の仮想化こそ歌枕の

精髓である。右の段における翁（おそらく業平自身）の和歌にある、「塩竈にいつか来にけむ」という句は、突然別世界に舞い降りたような気がして驚いている人の気持ちを強烈に感じさせるものだと言えるであろう。

当時も実際の塩釜で見られた塩釜の煙や海人船は少し悲しい印象を与えるものだったかもしれないが、融が六条河原院に塩釜の浦を再現した基本的な目的は、自分と友達を痛快な環境で喜ばせようというものだった。要するに、融の塩釜の浦の心象風景は決して悲しい印象を与えるものではなく、逆に愉快的心象風景だったと言える。しかし、融の死去の後で、『古今和歌集』に載せられた紀貫之の和歌によって、塩釜の浦のイメージは根本的に変わってしまう。

君まさで煙絶えにし塩釜のうらさびしくも見えわたるかな（古・八五二・紀貫之）

貫之によると、融が亡くなった今、昔は非常に美しいところと見なされていた塩釜の浦は淋しげな雰囲気しか漂わない場所となってきたと表現されている。

そうすると、『伊勢物語』の八十一段と貫之の和歌を念頭に置けば、兼実の和歌に現れる塩釜の浦が当時の読者の心にはどのような暗示を与えていたか良く分かるであろう。兼実の描写した冬の景色では、融の優雅なライフスタイルの魅力と貫之の和歌の悲しさを同時に響いていると言える。（参考 檀音「歌枕「塩釜の浦」の古今的展開」『四語七』文化 Issues in language and culture 7号、2006.3、p.179-196）

ロ、場所の地理的な特徴または、場所の名に起源がある歌枕

場所の地理的な特徴または、場所の名に起源がある歌枕の例を挙げるなら、「末の松山」が特に興味深いであろう。実は、この歌枕は地理的な特徴のために使われる場合もあれば、その名のために使われる場合もあるのだ。先ず「末の松山」が、地理的な特徴から歌枕となったものの一例として、その原拠となった『古今和歌集』の和歌を挙げる。

君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波も越えなむ（古・一〇九三・よみびと知らず）

末の松山は陸奥国の歌枕である。『歌ことば歌枕大辞典』を見ると「宮城県多賀城市八幡、末松山（まつしやうざん）宝国寺の裏山のあたりと伝えられ、現在二本の巨松がそこにそびえているが、実際位置していた場所は確かではない」と解説されている。（久保田淳、馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、1995年、p.471）

この歌枕の和歌的な意義は、地理的な特徴に由来すると認められるであろう。鈴木日出男は次のように述べた。この地を波が越すことなどめったにないところから、「末の松山」を波が越す、といえ、心変わり、特に恋の心変わりや浮気心を意味するようになった。この一首は、この私がもしもあなた以外に浮気心をいだいたとしたら、あの末の松山を波が越してしまうだろう、の意。（鈴木日出男『古代和歌の世界』筑摩書房、1993年、p.109-110）

要するに、歌人は「末の松山」という場所が、海岸にそびえる高い山であるという自然地理的な特徴を利用して、人の心の隠喩を作ることができるということである。

それに対し、右の歌を本歌として取った寂蓮法師は、場所の自然地理的な特徴だけではなく、場所の名を「末（まつ）」という名詞と掛けるという巧妙な技巧を利用した。『新古今集』の冬歌の巻における和歌である。

老いの波越える身こそあはれなれ今年も今は末の松山（新・七〇五・寂蓮法師）

久保田淳は

末の松山を波が越えるように、老いという年の波が越えたこの身はあわれなものだなあ。今年もはや末となつてしまった。

と解釈している。（久保田淳校注『新古今和歌集』上『新潮社、1993年、p.237』）

寂蓮も本歌における末の松山のイメージを利用しつつ、本土地の地理的な特徴に限らず、土地の名までを活用し、「末」という言葉に、「年の末」の「末」と「末の松山」の「末」とをかけ、「松」という言葉に「待つ」という同音の言葉をかけたのである。

結局、歌枕にとって大切なことは、人事と自然を結びつけるメタファー（隠喩）になりうるかということであ

る。だが、それぞれの地名が詠まれれば詠まれるほど、そこは名所となり、その名所に関する隠喩とイメージが標準化されてきた。佐佐木忠慧が歌枕の発展を論じた『正徹物語』の一節を興味深い文章なので、ここに引用する。

よしの野山はいづくぞと人たづね侍らば、たゞ花にはよし野・紅葉には立田をよむ事と思ひ侍りてよむばかりにて、伊勢やらん日向やらん、しらずとこたふべき也。いづれの国才覚はおぼえて用なし。おぼえんとせねども、おのづから覚えらるれば、よし野は大和とするなる。(佐佐木忠慧『歌枕の世』(岩波書店、1974年) 20頁)

この学説によると、中世歌人は、桜花や紅葉などの特別な自然の要素に関しては、それを代表する場所を固定する必要があったことがよく分かる。たとえば、花(桜)ならば吉野、紅葉ならば立田が一番望ましい場面だということだ。

このように歌枕が規格化されるようになったのは「古今時代」から始まった題詠歌の発展にもなっていると言えるであろう。「万葉時代」と違い、「古今時代」の歌人には或る題を詠むときに、一回も訪ねたことがない場所でもそこを歌枕として詠む習慣があった。だが、そのようなしきたりが流布するにつれ、和歌に詠まれた地名は次第に現実性を失った。(同上)

時がたつと、歌人たちが現実とまったく関係のない空想的な場所を詠み始める。彼らは、それぞれの地名の特徴だけを誇張して歌に詠むのだ。そうすると、吉野はとりわけ桜花で、立田は紅葉で名所となり、それらは現実のその土地とは関係なく、ただイメージだけが利用されているのである。

古今時代の歌人たちは、名所の現実性を徐々に歪め始めたのはなぜであろうか。それは名所を理想化することにより、宮廷の歌人は「万葉時代」の歌人と違い、理想の美の世界を描写することができるようになったからである。当時の宮廷の人にとっては、雑多なものが混在する現実世界よりも美しいバーチャルリアリティのほうが欠かせないものだったようだ。『源氏物語』に見られる庭の人工美に関して論じている岩坪健氏が次のように述

べた。

大宮人は自然の移ろいに敏感で自然を愛したというが、それは現実の自然現象ではない。蚊・蠅・蚤は平安時代にもおり、枕草子には取り上げられているのに、源氏物語では登場しない。これは紫式部が創造した自然には、不愉快な虫は存在せず、源氏物語の自然美は人工美なのである。(岩坪健「歌枕と屏風絵『國文學』——特集旅と日記王朝の女流を中心に——518号、2006.7、p.100)

第三節、歌枕の意義変化と歌風変遷

前節では歌枕の使われ方、捉えられ方が変異してきたことについて述べたが、歌枕のみではなく、全体の歌風も移り変わりがあったことに着目したい。「万葉時代」では歌の特色をよく示しつつ現実を活写する歌風が見られたが、「古今時代」では個人の心理的状况を描出するスタイルへと移りを見せている。また「新古今時代」においては、自然のえも言われぬ美しさを感じさせる優雅な様式へと変遷を遂げる。この変遷の具合をさらにより解明するために、それぞれ『万葉集』・『古今集』・『新古今集』の三首の和歌を挙げ、考察したい。

富士の嶺を高め恐み天雲も行きはばかりたなびくものを（万・三二一・高橋虫麻呂）

君といへば見まれ見ずまれ富士の嶺のめづらしげなく燃ゆるわが恋（古・六八〇・藤原忠行）

あまのはら富士の煙の春のいろの霞になびくあけぼののそら（新・三三・前大僧正慈円）

三首とも富士山を詠んだ和歌だ。その三首の和歌はテーマが異なる巻（雑・恋・春）に載っているが、それぞれが富士山の違うイメージを感じさせることには変わりはないと言えるであろう。確かに、一読して分かるように、各歌における富士山の全体的な印象は随分異なる。

「万葉集」にある高橋虫麻呂の短歌は、富士山は恐ろしく高いので、雲も離れ躊躇して棚引いているという意味である。ここは、富士山の壮観に対しての歌人の気持ちが見事に分かる。それとは異なり、「古今和歌集」の忠行の和歌では、同じ富士を詠んでいる歌ではあるが、注意点が自然の景色から「君」や「恋」などの人間の心

の奥深いところに移る。忠行は富士自体を詠んでいるのではなく、自分の心を富士山に例えている。富士山から絶え間なく煙が燃え上がるように、自分の胸も絶えず最愛の女性のための恋で燃えていると。それに対して、『新古今集』における富士山の雰囲気は以前の二つとは完全に異なる。詠み人が富士山の高峰を見上げると、火山が聳える空に、いかにも春らしい色が広がっていると分かり、穏やかに恍惚と心を奪われてしまうと詠んでいるのだ。慈円のこの和歌では富士の噴煙が春の霞と融合し、優艶な情景を描く。着眼点は富士に留まらず、その周りの情景にも広がりを見せている。

以上の考えをふまえ、「新古今時代」に入ってから歌枕がどのように洗練されてきたかをより明らかにするために、次の三首の和歌も論考したい。この三首の中で共通して使われている歌枕は「逢坂の関」だ。逢坂の関は現在の滋賀県大津市逢坂山にあった関所で、大化二年（六四六）頃に設置されたといわれている。平安中期には「不破関」「鈴鹿関」「愛発（あらち）関」が三関と称されていたが、平安後期に移ると、「愛発関」に変わって「逢坂関」が三関の一つとなる。（参考）日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』（縮刷版）巻2、小学館1979.10.1981A、p.88

先にあげた「末の松山」同様に、「逢坂の関」も二面性を持った歌枕だと言える。この歌枕も、地理的な特徴だけではなくその土地の名も使えるものだからである。逢坂は最初の「逢」という漢字によって「逢う」という言葉と連想されはじめ、時と共にこの概念は固定されてしまった。言うまでもないことだが、こうした連想は特に恋の歌で良く見られることである。

「逢坂」が詠まれた和歌をここに三首挙げる。

逢坂をうち出でて見れば近江の海白木綿花に波立ちわたる（万・三二三八・作者不詳）

かつ越えて別れもゆくかあふ坂は人だのめなる名にこそありけれ（古・三九〇・紀貫之）

うぐひすの鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉しろき逢坂の山（新・一八・太上天皇）

この三首のうち『万葉集』の歌は、関を越えて逢坂を出てみると、そこには近江の海、つまり琵琶湖が広がっ

ており、湖の水面には白い波がまるで白木綿花のように見えると詠んでいる。この歌で歌人はうえの方から白木綿花を思いおこさせる琵琶湖の白い波の美しい景色を観賞し、感嘆の声を上げている。彼は斬新な感覚の持ち主だと言えるであろう。歌の中では多くの言葉を使って説明することができない代わりに、近江の海の波を白木綿花に見立て、読者にある程度自然の神秘的な調和を味わせることが出来ると言えるだろう。

ちなみに、川村晃生は歌枕に関してこのように述べている。

かりに折口信夫が指摘するように、歌枕が歌詞とともに歌の中で最も大事な生命標となるものであり、それが神霊の宿りとしての枕と語義的に共通するという信仰的側面を持つとしても、歌枕の本来的な信仰性の一端がその景観美によって形成されたことは、十分に考えられるだろう。（川村晃生『古今集・歌枕の現在―破壊と再構築―』『文学』613号、2005.6、p.113）

また、『歌枕歌ことば大辞典』で、逢坂の関は

『万葉集』でも大和から近江へ向かう旅を歌う長歌で「：近江道の逢坂山に手向けして我が越えて行けば：」（巻一三・三二四〇・三二五四・作者未詳）神に手向けをしながら越えて行く境界が歌われる。

と解説されている。

次に、『古今和歌集』の和歌に移ると、ここでは『万葉集』の歌風の特徴である純真さがもう見つけられない。貫之の和歌は、「君は逢坂の関を越えているが、実は遠くに行ってしまう。この地名は「逢う」というような約束を暗示するのに、実は失望させるものだ。」と解釈できるであろう。貫之は恋心を詠むために、歌枕の地理的な特徴より地名（逢う）から連想してこの歌を詠んだことがよく分かる。

三首目にあたる太上天皇（後鳥羽院）の歌は、一見シンプルな歌のように感じられる。春になって鶯が鳴いているが、逢坂の山にある杉の葉の上にはまだ雪が残っている、という歌だ。後鳥羽院の句の中では、逢坂の山は非常に優雅な世界として捉えられている。『万葉集』の歌人の純粋な驚愕も、貫之の知的なアプローチもここで見られない。院の和歌は優艶で澄んだテキストのように感じられるであろう。しかしながら、この歌は貫之の

和歌と比べると、意識のもっと深いレベルの連想が隠されている。

後鳥羽院のこの和歌に関して、次のように注解がされている。

人の関であるとともに、季節の関でもあった逢坂の関で、冬と春との交錯している情景。清艶な歌である。

(逢村文人校注・訳『新古今和歌集』(日) 本古典文学全集 小学館 1974年 p.43)

丸谷才一氏は、逢坂の関やなどといった歌枕を論ずるときに、後鳥羽院の同じ歌を考察し、

一般に王朝の和歌においてはリアリズム短歌の場合と異なり、地名は具体的な地理のせせこましきよりもむしろそれにまつはる連想と工夫のゆゑに尊ばれるのだが、第五句はさういふ文学的形成を示して遺憾がない。

(丸谷才一『後鳥羽院』(日) 版、筑摩書房 2004年 p.28-29)

と述べた。

この院の和歌を詠むと、おそらく人々は国と国の境にある「関所」という特色と「うぐいす」で代表される「春」と「雪」で表されている「冬」という二つの季節の移り変わりが一つの歌の中でかけられていることに無意識的に気づくかもしれない。しかしながら、それを意識化して理解するには少々時間がかかるだろう。このひと手間かかる連想が歌の奥深さを作りだし、現実をより純化して表現できるようになるのだ。「新古今時代」で、現実性の純化の過程は完全になったと言っても過言ではないかもしれない。

第四節、先行研究の再検討

本節では、田尻嘉信の「新古今集「名所目録稿」」(田尻嘉信『新古今集「名所目録稿」」(『跡見学園国語科紀要』29号 1972)を先行研究の対象とし、見直しを行った。

田尻は、新古今集に歌われた名所の目録を作成するために滝沢貞夫『新古今集総索引』を参照した。この本は、日本古典文学大系『新古今和歌集』(岩波書店)に基づいた総索引である。それに対し、本研究では久保田

淳『新古今和歌集』(久保田淳校注『新古今和歌集』一冊、新潮社、1979)を参照しているため、相違点があるのは当然である。しかしながら、田尻氏の目録(以降「目録稿」)ではいくつかの間違いが確認できるため、その間違いをこの場で校訂しておきたい。正し、単なるミスプリントは無視する。

まずは、「目録稿」に載っていない次の歌枕をあげる。(数字は『新古今和歌集』久保田淳校注、新潮社、1979)による歌番号)よしの(一・一〇一・一〇二)、ひばら(二〇)、わか(七四一)、なには(九七三・一〇七七・一五九一)、あまのかは(一五六三)。

また、「目録稿」では歌枕ではない言葉も間違っって収められているためここに挙げる。

― 楽波

「目録稿」によれば、「さざなみ」ということばが出てくる和歌は三首に及ぶ。

さざ波や志賀の浜松ふりにけりたが世にひける子の日なるらむ(新・一六・皇太后宮大夫俊成)

さざ波や志賀の唐崎風さえて比良の高嶺にあられ降るなり(新・六五六・法性寺入道前關白太政大臣)

さざ波の比良山風の海吹けば釣する海人の袖かへる見ゆ(新・一七〇〇・よみ人知らず)

右の三首の和歌の「さざなみ」は歌枕ではない。証拠として、『歌ことば歌枕大辞典』の解説をここに挙げる。

【さざなみ】琵琶湖の西南沿岸一帯の古名、または、小さくこまかに立つ波。(略)「さざなみの」の形で枕詞として周辺の地名「志賀」「連庫(なみくら)山」「比良(ひら)山」などに掛かり、「楽浪の志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ」(巻一・三〇・人麻呂)、「楽浪の比良山風の海吹けば釣する海人の袖かへる見ゆ」(同 巻九・一七一五・一七一九槐本)などとよまれた。(久保田淳、馬場あき子編『歌ことば辞典』枕大辞典、角川書店、1993、p.375)

― 松山

「目録稿」では、一六三四番の和歌は「まつやま」という言葉が使われているとある。

ながらへてなほ君が代を松山の待つとせしまに年ぞ経にける(新・一六三四・二条院讚岐)

たしかに、「まつやま」は歌枕であるが、二条院の歌の「松山」は、新日本古典文学大系の『新古今和歌集』の注釈によると、

「年ぞへにける」の縁語として、また賀を添えて「待つ」の枕詞とする。(略)ここは特定の地名ではない。とある。要するに、右の和歌で詠まれた「松山」は歌枕ではないのだ。

さらに、「松山」と「末の松山」を混同しないように注意しなければならない。「松山」は讃岐国の歌枕(現在の香川県坂出市の北東部)であり、「末の松山」は陸奥国の歌枕である。

『新古今集』では、「松山」は一回も使われておらず、「末の松山」だけ詠まれている。「末の松山」を詠む歌は左の五首である。定家の一二八四番の和歌は「末の」という接頭語を使わないが、ここで詠まれた場所は「松山」ではなく、「末の松山」であることは間違いない。それは、定家が本歌として『古今集』の「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波も越えなむ」という名歌を取ったからである。

かすみたつ末の松山ほのぼのと波にはなる横雲の空(新・三七・藤原家隆朝臣)

老いの波越えける身こそあはれなれことしもいまは末の松山(新・七〇五・寂蓮法師)

ふるさとにたのためし人も末の松待つらむ袖に波や越すらむ(新・九七〇・藤原家隆朝臣)

松山とちぎりし人はつれなくて袖越す波にのこる月影(新・一二八四・藤原定家朝臣)

白波のこゆらむ末の松山は花とや見ゆる春の夜の月(新・一四七三・加賀左衛門)

― 田子浦

「目録稿」では「たごのうら」の歌枕を使う和歌は左の三首だと認められているが、一四八〇番の和歌では、「たごのうら」ではなく、「たこのうら」という歌枕が詠まれている。

田子の浦に打ち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ(新・六七五・山部赤人)

おのが波におなじ末葉ぞしをれぬる藤咲く多祐のうらめしの身や(新・一四八〇・前大僧正慈円)

沖つ風夜寒になれや田子の浦の海人の藻鹽火焚きまさるらむ（新・一六〇八・越前）

「多古（たこ）の浦」は越中国の歌枕であり、「田子（たご）の浦」は駿河国の歌枕である。だが、その二つの歌枕を区別するのは容易ではないと言わざるを得ない。なぜならば、前にも引用した『歌ことば歌枕大辞典』によると、「【たこのうら】多胡、多祜、田子とも書き、また、「たごのうら」とも読む」とあるからである。

第五節、『新古今集』の歌枕

ここまで、歌枕は何か、当時の歌人によってどういう風に使われていたか、単なる歌語として広義的に使われていたか、あるいは名所歌枕として狭義的に使われていたか、そして、奈良時代から「新古今時代」に至るまで、時代の移り変わりとともに歌枕の質はどのように変わってきたか、ということ論じてきた。

本節では、『新古今集』における歌枕に関する調査の結果を記述し、その歌枕の特徴を考察していききたい。特に、先行研究の再検討による『新古今集』の歌枕の改めた一覧表を利用しながら、後鳥羽院の勅撰和歌集の一番代表的な歌枕を割り出す。ただ、歌枕をめぐる数字的なデータの提供に限らず、その歌枕の特質を考察する。そのためには、同じ歌枕を使う和歌を集め、一つの連続として考察してみる。そうすると、「新古今時代」の歌風を論じつつ、それぞれの歌枕の本質を鮮明にする。そうすれば、その本質が当時の歌人にどういうふうに感じられていたかということが浮かび上がると思うからである。

さて、『新古今集』では、歌枕が使われた和歌は四七八首に及ぶ。つまり、全体の一九七九首のおよそ四分の一である（資料①と②）。その中で、二二九種の歌枕が使われている（資料③）。これらは、日本の様々な国に属する歌枕であり、現代的な分類を使いながらより詳細を挙げると、近畿 一六四、中部 二五、東北 二〇、九州 一〇、関東 七、北海道 一、北陸 一である。所在不詳の歌枕も一つあるが、それは家隆の「さてもなほ問はれぬ秋のゆふは山雲吹く風も峯に見ゆらむ」（一三一六番）という和歌に詠まれる「木綿葉山」（ゆ

ふはやま」という地名であり、小学館の『新古今和歌集』の注釈によれば、その土地は大和（奈良県）にある山といわれるが、久保田淳の編纂した『歌ことば歌枕大辞典』の解説によると、「ゆふはやま」は所在不詳である。このように、近畿に属する歌枕が圧倒的に多いことが一目で分かる。しかし、和歌活動の中心となった宮廷の辺りから遠ざかれば遠ざかるほど、その土地の歌枕の使用頻度が圧倒的に減ってしまうのは当然のことである。このデータは以前引証した俊頼の教えと一致する。前にも述べたが、平安時代から訪れたことがない名所を詠むことが普通であり、規則として当時の歌人はエキゾチックな（異国情緒あふれる）地名を詠んでいなかった。したがって、容易に遠い旅に出ることができなかった当時の歌人にとっては、北陸、なおさら北海道のような遠隔地は間違いなく和歌で使い難い要素だったと言っても過言ではないだろう。

それ故、『新古今和歌集』でよく見られる歌枕はほぼすべて近畿の地方に属する土地だということは当然のことだ。十首以上の和歌に詠まれる歌枕は『新古今和歌集』では七つあり、それらを少ない順に挙げると、「布留」（一〇首）、「須磨」（一〇首）、「春日」（一〇首）、「宇治」（一一首）、「立田」（一三首）、「難波」（一四首）と「吉野」（二二首）である。これらは特に代表的な歌枕であるため、それぞれを考察していきたい。

― 布留

「布留」は「布留野」「ふるから小野」「布留の川」「布留の中道」「布留の社」「布留の山」などという形でよまれた大和国の歌枕であり、今の奈良県天理市布留に相当する。天理市街の南を流れる布留川の上流一帯を布留野といい、石上神官が今もある。（参考『歌枕』は辞典増訂版）
片桐祥一 笠間書院 2004 p.370

傾向として「布留」は「降る」と「古」と掛詞にされ、「雨」と「時間の流れ」というイメージをよく暗示させる歌枕である。さらに付け加えると、「布留の社」は非常に有名であり、「石上」（いそのかみ）という表現も「布留」と一緒によく使われているので、「神」の神々しいイメージもしばしば呼び起されているものである。

以上のイメージは、『新古今集』では様々な形で表れる。

いそのかみ布留野のさくらたれ植ゑて春は忘れぬ形見なるらむ (九六・右衛門督通具)

石の上布留のわさ田をうちかへし恨みかねたる春の暮かな (一七一・皇太后宮大夫俊成女)

すずしきは秋やかへりて初瀬川ふる川のべの杉のしたかげ (二六一・藤原有家朝臣)

ふかみどり争ひかねていかならむまなくしぐれの布留の神杉 (五八一・太上天皇)

初雪のふるの神杉埋もれてしめ結ふ野辺は冬ごもりせり (六六〇・権中納言長方)

石の上布留野のをざさ霜を経てひとよばかりに残る年かな (六九八・撰政太政大臣)

いそのかみ布留のわさ田のほには出でず心のうちに恋ひやわたらむ (九九三・柿本人麿)

いそのかみ布留の神杉ふりぬれど色には出でず露もしぐれも (一〇二八・撰政太政大臣)

いそのかみふりにし人を尋ぬれば荒れたる宿にすみれ摘みけり (一六八二・能因法師)

みな人のそむきはてぬる世の中に布留の社の身をいかにせむ (一七九五・女御徽子女王)

布留の桜を詠む通具の歌は、後撰集の有名な和歌(いその神ふるの山べの桜花うへけむ時を知る人ぞなき・

四九・僧正遍昭)を本歌にしたものだが、古めかしい趣を感じさせる本歌と違い、通具の和歌における布留の桜は昔を忘れさせない形見とみなされており、優雅で新鮮な風情を味わせるものだと言えるであろう。同様に、俊成女の次の和歌も、本歌(うちかへし君ぞ恋しきやまとなる布留のわさ田の思ひ出でつつ・後撰集・五一二・詠み人しらず)に比べると、雰囲気がだいぶ変わっている。本歌で歌われているのは恋であるが、俊成女の和歌では、もうすぐ春が去ってしまう辛い事実を甘受しがたいという純粹で美学的な次元に移るのである。

夏部に属する有家の和歌も本歌に対して全く同様の変化を表すものである。有家が本歌にする和歌(初瀬川古川の辺に二本ある杉年を経てまたも逢ひ見む二本ある杉・古今集・一〇〇九・よみ人知らず)では、重要な景色の要素である二本の杉が自然の領域と人事の領域を結ぶ手段となっている。それは、歌人がその二本の杉を誰か

が会える前兆ではないかと思うからである。それに対して、有家の和歌は、意識的思考が完全になくなり、混じり気のない杉の涼しい陰のイメージのみが表れている。

その次の太上天皇の次の和歌に関し丸谷才一は『後鳥羽院・第二版』で次のように考察している。

時雨のせいで木の葉がもみぢするといふのは古くからの詩的発想で、『万葉』巻第十にも、

ながつきの時雨の雨にぬれとほり春日の山は色づきにけり

しぐれの雨まなくしふれば真木の葉もあらそひかねて色づきにけり

の例がある。後者は柿本人麿の作といふ形で『新古今』に撰入し、この後鳥羽院の詠のすぐあとにつづいてあるが、これが、一首の本歌である。(略)「神杉」は「神木ノ杉。大和国、石上布留神社ニアルモノ、最モ名アリ」(『大言海』)。これが「布留の神杉」だが、言ふまでもなく「ふる」は時雨の「降る」と

「古」とにかける。第四句、「間なく」は一応のところ「絶え間なく」の意だけれど、「まなくしぐれの」は「間なく時雨の」でありながらまた、「間なくし暮の」と働く。本歌では単なる強意の助詞にすぎない

「し」が、本歌どりでは二重に使われてゐるのである。そこで布留の神杉にはしきりに時雨が降りそそぎ、また、間もなく夕暮が訪れることになるのだが、この夕闇はやはり艶っぽい風情を漂はすだらう。時雨が杉の葉を染めるといふのは、『万葉』の二首の場合も、後鳥羽院の一首の場合も、うはべは冬の叙景でありながら実は男女の仲を語つてゐるからである。(『後鳥羽院・第二版』丸谷才一、筑摩書房、2001、p.99)

しかし、人麿と後鳥羽院の詞を比較対照すると、現実の直接的な認識を見抜かせる人麿の「争ひかねて色づきにけり」という句と違い、後鳥羽院の「ふかみどり争ひかねていかならむ」という表現は、布留の景色が歌人のメンタルなイメージだと分らせるものである。それは、藤平春男氏が「新古今的な」ものとして定義したものだと言える。藤平は、所謂「新古今時代」の歌風、特に恋の歌に関して以下の様に論じている。

恋歌でありながら人間が全く消去されており、自然美とそれへの詠嘆がそのまま恋情の内的風景となるとい

う技法は、新古今集時代になって初めてあらわれてくるものである。ここには真情であるかポーズであるかという次元をこえて、抒情する人間の直接の声が全く消去されている、そういうやり方で純粹に内面的世界をイメージとしてとらえようとする詩法が確立されているのである

と述べている。『新古今とその前後』、藤平 春男 笠間書院、昭和38年、p.6

このような分析は右の後鳥羽院の和歌のみに限らず、「初雪のふるの神杉」を詠む長方の歌にも適応するものだと考えられる。この場合も本歌との対比に啓発されるであろう。長方が自分の和歌の本歌にする歌は次の和歌である。

石上布留の早稲田をひでずともしめだにはへよ守りつつをらむ（万葉・一三五三・よみびと知らず）

万葉集の和歌では、石上布留の早稲田は早く成熟してもらいたいと思う少女の例えである（参考『萬葉集』小島憲之、木下正俊、佐竹昭広校注・訳、小学館、1967）。

それに対して、長方の和歌では、藤平が述べたように、「抒情する人間の直接の声が全く消去されている」と言えるであろう。

摂政太政大臣（藤原良経）の歌では人間の次元が神の次元に妖艶に合う。それは、神楽の採物の一つである小笹（篠）によって土地が聖なることを強調されている一方で、歌人は老化して死去することを恐れているからである。よく見ると、こうした人間と神の次元の重なり合わせは女御徽子女王の和歌（前提の一七九五番歌）でも味わうことができる。知り合いが皆出家していった今、まだ世を捨てていない彼女は落ち込んでいるような気がする。人生の慰めが宗教にしか見つけられないというメッセージがあるのかもしれない。

本論からだいぶ離れてしまいが、人麿と良経（一〇二八番）の歌はセットとして論考したい。しかしそれは、両首の和歌が恋部における和歌だという理由だけではない。人麿の和歌は新古今時代の歌風の立場から考察すれば、あまり洗練された作品だとは少し言い難いかもれない。それは読み手が石上布留の穂を自分の恋の単なるメタファーとして利用しているからだ。しかし、「幽玄様」や「妖艶様」などのような難解なスタイルが良く見

られる『新古今和歌集』に選出されたこの人麿の歌は、もとは『万葉集』の歌であることを考慮に入れると、逆説的に新鮮なタッチになると認めなければならぬと思う。奇妙なことに新古今時代の歌人である藤原良経の和歌も、何処と無く人麿の和歌と同じような印象を与える和歌だ。彼も布留の景色を自分の心の隠喩として描写する。とにかくそれは、良経がその歌を詠んだ時、『万葉集』の歌（石上布留の神杉神びにし我やさらさら恋にあひにける・一九二七・詠み人しらず）を本歌にしたということ念頭に置いて考えると、特にそこまで不思議なことではないと言えるであろう。

前に挙げた和歌に戻ろう。能因法師の和歌では読み手が愁いに沈んでいる。石上布留にある荒れた家を訪れてみると彼が会いたかった人に会えず、見知らぬ人だけがそこにいる。この歌の寂しさは本歌との対照によって一層強調されてしまう。なぜなら、本歌（わが宿に葶の花の多かれば来宿る人やあると待つかな・後撰集・八九・詠み人しらず）では読み手にはまだ将来に対して希望があるのに対し、能因法師の歌にはそれが無いからだ。本歌における希望と能因の和歌における失望のコントラストは随分感服させられるものである。

― 須磨

「須磨」は「須磨の浦」「須磨の関」という形でもよまれた摂津国の歌枕であり、現在の兵庫県神戸市須磨区の一部である。「須磨」が初めて詠まれた歌は『万葉集』の「須磨の海人の塩焼衣の藤衣間遠にしあればいまだ着なれず」（四一三・詠み人しらず）という短歌だ。須磨の侘びしい景色と海人を詠む和歌は『古今集』に沢山撰入されている。言うまでもないことであるが、「新古今時代」の歌人にとって須磨のイメージは『源氏物語』の「須磨」と「明石」という巻の話に強く結びつけている。（参考）井桐洋一『歌枕歌いしは誰か』増訂版『室町書院』2004.2 p.226

これを踏まえると、『新古今集』ではなぜ「須磨」を詠む和歌の大部分が恋部における（残りは雑部における）ものであるかということが簡単に分かるであろう。須磨を詠む『新古今集』の和歌は以下の通りだ。

須磨の海人の波かけ衣よそののみ聞くはわが身になりけるかな（一〇四一・藤原道信朝臣）

須磨の浦に海人のこりつむ藻塩木のからくも下に燃えわたるかな（一〇六五・藤原清正）
恋をのみ須磨の浦人藻塩たれほしあへぬ袖のはてを知らばや（一〇八三・撰政太政大臣）

須磨の海人の袖に吹きこす潮風のなるとはすれど手にもたまらず（一一一七・藤原定家朝臣）
なれゆくはうき世なればや須磨の海人の塩焼き衣まどほなるらむ（一二一〇・女御徽子女王）

白波は立ちさわぐともこりずまの浦のみるめは刈らむとぞ思ふ（一四三三・よみ人知らず）

藻塩くむ袖の月影おのづからよそにあかさぬ須磨の浦人（一五五五・藤原定家朝臣）

須磨の浦のなぎたる朝は目もはるに霞にまがふ海人の釣舟（一五九六・藤原孝善）

秋風の関吹き越ゆるたびごとに声うちそふる須磨の浦波（一五九七・壬生忠見）

須磨の関夢をとほさぬ波の音を思ひもよらで宿をかりける（一五九八・前大僧正慈円）

恋部に属する最初の六首では須磨の風景から恋のメタファーを作る為に須磨の特定の要素だけ詠まれていることがよく分かる。例えば、求愛者が悲しき涙を零す袖を思い起こさせる海人の絶え間なく濡れた袖（一〇八三番）、疎遠になってしまった関係を象徴する海人の着古した衣（一二一〇番）、隠れた恋を暗示する焼き海草の煙（一〇六五番）などである。要するに、一〇四一番から一四三三番までの和歌の詞はかなり因習的なものと言わざるを得ない。ここに簡潔な解釈を挙げておきたい。

道信は、或る女性の立場にたつてこれを詠む。塩水で濡れた海人の袖が今まで自分自身と全く関係のないものだと思っていたが、恋に落ちた今はその袖が涙の含んだ自分の袖と如何に似ているかわかったと言う。

清正も彼の歌に伝統的なイメージをかけている。藻塩木は自分の心のように燃えているものだ。良経も自分の恋心を表現する為に須磨の海人の濡れた袖という常套的な直喩を利用する。しかし、前の二首の和歌と違い、この和歌では本歌取（わくらば）に問ふひとあらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ・古今集・九六二・在原業平）でははっきりとしない昔の趣が漂っていると言えるであろう。

同様に、藤原定家の和歌でも本歌が大切な役割を果たすものだ。この和歌の本歌は「伊勢の海に塩焼く海人の藤衣ねるとはすれど逢はぬ君かな」（後撰集・七四四・凡河内躬恒）である。定家の和歌は本歌と比べると内容的には同じように思われるが、場面が須磨に設定されていることにより、歌の風情が魅力的に物憂げになる。片桐洋一が述べたように、躬恒の和歌に『万葉集』の「須磨のあまの塩焼きぎぬの藤衣間遠にしあればいまだ着なれず」（四一三）という歌が影響を与えた可能性があると言えるだろう。（参考 片桐洋一校注『後撰和歌集』新日本古典文学大系岩波書店、1984年、p.217） それ故定家は、躬恒の和歌だけではなく、『万葉集』の歌も念頭に置いて右の和歌を詠んだと考えられる。

定家の和歌と女御徽子女王の次の和歌（一一二〇番）とを比べると、「新古今時代」の和歌のテクニクが如何に洗練されてきたかということが分かる。女御徽子女王の和歌でも本歌取が見られ、その本歌は「須磨の海人の塩焼衣箆をあらみ間遠にあれや君が来まさぬ」（古今集・七五八・詠み人知らず／伊勢物語・一一二段）である。普通、恋の歌の場合では、歌人が恋人の訪問回数が増えてもらえるように願うが、女御徽子女王の和歌では恋人の訪問の回数を控えることが優美な願いに過ぎず、定家の至妙のタッチに比べるとそこまで及ばない作品だと認めなければならぬ。

よみ人知らずの一四三三番の歌では、須磨の海人が波が立っても海松を刈るつもりだというのが同じように、世間の噂を無視し、人に逢うつもりだと詠んでいる。これは、平凡なアナロジーに過ぎない。逆に、定家の和歌（一五五五番）では、須磨の妖艶な夜が純粹なりリズムに溢れている。濡れた袖に映る月の影を間接的に觀賞する須磨の海人のイメージは本当に感動させられる。しかも、この和歌も本歌取によって抒情の風情がかなり強調されている。本歌は定家が愛した『源氏物語』における次の和歌だ。

海人の世をよそに聞かめや須磨の浦に藻塩垂れしも誰ならなくに（源氏物語・若菜下）

最後の三首の和歌に関しては、『新古今集』の和歌の配列を考察する本章の第六節で分析する。

― 春日

「春日」は「春日野」「春日の原」「春日山」「春日の原」という形でも詠まれた歌枕だ。「春日野」や「春日の原」は大和国、現在の奈良市街の東方の丘陵地のことで、「春日山」は三笠山・若草山などを含む春日神社の背後の山の総称である。(片桐洋一『歌枕歌ことは辞典増訂版』笠間書院、2004年、p.202)

平安時代には春日は、早春のイメージに連想されてきた。『歌ことば歌枕大辞典』によれば、春日は以下のよう

に説明されている。

「むかし、男、初冠して、奈良の春日の里に、しるよしして、狩りにいにけり」で始まる『伊勢物語』初段に「春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず」(一)の作が見え、『古今集』春上に

「春日野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり」(一七・よみ人しらず)、「春日野の若菜つみや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ」(二二・貫之)などあって、開放的なのびのびとした早春のイメージでとらえられ、特に若菜や春雪が詠まれることが圧倒的に多い。(久保田洋、馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、1995年、p.223)

この傾向が『新古今集』でもよく表れている。それは、季節部に撰入された、春日を詠む五首の和歌はすべて春の巻に分類されているからである。しかし、この五首は全部「新古今時代」以前の歌人に詠まれた和歌だといふことは偶然であろうか。これに答えることは難しいことだが、撰者たちはこのように和歌を選択することで、春日と春のイメージとの関連がいかに平安時代らしいということを強調したかったではなからうか。

以下に春日を詠む和歌を挙げる。

春日野の下もえわたる草の上につれなくみゆる春のあは雪 (一〇・権中納言国信)

春日野の草はみどりになりにけり若菜つまむとたれかしめけむ (一二・壬生忠見)

若菜つむ袖とぞ見ゆる春日野の飛火の野べの雪のむらぎえ (一三・前参議教長)

いづれをか花とはわかむふるさとの春日の原にまだ消えぬ雪 (二二・凡河内躬恒)

焼かずとも草はもえなむ春日野をただ春の日にまかせたらなむ (七八・壬生忠見)

春日山みやこの南しかぞおもふ北の藤波春に逢へとは (七四六・撰政太政大臣)

春日野のわかむらさきのすり衣しのぶの乱れかぎり知られず (九九四・在原業平朝臣)

春日山谷のうもれ木くちぬとも君に告げこせ峯の松風 (一七九三・藤原家隆朝臣)

万代を祈りぞかくる木綿襷春日の山の峰の嵐に (一八九五・中納言資仲)

春日野のおどろの道の埋もれ水未だに神のしるしあらはせ (一八九八・皇太后宮大夫俊成)

右の和歌を一連に読むと、『新古今集』における春日を詠む和歌は大きく二つのグループに分けられると分かる。それは、季節部に分類された春日の春らしいイメージを生かす和歌のグループと、そうではない和歌のグループである。

先ず、春の巻に配分されている和歌を論考する。言うまでもないことであるが、春と春日との厳密な関係は地名そのものに由来するものである。春巻の和歌に表れる春日の特徴は、残雪と草と花だと言えるであろう。

国信の和歌は、残雪に少し隠れている新芽が繊細なイメージとなる。さらに、冷たい雪と、春のぬくもりを求め新芽との対立が「モエル」という動詞によってより強調されている。なぜなら、「萌える」とは同音語の「燃える」を連想する動詞だからである。

壬生忠見の最初の和歌(一二番)でも対照的な興趣が共在している。上句で表れる春日の緑原は非常にシンプルな写生のようなイメージであるが、下句では詠み手が若菜を掴むために誰かが縄張りをしたのだろうかという問いがあり、なんとなく神秘的な雰囲気を感じられる。そのようなたまたまは教長の和歌でも味わえる。それは、こちらでも人間の姿はある程度消えており、本歌(春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ・古今集・二二・貫之)の若い女性たちの姿は、高雅な換喩(注一)によって暗示されていることである。

次の二首の和歌は春日のテーマが典型的に扱われていると認めざるを得ない。躬恒は雪を梅花に見立てるが、忠

見（七八番）はモエル（萌える・燃える）草のテーマを反復している。

季節部に分類されていない和歌における春日のイメージは大分異なる。藤原良経の和歌を見てみよう。彼は自分の藤原北家が繁盛するように願い、藤原氏の氏神をまつる聖地であり、南にある春日山の方に向かう。良経の歌では春日は遠い場所のように見えるが、それにもかかわらず堂々としているということが強く感じられる。こうした印象が本歌（補陀落の南の岸に堂建てて今ぞ栄えん北の藤波・新古今集・一八五四・神祇歌）によつて際立たせられている。しかし同時に、良経は喜撰法師の歌（わが庵は都のたつみしかぞ住む世をうぢ山と人はいふなり・古今集・九八三）も本歌にし、威風堂々たる雰囲気希望にする。

恋部では、春日を詠む和歌は在原業平の和歌（九九四）だけである。業平は隠せぬ鮮やかな若紫を自分の恋に例えている。この和歌は、それだけを読むと、特に優艶な作品のように感じられないかもしれない。しかし前述のように、この歌は『伊勢物語』の一段の非常に有名な和歌である。なので『伊勢物語』の和歌前後の文章を背景にすれば、業平の和歌が特別な示唆を受けているのが分かる。その一節全体を引用する。

むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩りにいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、信夫摺の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず

となむおひつきていひやりける。ついでおもしろきことともやおもひけむ。

みちのくのしのぶもぢすりたれゆゑに乱れそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。（片桐洋一校注・訳『伊勢物語』福井貞助校注・訳『伊勢物語』高橋正治校注・訳『大和物語』清水好子校注・訳『平中物語』（新編日本古典文学全集）小学館 1994年、p.182-183）

このように和歌の前後の文脈を読み取ることで、歌枕としての春日野にある示唆を見逃さなければ、この和歌

が魅惑的だと言えるだろう。

春日を詠む最後の三首の和歌の共通点として、藤原良経の歌のような尊くて厳かな雰囲気があるということが挙げられる。家隆は藤原氏一門に生まれたが、年を取った今は埋もれ木のように淋しくなりつつあると悲痛に嘆く。そのため、この歌では個人的な悩みしか表れていないと考えてしまいがちである。ところが、彼の寂しさの背後にあるのは藤原一家の氏神である春日神社の山である。この春日の山から氏神を連想し、氏神から公家社会を連想させる。この暗示は当時の公家社会を思い描く鍵となると言えるであろう。

資仲と俊成の和歌は家隆のそれよりもたまたまいの方で堂々たる存在が感じられる。資仲が君王の不老長寿を祈る一方で、俊成は神様と見なされる王様に自分の子孫が繁栄の人生を送れるように頼みごとをする。

― 宇治

「宇治」は山城国の歌枕であり、現在の京都府宇治市を中心とする一帯である。大和から近江を経て北陸を結ぶ、古北陸道の重要な結節点であり、日本最古の架橋といわれる宇治橋を中心に、交通の要所として早くから栄えてきた。(参考 片桐洋一『歌枕(1)』(増訂版)笠間書院 2004.2 p.143) 中周子は山城の歌枕を論じながら、歌枕としての宇治の由来を次のように解説している。

宇治は山城国の中で、古く記録歌謡にも詠まれ、『万葉集』以来、歌に詠み継がれてきた地である。奈良時代、山城は山背と表記され、大和朝廷から見て奈良山の向こう側、山の背の国と認識されていた。(略)さらに平安遷都以後、宇治は旧都と新都を結ぶ要、また初瀬詣でに出かける途上として、貴族の別荘地として、よりいっそう賑わった。宇治は王朝貴族たちが頻繁に訪れる行楽地となり、多くの歌に詠まれた。二十一代集にわたって宇治の歌は採られている。宇治を詠んだ歌々は、『万葉集』以来の和歌史の流れの中において、地名が一つの歌ことばとして変貌してゆくありようをたどりうる好例と言えよう。(片桐洋一編『歌枕を字ぶ人のため』(1)『世界思想社』1994.3 p.121)

宇治を詠む和歌を次に挙げる。

暮れてゆく春のみなどは知らねども霞に落つる宇治の柴舟 (一六九・寂蓮法師)

鶺鴒舟あはれとぞ見るもののふの八十宇治川の夕闇のそら (二五一・前大僧正慈円)

さむしろや待つ夜の秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫 (四二〇・藤原定家朝臣)

ふもとをば宇治の川霧たちこめて雲居に見ゆる朝日山かな (四九四・権大納言公実)

片敷きの袖をや霜に重ぬらむ月に夜がるる宇治の橋姫 (六一一・法印幸清)

橋姫の片敷き衣さむしろに待つ夜むなしき宇治のあけぼの (六三六・太上天皇)

網代木にいさよふ波の音ふけてひとりや寝ぬる宇治のはし姫 (六三七・前大僧正慈円)

うれしさや片敷く袖に包むらむけふ待ちえたる宇治の橋姫 (七四二・前大納言隆房)

年へたる宇治の橋守言問はむ幾代になりぬ水のみなかみ (七四三・藤原清輔朝臣)

かかる瀬もありけるものを宇治川の絶えぬばかりも歎きけるかな (一六四六・東三條入道前関白太政大

臣)

もののふの八十宇治川の網代木にいさよふ波の行方知らずも (一六四八・柿本人麿)

右の四二〇・六一一・六三六・六三七・七四二番はすべて同じ和歌(さむしろに衣かたしきこよひもや我を

まつらむうぢのはしひめ・古今集・六八九・よみ人しらず)を本歌にする。それは『新古今集』における本歌取
に関する章で論じるため、ここでは省略する。

『新古今集』の中で「宇治の橋姫」を詠む和歌を除けば、「宇治」から必ず導かれるイメージは宇治川の流れ
水である。後の説明で明らかにするように、このイメージには時空間的にぼけた輪郭がついていけると言える。そ
れを明確にするために寂蓮と人麿の和歌から始めよう。

寂蓮は季節変わりを時間的な現象ではなく、空間的な事象としてスケッチする。彼は擬人法で、春が霞に抱く
宇治川の柴舟とともに帰っていくかな、と詠んでいる。実は、このような心象風景は新しいものではない。寂蓮

のこの歌は、どことなく同じ観念を表している紀貫之の和歌（年ごとにもみぢ葉ながす龍田河水門や秋のとまりなるらむ・古今集・三一）を本歌にする。しかし、寂蓮の和歌と違い、貫之の和歌では「秋のとまり」となる水門がはっきり見える明快な境である。人麿による宇治川では、はっきり見える境があるものの、「宇治川の網代木にいさよふ波の行方」を分るわけがない。

清輔と兼家（東三條入道前関白太政大臣）の和歌では、寂蓮のそれとは違い時間的な事象を表している。清輔の歌は目線を過去に向けており、兼家の歌は未来に向けていると言えよう。清輔は、「ちはやぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ年のへぬれば」（古今集・九〇四・よみ人しらず）という歌を本歌にし、宇治川の透明な水がいつから流れているのか、まあそれは宇治の橋守に聞きましようという意味である。内容的に、非常にシンプルな和歌であるが、古めかしい知恵の保管者に見える橋守の存在がどこか古色蒼然たる雰囲気を漂わせるものだと言えるであろう。

それに対して、兼家の和歌は未来への不安を表す。ここでは宇治川は藤原氏の象徴として捉えられている。詠み手が昔は藤原氏には幸せな時があったものの、将来はどうなるのでしょうか―藤原氏も絶えてしまうのでしょうかという風に嘆いている。

この二首の和歌に表れている時間的な経緯もはっきりしているとは言いがたいだろう。

― 龍田

「龍田」は大和国の歌枕である。現在の奈良県生駒郡斑鳩町・三郷町の一带に相当する。（略）「龍田山」は、三郷町と大阪府との境にある山で、大和川の北岸に位置する。この山を越える道は大和国から河内国への交通の要路であった。（略）『正徹物語』に「ただ花には吉野山、紅葉には竜田を詠むことと思ひつきて」とあるように、「竜田」は紅葉の名所として著名であるが、『万葉集』には、そこまで強固な紅葉と

の結び付きを見いだすことはできない。

（久保田洋、馬場あき子編『歌こぼし』枕大辞典『1995』角川書店、1995、p.516）

「龍田」は「たつたやま」と「たつたかわ」などの形で詠まれることが多いが、『新古今集』では、左の和歌を見れば分かるように、八七番を除くと、「たつたやま」か「たつたのやま」の形でしか表れていない。『新古今集』における「龍田」を詠む和歌を挙げる。

ゆかむ人來む人しのべ春かすみ立田の山の初さくらばな（八五・中納言家持）

葛城や高間の桜咲きにけり立田のおくにかかる白雲（八七・寂蓮法師）

白雲の立田の山の八重桜いづれを花とわきて折りけむ（九〇・道命法師）

白雲の春はかさねて立田山をぐらの峯に花にほふらし（九一・藤原定家朝臣）

朝霧や立田の山の里ならで秋きにけりとたれか知らまし（三〇二・法性寺入道前関白太政大臣）

龍田山よはにあらしの松吹けば雲にはうとき峯の月影（四一二・左衛門督通光）

龍田山梢まばらになるままに深くも鹿のそよぐなるかな（四五一・俊恵法師）

こころとやもみぢはすらむ龍田山松はしぐれに濡れぬものかは（五二七・皇太后宮大夫俊成）

龍田山あらしや峯によわるらむ渡らぬ水も錦絶えけり（五三〇・宮内卿）

から錦秋の形見やたつた山散りあへぬ枝にあらし吹くなり（五六六・宮内卿）

立田山秋行く人の袖を見よ木々のこずゑはしぐれざりけり（九八四・前大僧正慈円）

なき名のみ立田の山に立つくもの行方も知らぬながめをぞする（一一三三・権中納言俊忠）

秋されば狩人越ゆる立田山立ちてもゐても物をしぞ思ふ（一六八六・柿本人麿）

『正徹物語』では「龍田」と紅葉の関連性が記されているが、龍田山は秋の紅葉だけではなく、春の桜でも有名な歌枕であった。実際には、『新古今集』の春の巻における「龍田山」を詠む和歌は、直接的または間接的にすべて美しく咲いている桜花を詠出するものである。最初の歌は家持のものであり、万葉時代の素朴な歌風を味わせるものである。歌人は、霞に潜む龍田山を行き交っている人々に咲いたばかりの桜を觀賞してほしいな、と

いう希望を表現する。しかし、それに対して、次の寂蓮法師の和歌は、歌詠みの技術から見るとより複雑な作品である。寂蓮の歌では葛城や高間の峯に桜の花があると同時に、龍田山には雲がある。寂蓮はこの和歌に二首の歌を本歌として取った。一つ目は紀貫之の歌（桜花咲きにけらしなあしひきの山の峽より見ゆる白雲・古今集・五九）であり、二つ目は『新古今集』の恋巻一の巻頭として載せられる『和漢朗詠集』の歌（よそにのみ見てややみなむ葛城や高間の山のみねのしら雲）である。

寂蓮の和歌と同様に道命法師と藤原定家の次の和歌でも桜と白雲が詠まれているが、龍田山には両方の要素がある。道命は本歌（雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきてをらまし・古今集・三三七・紀友則）のモチーフを利用するが、自分の和歌で紛らわしくなるものは雪と梅花ではなく白雲と桜花である。定家も雲と花を詠むが、彼の歌では白雲と桜花の白さがもつとはっきりと重なっている。定家は本歌として『万葉集』の長歌（白雲の 龍田の山の 瀧の上の 小椋の嶺に 咲きををる 桜の花は 山高み 風しやまねば 春雨の 継ぎてし降れば ほつ枝は 散り過ぎにけり 下枝に 残れる花は しましくは 散りな乱ひそ 草枕 旅行く君が 帰り来るまで・一七四七・高橋虫麻呂）を使うが、峯村文人が述べているように、「下句の「花にはほふらし」が、上句の重なりたつ白雲を色たたせて、幻想的妙味を生んでいる」。（峯村文人校注・訳『新古今和歌集』（日）本古典文学全集 小学館、1973年）

次の和歌に表れる龍田山のイメージは対照的なものであると言える。なぜなら、藤原忠通（法性寺入道前関白太政大臣）の和歌における龍田山の麓は霞に滲んでいるが、通光の描写した龍田山の峰は冴えた月に照らされているからである。だが、本歌取により、通光の和歌の方が余情に満ちた歌だと考えられる。本歌は『古今集』の歌（風ふけばおきつ白浪たつた山よはにや君がひとりこゆらむ・九九四・よみ人しらず）である。同様の説話が『伊勢物語』（二三段）にも見えるが、その歌には次の左注がある。

ある人、この歌は、「昔大和のなりける人の女に、ある人住みわたりけり。この女、親もなくなりて家もわるくなりゆくあひだに、この男、河内国に人をあひ知りて通ひつつ、離れやうにのみなりゆきけり。さりけ

れども、つらげなる気色も見えて、河内へいくごとに男の心のごとくにしつついだしやりければ、あやしと思ひて、もしなき間に異心やあると疑ひて、月のおもしろかりける夜、河内へいくまねにて、前栽のなかに隠れて見ければ、夜ふくるまで琴をかき鳴らしつつうち嘆きて、この歌をよみて寝にければ、これを聞きてそれよりまたほかへもまからずなりにけり」となむ言ひ伝へたる

通光の和歌は、秋の歌として『新古今集』に載せられているが、愛情の深い趣があると認められる。個人的な解釈に過ぎないが、「あらし」と「月影」は説話の女の悲しい愛情の象徴としてとられるのではなからうか。

後半の六首の和歌はすべて龍田山の紅葉を詠む歌である。しかしながら、俊恵の和歌では紅葉の暗示は間接的である。龍田山の梢がまばらになつていくところであり、さきほどまでは美しい朱色の紅葉であつた葉が落葉になつた。その落葉を踏んで行く鹿の音が聞こえるような気がすると詠んでいる。久保田淳が明確にしたように、鹿の動きを「そよぐ」と表現した点が新しい。（久保田淳校注『新古今和歌集』上巻、新潮社、1973年）この和歌の題は秋で山深く行く鹿であるが、とくに感動的な要素は鹿の踏む落葉である。なぜかというところ、その落葉は少し前までは龍田山を名所にする美しい紅葉であつたがそれが散つてしまったものであるからだ。この時間の流れがより寂しさを強調させている。

俊成の和歌でも龍田の紅葉が詠まれているが、歌人が紅葉に心があるということを確認することで妖艶なニュアンスを吹き込んでいる。こうしたシンプルな擬人法は俊成の歌に高い格調を与えていると言えるだろう。

宮内卿の最初の和歌（五三〇番）では、俊恵の和歌と同様に、紅葉は間接的に暗示されている。しかし、俊恵の歌の基本的なポイントは聴覚であるのに対し、宮内卿の和歌で中心となる感覚は視覚である。だが、定家の有名な「花も紅葉もなかりけり」と同じように、この歌でも紅葉の鮮明な赤色は精神的なイメージに過ぎない。それは、川に流される美しい紅葉の錦が絶えてしまったからである。こうした紅葉の錦の不在が、本歌取により、より懐かしく感じられる。実際には、女流詩人が本歌にした二首の和歌は目に見える紅葉の錦の美しさを詠むのである。一つ目は『古今集』の歌（竜田河もみぢみだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ・二八三・よみ人

しらず）であり、二つ目は『後拾遺集』に撰入された能因法師の和歌（嵐ふくみむろの山のみぢ葉は立田の川の錦なりけり・三三六）である。

宮内卿の次の和歌（五六六番）で表れる龍田山の紅葉のイメージも、本歌（唐錦枝にひとむら残れるは秋の形見をたたぬなるべし・拾遺集・二二〇・遍昭）と対照することで、より悲しみを感じさせている。遍昭の和歌では秋の形見である紅葉の錦を大切にすする優しい自然が表現されているが、宮内卿の歌ではその形見を意識的に破壊してしまう秋風が無情に見える。言うまでもないことだが、紅葉の運命は秋が更けて散ることだ。しかし、美しい紅葉が容赦ない風に覆われているのを見ることは耐えがたいことだと言えよう。

慈円の和歌では、龍田山の紅葉からにじみでる悲しさが非常に淋しく旅人の袖に移る。換言すれば、和歌のアクセントが自然から人事に移動するということだ。それは、最後の二首の和歌でも見られることである。『拾遺集』の和歌（なき名のみ立田の山の青つづらまたくる人も見えぬところに・六六九・よみ人しらず）を本歌にする俊恵の歌も柿本人麿の歌も、詠み手が龍田山を背景にしながら寂しい思いに沈み込んでいる。特にダークな印象を与える和歌は人麿の方である。この和歌は峯村が次のように解釈している。

『万葉集』の原歌は新鮮な恋愛の歌であるが、これは、歌形が変貌し、山里でもの思いに閉ざされている嘆きの歌としての重い抒情になっている。（峯村文人校注・訳『新古今和歌集』（日）
本古典文学全集）小学館 1974.3. p.59

それは、『万葉集』の原歌（秋きれば雁飛び越ゆる竜田山立ちて居ても君をしそ思ふ・二二九四）の結句「君をしぞ思ふ」はより暗い「物をしぞ思ふ」という句になるからである。

― 難波

難波は吉野の次に『新古今集』で多く詠まれた歌枕である。まず、歌枕としての難波の定義を挙げておきたい。

浪速・浪花・浪華とも表記される。難波の地は、応神天皇の大隅宮以来、しばしば皇居の置かれた場所であり、奈良時代には、唐や西国へ向かう船の出る御津（みつ）もあった。しかし平安時代に入ると、蘆のたく

さん生えた寂しい海辺という印象が強くなる。和歌の世界では、「難波人」「難波女」といえば、蘆ぶきの小屋にわび住まいする貧しい人たちである。古代と現代とでは地形が相当にことなっていたようで、上町台地西の、現在は大阪市の中心をしている地域が、かつてはおおむね海ないし低湿地であったらしく、海上には、土砂の堆積によってできた島が点在していたもようである。それが浪花潟・難波江であり、浪花の浦でもあった。近世にはいつて大坂が日本の経済の中心地となると、好んで「浪花」と表記されるようになり、浪花風流といえ、都会的で色っぽく華やかな風俗を意味する。難波の海は浪花潟と呼ばれるように水深浅く、そのために航路を示す濤標（みおつくし）が立てられていた。濤標は難波の名物の一つとなり、大阪市の市章のデザインにも採用されている。（大岡信ほか編集『歌枕年譜』集英社、1989年、p.385-386）

難波を詠む和歌は次である。

夕月夜しほ満ち来らし難波江の蘆の若葉をこゆる白波（二六・藤原秀能）

難波潟霞まぬ波もかすみけりうつるも曇るおぼろ月夜に（五七・源具親）

忘れじな難波の秋のよはの空異浦にすむ月は見るとも（四〇〇・宜秋門院丹後）

夏草のかりそめにとて来しかども難波の浦に秋ぞ暮れぬる（五四七・能因法師）

津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯れ葉に風わたるなり（六二五・西行法師）

冬深くなりにけらしな難波江の青葉まじらぬ蘆のむらだち（六二六・大納言成通）

あはれ人けふの命を知らませば難波の蘆に契らざらまし（八二三・能因法師）

難波人蘆火たく屋に宿かりてすずろに袖のしほたるるかな（九七三・皇太后宮大夫俊成）

難波潟みじかき蘆のふしのまもあはでこの世をすぐしてよとや（一〇四九・伊勢）

わが恋はいはぬばかりぞ難波なる蘆のしの屋の下にこそ焚け（一〇六三・小弁）

難波人いかなるえにか朽ちはてむあふことなみに身をつくしつ（一〇七七・摂政太政大臣）

難波潟潮干にあさる蘆たづも月かたぶけば声の恨むる（一五五三・俊恵法師）

難波女の衣干すとて刈りて焚く蘆火のけぶり立たぬ日ぞなき（一五九一・紀貫之）

沖つ風夜はに吹くらし難波潟あかつきかけて波ぞ寄すなる（一五九五・権中納言定頼）

右の和歌は『新古今集』の全体に配分されているものの、一つの連続と見なしてもよいだろう。この和歌を順に読むと、詩的なイメージと雰囲気流暢に変化するもので、全体的にスムーズな印象を受ける。それだけに限らず、この和歌の群には堂々巡りの感も受ける。一首一首の歌を解釈し、それを明確にする。

藤原秀能の和歌では難波が生き生きと描写されている。夜の月が満潮を起こす折に、白波は蘆の若葉を越えてしまう。白黒の場面になるこうした難波では、詠み手の存在が全く感じられないので、幽玄の感じがかなり深い。本歌は藤原範永の和歌（花ならで折らまほしきは難波江の蘆の若葉に降れる白雪・後拾遺集・四九）だ。

具親の和歌でも詠み手の姿が場面から消えている。だが秀能の和歌と違い、月は一面に淡い光を広げながら、霞んできている。この歌の興趣も魅惑的であり、妖艶と幽玄が味わえると言えるであろう。人間の存在は宜秋門院丹後の次の和歌でそつと感じ始められる。女流歌人は難波の月が忘れがたいものであり、将来はどこでこのような美しい月が見られるだろうと表現している。詠み手の正直な感動は倒置法によって強調されている。

能因法師の和歌により難波がどれほど美しく魅力的であったかということが分かる。少しでも滞在しようと思つて夏に難波に来ていた歌人は、あつという間に秋も暮れようとしていることに気づく。それは、難波を訪れたら離れ難い場所だからである。しかし、こうした美しさは西行の和歌で疑われるものとなる。つまり、難波の春のイメージが夢の次元に滑り落ちているのだ。冬になると、難波の春の景色の麗しさが、風にさらされる枯葉の侘びしい場面に道を譲る。しかも、春の景色に対しての憧れは本歌（心あらむ人に見せばや津の国の難波わたり春のけしきを・後拾遺集・四三・能因法師）によって強調されている。前の和歌と比較すると雰囲気が大分変わっていると云わざるを得ないが、共通点もある。それは言外に奥深い情趣・余情ある歌体である、いわゆる幽

玄様なのである。

一方、蘆のイメージは次の和歌との強い関係を作り出す。成通の歌でも難波の春の景色に対しての憧れがあるが、それはもう見えなくなってしまうた青葉の記憶によって象徴されているものである。それに対して、次の四首では人事の次元が山場を迎えると言える。

俊成の和歌は、『万葉集』の歌（難波人葦火焚く屋の煤してあれどおのが妻こそ常めづらしき・二六五一・よみ人しらず）を本歌にし、難波人が蘆火を焚く小屋に宿を借りて、恋の涙に濡れた袖を乾かすことができないうと詠んでいる。恋愛のテーマは伊勢と小弁が詠んだ次の和歌でも見られる。伊勢の和歌は二人の恋人が短い間でも会えないという話だが、小弁の和歌の題は隠された恋である。

こうした恋愛のテーマは、本歌（わびぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ・後撰集・九六〇・元良親王）のイメージを利用した藤原良経の和歌で絶頂に達する。歌人は、恋人に逢うこともないので、難波の濡標が朽ちはててしまうように、私も一生を終えてしまうのだろうか、と嘆いている。

ここから生き物の姿はだんだん消えて行くことが分かる。なぜなら、俊恵の和歌では鶴の悲しい声しか聞こえず、貫之の歌では難波に住む女の存在が、濡れた衣を乾かすために焚かれた蘆の煙によって間接的に暗示されているものだからである。この仮定的な連続は藤原定頼の和歌で終わる。もはや聞こえるのは波の音だけである。というのは、人間の姿は完全に消えてしまい、自然は秀能の一番目の和歌と同様にまた人物が登場しない舞台となっているのである。再び述べるが、難波を詠む以上の和歌は『新古今集』の全体に配分されており、一つの連続ではない。しかし、一つの連続として読むことにより、歌枕としての難波の捉われ方がより明らかになる。

― 吉野

吉野は『新古今集』で一番詠まれた歌枕である。久保田淳の編纂した『歌ことば歌枕大辞典』では次のように定義されている。

大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡一帯を指す。吉野山といえ、現在の吉野山だけではなく、金峰山（きんぶせん）・水分山（みくまりやま）・高城山（たかきやま）・青根が峰など広範囲にわたる山岳地帯の総称であつたらしい。また吉野川は、大谷ヶ原に発して、宮滝・上市・下市・五条市を経て、紀伊国（和歌山県）に入ってから紀ノ川と称される。七世紀には、吉野山流域の宮滝付近に離宮が詠まれた。（略）万葉時代には、吉野の山よりも川が圧倒的に多く歌に詠まれた。柿本人麻呂の御幸従駕での賛歌「見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆることなくまたかへり見む」（万葉集・卷一・三七）がよく知られているが聖地としてのイメージが、流れの絶えない神聖な川の清浄さによって具体化されている。これが、歴代天皇の御幸における賛歌表現の一類型になっている。（略）平安時代以後は、万葉時代とは異なつて、吉野の山も盛んに詠まれるようになる。「み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時の隠れ家にせむ」（古今集・雑下・九五〇・よみ人しらず）のように、人も通わぬ隠遁の地ともみられるようになる。山の神秘的な深奥さが、前代の聖地・仙境のかわりに、山岳信仰とも結びつく隠棲のイメージを作り出したともいえよう。（略）吉野が雪深い地として読まれるのも、平安時代以後である。「朝ぼらけ有名の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪」（同・冬・三三二・是則）の名歌をはじめ、『古今集』以後、吉野と雪の組み合わせが常套的となつた。郷ではまだ晩秋なのに吉野の山は早くも雪、あるいは郷ではもう春なのに吉野の山は雪のまま、等という発想も多く、人も通いにくい深山ゆえの雪が強調される。（略）一般に吉野が桜の名所として意識されるのは、平安時代以降である。三代集時代にも小数ながら、「み吉野の山辺に咲ける桜花雪かとのみぞあやまたれける」（同・春上・六〇・友則）、「み吉野の吉野の山の桜花白雲とのみ見えまがひつつ」（後撰集・春下・二七・よみ人しらず）などあるが、雪や雲との組み合わせによっている点に注意される。（略）とりわけ西行の「吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねむ」（新古今集・春上・八六）や、「吉野山桜が枝に雪散りて花遅げなる年にもあるかな」（同・七九）などの名所は、日本の美意識の典型ともなつて

いるのであろう。吉野の山が桜の名所とされるのにしたがって、吉野川もまた桜と組み合わせられるようになる。「吉野川水かさはさしもまさらじを青根を越すや華の白波」（千載集・春上・六五・顕昭）のように、水面を流れる桜の花びらを白波などになぞらえる表現も見られるようになる。なお、吉野川は、『古今集』以後、恋の歌にも詠み込まれ、「吉野川岩波高くゆく水のはやくぞ人を思ひそめてし」（古今集・恋一・四七一・貫之）のように、よしの川の激流が恋の心情のはげしさの比喩として用いられる例がすこぶる多い。

（久保田洋、馬場あき子編『歌じはば歌
枕大辞典』角川書店、1995、page 1932,3）

ここに吉野を詠む二二首の和歌を挙げる。

み吉野は山もかすみて白雪のふりにし里に春は来にけり（一・摂政太政大臣）

み吉野の大川のべの古柳かげこそみえね春めきにけり（七〇・輔仁親王）

吉野山桜が枝に雪散りて花おそげなる年にもあるかな（七九・西行法師）

吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねむ（八六・西行法師）

吉野山花やさかりにほふるさとさえぬ峯の白雲（九二・藤原家衡朝臣）

花ぞ見る道の芝草ふみわけて吉野の宮の春のあけぼの（九七・正三位季能）

いくとせの春に心をつくしきぬあはれと思へみよしのの花（一〇〇・皇太后宮大夫俊成）

散りまがふ花のよそめは吉野山あらしにさわぐ峯の白雲（一三二・刑部卿頼輔）

みよしのの高嶺のさくら散りにけりあらしも白き春のあけぼの（一三三・太上天皇）

吉野山花のふるさと跡たえてむなしき枝に春風ぞ吹く（一四七・摂政太政大臣）

吉野川岸のやまぶき咲きにけり峯のさくらは散りはてぬらむ（一五八・藤原家隆朝臣）

今宵たれす吹く風を身にしめて吉野の嶽の月を見るらむ（三八七・従三位頼政）

み吉野の山の秋風さ夜ふけてふるさとさむく衣打つなり（四八三・藤原雅経）

み吉野の山かき曇り雪降ればふもとの里はうちしぐれつつ（五八八・俊恵法師）

吉野なる夏実の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして（六五四・湯原王）

音にのみありと聞きこしみ吉野の滝はけふこそ袖におちけれ（九九一・詠人しらず）

今はわれ吉野の山の花をこそ宿のものとも見るべかりけれ（一四六五・皇太后宮大夫俊成）

世をいとふ吉野のおくのよぶこ鳥深き心のほどや知るらむ（一四七五・法印幸清）

水の江のよしのの宮は神さびてよはひたけたる浦の松風（一六〇二・正三位季能）

花ならでただ柴の戸をさして思ふ心の奥もみ吉野の山（一六一六・前大僧正慈円）

吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ（一六一七・西行法師）

いとひてもなほいとほしき世なりけり吉野の奥の秋の夕暮（一六一八・藤原家衡朝臣）

藤原良経の吉野を詠んだ和歌は右に挙げた最後の三首と一連続として『新古今集』の本歌取を中心にする第三章で論考するため、ここでは取り上げない。

久保田による以前の解説から分かるように、和歌の世界での歌枕としての吉野のイメージは時間が経つにつれ、徐々に変化してきた。最初は吉野が世捨て人の求める、世界から引き離された隠遁地と見なされていた。こうした吉野はよく雪で覆われていた。俊恵法師の和歌（五八八番）を例として挙げておきたい。こちらで歌人は、真っ白い雪雲に覆われている吉野山の峰を描写する。しかし、俊恵は雪だけに限らず、麓にある里の雨のイメージも加え、まさに幽玄の雰囲気を味わわせると言えるであろう。峯村が、

客観的詠風で、一見、淡白であるが、古京吉野の山に降る雪と、郷に降る時雨との立体的把握による初冬の姿が、幽玄味を生んでいる。（峯村文人校注・訳『新古今和歌集』（日）本古典文学全集 小学館、1974.3. p.192）

と述べているとおりである。

『新古今集』における吉野のイメージは基本的に春と結ばれていることがよく分かる。しかし、その関係は

色々な形で表れるものだ。良経の巻頭歌では、春の前触れとなるのは霞である。それに対し、『古今集』の歌（み吉野の大川のへの藤波のなみに思はばわが恋ひめやは・六九九・よみ人しらず）を本歌にする輔仁の和歌では、春はより一層間接的に理解されている。なぜなら、こちらでは歌人は春になったということを確認するために客観的な証拠を挙げる事が出来ないからだ。彼は陰を成す柳がまだ茂っていないものの、なんとなく春になったような気がするという事だけを表現している。

当然ながら新古今時代において、吉野の春を象徴する要素は桜の花である。だが前述したように歌の世界での吉野は、最初は雪に覆われた土地というイメージであった。その後桜花に満ちた土地というイメージへ移行したが、その変化を完成に導いた歌人は、間違いなく西行法師だと言える。彼の『山家集』では吉野の桜花を詠む和歌が多い。それ故、『新古今集』で吉野の桜花を詠む最初の歌が西行法師のものであるということは特にそのことを象徴していると言えるであろう。

しかし、西行の七九番の和歌では、木の枝にまだ雪が残っており、その雪が桜の花を思わせるものだと言われている。つまり桜のイメージは実際のものではなく、間接的に暗示されるイメージに過ぎない。西行の次の和歌（八六番）でも桜花は詠み手からの暗示的手法で表されている。彼は今まで見る事のなかった桜を観賞するために今年は何の道を通ろうと思うよと表現している。

家衡の和歌でも桜花ははっきりとは表れていない。歌人は、吉野で気温が少し上がったので、吉野の桜がもう咲いているのではないかと想像する。家衡は常套的技法を利用し、本歌（み吉野の山の白雪積るらし古里寒くなりまさるなり・古今集・三二五・坂上是則）の要素、すなわち寒さと雪を温かみと桜に巧みに変化させた。

息を飲むような美しい桜花はやっと季能の和歌で初めて表れる。その和歌では神秘的な雰囲気漂っていると言えるであろう。時間の流れと人生のはかなさを重ねた考えは、本歌（たち変り古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり・万葉集・一〇四八・田辺福麻呂）によって強調される。

次の和歌（一〇〇番）で俊成は、長い間桜花の命が短いことを悲しんでいたため、今は自分のことを同情してほしいと、直接桜に声をかける。俊成は定家の『小倉百人一首』にも撰入された金葉集の有名な和歌（もろともにあはれと思へ山桜花よりほかにしる人もなし・五二一・僧正行尊）を本歌にした。本歌でも詠み手が桜花の共感を願う。久保田正文氏は右の和歌を次のように解釈している。

山桜よ、おたがいにしたしみをもつて相寄ろうではないか。この山奥で青葉にかこまれて思いがけず美しく咲いている桜を知っているのは私だけだし、私の淋しさを知ってくれるのもおまえだけなのだから。

の世界「文藝春秋」
秋、1968年11月号

桜に対するこうした呼び掛けのために、和歌にはそこはかとない悲しみが宿っていると感じられる。さらに、吉野の桜花は無情な自然に対して無防備なようにも見える。頼輔と後鳥羽院の和歌（一三二・一三三番）では、桜の花びらは情け容赦のない風に飛ばされ、吉野山を一面銀世界に変化させる。だが、このような場面は長く続くものではない。やがて、良経の和歌で（一四七番）白っぽい風はもう一度透明な存在となる。花びらは地面に散ると、吉野の景色は荒涼たる風景に変わるのである。このように、吉野のイメージは、雪から桜へと変遷をとげ、その後その美しい桜の花というイメージも歌の中から消えていくのである。家隆は山吹が咲いている吉野川を探勝し、桜花が吉野山の高峰で落ちているだろうと想像してしまう。言うまでもないことであるが、桜の花は伝統的に人生のはかなさを象徴するものである。家隆の和歌では、「人生はうたかたの如し」という寂しい考えが本歌によって強調される。その本歌は『古今集』に於ける紀貫之の和歌（吉野河岸の山吹ふくかぜにその影さへうつろひにけり・一二四）であるが、この歌で無情にしぼんでしまう花は桜ではなく山吹である。

頼政の歌で初めて月が現れる。しかし、その月は詠み手の淋しさを強調する要素に過ぎないと言えるであろう。彼は風がすず竹を吹く今夜は一体誰がその輝く月を私と一緒に見えてくれるだろう、と言う。その上、み吉野の夜の憂愁は雅経の和歌でも見られる。だが、こちらの歌では、月が見えないし、遠くからいかにも秋らしい衣打つ

音しか聞こえないと詠んでいる。峯村が鋭敏に解釈しているが、雅経は本歌（みよしのの山の白雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり・古今集・三二五・坂上是則）のイメージを背景にし、聴覚の感覚を加えることによって寂しげな感じをより一層表現している。（峯村文人校注・訳『新古今和歌集』（日）
本古典文学全集・小学館、1974.3 p.155）

み吉野の侘びしさを強調するこうした聴覚は、他の二首の和歌でも見られる。一つ目は湯原王の歌（六五四番）だ。鴨の悲痛な声を想像することによって、歌人の詠む自然の景色と詠み手の心にある自然の景色がぴたりと重なり合う。二つ目は法印幸清の和歌（一四七五番）だ。この歌では、吉野で寂しく鳴く小鳥の声を想像して聞きながら歌を読むことで歌人と読み手の視点が重なり合い、両者が一体化することができる。ところで、孤独感というテーマは隠遁者のイメージと密接に繋がる。以前も述べたが、昔吉野は花見の名所としてだけではなく、世を捨て隠遁生活を求める隠修士の場所としても有名だった。しかし、俊成の和歌（一四六五番）のように、一つの歌の中に桜花と隠遁という二つのテーマが共存する場合がある。俊成は『古今集』におけるよみ人知らずの歌（みよしのの山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ・九五〇）を本歌にし、非常に優雅な和歌を詠んだ。その和歌で俊成は、世を捨てるということと人生の空しさの両方を象徴する桜花の美しさを詠んでいる。

歌枕としての吉野は莊嚴で神秘的なところだったと言ってもよからう。このことは季能の和歌（一六〇二番）でよく分かる。実は、この和歌の要素は全て嚴かで威嚴を持っているものと感じられるからである。

『新古今集』では吉野を詠む和歌はすべて質的にレベルが相当高いと言えるが、読者の期待を裏切る和歌が一首だけある。それはよみ人知らずの九九一番の和歌だ。なぜかというところ、そちらで歌人は、自分の悲しさを隠喩で表現するために、濡れ袖のステレオタイプを利用するからである。

さて、本節で記述した調査の結果をまとめれば次のことが挙げられる。

『新古今集』における二二九種の歌枕の中では、良く使われる歌枕は、布留、須磨、春日、宇治、立田、難波と

吉野なのである。右の歌枕を使う和歌を考察すれば、たびたび本歌取も使われているということが分かる。だが、それは、ある程度予想されることである。なぜなら、第二節で述べたように、和歌で歌枕として詠まれる名所は、伝統的に他の歌人によって詠まれてきた名所しか使っていないからである。しかし、「新古今時代」の和歌に詠まれる歌枕が、前時代と比較すれば、別の特性を表わすということが言えるであろう。当時の和歌に詠まれる歌枕はより優雅な美を持つ。それは、歌人が過去の響きを生かし、名所歌枕の妖艶さをさらに増幅させるからだ。すなわち名所歌枕の景色は、理想化されてしまう。

ともあれ、興味深い点としては、同じ歌枕を詠む和歌を集め、一連続として読んでみれば、一貫した印象が生じてはいることが挙げられる。言うまでもないことであるが、こうした一貫性は当時の歌風に原因するであろう。周知のように、「新古今時代」の歌人は、上代の歌人と違い、限られた語彙とイメージしか使えなかった。それ故、『新古今集』では異例の和歌を見つけることは潜在的に無理である。しかしそれにしても、『新古今集』における歌枕を使う和歌がどの再構築化でも一貫性を失ってしまわないということが注目し値すると思う。『新古今集』の歌枕のこうした特徴は、「新古今時代」の歌人が人間の心の普遍的な象徴となりうる理想化された世界を作りだしてみたかったことに由来するのではなからうか。

第六節、『新古今集』に於ける歌枕の配分と配列

前節では歌枕がどの点まで『新古今集』の歌風を特徴づけるかを明らかにした。その結果、歌枕は『新古今集』の和歌の配分と配列に対して大切な役割を果たしていないとゆめゆめ思ってはならない。要するに、当時の歌論書などのような文献による客観的な証拠がつかめなくても、寄人が和歌の配分と配列を定めた折に歌枕の有無を無視したということとはあり得ないと言えるであろう。逆にいえば、歌枕を中心にして本勅撰集の配列と配分を具に調べれば、撰者たちの選択の理由をさらにより解き明かせるであろう。

従って、歌枕を使う和歌の配分と配列に関する次の調査を行った。

イ 歌枕を使う和歌の配分

『新古今集』では歌枕は次のように配分された。(2回以上使われる歌枕だけをあげる)

春部	一七四首	歌枕を使う和歌五三首 (30.45%)	使われる歌枕	三三
	よく表れる歌枕	よしの一首、かすが五首、たつた四首、いそのかみ三首		
夏部	一一〇首	歌枕を使う和歌二四首 (21.8%)	使われる歌枕	二三
	よく表れる歌枕	かぐやま二首		
秋部	二六六首	歌枕を使う和歌六二首 (24.8%)	使われる歌枕	四八
	よく表れる歌枕	たつた五首、たかまど三首、ふかくさ三首、をぐら(山城)三首		
冬部	一五六首	歌枕を使う和歌四六首 (29.4%)	使われる歌枕	四四
	よく表れる歌枕	ふる三首、なるみ三首、かたの三首、うぢ三首、よしの二首		
賀部	五〇首	歌枕を使う和歌四六首 (29.4%)	使われる歌枕	二〇
	よく表れる歌枕	すみのえ二首、ふぢ二首		
哀部	一〇〇首	歌枕を使う和歌八首 (8%)	使われる歌枕	六
	よく表れる歌枕	さが三首		
離部	三九首	歌枕を使う和歌一首 (28.2%)	使われる歌枕	一一
	よく表れる歌枕	あぶくまがは二首		
羈部	九三首	歌枕を使う和歌四二首 (45.16%)	使われる歌枕	三五
	よく表れる歌枕	さやのなかやま五首、いせ四首、うつのやま四首		

恋部	四四五首	歌枕を使う和歌八一首 (18.2%)	使われる歌枕	六三
		よく表れる歌枕	すま六首、しのぶ四首、なには三首、ふぢ三首、やましる三首	
雑部	四一七首	歌枕を使う和歌九五首 (22.78%)	使われる歌枕	七五
		よく表れる歌枕	よしの六首、すま四首、わかのうち四首、おほはら三首、すみよし三首、ながらのはし	
		三首、なには三首、ふぢ三首		
神部	六五首	歌枕を使う和歌三三首 (50.76%)	使われる歌枕	二五
		よく表れる歌枕	いずすがは四首、みたらしがは三首	
釈部	六三首	歌枕を使う和歌七首 (7.93%)	使われる歌枕	七
		二回使われている歌枕は一つもない。		

このデータにはいくつか興味深いところがある。まずは、比率に着目すると、羈旅と神祇の巻の歌枕は、他の巻と比べると歌枕の使用頻度がかなり高い。羈部の九三首の中で歌枕を使う和歌は四二首 (45.16%) あり、神部の六五首の中で歌枕を使う和歌は三三首 (50.76%) である。どちらも半数ほどが歌枕を使っていることが分かるが、それはよく考えればあたりまえのことである。旅の歌には名所は設定場面として欠かせないものであり、同様に山や川などのような自然の要素と親密な関係のある神道の歌で歌枕が詠まれるのは当然だと言えるからである。逆に釈教巻では歌枕の使用頻度が低いこと (7.93%) を考慮にいれると神祇巻のデータがより興味深くなる。なぜなら、この日本の二つの宗教は、自然に対する概念が異なっているからである。神道の考えでは、神社とか神像などのような崇拜の物より、自然そのものの方が神聖なものだとされる。山や湖や島や森などが、もともとはげがれの無い場所であり、神様の最高の現れだと考えられる。それと違い、仏教によると、経験的認識は錯覚を起こさせる経験に過ぎなく、自然の景色は宗教的にそのような大切な要素ではない。そのことが歌枕の使用頻度の高低でもはっきりと表れていると言える。

しかし、もう一つ歌枕の使用頻度が少ない部がある。それは哀部である。哀傷部の百首の和歌の中で、歌枕を使う和歌は八首（ $\infty\%$ ）のみである。この頻度は、釈教巻のそれとほぼ一致するため、直接的な関係があると推測される。それは、哀情の歌は人の死を悲しみ恨む歌であり、日本で古代から人の死は、神道ではなく、仏教の領域となるからである。

尚、冬の巻のデータも見逃してはいけない。ここで目立つのは、古代に雪で有名であった吉野がたった二箇所にしかなっていないことだ。これは時代の移り変わりとともに歌枕の本質も変わってきたということの証明にもなりうる。吉野は古代には雪だけに限らず、隠遁生活を送ることにした人の寂しい場所としても詠まれており、「新古今時代」の歌人はそれを忘れてはいない。しかしこれに関しては、後に述べることにする。

ロ 歌枕を使う和歌の配列

第二節では、土地に関する民話に起源がある歌枕を除けば、歌枕は基本的に二つのグループに分けられると述べた。つまり、場所の地理的な特徴および、場所の名に起源がある歌枕である。本節では、同じ歌枕を詠む和歌連続を挙げ、その連続は詠まれる歌枕によって異なるテクニクで編纂されてきたかどうかを明らかにする。特に、掛詞を成す歌枕の場合は、選者たちはどういうふうには和歌の配列を決めたか。さらに同様に、場所の地理的な特徴を利用する歌枕を中心にする和歌連続は、全体としてどのような印象を与えるのか。これらの点を明確にするために、とりあえず一番意味深い例を挙げる。

『新古今』で歌枕を使う和歌が連続するのは九四箇所ある。平均的にこの連続は三、四首の歌の連続であるが、二九首の長い連続が一つある。これは、一五九〇番々一六一八番である。歌枕を使う九四箇所の中には、同じ歌枕を使う和歌が連なる場合もある。それらは次の三二箇所である。

かすが一二・一三、たつた九〇・九一、よしの一三二・一三三、ふしみ二九一・二九二、ははそのもり五三

一・五三二、あすかかつらぎ五四一・五四二、おほいがは五五五・五五六、なには六二五・六二六、うぢ六三六・六三七、ふきあげのはま六四六・六四七、なるみ六四八・六五〇、かたの六八五・六八六、うぢ七四二・七四三、さが七八五・七八七、あぶくやま八六六・八六七、いせ九四三・九四五、うつのやま九八一・九八三、ふじ一〇〇八・一〇〇九、くつばやま一〇一三・一〇一四、しのぶ一〇九三・一〇九六、なとりがは一〇一八・一〇一九、ながらのはし一五九二・一五九四、すま一五九六・一五九八、すみよし一六〇五・一六〇六、ふぢ一六二・一六一四、よしの一六一六・一六一八、おほはら一六三八・一六三九、ぬびきのたき一六五〇・一六五一、あまのかは一六五二・一六五三、みたらしがは一八八八・一八八九、おしお一八九九・一九〇〇、くまの一九〇七・一九〇八。

― 信夫

右の一覧を見ると分かるように、同じ歌枕を使う和歌の連続は、二首続くのが最も多く三首以上に及ぶのは少ない。四首まで至る歌枕は一つのみである。これは「しのぶ」だ。信夫は『歌ことば歌枕大辞典』では次のように言及している。

陸奥国の歌枕。『続日本紀』に名が見える。現在の福島市域の地。山を中心に里・杜・原・浦など広範囲にわたり詠歌の対象となった。『伊勢物語』十五段での「しのぶ山忍びて通ふ道もがな人の心の奥も見るべく」(二三)の歌が初出で、以後「心の奥」に寄せての忍恋の歌が詠じられた。(久保田祥、馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、1995、p.114)

次に見られる連続の前に一〇九二番の歌が置かれているので、これも挙げる。

物思ふといはぬばかりは忍ぶともいかがはすべき袖のしづくを (一〇九二・神祇伯頭仲)
人しれずくるしきものは信夫山下はふ葛の恨みなりけり (一〇九三・清輔朝臣)
消えねただ信夫の山の峯の雲かかる心の跡もなきまで (一〇九四・藤原雅経)
かぎりあれば信夫の山のふもとにも落葉が上の露ぞ色づく (一〇九五・左衛門督通光)

うちはへてくるしきものは人目のみしのぶの浦のあまの栲縄（一〇九六・二條院讚岐）

これはなぜであろうか。右の連続は恋部に属するからだといっても過言ではなからう。実は、「志信」という地名の和歌的な意義は、地理的な特徴よりも、「忍ぶ」と「偲ぶ」という動詞との同音に基づくものである。そのため、「志信」は隠された恋の隠喩としてよく詠まれている。要するに、この場合では掛詞の役割が優勢だということだ。同様のことが他の連続でも見られるかどうか他の歌枕に關しても言及する。

言うまでもないことだが、右の連続の主なテーマはひそかな恋だ。各歌では、自分の気持ちを隠すことは何よりも大変な体験だと言われている。もちろん言葉は違うが、各歌では読み手が自分の心を告白するように勇気を出せば幸いであるというような秘めた考えを表す。というのは、本連続では何度も同じことが繰り返されているのだ。しかしそれは、反復の巧みな技巧により、単調な印象を与えずに、歌人の気持ちを敷衍することだと言えるであろう。

鳴海

さ夜千鳥声こそ近くなるみ瀉かたぶく月に潮や満つらむ（六四八・正三位季能）

風吹けばよそになるみのかた思ひ思はぬ波に鳴く千鳥かな（六四九・藤原秀能）

浦人の日も夕暮になるみ瀉かへる袖より千鳥鳴くなり（六五〇・左衛門督通光）

こども、地名の地理的な特徴より、地名の名が利用されている。即ち、「なるみ」は掛詞として使われている。片桐氏は、この歌枕を次のように解釈した。

【鳴海】（略）実際の土地とは関係なく、「成る身」「成る」「なり」と掛けてよんだり、「浦」に「恨」を掛けた表現が多かった。そのほか、「月」「霞」「浜ひさぎ」「千鳥」「浪」などの海辺の景物がよみ込まれたが、「身」「恨」などを掛ける表現パターンであるゆえに、人事と自然を一体的に表現することが多いのは当然であろう。（片桐洋一『歌枕歌こしは辞』典増訂版『笠間書院、2002』）

この場合でも、鳴海を軸にする右の連続は大体同じイメージを繰り返し見せる。各歌で、鳴海の冷たい波の上で千鳥の悲しい声が響き、冬の寂しさを深く感じさせる。久保田淳氏は

日本の四季の美意識を鳥でいえば、やはり春は鶯、夏は時鳥、秋は雁、そして冬は千鳥であろうか。清少納言は『枕草子』「鳥は」の段で、千鳥のことを「いとをかし」としか言及していないが、日本人にはあらゆる種の哀感をもって思い起こされる鳥ではなからうか。

と述べている。(久保田淳、馬場あき子編『歌ことば』
歌枕大辞典『角川書店』1993年、p.52)

― 嗟峨

「嗟峨」も同じように利用されている。なぜなら、「嗟峨」は「性」に掛けられているからである。次の三首の和歌は、「性」との掛詞を使い、涙を嗟峨野の露に、泣き声を虫の音に例え、嗟峨野に葬られた故人を偲ぶ。

さらでだに露けき嗟峨の野べに来て昔の跡にしをれぬるかな (七八五・權中納言俊忠)

かなしさは秋の嗟峨野のきりぎりすなほふるさとに音をや鳴くらむ (七八六・後徳大寺左大臣)

今はさは憂き世の嗟峨の野べをこそ露消えはてし跡としのばめ (七八七・皇太后宮大夫俊成女)

父と妻と母。右のそれぞれの和歌ではそのような人の死が嘆かれている。もちろん、本連続は哀傷歌の巻に載っており、各和歌で特別なイメージか情趣を見つけるわけにはいかないと認めざるを得ない。だが、この場合も、詠まれる歌枕は掛詞を含むことができる歌枕であり、和歌の趣に関する歌人の態度はいつもあまり変わらないものである。ここは、先ほど述べたように、歌人が「嗟峨」と「性」との同音を利用し、悲しい性のイメージを暗示することにしたのだ。

― 伊勢

幾夜かは月をあはれとながめ来て波に折り敷く伊勢の浜荻 (九四三・越前)

知らざりし八十瀬の波を分け過ぎてかた敷く袖は伊勢の浜荻（九四四・宜秋門院丹後）
風さむみ伊勢の浜荻分けゆけば衣かりがね波に鳴くなり（九四五・前中納言匡房）

右の和歌は羈旅部に属し、三首とも伊勢の浜荻を詠む歌である。和歌の世界では伊勢は「国」「海」「浜荻」と連語として用いられている歌枕だが、掛言葉を作るにはめったに利用されていない。和歌の趣を中心にすれば、匡房の歌は越前と丹後の歌と深く異なると言えるだろう。最初の二首（九九三・九九四）は、同じ本歌（神風や伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜べに・万葉集・五〇〇・よみ人しらず）を取ることでだけに限らず、歌人の気持ちも余り変わらない。なぜなら、越前も丹後も伊勢の浜までの旅を思い出すからである。越前は「題中の「海浜」を伊勢の海浜とし、本歌の浜荻に月を配し、旅情のわびしさを優雅にしている」（（岩村文人校注・訳『新古今和歌集』（日）本古典文学全集 小学館、1973、p.296））。同様に、丹後は鈴鹿川のたくさんの瀬の記憶を心に蘇らせる。従って、歌人が伊勢の浜に居るものの、現在の認識より、過去の記憶の方が優勢だと言えるであろう。それと違い、『古今集』の「夜をさむみ衣かりがね鳴くなへにはぎの下葉もうつろひにけり」という和歌（二一一・よみ人知らず）を取っている匡房の和歌では、注意は現在の景色に集中される。歌人は伊勢の浜荻を分けていくと、風の寒さを感じるし、雁がねの悲痛な声も聞こえる

宇津の山

旅寝する夢路はゆるせ宇津の山関とは聞かず守る人もなし（九八一・藤原家隆朝臣）
都にもいまや衣を宇津の山夕霜はらふ蔦のした道（九八二・藤原定家朝臣）

袖にしも月かかれとは契りおかず涙は知るや宇津の山越え（九八三・鴨長明）

右の和歌は旅の巻に収められている。そのため、故郷への思いから潜在的に寂しさが感じられるのは当然であろう。だが三首ともに、特に幻想的な雰囲気を感じられる。家隆の和歌は、本歌（駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり―『新古今』九〇四・伊勢物語九段）と同様に、うつつのやまを夢の世界に結びつ

けている。定家も、はつきり夢のことには言及しないが、都で恋人は何をしているのか、という表現が夢につながっていると言える。最後の長明の歌には、歌人の涙が意識的に現実を認識するだろうかという疑問さえ読者の心に生じてしまう。

定家の和歌では宇津の山という名所歌枕が掛け言葉（「ころもを宇津の山」）を作るためにも用いられているが、全体として右の連続では特に強調されることは、孤独を深く感じさせる宇津の山の山路だと言えるだろう。つまり、場所の名前よりも、場所の地理的な特徴（ぼつんと離れた山道）が利用されている。さらに、本和歌連続の随分興味深いことは、歌人の注意が次第に夢の次元（「夢路はゆるせ」）から、遠い都に居る恋人のことを空想する定家の和歌（「都にもいまやころもを」）を経、月影が袖の涙に映っている（「袖にしも月かかれとは契りおかず涙は知るや」）現在の場面にまで移って来るということだと思う。なんども述べているが、歌枕の地理的な特徴が力説される和歌連続は、イメージかテーマを敷衍するより、物語的发展を目的にする。無論、右の連続では、他の連続でも見えるように、描写されることが或るできごとではなくて歌人の意識の変化である。

― 長柄の橋

年ふれば朽ちこそまされ橋柱昔ながらの名だに変わらで（一五九二・壬生忠岑）

春の日の長柄の浜に舟とめていづれか橋と問へど答えぬ（一五九三・惠慶法師）

朽ちにける長柄の橋を来て見れば蘆の枯葉に秋風ぞ吹く（一五九四・後徳大寺左大臣）

『新古今』で「ながらのはし」は、右の三首の和歌にのみ現れるが、最初の二首の和歌だけ掛詞として使われている。忠岑の歌の「昔ながら」は「昔のまま」を意味し、惠慶の和歌の「春の日のながらの浜」は「春の日の長い長柄の浜」を意味する。良く分かるように、この連続のテーマは時間の不可避な流れと人生のはかなさであるが、長柄の橋という歌枕が物語的发展よりも、イメージの敷衍化のために使われている。各和歌で歌人は、長

命を考えさせる橋の名前と、その橋がもうなくなっているという悲しい事実との矛盾に悩む。橋の代わりに、実定（後徳大寺左大臣）の和歌の下の句のように、蘆の枯れ葉に吹く陰鬱な秋風だけ残っている。かくして、同じイメージの反復によって場面の心細い情趣が広がっている。

― 須磨

須磨の浦のなぎたる朝は目もはるに霞にまがふ海人の釣舟（一五九六・藤原孝善）

秋風の関吹き越ゆるたびごとに声うちそふる須磨の浦波（一五九七・壬生忠見）

須磨の関夢をとほさぬ波の音を思ひもよらで宿をかりける（一五九八・前大僧正慈円）

「須磨」を詠むこの三首の和歌では、掛詞はないが絵巻物のように同じ場面を三つの別の時間でとらえられたと考えられるであろう。一五九六番は海人が朝の微風を受け、海の波の中を通過して遠くへ行く場面を描写する。二番目の歌では、時間的な設定は不明であるが、時間は昼か午後ではないかと考えられる。なぜなら、最後の和歌にある「夢」と「宿」の言葉により、場面は夜だということが分かるからである。このように、本連続では時間の流れはきちんと感じられるし、こちらで描写される場面はかなりダイナミックな印象を与えるとと言えるであろう。

― 富士

世の中を心高くもいとふかな富士のけぶりを身の思ひにて（一六一二・前大僧慈円）

風になびく富士のけぶりの空に消えてゆくへも知らぬわが思ひかな（一六一三・西行法師）

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ（一六一四・在原業平朝臣）

この和歌では掛詞などのような技巧はない。ここは、「富士山」の現実性のある特徴（つまり雪と煙）が上手く利用されている。最初の二首の和歌はかなり似ていると言える。両歌とも僧が詠んだ歌であり、「富士山」の煙を歌人の心と比べている。だが、慈円と西行はそれぞれ別の態度あるいは別の気持ちを表わしている。慈円は、

富士山から空に立ちのぼる煙を見ながら、彼自身が同じように俗世間を捨てるつもりだということを表す。西行法師も、風になびく富士の煙を見て自分の状態を考えてしまうが、隠遁をきちんと願望する慈円と違い、彼は自分の魂がどうなるか分からないというような不安を表す。それに対して、業平の和歌は前の二首の和歌とは大分異なる。業平は「富士」の煙ではなく、永続的な雪を詠む。しかも、精神的な雰囲気からもっと理性的な雰囲気に移る。小学館の『新古今和歌集』の注釈によると、「夏にも雪の降る富士を見て、『万葉集』の山部赤人は、その神秘感を厳粛にうたったが、この作者は、知的風雅の対象として興じた」とある。そういうふうには本和歌連続では、歌人の三つの精神状態が描かれていることが分かる。すなわち、(隠遁生活への)憧れと(運命への)不安と(富士山の美しさへの)驚きである。

― 吉野

花ならでただ柴の戸をさして思ふ心の奥もみ吉野の山 (一六一六・前大僧正慈円)

吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ (一六一七・西行法師)

いとひてもなほいとほしき世なりけり吉野の奥の秋の夕暮 (一六一八・藤原家衡朝臣)

この三首の和歌の詠み人は三人とも「新古今時代」の歌人であるが、吉野のイメージが吉野の古代のイメージにかなり近い。

先行研究(参考 片桐洋一「歌枕・吉野」『古典文学に見る吉野』桜トラス、下運動記念講演録『片桐洋一ほか著 和泉書院 1996、p.2-30』)が明らかにしたように、万葉時代では、吉野は特に雪で有名だったが、この最初の二首では春の花が詠まれている。だが本連続では吉野が花見をしに行く名所というよりも、世の中を遁れる隠者の世界として描かれている。これは、慈円の和歌からよく分かる。しかし、世の中を遁れるこの心は、西行の歌で不安定となる。実は西行は、慈円と同じように隠遁することにしたが、慈円とは違い、逃れた世に対して憧れの気持ちを感じている。そのような離れたところでも苦悩をやわらげるのは無理だったという考えは、

家衡の和歌でよく見える。彼は吉野に隠遁しても厭世感をもてあましているようだ。要するに、こちらでも撰者たちが或る人のストーリーを語って見たような気がする。自分の心を落ち着かせるのに世を捨てることにするが、できる限りのことをやってみても、最後にどうしようもないと分かる隠遁者の物語。

まとめ

本章では、『新古今和歌集』における歌枕の役割を取り上げた。それを明らかにするために、『新古今和歌集』で詠まれた歌枕の一覧を作成し、これをもとに以下の二点を調査した。

- 1、代表的な歌枕の特定、およびそれらを詠みこんだ和歌の特徴について。
- 2、歌枕の和歌の配列に対する役割について。

この調査の結果としては次のことが挙げられる。

① 「新古今時代」の歌人には一度も訪れていない所を詠む習慣があったとは言うものの『新古今』で特に多く詠まれた歌枕は、歌人たちが住む近畿の歌枕である。それらの歌枕の中で一番多く詠まれたものは、吉野である。吉野は、後鳥羽院の歌壇の新歌風を代表する歌枕だと認められる。なぜなら、吉野の和歌的な意義の変化（冬から春へ）は、「新古今時代」の歌人の態度の象徴として考えられるからである。

② 歌枕は、『新古今』のそれぞれの巻に均質に配分されている。しかし、羈旅と神祇の部の歌枕の使用頻度は非常に高い。それに対し、釈教と哀情の部のそれは低い。

③ 『新古今』では同様の歌枕を使う和歌の連続がかなり多い。二九首の長い連続も一つあるが、平均的にこのような連続は三、四首である。その中には同じ歌枕を使う連続もあり、それらの連続は、内容的に同じ詠み方がされている。掛詞を伴う歌枕を詠む連続の和歌は、通常相互的に似ており、同様に同じ題を展開することが多い。

例えば、「鳴海」や「嗟峨」などのような歌枕を詠む歌である。これらは歌枕の単なる名だけに限らず、自然地
理的な特徴が利用されるなどの幾つかの共通点があり、和歌の連続がもっとダイナミックである。「須磨」と
「吉野」を詠む三首の連続は意義深い例である。なぜなら、「須磨」が連続する場合には場面の時間的な流れが
見え、「吉野」を詠む三首の連続では詠み手の心の様子の変化（つまり精神的な発展）が見えるからである。

注一 比喩法の一。ある事物を表すのに、それと深い関係のある事物で置き換える法。「青い目」で「西洋人」を、「鳥居」で「神社」を表す類。

第二章 『新古今和歌集』における体言止め

はじめに

第一章では『新古今集』における歌枕について論じた。特に、『新古今集』の歌枕はどのような特徴を表すかということ明らかにした後、それらは本勅撰集に対してどのような影響を与えたか、つまりそれぞれの和歌連続ではどのような役割を果たしているかという問題も明確にしてみた。換言すれば、『新古今集』の撰者たちは和歌連続を決めた時、歌枕を重視したかどうかを明らかにするために同じ歌枕を詠む幾つかの和歌連続を分析した。

本章では、「体言止め」という技巧を中心にして、同様の調査を行う。周知のように「体言止め」とは和歌の句の最後を名詞で終わらせる表現技法だ。実は、和歌で使われる体言止めは、どの句で使われているかによって違うものだ。たとえば、三句で表れれば「三句体言止め」と称するが、第五句で表れれば「五句体言止め」と称する。だが、このテーマを研究した他の学者の例に従って、本調査では「五句体言止め」だけを中心にする。それは、『新古今集』では「五句体言止め」の方が「三句体言止め」より数的にも質的にも興味深いものだからである。さて、『新古今集』に対して「五句体言止め」（「体言止め」と称す）はどのような影響を与えるのかを明確にするために次の点を考察する。

① 『新古今集』の和歌を中心にして、いわゆる「新古今時代」の歌人は、体言止めに対してどのような態度を示すか。すなわち彼らは、体言止めに欠かせない詩的なテクニクと見なしていたかどうかということを調べる。特に、「新古今時代」の歌人による体言止めの使い方は、前の時代の歌人と比べれば違うかということも論考する。このような調査を行うためには、「八代集」のデータを対照する（参考 page 表③）。

② 『新古今集』の体言止めに詳しく論究する。とりあえず当時は、体言止めを作るにはどのような言葉が使われたかということ調べる。そうすれば、体言止めならば他の言葉より特に相応しい言葉があると言えるかを

確認するであろう。しかし、本調査は体言止めとして使われる言葉に限るものではない。体言止めがそれぞれの和歌でどのような役割を果たすかをきちんと分けるには、体言止めを使う和歌の統語論上構造も分析する。そうすれば、体言止めと和歌連続の規範との関係をもっと明らかにすることができるであろう。

このように、『新古今集』の撰者たちは和歌連続を決めた時に、どのような根拠に従ったかという問題を先行研究とは、別の視点から考察することができるであろう。

第一節、『新古今集』の歌人と体言止め

『新古今集』を特徴づける様々な技巧中では、間違いなく「体言止め」があると見える。それは、『新古今集』において、体言止めの歌が非常に多いからだ。それらは四六一首に及び（資料④）、本歌集の四部の一を超えるものだ。次の節でより詳しく論じるが、その数は前の勅撰和歌集と比較すれば、特に興味深いデータになる。なぜなら、体言止めの技巧が前の時代にも使われていたものの、「新古今時代」に至ると急増したからである。ともあれ、本節では『新古今集』の歌人だけを中心にしても、その傾向の証拠を掴むことができるであろう。体言止めを使う四六一首の読み人を調査すれば、それらの大部分が「新古今時代」の歌人だと分かる。『新古今集』で三回以上体言止めを使う歌人を列挙する。

藤原良経・二六首、慈円・二五首、式子内親王・二二首、藤原家隆・二一首、藤原定家・二一首、寂蓮・二〇首、藤原俊成・一八首、西行・一七首、藤原雅経・一六首、後鳥羽院・一四首、藤原俊成女・一三首、藤原有家・八首、源通具・六首、鴨長明・六首、宮内卿・六首、源具親・六首、源通光・六首、寂然・六首、二条院讚岐・六首、殷富門院大輔・六首、公経・五首、藤原秀能・五首、恵慶・四首、相摸・四首、藤原兼実・四首、藤原実定・四首、惟明親王・三首、宜秋門院丹後・三首、紫式部・三首、菅原道真・三

首、藤原清輔・三首、藤原忠良・三首、八条院高倉・三首（資料④）

菅原道真・相摸・恵慶を除けば、右の歌人は全て「新古今時代」として示される時代の歌人である。では、「新古今時代」とは具体的に言うならば、どの時期を示すものであるのか。先行研究では二つの考え方が見られる。一つは、狭義に解釈するものであり、もう一つは、広義に解釈するものである。狭義に解釈する考え方によると、「新古今時代」とは、後鳥羽院の歌壇が活動していた時期だけにするものである。それどころか、久保田淳氏は「新古今時代」よりも「後鳥羽院時代」という方が相応しい表現であると述べた（久保田淳校注『新古今和歌集』上、新潮社、1979.3.9. p. 344）。たしかに、宮廷の詩的な活動に対する後鳥羽院の求心力は否定できないだろう。しかし、久保田氏の定義は少し限定的であり、「時代」という概念に余り適応しないものだと考えられるであろう。それに対して、「新古今時代」を広義に解釈する、藤平春男氏のような観点がある。藤平氏の考えによると、「新古今時代」というのは、建久年間を主とする良経家歌壇期から、承久の乱に至る建保年間を中心として活動を続けた順徳院内裏歌壇期までのものである（藤平春男『新古今歌壇の形成』明治書院、1981. p. 4-5）。有吉保氏の研究も、後者の考えの確証を深めるものである。氏は、建久年間に行われた『六百番歌合』と『新古今集』との関係を考察した時に、

六百番歌合は、新古今集の基盤や性格を端的に把握できる恰好の資料である。（略）この歌合が（略）新古今集中にあつては、千五百番歌合の九十一首、正治初度百首の七十九首に次いで、第三位の三十四首を占めるものである

と述べた（有吉保『新古今和歌集の研究』基盤と構成』三友堂、1984. p. 3）。それ故に、本研究では後者の考えに倣い、広義の「新古今時代」を指して言う。とにかく、力点を置きたいのは、体言止めに対する当時の歌人の熟練ということである。この考察は、「六百番歌合」を後援した藤原良経のデータ（二六首）を見るならば、もっと興味深くなると言えるであろう。後鳥羽院の歌壇の活動は、宮廷の歌風の革命になったと考えられるが、この革新の第一歩は宮廷の和歌活動の守護であった良経の時期に遡るといふことを無視してはいけなからい。

ともあれ、「新古今時代」の歌人と体言止めとの関係をより明らかにするならば、五句を月か月影のイメージで終わらせる和歌を例として挙げればよいだろう。それは、誰にも知られるように、古典和歌では月が古代から絶え間なく欠かせない詩的な要素であったからだ。実は、月の美しさを詠む和歌は、数えきれないほどたくさんある。体言止めを中心にして、『古今集』と『新古今集』を比較すれば、随分興味深い結果が出る。『古今集』では、「月」・「月影」という言葉を五句体言止めとして使う和歌は次の三首だけだ。

白雲に羽うちかはし飛ぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月（一九一・読み人しらず）

佐保山のははそのもみぢ散りぬべみ夜さへ見よと照らす月影（二八一・読み人しらず）

ふたつなきものと思ひしを水底に山の端ならでいづる月影（八八一・紀貫之）

それと違い、『新古今集』では、五句を「月」か「月影」で終わらせる和歌の数は著しく増加し、七二首に及ぶ。

無論、『古今集』と『新古今和歌集』のデータを対照する時に、『新古今集』の和歌数が『古今集』と比べればほぼ二倍だという事実を忘れてはいけないが、それにしても本調査の結果は大変興味深いと言えるであろう。とりあえず、「新古今時代」の新しい風体を代表する歌人の和歌を挙げておきたい。（『新古今集』で一〇回以上体言止めを使う歌人だけを列挙する。傍線は、三つの体言と二つの「の」や四つの体言と三つの「の」という助詞のみで成立している和歌の下句を示す）

藤原良経

空はなほ霞もやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月（二三）

もろともに出でし空こそ忘れられぬ都の山のありあけの月（九三六）

忘れじと契りて出でし面影は見ゆらむものをふるさとの月（九四一）

わくらばに待ちつるよひも更けにけりさやは契りし山の端の月（一二八二）

慈円

ふけゆかばけぶりもあらじ塩釜のうらみなはてそ秋の夜の月（三九〇）

憂き身にはながむるかひもなかりけり心にくもる秋の夜の月（四〇四）

やはらぐる光にあまる影なれ五十鈴川原の秋の夜の月（一八八〇）

式子内親王

ふくるまでながむればこそ悲しけれ思ひも入れじ秋の夜の月（四一七）

秋の色はまがきにうとくなりゆけど手枕なるる閨の月影（四三二）

風寒み木の葉晴れゆくよなよなにのこるくまなき庭の月影（六〇五）

君まつとねやへも入らぬ真木の戸にいたくな更けそ山の端の月（一二〇四）

藤原家隆

ながめつついくたび袖に曇るらむしぐれにふくる有明の月（五九五）

志賀の浦や遠ざかりゆく波間より氷りて出づる有明の月（六三九）

野べの露浦わの波をかこちてもゆくへも知らぬ袖の月影（九三五）

忘るなよいまは心のかはるともなれしその夜の有明の月（一二七九）

藤原定家

おほぞらは梅のにほひに霞みつつくもりもはてぬ春の夜の月（四〇）

ひとり寝る山鳥の尾のしだり尾に霜おきまよふ床の月影（四八七）

忘るなよ宿るたもとは変わるともかたみにしぼる夜半の月影（八九一）

言問へよおもひおきつの浜ちどりなくなく出でし跡の月影（九三四）

帰るさのものとや人のながむらむ待つ夜ながらの有明の月（一二〇六）

松山とちぎりし人はつれなくて袖越す波にのこる月影（一二八四）
寂蓮

高砂の松も昔になりぬべしなほゆくすゑは秋の夜の月（七四〇）

西行

捨つとならば憂き世をいとふしるしあらむわれ見ばくもれ秋のよの月（一五三三）

藤原雅経

たづねきて花にくらせる木の間より待つとしもなき山のはの月（九四）

かげとめし露の宿りを思ひ出でて霜にあと問ふ浅茅生の月（六一〇）

影やどす露のみしげくなりはてて草にやつるるふるさとの月（一六六六）

後鳥羽院

秋ふけぬ鳴けや霜夜のきりぎりすやや影寒しよもぎふの月（五一七）

たのめずは人を待乳の山なりと寝なましものをいざよひの月（一一九七）

ながめばや神路の山に雲消えてゆふべの空を出でむ月影（一八七五）

藤原俊成女

梅の花あかぬ色香もむかしにておなじ形見の春の夜の月（四七）

大荒木の杜の木の間をもちかねて人だのめなる秋の夜の月（三七五）

さえわびて覚むる枕にかげ見れば霜深き夜の有明の月（六〇八）

五句で月のことを詠む藤原俊成の一首の和歌もあるが、五句の最後の名詞が「月」・「月影」ではないので、右の列挙に入れていない。俊成の和歌は次だ。

夏刈りの蘆のかり寝もあはれなり玉江の月の明方の空（九三二）

良く分かるように、調査を「新古今時代」の歌人に限っても、体言止めとして「月」・「月影」を使う和歌の数は結構多い。だが、右の和歌で一目瞭然のことは、和歌の半分ぐらいの第五句は、三つの名詞と二つの「の」という助詞で成立しているものごとである。そのような構造は古代から決して見られなかったわけではないが、「新古今時代」に至ると、歌人はそれを好み、意識して利用し始めたと言えるだろう。

山崎敏夫氏は、『新古今集』における体言止めについての論文で、四つの体言と三つの「の」という助詞のみで成立している和歌の下句を考察する時に、

体言止めそのものが、文としては破格であるわけであるが、体言と助詞「の」の連続で成っている、この下句の構造は、文としては極めて不自然のものであると言える。その不自然であるところはこの時代の歌人は、調べの新奇を見出したのである。不自然であるが故にこの形は、歌の意味が安定し難いところがある。その意味の不安定の上に、これらの歌の作者たちは、余意と余情の効果を期待したものである。したがってこの下句の特殊な構造は、単に形式としての新しさがそこに見られるのみではなく、それは新古今の歌風そのものの特殊性に直接につながっているわけである

と述べている （山崎敏夫「新古今集の体言止歌の下句構造」『愛知県立女子大学説林——The Bulletin of the Association of the Japanese Literature of Aichi Prefectural Women's College』74, 1960.12, p.3）。

四つの体言と三つの「の」という助詞のみで成立している和歌の下句を論じる山崎の論文と違い、本節では三つの名詞と二つの「の」という助詞で成立している五句を使う和歌を中心にしたもの、体言止めとそれを伴う構造が「新古今時代」の歌人には、新しい歌風を確立するために非常に大切な手段だったと認めなければならぬ。当然の帰結として、『新古今集』の撰者たちは、和歌の配列を決めた時に、体言止めに十分注意を払ったと言ふことが仮説として認めらると思う。次の節で、体言止めは、撰者たちが『新古今集』の多い和歌連続を決定した時に、どの点まで重要な技巧とされたかという問題を解決することを試みる。

第二節、体言止めを使う和歌の配分と連続

体言止めは『新古今集』の和歌連続に対してどのような影響を与えたかという点を論じる前に、体言止めを使う和歌が本勅撰集ではどのように配分されているのかということ进行を明らかにしておきたい。このように、体言止めは特定の部立とより強い関係を持つかどうかということを確認することができるであろう。その後、体言止めと和歌連続との関係について考察する。

さて、『新古今集』における体言止めの配分を明確に見せるには次の表が挙げられる。先程述べたように、『新古今集』では体言止めを使う和歌が四六一首であり、全体の四分の一ぐらいだ。それは、より詳しく言えば、二三％である。それ故に、この二三％を基準とすれば、『新古今集』では体言止めが特殊な役割を果たす部分があるかどうかということを確認することができる。

比率関係	体言止めを使う歌数	巻の歌数	部
31.5	223	706	季
18	9	50	賀
12	12	100	哀
15.3	6	39	離
29.7	28	94	羈
16.5	74	446	恋
18.7	78	416	雑
23.4	15	64	神
25.3	16	63	積

表①

32.7	57	174	春
33.6	37	110	夏
32.7	87	266	秋
26.9	42	156	冬

表②

上記の表①から良く分かるように、一番意味深いデータは、四季部に関するものである。なぜなら、『新古今集』の最初の六巻に入選された七〇六首の二二三首の和歌、すなわち三一・五％は、体言止めを使うからである。さらに、四季部に関するデータをより細かく分解して分析すれば（表②）、体言止めの比率が春と夏と秋の巻でもう少し増えると分かる。当然それは、冬の巻における体言止めの比率が二七％に過ぎないものだからである。表①に表れる四季部に関するデータが、前の勅撰和歌集に関するデータと対比すれば、より興味深いものになると言えるであろう。言うまでもないことであるが、それぞれの勅撰和歌集における

古今集	7.9 %
後撰集	5.3 %
拾遺集	8 %
後拾遺集	11.8 %
金葉集	12.6 %
詞花集	12.6 %
千載集	21.2 %
新古今集	31.5 %

表 ③

四季の歌の体言止

全体の和歌数は違うが、それにしても比率関係は興味深いものである。表③は、先行研究の結果を示すものだ(武内章一・他二十一代集における体言止めについて、『名古屋大学国語国文学』6号、昭和10年)。その表③から良く分かるように、調査を四季部に限っても、『新古今集』に至ると体言止めの急増が見える。それは、当時の歌風の傾向を明確にするものであるもので、大変興味深いデータだと言ってもよろう。

周知のように、後鳥羽院は『新古今集』の準備に長い間打ち込んでいた。彼は編纂の過程を監督することに限らず、『新古今集』の基盤となるべき多くの歌合をパトロ

ンとして活発的に催していた。その中で、古典和歌史上画期的な歌合せと見なされる『千五百番歌合せ』もある。それ故に、『新古今集』は、当時の宮廷歌風の鏡になるためにこそ編集されたという事実を認めれば、体言止めが『新古今集』だけではなく、後鳥羽院の歌壇の歌風に対しても重要な技巧であったと言えるであろう。

『新古今集』で認められる体言止めと季節部の和歌との密接な関係を考察する前に、羈旅部において、興味をそそられる二つの和歌連続を論じておきたい。一つ目は「月」か「月影」という言葉で五句を終わらせ、第一節でも記載した和歌連続だ。

言問へよおもひおきつの浜ちどりなくなく出でし跡の月影（九三四・藤原定家）

野べの露浦わの波をかこちてもゆくへも知らぬ袖の月影（九三五・藤原家隆）

もろともに出でし空こそ忘れね都の山のありあけの月（九三六・藤原良経）

先ず以て、定家の和歌は、体言止めを使う和歌を疑問の余地なく解釈することが時々困難なものであるということ。これをさらに考えるきっかけとなるものだ。第一節では山崎氏の論文を引用した時に、体言止めは和歌の意味の不安定をもたらしやすいものだと分かった。実は、定家の右の和歌は一つの意味だけで解釈される和歌ではないのである。最初のところでは命令形が使われているが、その命令（「言問へよ」）は歌人が誰（何）に下すので

あろうか。久保田氏はそれを次のように解釈している。

月よ、尋ねてくれ、浜千鳥が鳴くように、なごりを惜しみながら、わたしが泣く泣く興津の浜を出たあと

を（久保田海校注『新古今和歌集』
上新集社 1979.3 p.322.）

それに対して、小学館の『新古今集』では、歌人が月ではなく、千鳥に声をかけるといような次の現代訳が読める。

思う人のことを尋ねてくれよ。思いを残して来た興津の浜千鳥よ。別れを惜しんで泣く泣く出立したあとにさしている月の光に（荻村文人校注・訳『新古今和歌集』（日）
本古典文学全集 小学館 1974.3 p.294）。

右の解釈は、どちらが正しいかということ客観的に決めることが随分難しいことである。しかし、その和歌を体言止めも呼びかけも同時に使う『新古今集』における他の和歌と比較すれば、久保田氏の解釈の方が適切であると言えると思う。なぜなら、次の節で述べるように、体言止めが呼びかけとともに使われる時に、歌人は殆ど五句を終わらせる要素に声を掛けるからである。

ともあれ、右の三首の和歌を連続すれば、月影が故郷から離れている旅人の寂しさに光をばつと注ぐというよな感じがするとと言えるであろう。本和歌連続で、歌人に対して体言止めがどの点まで月影による精神衝撃を最大限に高めるかということを知るために、体言止めを使わない次の和歌を対比として挙げたい。

月見ばと契りおきてしふるさとの人もやこよひ袖濡らすらむ（九三八・西行）

西行の和歌では、月のイメージが初句で現れるが、歌の全体の調子が体言止めを使う和歌と対照すればよりやわらかいものだと言えるであろう。

『新古今集』において、体言止めを使う一番長い和歌連続は六首に及ぶ連続である。二つしかないが、一つは羈旅部にある。

明けばまた越ゆべき山の峯なれや空行く月の末の白雲（九三九・藤原家隆）

ふるさとのけふの面影さそひ来と月にぞ契る佐夜の中山（九四〇・藤原雅経）
忘れじと契りて出でし面影は見ゆらむものをふるさとの月（九四一・藤原良経）

あづまぢのよはのながめを語らなむ都の山にかかる月影（九四二・慈円）

幾夜かは月をあはれとながめ来て波に折り敷く伊勢の浜荻（九四三・越前）

知らざりし八十瀬の波を分け過ぎてかた敷く袖は伊勢の浜荻（九四四・宜秋門院丹後）

右の連続で見られる体言止めの使い方は、配列のことを中心にすれば、前の三首の和歌連続と少し違うと思う。九三四番く九三六番の連続では、五句を終わらせる体言の反復が寂しい旅の趣を深める効果を狙うものであるが、九三九番く九四四番の連続では、体言止めが場面に躍動感を与えるのに巧みに使われると言えるであろう。後者の和歌連続の中心イメージも月と月影というものであるが、その様子は各和歌で違う。家隆の和歌（九三九）は、月の存在は読者から間接的に感じられると言えるであろう。それは、月の輝きが空の白雲に反射するからである。それに対して、雅経の和歌（九四〇）は、月が直接に目に見えるようになる。だが、まだ体言止めとして使われていない。そのように、月そのものより、夜に旅人が寂しく渡っている中山に注がれる月明かりの方が読者の心に刻み込まれてしまうと考えられるであろう。それに引き換え、良経と慈円の和歌では、月とその魅力的な光は五句を終わらせ、随分感動させるものだと言っては過言ではないと思う。このような視点から考えれば、右の連続の最後の二首の和歌は歌配列を決めた撰者たちの基準への注意をさらに喚起させるものになるはずだ。その二首の和歌は一見したところかなり似ていると考えがちだ。実は、両首とも伊勢の浜荻を詠むことだけに限らず、同じ本歌（神風や伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜べに・新古今集・九一一・詠み人しらず）も取る和歌であるのだ。しかし、上述したように、本連続が月のイメージをめぐるものだとすれば、越前と宜秋門院丹後の和歌は大分違うと言えるであろう。言うまでもないが、基本的な違いは、月の存在に関するものである。越前の和歌では、月は第二句で現れ、背景に戻ってしまうものの、まだ目に見える。だがそれと違い、宜秋門院

丹後の和歌では月は完全に消えてしまうのだ。

要するに、こちらで紹介した和歌連続には、強い一貫性を感じさせる二つの共通点があると言える。一つは、体言止めということであり、もう一つは、月とその光ということである。だが、大変興味深い特徴として次のことが挙げられる。一方では体言止めの反復の方が構造的にも文体的にも安定の強い印象を与えるものだが、他方では月明りの動きの方が和歌連続にダイナミックな印象をひびかせるものである。すなわち撰者たちは、現代の巧みな撮影監督のように、次第に現れ次第に消えていく月の動きを利用することにより、旅人の寂しさが強調されているドラマチックな場面を作ることができた。

さて、上述したように、『新古今集』における体言止めは、とりわけ季節部の和歌と強く結ばれる技巧である。それは、体言止めを使う和歌の配分に関するデータだけから分かるものではない。なぜなら、体言止めと季節を詠む和歌との関係は体言止めを使う和歌連続の配分に関するデータからも分かるものだからである。

『新古今集』では、体言止めを使う和歌が連続的に配列されている場合が少なくはない。再び述べるが、連続的に並んでいる和歌は六首までに及ぶ。(言うまでもないが、一連続の和歌の数が増えれば増えるほど、この連の数は減ってしまう)。だが、次の一覧から分かるように、体言止めを使う和歌の連続は、特に季節の最初の六巻に見られる。(傍線が引かれた数字は、四季の巻の和歌である。)

二首の和歌の直接連続 五十一連

二二・二三、二六・二七、三七・三八、五八・五九、一二九・一三〇、一三二・一三三、一四四・一四五、
一五四・一五五、二二〇・二二一、二二六・二二七、二三九・二四〇、二五一・二五二、二六〇・二六一、
二六八・二六九、二七九・二八〇、二九五・二九六、二九九・三〇〇、三〇七・三〇八、三五一・三五二、
三五六・三五七、四〇三・四〇四、四一二・四一三、四三四・四三五、四七四・四七五、五一四・五一五、
五九四・五九五、六一〇・六一一、六三六・六三七、六七三・六七四、六八二・六八三、八九一・八九二、

九五三・九五四、九五七・九五八、一〇七三・一〇七四、一〇七九・一〇八〇、一一九七・一一九八、
二〇一・一二〇二、一三三七・一三三八、一四二四・一四二五、一五〇五・一五〇六、一五一一・一五一
二、一五二〇・一五二一、一五四三・一五四四、一五九六・一五九七、一六〇九・一六一〇、一六五〇・
一六五一、一六六三・一六六四、一八四九・一八五〇、一八八〇・一八八一、一九一〇・一九一一、一九
六八・一九六九

三首の和歌の直接連続 二十二連

九二〇・九四一、一五九〇・一六一一、一七三〇・一七五〇、二一五〇・二一七〇、四四二〇・四四四〇、四九一〇・四九三〇、五
〇三〇・五〇五〇、五九七〇・五九九〇、六六一〇・六六三〇、九三四〇・九三六〇、九六七〇・九六九〇、一二七四〇・一二七
六〇、一二八〇〇・一二八二〇、一二八四〇・一二八六〇、一三〇九〇・一三一〇〇、一三二〇〇・一三二二〇、一三二五〇・
一三二七〇、一四七二〇・一四七四〇、一六〇一〇・一六〇三〇、一六七三〇・一六七五〇、一七九二〇・一七九四〇、一九
三七〇・一九三九〇

四首の和歌の直接連続 三連

二七三〇・二七六〇、三七四〇・三七七〇、七四〇〇・七四三〇

五首の和歌の直接連続 三連

三一九〇・三二二〇、四二〇〇・四二四〇、六〇四〇・六〇八〇

六首の和歌の直接連続 二連

三五九〇・三六四〇、九三九〇・九四四〇

『新古今集』は、和歌の配列の面から判断すれば、全体として随分洗練された勅撰集だとよく言われることだ
が（参考 有吉保『新古今和歌集の研究』
基礎と構成』二巻集、1984）、撰者が特に注意を払ったのは、間違いなく季節の移り変わりを描写する巻第一〜六の和歌の
配列だと言っても過言ではないであろう。和歌の配列にきちんと注意を払うこうした態度は、『古今和歌集』の

時代までに遡ることだと認められるが、「新古今時代」に至ると、当時の歌学者により、この技巧は「新古今時代」以前よりも理論的に整理された。『古来風躰抄』では、季節的な歌材と和歌ということについて考察する時、後鳥羽院の歌壇で高名な歌人と見なされた藤原俊成は和歌の正しい配列を詳しく説明し、自然界の要素の登場順番の規則をつぶさに定めている（橋本不審男、有吉保、藤平春男校注・訳『歌論集』、日本古典文学全集 小学館、1975、4、p.371-373）。

本歌論書では、「新古今時代」以前の歌を例歌として、体言止めを使う和歌が何首かが挙げられているが、体言止めの技巧と区別しては、論じられていない。「新古今時代」の歌風の代表歌人として考えられる、『新古今集』の撰者が特に注意を払ったのは、四季折々の移り変わりを描写する和歌の配列だということをもまず認め、先に見たように、『新古今集』の最初の六巻において体言止めを使う和歌の数が比率的に多いことから、当時の歌人は意識的にこの修辞技巧を使っていた、と考えられる。

『新古今集』の四季部において、体言止めを使う六首の和歌連続は後で論じるので、こちらで秋部に属する他の三つの和歌連続を考察したい。三つとも五首の和歌連続だ。

たなばたの衣のつまはこころして吹きな返しそ秋の初風（三一九・小弁）

たなばたのとわたる舟の梶の葉にいく秋書きつ露のたまづさ（三二〇・皇太后宮大夫俊成）

ながむれば衣手すずしひさかたの天の川原の秋の夕暮（三二一・式子内親王）

いかばかり身にしみぬらむたなばたのつま待つ宵の天の川風（三二二・入道前関白太政大臣）

星会ひの夕べすずしき天の川紅葉の橋をわたる秋かぜ（三二三・権中納言公経）

右の連続は七夕を詠む歌のグループの一部である。本連続では、今まで挙げた連続と違い、五句を終わらせる同じ体言を使う和歌は連続的に配列されていない。二回現れるイメージは秋の風というものであるが、小弁の和歌（三一九）では「秋の初風」、公経の和歌（三二三）では「わたる秋かぜ」という表現で現れている。このように、同じイメージの反復ということはないので、その連続で或る程度の変動性が認めることが出来るであろう。

しかし、右の和歌連続で体言止めそのものは強い連続性を感じさせるのに欠かせない要素だと言わなければならぬ。その証拠になるものは、三二〇番と三二一番との結びだと考えられるであろう。他の和歌組では連続性を強める要素を割り出すことはかなり簡単なものであるのに、俊成と式子内親王の和歌の組み合わせの場合ではそれほど容易ではない。実は、秋のことを除けば、その二首の和歌が共有する要素は、たった一つのものであり、それは体言止めそのものである。

次に分析したい和歌連続は宇治の橋姫を詠む藤原定家の名歌で始まる連続だ。

さむしろや待つ夜の秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫（四二〇・藤原定家）

秋の夜の長きかひこそなかりけれ待つにふけぬる有明の月（四二一・右大将忠経）

行く末は空もひとつの武蔵野に草の原より出づる月影（四二二・藤原良経）

月をなほ待つらむものか村雨の晴れゆく雲の末の里人（四二三・宮内卿）

秋の夜は宿かる月も露ながら袖に吹きこす荻のうは風（四二四・右衛門督通具）

右の連続は、前に記載した和歌連続（九三九番〜九四三番）と同様に月とその光を中心にする連続である。それだけに限らず、この場合も撰者たちは前掲の連続とまったく同じように月と月影の動きを巧みに利用し、この連続にも躍動感を印象付けることができたとと言えるであろう。実は、右の和歌連続で月が次第に現れ来て、次第に消えて行くものなのである。定家の和歌で月光は衣の片袖のように妖艶に敷かれている。その和歌の第四句は「月をかたしく」というものであるが、定家が描写したいことは月そのものではなく、宇治橋と橋姫を包むやわらかい月明かりということだと考えられるであろう。それに対して、次の二首の和歌では、月が五句を終わらせる体言（「有明の月」「出づる月影」）であり、遠景から近景に移動してくる。何回も述べたように、体言止めは日本語の普通の統語法から離れる技巧であり、五句を終わらせる体言として使われる言葉が読者の心に随分深い印象を残すものである。それ故に、忠経と良経の和歌は或る意味で本連続のクライマックスだと言っ

てもよからう。しかし、そのクライマックスの後で月はもう一度近景から遠景に引き戻されてしまう。宮内卿と通具の和歌では、月のイメージは消えていくが、月の光は魅力的に注がれ続ける。宮内卿の和歌の題は「雨後の月」であるが、小学館の注釈のところで読めるように、「題意を、村雨の晴れた里で見る月とした。里から里へ晴れ間の移動する光景をも生かし、余情を新鮮にした」(『新古今和歌集』(日) 本古典文学全集 小学館 1974.3. p.148)と読める。通具の和歌では、月の光が萩の露の小さいしずくで凝結してしまおうというような感じがすると見えるであろう。従って、体言止めで一貫性を印象付けられた本連続でも撰者たちは場面に躍動感付けようとしていたということが認められるであろう。以上のことは偶然ではない物だということを証拠だてるために、次の和歌連続も挙げられる。

秋の色を払ひはててやひさかたの月の桂にこがらしの風(六〇四・雅経)

風寒み木の葉晴れゆくよなよなにのこるくまなき庭の月影(六〇五・式子内親王)

わが門の刈り田のねやにふすしぎの床あらはなる冬の夜の月(六〇六・殷富門院大輔)

冬枯れの杜の朽ち葉の霜の上に落ちたる月の影のさむけさ(六〇七・清輔)

さえわびて覚むる枕にかげ見れば霜深き夜の有明の月(六〇八・皇太后宮大夫俊成女)

右の和歌連続でも、前に記載した和歌連続(四二〇番〜四二四番)とまったく同じ和歌配列戦略を認めることが出来ると言えらるであろう。体言止めを使うその五首の和歌の中心イメージも月と月影といふことである。それだけに限らず、右の和歌連続でも撰者たちが和歌の再構築化により、月とその光の魅力的な動きを生じさせることが出来た。雅経の和歌(六〇四)には月が存在するが、本当の中心要素は秋のすべての色、つまり紅葉を吹き払った寒い木枯らしの風ということだと認めなければならぬであろう。歌人は、中国の伝説を暗示し、今更紅葉を觀賞できるところとしては、桂が植えている月だけが挙げられるだろうかということを考えているようだ。このようにこの和歌の月は、雲が晴れた空ではなく、神話の次元で現れると言ってもよからう。その後、大きくてまっ白い天体として空に現れる前に月は、寒い風が木の葉を完全に吹き落した庭の地面に魅力的な光を注ぐ

（「庭の月影」）。それは、もう一度月の存在が月光にやわらかく包まれる物の様子から間接的に感じられるということである。

月が初めて空にはつきり見えてくる和歌は、殷富門院大輔の和歌だ。歌人はこの和歌でも、先ず乳白色の光に包まれた物、より詳しく言えば鳴の床、を見てすぐ空に目を向け、「冬の夜の月」ということを描写する。だが、それは一瞬の体験にすぎないものである。なぜなら、月影は次の清輔の和歌（六〇七）ではすぐ「冬枯れの杜の朽ち葉の霜」逃げ込んでしまい、「影のさむけさ」という共感覚（シネスシージャ）を生じさせるからである。そして、本連続の最後の和歌では月の光はより一層ビジュアル的に限られてしまおうと言えるであろう。清輔の和歌の場面は冬の枯れ森ということであり、歌人の視野はかなり広いと言ってもよい。しかし、俊成女の和歌では歌人の視野は大分縮んでしまうものである。歌人は寒さのせいで起きてしまつて目をわずかに開けると、枕の霜に宿っている月影だけが見える。

第三節、体言止めとして使われる言葉——その一・語彙の分類を中心に

第一と二節では、『新古今集』における体言止めを使う和歌の大部分はいわゆる「新古今時代」の歌人の詠んだ和歌だということが分かり、その技巧は「新古今時代」の歌人にとってどの点まで重要なテクニクだったかということも明らかにした。実は、後鳥羽院の歌壇の和歌活動は、その技巧の頻繁な利用によって強く特徴づけられたものである。上述したように、当時の歌風の鏡とされる『新古今集』で見られる傾向は、前の勅撰和歌集をめぐる調査の結果と比較すれば、とくに分かりやすいものである。

『新古今集』における体言止めを使う和歌を調べ、随分興味深い結果を得た。それは、体言止めはとりわけ四季をテーマにする和歌でよく使われていたということである。その証拠に、四季折々を描写する最初の六巻では、体言止めを使う和歌の比率は全体の比率と対照すれば、かなり高いものである。それに加え、体言止めそのもの

は『新古今集』の幾つかの和歌連続の一貫性を生じさせたり強めたりする必須条件だということを、その和歌連続の分析により、裏付けることもできた。本節では、体言止めと或る特殊な言葉との厳密な関係が認められるかどうかという問題点を解決してみたい。それをするには、体言止めを使うすべての和歌の第五句を集め、五つに分類した。その調査の結果は非常に興味深いものであると言えるであろう。

本調査で使う分類は、「植物」・「動物」・「天象」・「地儀」・「人事」というものだ。それらは中性哲氏による分類である（中性哲「八代集の体言止めの歌の性格」『富山大学文学』
『富山大学文学部』二号、一九七〇年、三〇―三三）。「植物」と「動物」と「地儀」という部類には特別な問題はないが、「天象」と「人事」という分類にどのような言葉を入れることにしたかということは、明らかにしておかなければならない。

日本語の「天象」という言葉には、広辞苑の定義によれば、基本的に二つの意味がある。それは、イ「天体の現象。日・月・星のおこす現象」、ロ「空模様」という意味である。しかし本調査で、行う以下の分類には「日・月・星・風・雲・雨・雪」などのような景物だけに限らず、「天体の現象」でも「空模様」でもない「露・霜・玉水」というような言葉も入れることにした。

「人事」という部類には、人間のことを示す「みやびと」か「しまもり」などのような言葉だけではなく、人間の世界に関する言葉も入れることにした。つまり、人間から作られた「つりぶね」や「たくなわ」などのような言葉と、人間の心境を示す「うれしさ」などのような言葉も入れた。さらに、人間の意識状態に関する「ゆめ」というような語も「人事」の分類に入れることにした。

植物・動物・天象・地儀・人事を表わす語句は、個々に使われる場合もあるし、合併して使われる場合もある。まずは、体言止めとしては、個々の語句を使う和歌に関しての本調査の結果を述べておきたい。（一％を超える和歌の比率だけを記載する。例歌としては、特に分かりやすい和歌を選んだ。資料⑥で結句は、『新編国歌大観』の索引の例に倣い、漢字を仮名に改めた。）

- ① 天象 二一六首（四六・八％）
- 例 またも来む秋をたのむの雁だにも鳴きてぞ帰る春のあけぼの（一一八六・藤原良経）
- ② 人事 四七首（一〇・一％）
- 例 露はらふ寝覚めは秋のむかしにて見はてぬ夢に残る面影（一三二六・皇太后宮大夫俊成女）
- ③ 地儀 三二首（六・九％）
- 例 夜もすがら浦こぐ船はあともなし月ぞ残れる志賀の唐崎（一五〇五・宜秋門院丹後）
- ④ 動物 二一首（四・五％）
- 例 野分せし小野の草ぶし荒れはてて深山にふかきさを鹿の声（四三九・寂蓮法師）
- ⑤ 植物 七首（一・五％）
- 例 ゆかむ人来む人しのべ春がすみ立田の山の初さくらばな（八五・中納言家持）
- 植物・動物・天象・地儀・人事を表わす語句の合併。
- ⑥ 植物・人事 七首（一・五％）
- 例 山賤の麻のさごろもをさをあらみあはで月日や杉ふける庵（一一〇八・藤原良経）
- ⑦ 植物・地儀 一首
- 例 都にもいまやころもを宇津の山夕霜はらふ蔦のした道（九八二・藤原定家朝臣）
- ⑧ 植物・天象 二〇首（四・三％）
- 例 秋の夜は宿かる月も露ながら袖に吹きこす荻のうは風（四二四・右衛門督通具）
- ⑨ 天象・人事 六首（一・三％）
- 例 忘れずはなれし袖もやこほるらむ寝ぬ夜の床の霜のさむしろ（一二九一・藤原定家）
- ⑩ 天象・地儀 三首

例 さやかなる鷺の高根の雲居より影やはらぐる月読の杜（一八七九・西行法師）

実は、「月読の杜」というのは伊勢神宮の別宮なのである。しかし峯村氏によれば、「影やはらぐる月読の杜」とは「神仏習合・本地垂迹の思想から、本地のインドの物が、光をやわらげて、わが国の月読の神となられた、その神であられる月が照っている月読の森、という意味である」（峯村文人校注・訳『新古今和歌集』（目）
本古典文学全集）小学館、1974年、p. 582。すなわち、西行は掛詞を用いて森に射し込む月の存在を強く感じさせたと言えるであろう。峯村氏は、

月読の神を思わせる、月読の森のおだやかな月の光が、はるかな靈鷲山（りょうじゆせん）の空のさやかな月の光と重なった心象を見事に生かして、幽玄である

というふうに注釈している（註同）。従って、月そのものを優先させ、右の和歌を「天象・地儀」という分類に入れることにした。

⑪ 地儀・植物 一三首（二・八％）

例 知らざりし八十瀬の波を分け過ぎてかた敷く袖は伊勢の浜萩（九四四・宜秋門院丹後）

⑫ 地儀・人事 一〇首（二・一％）

例 旅人の袖吹き返す秋風に夕日さびしき山のかけはし（九五三・藤原定家）

⑬ 地儀・天象 四四首（九・五％）

例 水の江のよしのの宮は神さびてよはひたけたる浦の松風（一六〇二・正三位季能）

⑭ 地儀・動物 二首

例 思ふどちそこもしろらずゆきくれぬ花の宿かせ野べのうぐひす（八二・藤原家隆）

⑮ 人事・植物 四首

例 行く末をたれしのべとてゆふ風に契りかおかむ宿のたちばな（二三九・右衛門督通具）

⑯ 人事・地儀 一首

例 たのめおきし浅茅が露に秋かけて木の葉降りしく宿の通り路（一一二八・前大納言忠良）

⑰ 人事・天象 一七首（三・四％）

例 いまはまた散らでもまがふしぐれかなひとりふりゆく庭の松風（五八七・源具親）

「人事・天象」の分類には第五句で「とこの山」を詠む二首の和歌（「あだに散る露の枕に伏しわびてうづら鳴くなり」とこの山風」・五一四・皇太后宮大夫俊成女、「さらぬだに秋の旅寝はかなしきに松に吹くなり」とこの山風」・九六七・藤原秀能）も入れることにした。「とこの山」というのは近江国（今の志賀県）の歌枕であるが、上記の両首の和歌が掛詞で「床」というイメージを暗示するものなので、「地儀」のアスペクトより「人事」のニュアンスを優先した。

⑱ 右のデータの中で特に注目に値するものは、「天象」に関するデータだと言わなければならない。なぜなら、「天象」の部類に入る言葉を体言として使う和歌は、二一六首に及び、それは体言止めを使う和歌全体の半分ぐらいだからである。そのデータに、第五句で合併の表現を使う和歌（植物・天象 二一首、地儀・天象 四二首、人事・天象 一七首）も含めば、最終の数は二九七首、すなわちほぼ六五％に達するものである。従って、「新古今時代」の歌人が体言止めの言葉を選ぶ場合、その多くは「天象」というものとの関係があると認められよう。それは、ほぼ議論の余地のない結果だと言ってもよからう。それ故に、『新古今集』で、体言止めを使う最初の和歌が五句の体言として「天象」の言葉を使う和歌であることは、もしかすると偶然ではないかもしれない。それは、式子内親王による次の名歌である。

山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえだえかかる雪のたま水（三）

ともあれ、『新古今集』で五句めを終わらせる体言にはどの様な言葉が使われているかということ改めてつぶさに考察していきたい。

『新古今集』の語彙がごく限られたものであることは、よく知られている。それは、当時の歌人は和歌を詠む

折に、出来る限り和歌ハンドブックとみなされていた『古今和歌集』の語彙だけを利用しなければならなかったからである。それ故に、五句めを終わらせるすべての言葉は少ないグループに分けられるということに不思議はないであろう。「天象」に関する言葉を調査すれば、大部分は「月」（七十二例）と「風」（六五例）と「空」（三三例）、そして「夕暮」（二六例）と「露」（二〇例）と「雪」（一〇例）と「みず」（二〇例）、そして「曙」（九例）という自然要素を表わす言葉だと分かる。というのは、『新古今集』の表現は傾向として反復的なものだということである。しかし時折、随分特殊な和歌を見つかることもできる。例えば、第五句を終わらせるために「雪」ということばを使う和歌の中では、「雪」を植物との合併で使う和歌は次の二首しかない。

さそはれぬ人のためとやのこりけむあすよりさきの花の白雪（春下・一三六・藤原良経）
このごろは花もみぢも枝になししばしな消えそ松の白雪（冬・六八三・太上天皇）

右の二首の和歌は、第五句を終わらせる名詞として「雪」を使う他の和歌と比較すれば、随分独特の和歌だと言えると思う。それを明らかにするには、第五句の体言止めに雪のイメージを使う他の八首の和歌を記載する。

春日野の下もえわたる草の上につれなくみゆる春のあは雪（一〇・権中納言国信）

若菜つむ袖とぞみゆる春日野の飛火の野への雪のむらぎえ（一三・前参議教長）

いづれをか花とはわかむふるさとの春日の原にまだ消えぬ雪（二二・凡河内躬恒）

薄く濃き野べのみどりの若草に跡までみゆる雪のむらぎえ（七六・宮内卿）

やまざくら花のした風吹きにけり木のもとごとの雪のむらぎえ（一一八・康資王母）

ふればかく憂さのみまさる世を知らで荒れたる庭につもる初雪（六六一・紫式部）

尋ね来て道分けわぶる人もあらし幾重もつもれ庭の白雪（六八二・寂然法師）

山陰やさらでは庭にあともなし春ぞ来にける雪のむら消え（一四三六・藤原有家）

よく分かるように、良経の和歌も太上天皇（後鳥羽院）の和歌も、ほかの歌人と違う視角を感じさせるイメー

ジを描写する和歌である。歌人の視線が地面に残っている雪を見るために下に向いている他の和歌と違い、以上の和歌を詠んだ二人の歌人は、視線を上に向けているが、このような仕草こそ和歌の寂しい趣を強調するものだと、言っても過言ではないと思う。

再び述べるが、体言止めを中心にするれば、『新古今集』で何より詠まれたものは月とその光というものである。だが、月の場合も、雪の場合と同様に、第五句で月を植物とともに詠む和歌は二首しかない。それらは次である。

秋ふけぬ鳴けや霜夜のきりぎりすやや影寒しよもぎふの月（五一七・太上天皇）

かげとめし露の宿りを思ひ出でて霜にあと問ふ浅茅生の月（六一〇・雅経）

とにかく、それより興味を引くものは次の四首の和歌である。なぜなら、『新古今集』において、体言止めを使う和歌のなか、月が直接的に人間の世界に結びつく歌はこれしかないからである。

秋の色はまがきにうとくなりゆけど手枕なるる閨の月影（四三二・式子内親王）

ひとり寝る山鳥の尾のしだり尾に霜おきまよふ床の月影（四八七・藤原定家）

風寒み木の葉晴れゆくよなよなにのこるくまなき庭の月影（六〇五・式子内親王）

野べの露浦わの波をかこちてもゆくへも知らぬ袖の月影（九三五・藤原家隆）

右の和歌の中では、月明かりがあたるところを中心にするれば、とくに面白い歌は家隆の和歌だと言えるであろう。それは、式子内親王の最初の和歌（四三二番）で月の光は歌人が手枕して寝ている閨に射し込むものの、月光は家隆の和歌だけ直接的に歌人の袖に注がれているからである。『新古今集』で見られる他の場合の月は、例は挙げないが「山のはの月」や「峯の月影」や「春の夜の月」などのような表現で詠まれるものである。すなわち、こうした和歌では月光は広くぼんやりと照らすものであり、ある意味で普遍的なイメージになると言えるであろう。ところが、家隆の和歌では、「野辺」と「浦わ」という広い場所が描写されても、五句の「袖の月影」とは涙にぬれて、さびしい旅人の袖に読者の注意を引き、歌人の孤独を強く感じさせることができる表現である。

峯村氏は上記の和歌に、

野べの露や浦わの波とともに涙で袖を濡らしながらつづけている、どうなるか分からない旅のわびしさを、「袖の月影」に凝集させている感がある

という注釈を書いている（峯村文人校注・訳『新古今和歌集』(日)
本古典文学全集 小学館 1974.3. p.284)。

Ⓣさて、「人事」の分類に属する言葉に移ると、それらは「天象」に関する言葉と比較すれば、数がより多いものだと分かる。すなわち、「人事」の分類に語彙のより広い多様性が見られる。実は、幾つかの例外を除けば、「人事」の分類に属し、同じ言葉を使う和歌はかなり少ないのである。良く使われる言葉としては、「面影」(三首)と「袖」(四首)と「舟」(七首)と「夢」(七首)という語だけが挙げられる。「人事」の他の言葉は一回か二回だけ使われている。名詞化された形容詞で第五句を終わらせる四首の和歌もそれぞれ違う語を利用する。

見し夢をいづれの世ぞと思ふまに折を忘れぬ花のかなしさ(一五八三・御形宣旨)

つきもせぬ光のまにもまぎれなで老いて帰れる髪のつれなさ(一七一―・冷泉院太皇太后宮)

風早み荻のはごとにおく露のおくれさきだつほどのはかなさ(一八四九・中務卿具平親王)

色にのみそめし心のくやしきをむなしと説ける法のうれしさ(一九三七・小侍従)

表面的には、具平の和歌の「はかなさ」という語は露に結ばれる言葉であり、「天象」の分類に入れなければならないことばだと考えられる。しかし、上記の和歌で描写されたイメージは隠喩的に使われている感じが随分強いので、「人事」の言葉として見なすことにした。久保田氏はその和歌を、

風が強いので、どの荻の葉にも置いてある露が、遅れたり先立ったりというのはあってもいずれは皆落ちてしまう……それと同じようなこの世のはかなさよ

というように現代語にしている（久保田祥枝『新古今和歌集』(上)
新潮社、1973.9. p.281)。

五句体言として「人事」の分類に属する言葉を使う和歌は、「天象」の分類に属する言葉を使う和歌より少ないものの、詳しく分析すれば、「天象」の言葉より「人事」の言葉の方が数の多いということが分かる。自然界に関する語と対照すれば、人間の世界に関する言葉のより大きな多様性にはどのような意味があるのでしょうか。答えを導くのは必ずしも容易なことではないが、『新古今集』の撰者たちは、第五句を終わらせる語として「月」や「風」や「夕暮」などのような言葉だけを使う和歌に見られる表現のステレオタイプ化の傾向を補う積りではなかったかと考えられるであろう。

④ 「地儀」の分類に属する言葉を考察すれば、注意を喚起することは、幾つか言えるであろう。先ず、第五句を終わらせる言葉の五つの分類のなかでは、すべての分類の言葉と合併し、使われる語は、「地儀」の言葉だけである。それだけに限らず、語句の合併に関するデータを見れば、「地儀」+「植物」と「地儀」+「人事」と「地儀」+「天象」と「地儀」+「動物」というようなコンビネーションを第五句で使う和歌は、全部で六八首にも及ぶということもわかる。具体的に言えば、「地儀」を表現する言葉で第五句を終わらせる和歌で良く使われる言葉は、「浦」（四首）と「里」（九首）と「山」（一四首）という語だけだ。だが、「地儀」のことを表わし、第五句で一回だけ使われる言葉もある。たとえば、次の二首を挙げる。

あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風たちぬ宮城野の原（三〇〇・西行法師）

流れ木と立つ白波と焼く塩といづれかからきわたつ海の底（一六九九・菅原道真）

『新古今集』において、「原」で五句を終わらせる和歌に関し、明確にしなければならぬことがある。それは、右の和歌以外に「原」という言葉で終わる和歌は、あと三首しかないということである。しかし、その和歌では、主眼が場所そのものより植物のイメージに置かれているので、「植物」のグループに入れることにした。その三首の五句めは、「真野の萩原」（三三二番）・「小野の篠原」（九五七番）・「庭の萩原」（一二八九番）というこののである。良く分かるように、それぞれの和歌で場所の面影が「真野」と「小野」と「庭」という

言葉で伝えられるものである。

古典和歌では「原」そのものは、めったに詠まれないと言い難い物である。しかしそれと違い、海の底を詠む和歌のいくつかの例が古典和歌にありながら、そのイメージはよく使われたイメージだったとは言えないであろう。なので、配流の境遇の大変な辛さを悩んでいた道真の右の和歌を藤原定家が自書の『定家十体』で「拉鬼様」例歌として挙げたということは偶然ではなからう(新編国歌大観(底本は宮内庁書陵部蔵本、CDROM))。定家自身は、『毎月抄』という歌学書でそのスタイルについて次のように述べている。

鬼拉の躰ぞたやすくまなびおほせ難う候なる。それも練磨の後はなかよまれ侍らざらむ。初心の時よみ

難き姿にて侍るなるべし(橋本不秀男、有吉侯、藤平春男校注、訳『歌論集』)。

それは、現代語に訳すれば、「鬼拉の体だけはそうなくても簡単には習得困難です。しかしその鬼拉体も稽古を十分積んだ後にはどうして詠めないことがあります」(長岡) ということになる。

㊦ 「植物」の分類に入る語に移ると、「人事」の言葉を考察したときのように、面白いデータに注意を促すことができであろう。おそらく、桜を好み、それを何回も詠んだ西行法師の和歌のせいであるかもしれないが、『新古今集』の一番代表的な花を挙げるならば、誰でも桜花を選ぶと考えられるであろう。しかし、微妙に、「桜」を五句体言として使う和歌は一首しかない。しかもそれは、「新古今時代」の歌人ではない家持による和歌である(ゆかむ人來む人しのべ春がすみ立田の山の初さくらばな・八五・中納言家持)。五句の最後に現れ、二回使われる植物は「山吹」と「橘」と「萩」という三つの植物しかないと分かる。しかしそれは、その植物を詠む和歌は連続的に並んでいるからではなからうか。ともあれ、同じ言葉を体言止めに使う和歌の配列に関する問題点は後で考察する。

㊧ 最後に、「動物」を示す語に関するデータについて考察する。先ず、動物界を連想させる言葉を第五句で使

う和歌は少ないと言わなければならない。実は、動物を示す語が合併の表現で使われる場合も含めると、全部で二三首に及ぶものである。その中で、動物の名前を五句の最後の最後のところに入れる和歌は四首しかない。より詳しく言えば、「鶯」を詠む和歌は一首（八二番）、「駒」を詠む和歌は一首（一六四四番）、「ほととぎす」を詠む和歌は二首（一九四・二〇一番）なのである。すべての他の場合、読者は、動物の存在をその動物の声だけにより、間接的に感じる事が出来る。言うまでもないことであるが、そのような和歌で現れる全部の動物の声は、非常に悲しく響いて聴こえる声であり、現代の映画のサウンドトラックのように場面の悲しい雰囲気強調するものだと言ってもよいであろう。

第四節、体言止めとして使われる言葉——その二・配列を中心に

さて、考察してきたデータを、和歌配列を中心にして、改めてもう少し考察しておきたい。なぜなら、何度も述べたように、『新古今集』を編纂した撰者たちの採用した規則を明らかにするならば、和歌配列こそ欠かせない分析手段と考えられるからである。第二章では体言止めが連続する例を取り上げたが、本節ではさらに限定して、体言止めの言葉が同じ分類に属する和歌の連続について考察する。ただし、用例は多いので、すべてを挙げて分析することはできない。しかし、いくつかの例に限っても、非常に洗練されたアンソロジーと見なされる『新古今集』の原則を一層説明することができるであろう。

「天象」の言葉で第五句を終わらせる和歌連続としては、とりあえず次の例が挙げられる。

夕月夜しほ満ち来らし難波江の蘆の若葉にこゆる白波（二六・藤原秀能）

降りつみし高峯のみ雪とけにけり清滝川のみづの白波（二七・西行法師）

右の和歌の共通点が五句の「白波」だということは自明である。だが、反復は言葉の表面にとどまり、見せかけのものに過ぎないと言えるであろう。それは、きちんと読めば、秀能の詠んだ白波は西行の詠んだ白波と対照

的で随分違うものだからである。最初の和歌で描写される場面は難波江をイメージするものだ。すなわち秀能はシーンを海岸に設定している。それと違い、西行の白波は清滝川の水に立つ白波である。しかし、興味深いことはそれだけに限らないと思う。それぞれの和歌で歌人は白波を起こす自然力ということ暗示する。しかし、この場合も根本的な違いがみられる。秀能は白波を月の存在に関連付けるが、西行は春の到来ということに結び付ける。

再び述べるが、撰者たちは右の二首の和歌を連続的に並べることにより、表面的な反復を生かしながら、対照の感じを味わせることも出来た。

配列のテクニクから判断すれば、かなり面白いもう一つの和歌連続は次なのである。

いかにせん来ぬ夜あまたのほととぎす待たじと思へば村雨の空（二一四・藤原家隆）

声はして雲路にむせぶほととぎす涙やそく宵の村雨（二一五・式子内親王）

ほととぎすなほうとまれぬ心かな汝が鳴く里のよその夕暮（二一六・権中納言公経）

良く分かるように、右の和歌は三首とも「天象」に関する言葉で第五句を終わらせるものだ。しかし、興味深いことは、その三首の和歌は、「ほととぎす」を詠み、より長い和歌連続（一八九番〜二二〇番）に入っているということである。以前、体言止めに「動物」を示す言葉を使う和歌を考察した時、そのような和歌の大部分は動物の存在がその動物の声だけによって感じられるものだとして述べた。右の和歌連続でも、ほととぎすの声だけ聞こえる。しかしそれは、一瞬だけのものである。実は、最初の和歌で、歌人はほととぎすの不在を悩んでいるが、同時に村雨の空はほととぎすの到来の前兆ではないかという希望も表現する。その通り実際に、続きの和歌で、ほととぎすが現れるので、その希望が叶ってしまう。それを証明することは、歌人がほととぎすの声を聞こえるようになるということである。彼は、宵の村雨が親愛な鳥の涙ではなからうかということも考えるまでになる。だが残念ながら、三番目の和歌で、村雨のイメージが消えていき、それとともにほととぎすもなくなってしまう。

このように、ほととぎすを詠歌の目的にすれば、右の和歌連続には或る程度の対称性（無・有・無）が認められると言えるであろう。だが、公経の和歌は特に感動させるものだと思う。なぜなら、久保田氏が述べたように、「ほととぎす汝が鳴く里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから」（『古今集』夏、読人しらず）の古歌を本歌としながら、「うとましく思われる」という本歌とは逆にほととぎすへの愛着の情を強調したからである。

（久保田淳枝注『新古今和歌集』上、新潮社、1973、p.88）

ともあれ、「天象」の言葉で第五句を終わらせる和歌連続の中で何より注目を引く連続は三五九番から三六四番までの連続だということができると思う。さらに、以上の連続は『新古今集』の一番有名な和歌連続だと言っても過言ではないであろう。それは、その連続には「三夕の歌」として知られる非常に誉れ高い三首の歌も含まれているからこそである。実は、普段学者はその「三夕の歌」という連続を切り離せないものとするが、新しい読み方を提起してみたいと思う。先ず、その六首の和歌を挙げておきたい。

もの思はでかかる露やは袖におくながめてけりな秋の夕暮（三五九・藤原良経）

み山路やいつより秋の色ならむ見ざりし雲の夕暮の空（三六〇・前大僧正慈円）

さびしさはその色としもなかりけり真木立つ山の秋の夕暮（三六一・寂蓮法師）

心なき身にもあはれはしられけりしぎ立つ沢の秋の夕暮（三六二・西行法師）

見わたせば花もみぢもなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮（三六三・藤原定家）

たへてやは思ひありともいかがせむむぐらの宿の秋の夕暮（三六四・藤原雅経）

右の和歌を連続的に読んでみれば、撰者たちの決めた順番より相応しい順番がないということ強く感じると言える。それは、本連続に並ぶ和歌の順番を少しでも変えることにしてみると、和歌のバランスは決定的に損なわれてしまうだろうからである。個人的な考えに過ぎないものであるが、その連続は基本的に二つの部分に分け

られるものだと思う。一つは三五九番から三六一番までの和歌になる部分であり、もう一つは三六二番から三六四番までの和歌になる部分である。以上の二つの連続を分析すれば、両方とも同じ調子を取ることが分かる。まず初めに三五九番と三六一番の連続を見よう。

良経の和歌で強く感じられるものは、人間の存在ということである。なぜなら、歌人の深い悲しさは袖にかかると露、すなわち自分の涙の形で実体化されるからである。それと違い、慈円の描写するシーンは自然そのものに支配される。人間の存在は感じられなくなるが、その代わりに秋の夕暮のくれないの色になる雲だけがたなびき残る。最後に寂蓮の和歌では或る意味で人間界と自然界は調和してしまうと言えるであろう。歌人は人間の心が感じる悲しさと秋の夕暮の堪え難い美しさとの関係を強調し、その悲しさは「真木立つ山の秋の夕暮」の色さえも超えるものだということを詠む。

驚いたことに、二つ目の和歌連続も同じような進展を見せるものである。西行法師の和歌で、特に強意されるものは歌人の心である。なぜなら彼は、世を捨て、出家することにした人であるものの、秋の夕暮で鳴の飛び立つ沢というイメージに対して苦痛を感じないことが出来るからである。しかし、定家の名歌では、慈円の和歌とまったく同じように、人間は場面から突然消えていく。読者が見えるものは秋の夕暮に沈んでいる浦の海人の仮小屋だけである。但し、雅経による最後の和歌は、もう一度秋の夕暮の悲痛な美を背景にしながら人間の心を見せる歌である。歌人はそれほど寂しい秋の夕暮で、むぐらの生い茂った家に居ることは親しい人がいてもできないという。前に考察した公経の和歌のように、この和歌も本歌（思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも・『伊勢物語』三段）の意味を比較的に逆にし、随分悲しい和歌である。峯村氏はそれを、

思い合う心があるなら葎（むぐら）の宿でも耐えられようという本歌を受け、それでも耐えられそうもな

い秋の夕暮れの哀感だ（峯村文人校注・訳『新古今和歌集』（日）
本古典文学全集 小学館、1974年、p.134）

というふうには解釈している。兎にも角にも、以上の二つの和歌連続は一つの連続として考えられないわけがない。接点は寂蓮と西行の和歌にこそあると思う。安田章生氏は、「新古今時代」の新風の特徴を明らかにしてみるとき、「三夕の歌」について次のように述べた。

これら三首は、世に「三夕の歌」と称されて有名な歌であるが、この表現形式を同じくしている三首を比較してみると、定家の歌の特色がはっきりと把握できる。すなわち、西行の歌は、作者の人間像を強く浮きあがらせて、人間的抒情、詠嘆の上に文学的価値をおいており、その実情的な詠風は、定家の詠風とはおよそ対照的である。寂蓮の歌は西行や定家の歌ほどははっきりとした特色を有していないけれども、右の歌に関する限り、どちらかといえば西行に近い詠風を示している。(安田章生『藤原定家研究』1975年、195頁)

「天象」以外の分類に属する言葉で第五句を終わらせる和歌を考察すると、同じタイプの言葉を使う和歌連続は多いと言えない。だが、それは驚くべきことではない。なぜなら、本調査の結果で分かったように、「天象」の分類の言葉を使う和歌数に比較すると、他の分類の言葉を使う和歌数は多くないからである。それにしても、いくつかの興味深い例が挙げられるであろう。体言止めに「人事」の言葉を使う和歌連続の中で、とくに注意を促す連続は次の例だと思う。

窓近き竹の葉すさむ風の音にいとどみじかきうたたねの夢（二五六・式子内親王）

窓近きいささ群竹風吹けば秋におどろく夏の夜の夢（二五七・春宮大夫公継）

『新古今集』で、「夢」という言葉で第五句を終わらせる和歌は七首しかないが、連続的に並ぶのは右の二首だけだ。一読すると、式子内親王と公継の和歌は、良く似たものだと考えられるであろう。それは、後鳥羽院が今日『隠岐本』として知られる『新古今集』の伝本において公継の右の和歌を切り出すことにした理由としてあげられるのであろうか。(参考 岸上慎一、橋本下美男、有吉保雄『校訂 新古今和歌集』、武蔵野書院刊、1992年、244頁)。しかしながら後鳥羽院の理由が分かるとどうじに、撰者たちの選択の動機も理解できるであろう。再び言うが、右の二首の和歌は一見したところ全く同じものに見えるが、公継の

和歌に付けられている詞書（「鳥羽にて、竹風夜涼といへることを人人つかうまつりし時」）により、根本的そして見逃せない違いがあると分かる。式子内親王の和歌で強調されている要素は、聴覚ということである。それは、女流歌人が窓近い竹の葉を吹いてもあそぶ風の音を読者にきちんと聞かせるといふことがあるからである。それと違い、公継の和歌で読者の注意を引くものは風の音ではなく、風の秋らしい涼しさということである。結局、この場合も撰者たちは良く似ている和歌を連続的に並べることにしたが、その和歌に隠されている細かい違いを巧みに利用し、劇的な印象を与えることができたと言えるであろう。換言すれば、同じく体言止めを使う和歌連続は表面的に一本調子のもに見えるが、その一本調子こそ小さい違いを強調し、和歌連続の躍動性を生かすものだと言ってもよからう。

「地儀」に分類する言葉で第五句を終わらせる和歌の中では、連続的に並べられる和歌は次の二首しかない。しかも、一首めは巻軸歌であり、二首めは巻頭歌である。

あすよりは志賀の花園まれにだにたれかはとはむ春のふるさと（一七四・藤原良経）

春過ぎて夏きにけらし白栲の衣ほすてふ天の香具山（一七五・持統天皇）

この場合は、第五句を終わらせる言葉が同じく「地儀」の分類に属する語であるが、ここは、和歌の内容より、歌人は誰かという点に注意を払う必要がある。久保田氏は、

春の歌が上下とも当代歌人の作を巻頭・巻軸に置いているのに対して、夏の歌が古代の歌人の作を捉えているのは、変化を持たせ、かつ古典をも尊重していることを示そうとした結果と見られる

と述べている（久保田洋校注『新古今和歌集』上巻、新潮社、1979.3.9、p.76）。要するにそれは、『新古今集』の撰者たちは古代の和歌と当時の和歌を結び付けることにしたかったということと言ってもよからう。

ともかく、右の和歌連続より、次の連続の方が随分興味深いものだと思う。それは、五句体言止めとして「動物」に関する語を利用し、一つしかない和歌連続である。

夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山にひぐらしの声（二六八・式子内親王）
夕づく日さすや庵の柴の戸にさびしくもあるかひぐらしの声（二六九・前大納言忠良）

右の和歌も、今まで考察した和歌連続の大部分と同様に、表面的によく似ている歌である。だが、和歌の同じ構造と第五句の反復というような要素こそそれぞれの和歌の特徴を強調するものだと考えられるであろう。良く分かるように、両首の和歌でも秋の夕暮れのひぐらしの哀しい声が聞こえる。だから、聴覚から判断すれば以上の和歌は全く同じようなイメージを作る歌だと言える。しかし、歌人の視界ということを中心にするれば、式子内親王と忠良の和歌には相当な違いがあると認められる。式子内親王の和歌では、歌人は遠くまで見わたすことができるし、夕立ちを降らせた雲にもう包まれていない山と夏の日もきちんと見える。それに対して、忠良の和歌で描写されるシーンは、屋内のものである。日が低くなっているので、歌人は草庵の柴の戸を閉ざすことにしているが、その戸から夕日の日差しがひぐらしの声とともに漏れる。そういうふうには、式子内親王の和歌と比較すれば、蝉の声は、草庵の戸によって顕著に減ぜられ、より弱く聞こえるが、感情的な効果から判断すればより強いものだと言えるであろう。なぜなら、歌人は、ひぐらしが寂しく鳴く秋の夕暮れの場面を自分の心で描写してしまうからである。

次の和歌連続の例も『新古今集』における和歌の配列のテクニクを解明するものだと思う。

み山べの松の梢をわたるなりあらしに宿すさを鹿の声（四四二・惟明親王）

われならぬ人もあはれやまさるらむ鹿鳴く山の秋の夕暮（四四三・土御門内大臣）

たぐへくる松のあらしやたゆむらん尾上にかへるさを鹿の声（四四四・藤原良経）

良く分かるように土御門の和歌は第五句で「動物」ではなく、「天象」に関する言葉（「秋の夕暮」）を使う。それにしても、右の和歌は密な連続性を持つものだと考えられるであろう。なぜなら、以上の和歌は三首とも山で哀しく鳴く鹿というイメージを中心にする和歌だからである。無論、土御門内大臣の和歌で、体言止めのため

に、読者の注意が一時的に「秋の夕暮」というイメージに移ってしまふ。しかし、右の三首の和歌は左右対称性の印象を与えるように作られていなかったかというところが考えられる。それは、一つ目と三つ目の和歌の五句めは同じ表現を使うことだけに限らず、鹿の声が同じように扱われているからである。実際、惟明親王と良経の和歌で鹿の声は、魅力的に美しい旋律で松のあらしと混じり合うものである。というのは、以上の和歌は特に聴覚の範囲に執着するということである。だが、意外な考えであるかもしれないが、その対称性こそ真ん中の和歌におけるイメージを強調するために撰者たちが意欲的に生かしたものだと言つても過言ではないと思う。土御門の和歌では、鹿の鳴き声が秋の夕暮というイメージとともに表現されるし、魅力的な風景が描写されている。最後に、第五句を終わらせる為に「植物」に関する言葉を使う和歌連続を考察する。随分興味深い例としては次の例があげられる。

岩根こす清滝川のはやければ波折りかくる岸のやまぶき（一六〇・権中納言国信）

かはづ鳴く神南備川にかげみえて今かさくらむやまぶきの花（一六一イ・厚見王）

右の和歌もかなり似たものである。それは、両方川の近くに咲いている美しい山吹を同じように詠む和歌だからである。しかしながら、今まで考察した例の大部分と同じように、撰者たちは詳細な違いを巧みに生かすことにより、第五句で現れるイメージのニュアンスを大きく変化させることができたと言えるであろう。以上の和歌を分析するならば、まず注意しなければならないところは上句である。国信の和歌では、描写されているのは巖を越す川の速い流れということである。それに対して、厚見王の和歌では読者の想像力を刺激するものは視覚の要素ではなく、「かはづ」すなわち河鹿の声ということである。それは、最初から読者の別の感覚を刺激するイメージなので、重視すべき違いだと思ふ。とにかく、それより肝要な点は厚見王の和歌における「今かさくらむ」という句なのである。なぜなら、「らむ」という推量の助動詞は、歌人の描いている場面が彼が実際に見ている場面ではなく、ただのメンタルなイメージだということを分らせるものだからである。そのように、右の

二首の和歌における同じ山吹には違うニュアンスが認められるし、山吹のイメージの反復は表面的なものに過ぎないといっても過言ではないであろう。

さて、本節の話を纏めるならば、客観的な証拠がないと言わざるを得ないものの、体言止めとして使われる言葉や表現は、撰者たちがどういふふうにならば、『新古今集』の和歌を配列しようかという問題点を解決したときに、大切な役割を果たしたと考えられる。とくに、同じ分類に属する語を使う和歌の連続の分析をし、それらの和歌には、それぞれの和歌における詳細な違いのおかげで、違うニュアンスがあるということが認められる。それは、『新古今集』の編纂過程がどの点まで熟考されたものであったかということに分からせるものだと言えるであろう。

第五節、体言止めの構成要素——「時」・「場」・「物」

柏木由夫氏は、八代集の体言止めを論考したときに次のように述べた。

(略) 前の名詞が時・場・物のいずれが示されても、末尾の名詞が物となって一首が終わる形式が主になっている。知られる。それが後拾遺集では時から場の名詞につづく形式が新たに登場する。そして新古今集に至ると、今度は場や物から時につづく形式が新たに加わる。

右のことを具体的な例で示すと、まず三代集では、「春の初花」(時↓物)、「住吉の松」(場↓物)、「鶯の声」(物)のような形式に限られているのが、後拾遺集ではあらたに「秋の夕暮」(時)、「秋の山里」(時↓場)の形式が加わる。金葉集ではさらに「五月雨の空」(物↓場)が新たに登場し、「曙の空」が初めて現われる。この「空」は千載集で「村雨の空・明方の空・夕暮の空」など多く使われるようになる。新古今集では「雨の夕暮」(物↓時)、「野辺の夕暮」(場↓時)が新たな形式としてあらわれる。

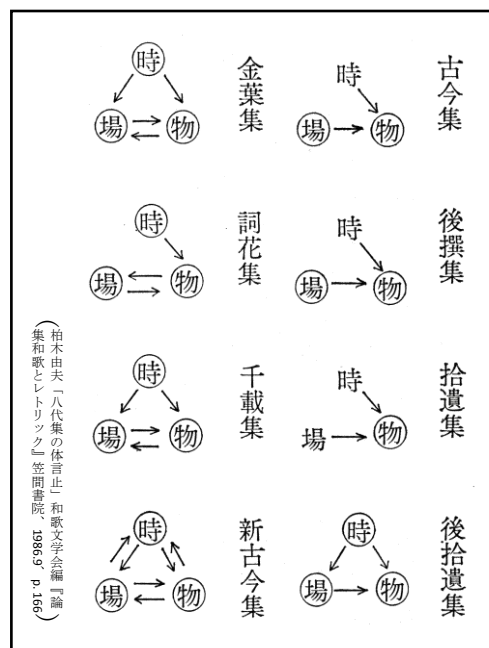
(「空表の見方：「時↓物」とは「春・時」の初花「物」のような形式、「時」は二つの名詞がともに時に属する「秋の夕暮」のような形式)

(柏木由夫「八代集の体言止」と『和歌文学会編』『論集』和歌とレトリック』笠間書院、1986年、165-166)

本研究に対しては、柏木氏の当該の調査が本当に役に立つものだと
 言わなければならない。それは、『新古今集』において、体言止めを
 使う和歌を別の視点から分析する可能性を与えるものだからである。
 換言すれば、柏木氏が作った分類を利用しながら、五句体言止めを使
 う和歌を新たに列挙することができる。ただ、本調査で柏木氏の調査
 と違い、五句で「名詞+の+名詞」というような形式に限らず、それ
 と違う形式を示す和歌も含むことにした。よって、「しぐれするこ
 ろ」・「まだみえぬゆき」などのような第五句を詠む和歌も調査した。
 以上のような五句は、「名詞+の+名詞」という形式をする五句と比
 べれば非常に少ないと言わなければならない。柏木氏による分類の使い方を明らかにすれば、「物」という分類
 は、「時」・「場」と違い、随分曖昧な分類だと言わなければならない。それに「鶯・雨・露・橘・波」などの
 ような具体的なモノだけではなく、「夢」や「うれしさ」などのような抽象的なモノも入れることにした。
 さて、先ず本調査の結果を記載する（資料⑦）。

- | | | | |
|-------|------------|-------|-------------|
| ① 時 | 二五首（五・四％） | ⑥ 場↓物 | 九七首（二一％） |
| ② 時↓場 | 二九首（六・二％） | ⑦ 物 | 一六七首（三六・二％） |
| ③ 時↓物 | 八一首（一七・五％） | ⑧ 物↓時 | 一一首（二・三％） |
| ④ 場 | 三五首（七・五％） | ⑨ 物↓場 | 一三首（二・八％） |
| ⑤ 場↓時 | 三首 | | |

良く見えるように右記の①～⑨の中で、一番顕著な分類は④なのである。言うまでもないことであるが、そ
 れは驚くべきことではないと言えるであろう。なぜなら、前述した述べたように、この分類は随分曖昧であり、



「風」や「雪」や「波」や「花」や「声」などのような言葉も細かく区別されずに入れられているからである。個人的な考えに過ぎないものであるが、^(物)の分類より^(時)という分類に属する表現の方が興味深いものである。この分類には「春の曙」と「秋の夕暮」というような第五句を詠む和歌が含まれている。それは注意を促すべきものだと思う。普段、以上のような表現は『新古今集』らしい表現とみなされている。ところが、『新古今集』では第五句でそのような表現を使う和歌は比較的に少ないものである。秋の夕暮れというイメージと『新古今集』との密接な関係の原因はほぼ確実にいわゆる「三夕の歌」に遡ると考えられるであろう。だが、その三首の和歌については後述する。

それに対して、春の曙のイメージを『新古今集』に結び付ける和歌としては、丸谷才一氏も考察した後鳥羽院の和歌（一三三番）と藤原俊成の和歌（一一四番）も挙げなければならない。後鳥羽院をめぐる本で、丸谷は以上の二首の和歌を次のように論評している。

みよしのの高ねの桜ちりにけり嵐もしろき春のあけぼの

『後鳥羽院御集』承元二年十一月最勝四天王院御障子。また『新古今和歌集』巻第二春歌下。また、『歌枕名寄』巻第七畿内七和国二。

障子歌といふのは、絵師に描かせた名所絵に合わせて名所歌を詠むわけだが、有吉保はこのとき詠進された「吉野山」の歌十首を検討して、「白雲とも霞も曇るとも観られる」「白くぼかし画きした部分があつたと思われる」と図柄を推定してゐる。後鳥羽院はそれを夜明けのころの落花の体（てい）と見たわけである。

一体、風に散る桜の花は日本人の美意識にとつて基本的な型の一つで、その最も素朴な形は『古今集』の、

承均

さくらちる花の所は春ながら雪ぞふりつつきえがてにする

索性

花ちらす風のやどりはたれかしる我にをしへよ行きてうらみん

あたりに求めることができよう。すなはち一方では落花を雪になぞらへて美しさをたたへ、他方では風に怨み言を言ふのが『古今』歌人の普通の態度であつた。これが『新古今』時代になると手がこんできて、うはべでは落花の風情を優美に歌ひあげながら、美は哀愁を底にひそめ、秘することには相変らず、散る花を雪に見たてる趣向が用ゐられた。

かういふ手法を確立したのはおそらく藤原俊成の、
又やみんかたののみの桜がり花の雪ちる春の明ぼの

であらう。これは「かたの」を地名の「交野」と「難し」とにかけ、年老いた身ではもうこのやうな美しい眺めは二度と見ることがむづかしいと嘆く形で、表ではその束（つか）の間（ま）の（束の間のもの）であるだけなほさら見事な）絶景に感嘆し、裏では花を散らせる風にほんのすこし怨みを述べてゐるのだ。このとき、老齡、おそらく生きてゐない来年の春、いま目（ま）のあたりにしてゐる一瞬の落花の趣、といふ入り込んだ時間性の歌は、「又や」といふ時の副詞にはじまり「曙」といふ時の名詞に終わること、まことにあざやかに首尾一貫してゐるのである。風に散る花を詠んだ和歌のうち、古今を通じて随一のもではなからうか。（丸谷才一『後鳥羽院』第二版、筑摩書房、2004年、p.254）

他の分類に入っている和歌を批評すれば、和歌のペアで幾つかの面白い例が挙げられる。「時↓場」という分類から始めよう。次の和歌連続は特に印象深いものである。

いまはとてたのむの雁もうちわびぬおぼる月夜のあけぼのの空（五八・寂蓮法師）
聞く人ぞ涙はおつる帰る雁鳴きてゆくなるあけぼのの空（五九・藤原俊成）

右の二首の和歌には、今まで考察した和歌連続の大部分のように、一つ以上の共通点がある。両方とも、北へ帰る雁がねの哀しい鳴き声を詠むだけでなく、同じ第五句（「あけぼのの空」）も表現する和歌である。それ故に、表面的に良く似ている和歌は、注目に値しないと考えがちの相違点により、連続的に並べられるので躍動性の強い印象を与えるものだと言えるであろう。

最初の和歌で歌人は自然の場面を客観的に描写することに限定している。無論、「うちわびぬ」というような表現は、歌人が観賞しているシーンにある程度主観的に解釈すると言うことを考えさせるものである。なぜなら、雁がねの鳴き声が侘しいという考えは人間の想像に過ぎないものだからである。だが、俊成の和歌では歌人の心はより強く感じられるものになる。そのように、右の和歌を連続的に読んでみれば、寂蓮における雁がねの心は、しい声が歌人の感情と思い出を刺激するものだと言える。それは、俊成の和歌で歌人が同じ雁がねの声を聴き、涙を零してしまうからである。さらに、歌人は和歌の本文で明瞭に本歌（鳴きわたる雁の涙や落ちつらむもの思ふ宿の萩の上の露・古今集・二二一番・読人しらず）に言及する。峯村氏は俊成の和歌を次のように解釈している。

萩の露を見て、鳴きわたる雁の涙が落ちたのだろうかと読んだ人があるが、雁の声を聞く人である私のほうが涙は落ちる（峯村文人校注・歌『新古今和歌集』目録）。
（本古典文学全集）小学館、1974.3. p. 53）

要するに、『新古今集』の撰者たちは、以上の和歌の配列を決めた時に、歌人の精神的な過程をまことらしく再現してみたとあえて断言してはばからないであろう。実際には、外在的世界の知覚は、よく人間の心に対する刺激になり、特別な気持ちや追想などを促すことができるものである。

「時―物」に属し、面白い和歌連続としては次が挙げられる。

散る花の忘れがたみの峯の雲そをだにのこせ春の山風（一四四・左近中将良平）
花さそふなごりを雲に吹きとめてしばしはにほへ春の山風（一四五・藤原雅経）

この和歌は構造的にも内容的にも随分似ている。両首の和歌で歌人は直接に春風に声をかけ、桜木から落とした花卉をせめて一時的にピンクの雲の形にして飛ばせるように願う。しかし、良平の和歌では歌人の注意が視覚の要素に払われているが、それに対して、雅経の和歌では、久保田氏が解釈しているように、歌人の注意が嗅覚の要素に移る。久保田氏は、その歌を次のように現代語に訳した。

花を誘って散らせる際に、その花のなごりの香を雲、せめてそれだけでも残しておくれ、春の山風よ（久保田氏校注）

古今和歌集（上、新
潮社、1973年）

このようにこの二首の和歌は、音楽のコードの二つの音符のように、よく調和しているものである。同じ分類に入っているもう一つの和歌のペアを挙げよう。

忘るなよいまは心の変はるともなれしその夜の有明の月（一二七九・藤原家隆）

そのままに松のあらしも変はらぬを忘れやしぬる更けし夜の月（一二八〇・法眼宗円）

この例はとくに興味深いと思う。なぜなら、いくつかの共通点があるものの、その和歌は根本的に違う歌だからである。無論、両首が恋歌であり、どちらの歌人も恋人の気持ち冷めてしまったことを嘆く女の心で歌を詠んでいる。それだけに限らず、両首は第五句を月のイメージで終わらせる和歌である。しかし、その共通点は表面上のものに過ぎない。勿論、家隆の和歌で詠まれた月は曙の月であり、宗円の和歌で詠まれた月は夜更けの月である。だが、一番大切な違いは、一首めで見られる月は歌人の記憶であるのに対して、二首めの月は実際に見ている月だということである。さらに、注意を促すべき要素は、もう一つある。それは、三句の最初のところで使われる「変はる」という動詞なのである。興味深いことは、その動詞の形（「変はるとも」「変はらぬを」ということよりも、その動詞の主語は何かということである。家隆の和歌で、変わることは恋人の心であるが、宗円の和歌で変わらなことは松の嵐である。それ故に、撰者たちは右の和歌を並べた時に、家隆の和歌で感じられ始まる別れの気持ち松の嵐が宗円の和歌における松の嵐によってもっと深く感じられるように、配列したと考えら

れるであろう。

㊦と「場↓時」という二つの分類には連続的に並べられた和歌は全くない。それと違い、九七首の和歌が入っている「場↓物」の分類では幾つかの例が見つけられる。中でも特に面白い和歌ペアは次なのである。

ならひこしたがいつはりもまだ知らで待つとせしまの庭の蓬生（一二八五・皇太后宮大夫俊成女）

あと絶えて浅茅が末になりけりたのめし宿の庭の白露（一二八六・二条院讃岐）

右の和歌の詠者は二人とも女流歌人であり、それだけに限らず二人ともいわゆる女房三十六歌仙の歌人である。よく分かるように、この二首の和歌は、恋人の薄情さを嘆く女の心で詠まれ、典型的な和歌である。その視点から考察すれば、特に注意を促すべき和歌ではないと言わざるを得ないかもしれない。だが、体言止めを中心にするれば、その和歌連続は『新古今集』の撰者たちの選択への関心を引き起こすものだと言えるであろう。最初の和歌で特に強調されたイメージは庭の茂って荒れた蓬であるが、二番目の和歌で強調されたイメージは庭の白露というものである。この場合も同じストーリーの二つの場面を描写する和歌連続だと考えられるであろう。『古今集』の和歌（わが宿は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせしまに・七七〇・編昭）を本歌として取る俊成女の和歌では、歌人は恋人を待つ時間がどれぐらい長かったかということを庭で茂った蓬で表現する。それに対して、『後拾遺集』の和歌（ものをのみ思ひしほどにはかなくて浅茅が末に世はなりにけり・一〇〇七・和泉式部）を本歌として取る二条院讃岐の和歌では、歌人の哀しさの明白な象徴となるものは庭の浅茅に結んだ露というものである。このように撰者たちは、捨てられた人による悔しさや哀しさの涙の隠喩として使われる白露という要素を生かし、最初の和歌で感じられる寂しさの趣を強調することができたと言っても過言ではないであろう。

先述したように、㊦という分類に入っている和歌は一番数が多いものである。そこで、比率の観点からみれば、当該の分類に属する和歌が連続的に並べられる箇所は随分多いということは、驚くべきものではないと言え

るであらう。その中で、注意すべき和歌ペアの例としては次が挙げられる。

あともなき庭の浅茅にむすぼれ露のそこなる松虫の声（四七四・式子内親王）

秋風は身にしむばかり吹きにけり今や打つらむ妹がさごろも（四七五・藤原輔尹）

今まで考察した和歌ペアの大部分は、よく似たものでありながら、小さな違いのおかげで読者に与えられる印象が大分変わる、というようなものである。だが、右の和歌連続の場合は、撰者たちが逆の技術を利用してたと考えられる。すなわち右の和歌は、形的にも内容的にもかなり違う和歌であるが、余り目立たない要素と見なしがちのものより、密接に結ばれているものだとということが認められるであろう。その要素は、聴覚の要素である。ただ、最初の和歌における音は歌人が実際に聴いているものでありながら、後者の和歌における音は歌人が空想している音に過ぎないものである。式子内親王に聞こえる音は、庭の浅茅に籠っている松虫の声であるが、それに対して、輔尹が空想する音は遠い都に残っている親しい妻が打つ衣の音というものである。このように撰者たちは、音を實際聴覚の範囲から想像の範囲に移すことにより、離別の哀しい気持ちをより深く感じさせることができたと言えるであろう。それは、周知のように砧で衣を打つというイメージは伝統的に離別の考えに結ばれていたものだからである。久保田氏と馬場あき子氏が編纂した『歌ことば歌枕大辞典』という辞典で「砧」という歌ことばは次のように説明されている。

（略）「砧」は六朝以来の詩題で、征旅の未を待つ妻の思慕を本意とする寂寥の詩境が主流で、和歌もその情趣の範囲に詠まれている。『白氏文集』の「月は新霜の色を帯び、砧は遠雁の声に和す」（酬夢得霜夜对月见懐）のように、「月」や「雁」も詠み合わされ、「さ夜更けて砧の音ぞたゆむなる月を見つつかや衣打つらん」（千載集・秋下・三三八・覚性）（略）などと、毎夜通しの「砧の音」に寝られず物思う類

型や、「遠」く響くことによせて「十市の里」を詠む傾向が見られる（久保田氏、馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、1995、p.283）。

さて、「忘れめやあふひを草に引き結びかりねの野べの露のあけぼの」（一八二・式子内親王）というような

和歌が入っている「物↓時」の分類では、連続して並んでいる和歌はないが、「物↓場」の分類では一連が見つけられる。それは次のとおりである。

かすみたつ末の松山ほのぼのと波にはなる横雲の空（三七・藤原家隆）

春の夜の夢の浮橋とだえして峯にわかる横雲の空（三八・藤原定家）

周知のように、この二首の和歌の詠人である家隆と定家は、優れた御子左家の双璧と評価されている。なので、その和歌にはただの内容を超え、或る程度同じニュアンスがあるということは驚くべきものではないと言えるであろう。

言うまでもないことであるが、両首の共通点は、「横雲の空」という第五句である。無論のこと、そのイメージは、第五句だけを読んでもまったく同じものである。しかし、初句から読むと、表面的には同じみえるその句も実は違うということが分かるであろう。それは、動詞の連体形（「はなる」・「わかる」）によって両首の四句が第五句を修飾するものだからである。換言すれば、家隆の横雲は「波にはなる横雲」であるが、定家のは「峯にわかる横雲」というものだ。勿論、家隆が詠む波は、末の松山という歌枕に関する和歌であるので、想像上の波に過ぎないものだ。それに対して、定家の和歌は、より写実的な印象を与える歌である。なぜなら、その和歌で描写されるシーンは、歌人が朝起き、山の峯から離れ行く雲を眺めるということに限るものだからである。しかし、以上の解釈は解釈の第一歩にほかならないものである。よく知られるように、古典文学で、明け方の時は伝統的に恋人からの別れの時とされる。従って、山の峯から離れ行く雲のイメージはそれを強調するものだと考えられるであろう。だが、それより物憂げな雰囲気を醸し出せる要素は、「夢の浮橋」という有名な表現だと言わなければならない。なぜなら、その表現は『源氏物語』の最後の巻のタイトルのあり、紫式部の名作の第三部の「宇治十帖」との関連をはつきり示すものだからである。

このように、定家の和歌における横雲の方が、家隆の和歌における横雲より、幽玄の美を表象するし、読者に

与える印象はより深いものだと言えるであろう。再び述べるが、何度も見られたように、この場合も撰者たちは同じものとされがちな要素を巧みに利用しながら、感情の波が激しくなっていく行き、ダイナミックな和歌連続を作っている。

第六節、体言止めを使う和歌の統語論上構造

前の節では、体言止めを使う和歌を分析するうえで、とくに中心にしたものは、五句めを終わらせる体言としてはどのような言葉が使われていたかという問題だった。しかし、体言止めを使う和歌は別の視点からも考察することができる。それは、和歌の統語論上構造ということである。

体言止めを使う和歌は統語論的に、換言すると文章の構造の立場からみれば、どのような部類に入るか。これを明らかにした先行研究（藤田道也『体言止めをめぐって』方集、古今集、新古今集における喚体表現と述体表現』『愛国文研究』12号、1983年、p.101-107）はあるが、それぞれの部類が『新古今集』に対して、どの点まで影響を与えるか、ということは論じられていない。本節では、先行研究に作られた部類を中心にして、『新古今集』における体言止めを使う和歌を、特に配列の視点から詳論してみたい。

先行研究が明らかにされたように、『新古今集』では、体言止めを使う和歌を文章の構造視点から考察すれば、大きく二つの部類に分けられる。つまり、一つの関係節から成る和歌（「Aタイプ」と、それと違う和歌（「Bタイプ」）である（資料⑧）。二番目のタイプの和歌は、内容的にさらなる下位部類に分けられるのだが、これは後述する。

（1）「Aタイプ」——一つの関係節から成る和歌

Aタイプの和歌は、上述したように、一つの関係節から成ることである。というのは、文章の全ての要素は、体言止めとして使われている最後の名詞の修飾となるのである。例歌としては、『増鏡』にも記載されている宮

内卿の有名な和歌をあげる。

うすくこき野辺のみどりの若草に跡までみゆる雪のむら消（七六）

このAタイプの和歌は『新古今集』に全部で一六首あり、体言止めを使う四六一首の和歌の四分の一ぐらいであり、かなり多いと言えるであろう。

配列の話になると、このタイプの和歌の連続は幾つか見られるが、詳しく言えば、一六九・一七〇、二七九・二八〇、三七五く三七七、五九七・五九八、六〇五く六〇七、一二八四・一二八五、一五九六・一五九七、一八四九・一八五〇、一九三七・一九三八、という九連である。このうち、特に興味深い連続と考えられるのは、次の一連である。

大荒木の杜の木の間をもちかねて人だのめなる秋の夜の月（三七五・皇太后宮大夫俊成女）

有明の月待つ宿の袖の上に人だのめなる宵のいなづま（三七六・藤原家隆）

風わたる浅茅が末の露にだに宿りもはてぬ宵のいなづま（三七七・藤原有家）

この三首の関係は非常に強く、この連続は『新古今集』の洗練された配列の技巧の例として挙げられるであろう。なぜなら、この三首の和歌には、内容的にも形態的にも共通点が多いからである。言うまでもないが、三首とも体言止めを使う和歌であり、統語論上においても等しい。しかし、それだけに限らない。実は、体言止めとして使われている詞（月・いなづま）も、意味論の同じ部類（天象）に属するのである。

だが、右の三首の和歌に強い一貫性が認められるものの、同時に描写されるイメージは、現代の「モーフイング」というソフト（注一）で変化させられるイメージと同じように、変身していくと言えるであろう。俊成女と家隆の和歌は同じ四句（「人だのめなる」と同じ月のイメージを詠む。同様に、家隆と有家は、同じ第五句（「宵のいなづま」と「宿」という語を使う和歌である。このように、その和歌連続で、真ん中の和歌は、或る意味で、ピボットの要素となると考えられるであろう。それを一層明らかにするために、もう一度右の和歌を

考察してみよう。俊成女の和歌では、大荒木の森の木で隠されており、見えないのに、月は場面に存在している。それに対して、家隆の和歌では有明の月は場面から消えて歌人が待っているものに過ぎないが、その代わりに「宵のいなづま」という自然要素が現れる。そして、最後の有家の和歌では、月が最終的に消えて、「宵のいなづま」というものしか残っていない。

要するに、撰者たちは本和歌連続の一貫性と躍動感を同時に求めたということを考えられるであろう。

(2) 「Bタイプ」——一つの関係節から成らない和歌

Aタイプと違う和歌の分析に議論を移したい。Bタイプに属する和歌は、内容的に判断すれば、四つの部類に分けられると認められる。

① 「呼び掛け」を使う和歌

主体が、第五句の体言止めに現われる客体に直接に言葉をかける和歌である。その言葉は通常、要望・質問・命令になる。例えば、次の名歌である。

昔思ふ草の庵のよるの雨に涙な添へそやまほととぎす(二〇一・藤原俊成)

このタイプの和歌は、『新古今集』には四二首に過ぎず、一一五首にも及ぶ前のAタイプと比較すれば、少ないと言える。実は、和歌の数が一番少ない部類なのである。

当然であるかもしれないが、呼び掛けの対象となるもので一番多いのは、自然界に関するものである(本調査の結果によると、二八首)。それに対して、呼び掛けの対象として使われ、意外に少ないのは、動物なのである。これは、俊成の和歌も含むと三首に過ぎない。同様に、非常に珍しいのは、地儀が呼び掛けの対象になることである。実は、このような和歌は『新古今集』中には一首しかない。それは、次の和歌だ。

花ならでただ柴の戸をさして思ふ心の奥もみ吉野の山(慈円・一六一六)

これは慈円が、美称の接頭語である「み」という文字を有効的に使い、「みよ」に「見よ」を掛けた。既述のごとく、体言止めを使う和歌の中には「呼び掛け」として定義される技巧を使う和歌は比率的に少ない。よって、このような和歌の直接連続も少なく、三連（一四四・一四五、六八二・六八三、一七九二・一七九三）だけである、というのは当然であろうが、次の和歌ペアが随分興味深い。

尋ね来て道分けわぶる人もあらし幾重もつもれ庭の白雪（六八二・寂然法師）

このごろは花もみぢも枝になししばしな消えそ松の白雪（六八三・後鳥羽院）

両首でも歌人は直接に白雪に声を掛けるが、それぞれの和歌では歌人の願いが違う。寂然は、誰も訪れ下さるわけがない道の上に白雪が幾重にも深く積もってほしい。それに対して、後鳥羽院は本歌（降る雪は消えでもし）ばしとまらなむ花も紅葉も枝になきころ・後撰集・四一七・読人しらず）の上句・下句を巧みに置き替えながら、雪が木の枝の上にもう少し残るように願う。ところで、久保田氏が注釈しているように、本和歌では、『新古今集』に入集した藤原定家の「見わたせば花もみぢもなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮」（三六三）という名歌の影響も見られる（『久保田淳校注「新古今和歌」』、『新古今和歌』上巻、新潮社、1979.3、p.221）。

右の和歌を連続的に並べることにしたのは、撰者たちの意味深い選択とすることができるであろう。なぜなら、この二首で『新古今集』で見られる二つの態度がみせられるからである。一つは、強い隠逸志向と信仰に裏付けられた閑寂な境地を切り開いた寂然のような歌人の態度である。もう一つは、芸術の享受と自然美の鑑賞が人生の一番大切な目標と考えていた後鳥羽院のような歌人の態度である。このように白雪は一方では、寂然の和歌で歌人の孤独感を強調する要素でありながら、他方後鳥羽院の和歌で美学的により深い意味を持つものになる。

② 「倒置」を使う和歌

倒置は、『和歌大辞典』に、

修辞法の一つであり、一首のうちで通常または慣用の語順を変えてある語句を特別な位置におくことであ

る。(略)体言止めの手法も、主語や客語にあたる体言を結句に置き、述語・修飾語を前に回した倒置法の応用例と言える(大養廉ほか編『和歌大辞典』明治書院、1983)

と記載されている。これは誰もが知ることであるが、倒置はどの点まで、和歌の詩的本質とニュアンスに対して重要であろうか。この質問に答える為に、とりあえず和歌、いやむしろ「詩」は何であろうか、という疑問から始めなければならぬ。この疑問を解決するのは簡単ではないが、一応、詩は、広義に考察すると、文章の特殊な構成を巧みに利用し、言語の特別な形態であるといえるであろう。

それ故に、「詩」の文章は、日常言語とはかなり距離のある表現と修辭を使わなければならない。調子と文章の特別なスタイルのようなものは、読者に詩的な印象を与えるため欠かせない要素である。言うまでもないが、倒置とは詩の世界だけではなく、日常言語にも見られる修辭である。しかし、日常言語の倒置と詩の倒置は、形態の立場からみれば同じような仕組みを使うが、目的は違ふと考える。日常言語に使われる倒置の目的は、受け手の注意をメッセージ内容の特別な箇所に戻すためである。たとえば、「飛ぶよ、かもめが」というような文章では、主語(かもめ)そのものより、主語の行動が強調されている。それに対して、和歌の倒置の目的は、読者に感情的な反応を引き起こすためである。これを明らかにする為に、次の和歌を挙げる。鴨長明の師であった俊恵の流麗な和歌だ。

春といへば霞にけりなきのふまで波間にみえし淡路島山(六)

この和歌の主体は、突然春の霞に隠れてしまった淡路島山である。だが、読者は淡路島山の輪郭を見分けられるようになる前に、霞の中に目をやり、一瞬の狼狽の感じを味わうといえるであろう。

『新古今集』に見られるこのような倒置を用いる和歌は一一八首あり、数が一番多い部類である。このタイプの和歌の直接連続は九連(一六〇・一六一、一七四・一七五、三〇七・三〇八、三五二・四七四・四七五、五九四・五九五、七四一〜七四三、一八八〇・一八八一、一九一〇・一九一一)ある。このうち唯一、三首

の連続を挙げる。

藻塩草かくともつきじ君が代の数によみおく和歌の浦波（七四一・源家長）

うれしさや片敷く袖に包むらんけふ待ちえたる宇治の橋姫（七四二・前大納言隆房）

年へたる宇治の橋守言問はむ幾代になりぬ水のみななみ（七四三・清輔）

体言止めと倒置以外で、右の三首の共通点は何であろうか。まず挙げられるのは、歌枕である。七四一と七四二番は結句で別の歌枕（和歌の浦・宇治）を使い、それに反して七四二と七四三番は別の所（結句・二句）で同じ歌枕（宇治）を使う。さらに、三首とも和歌の結句の構成も（名詞＋の＋名詞）で一致する。以上の共通点より、右の和歌連続で注意を促すべきものは、時間の流れはどのように表現されているかということである。家長の和歌は、久保田氏の解釈にすれば、

和歌の浦で藻塩草を掻き集めるように、いくら和歌所で詠草を書き集めても、尽きることはないでしょう。

わが国の御代の千代万代のかずに匹敵するようと、人々が詠んでおく和歌があまりにも多いものですか

ら。（久保田洋枝注『新古今和歌集』
上新集社、1973、p.250）

という意味である。よく分かるように、ここで歌人は特に未来ということに注意を払う。それに対して、隆房の和歌で強調されるものは、「けふ」という時間副詞が使われているので、現在ということである。それと違い、清輔の和歌で歌人は宇治川を見、それがどれほどの世を経てしまったかということを考えてしまう。つまり、歌人は、或る意味で、時間の流れを遡ってみたいので、過去に興味があると言えるであろう。要するに、右の三首の和歌は内容的に非常に異なる歌であるものの、いくつかの共通点によって一貫性を感じさせるものである。だが同時に、時間の流れというテーマを中心すれば、随分力感あふれる和歌連続だと言えるであろう。

③ 単なる叙述となる和歌

このような和歌で主体は、「何々は何々だ」「何々が起きると何々が起きる」「何々をすると何々となる」な

どのような平叙文で自分の考えを表す。例えば、次の和歌である。

おのづから音するものは庭の面に木の葉吹きまく谷の夕風（清輔朝臣・五五八）

このタイプの和歌は、『新古今集』では四五首見られ、体言止めを使う和歌全体の一〇%となり、歌数から見ると①「呼び掛け」の部類に属する和歌とおよそ同数であるが、『新古今集』中では、直接連続は一連もない。これはなぜであろうか。『新古今集』は、歌のアンソロジーであるが、構成の優れた作品として構想された歌集だと言っても過言ではない。換言すると、『新古今集』の美しさを味わう為に、そこに撰入された和歌を全部最初から最後まで読まなければならない。それは、『新古今集』の最大の美点は、それぞれの和歌より、和歌の配列ということにあるからである。だが、『新古今集』の和歌を順番に読めば読むほど、それらは全部秀歌であるわけがないと分かる。しかし、これは勅撰集の欠点であると考えてはいけない。藤原俊成は『古来風躰抄』において、『後拾遺集』の編纂を考察する時に次のことを述べた。

されば、げにまことに、おもしろく、聞き近く、物に心得たる様の歌どもにて、おもしろくは見ゆるを、撰者の好む筋や、ひとへにかしき風躰なりけん、ことに良き歌どもはさて置きて、挟間の地の歌の、少

し前々の撰集に見合するには、たけなども立ち下りにけるなるべし（橋本不美男、有吉保、藤平春男校注・訳『歌論』）。

有吉保氏の「和歌文学辞典」の定義によると、「地の歌」とは「撰集や百首歌中であって、それ自体は目立たないが、秀歌を引き立たせ、全体の基調をなす役割を担う」である（有吉保編『和歌文学辞典』）。もちろん、『新古今集』の底本ではそれに入選された和歌の本質に関する注釈のようなものはないので、③のグループに属する和歌が間違いなく「地の歌」だと言うことを認めることができない。だが、その和歌の構文が散文の構文に随分近いものだと言っては過言ではなからう。例えば、次の三首を挙げよう。

さびしさはみ山の秋の朝ぐもり霧にしをるる真木の下露（四九二・太上天皇）

うちはへてくるしきものは人目のみしのぶの浦の海女の栲縄（一〇九六・二条院讃岐）

和歌の浦を松の葉ごしにながむればこずゑに寄する海人の釣舟（一六〇一・寂蓮法師）

よって、歌として特別な構文を持つ右のような和歌は、地の歌のように「全体の基調をなす役割を担う」ということを考えられるであろう。

④ 呼び掛けと倒置を使わず、二つの文章になる和歌

このグループに属する和歌の例を挙げるならば、次の二首が挙げられる。

鶺鴒舟あはれとぞ見るものふの八十字治川の夕闇の空（二五一・前大僧正慈円）

鶺鴒舟高瀬さしこすほどなれやむすぼほれゆくかがり火の影（二五二・寂蓮法師）

右の二首の和歌は、鶺鴒舟のことを詠み、構成的には同じである。無論、慈円の歌には二句切れがある。それに対して、寂蓮は三句切れを使うが、両首ともに二つの文章からなる和歌である。しかし、表面的に類似しているものの、内容的に重要な違いがある。寂蓮の和歌の「むすぼほれゆくかがり火の影」という部分は上句に情報を添えるものだ。いやむしろ、この場合は、上句に現われる疑問に対しての、理屈的な答えとなる。解釈すれば、「鶺鴒舟は川の浅瀬を棹をさして越えているのだなあ。なぜかというと、突然かがり火の光は乱れてしまったからだ」と言える。それに反し、慈円の「ものふの八十字治川の夕闇の空」の部分は、上句に情報よりも、感情を加えるものだ。そうするとこの部類の和歌は、さらなる下位部類に分類できる。寂蓮のような和歌は「情報」として定義される部類に、慈円のような和歌は「感情」として定義される部類である。

「情報」の和歌は『新古今集』には六二首（体言止めの和歌の一三・四％）あり、直接連続としては、次の七連（二六・二七、二六〇・二六一、五〇三・五〇四、一二七四・一二七五、一三二〇・一三二一、一四二四・一四二五、一五四三・一五四四）が挙げられる。

「感情」の和歌の数は「情報」の和歌より少し多く、七八首（体言止めの和歌のうち一六・九％）ある。この部類にも直接連続が幾つかあり、詳しく言えば、五八・五九、二一五・二一六、二二六・二二七、三五九・三六

四である。

この連の特に興味深いのは、間違いなく第四節ですでに考察した三五九から三六四までの六首の連続であり、再びもう少し別の視点から考察したい。上述したように、『新古今集』において、体言止めを使う和歌の直接連続は六首まで及ぶが、六首の連続は二連しかない。そのうちの一連がこの三五九から三六四の六首である。

もの思はでかかる露やは袖におくながめてけりな秋の夕暮（三五九・藤原良経）

み山路やいつより秋の色ならむ見ざりし雲の夕暮の空（三六〇・前大僧正慈円）

さびしさはその色としもなかりけり真木立つ山の秋の夕暮（三六一・寂蓮法師）

心なき身にもあはれはしられけりしぎ立つ沢の秋の夕暮（三六二・西行法師）

見わたせば花もみぢもなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮（三六三・藤原定家朝）

たへてやは思ひありともいかがせむむぐらの宿の秋の夕暮（三六四・藤原雅経）

これは、全て「新古今時代」の歌人によって詠まれた和歌だ。周知のように、寂蓮・西行・定家の右の三首は甚だ有名な所謂三夕の歌であり、有吉保氏が述べたように、

三句切の歌、下句「まき立つ山」「鳴立つ沢」「浦の苦屋」の秋の夕暮で、点景を異にする三幅の絵画の

世界をもつことによって、印象的であり後世膾炙されるだけの理由がみられる

のである（有吉保『新古今和歌集の研究―基』
『鑑』『権成』三巻巻 1984, p.332）。

普通、体言止めは和歌の叙情的な本質とかなり強い関係があると考えられるが、『新古今集』でも、体言止めは景色を描写することだけに限られる技巧ではない。体言止めによって強調されるのは、景色よりも、主体の情緒だと言えるであろう。

ともあれ、体言止めを使う右の六首の連を考察する。秋は冬の到来を告げる季節であるならば、夕暮は夜の到来を告げる時間である。そうすると、「秋の夕暮」とは、内的に一貫性があるイメージであり、非常に悲しい表

現となる。本連の四首の和歌（三五九・三六一・三六二・三六四）には叙情的な表現が明白に現われると分かる。つまり、「もの思はでかかる露やは」、「さびしさは」、「心なき身にもあはれは」、「たへてやは思ひありとも」、の箇所である。それに反して、慈円と定家の和歌は、一見、単なる叙述的な和歌にみえるが、そうではない。この二首の和歌にも際立って叙情的な本質があると認められるからである。これは、和歌の内容的な要素ではないものに基づくものである。慈円の和歌の場合、和歌の意味に影響を与えているのは、詠人そのものである。なぜなら、慈円は法師であるので、彼の詠んだ深山は隠遁生活を送る者の寂しい世界を暗示しているからである。同様に、定家の描写した桜の花も紅葉もない浦の苫屋は、静止場面だけではなく、主体が観る景色である。それに関して折口信夫氏は、

第一、「浦の苫屋」と言ふのは、「浦のある風景」ではなく、歌の中の人物は、苫屋で秋の夕暮を観じてゐるのである。だから、苫屋に居る人自身、秋の夕暮のものである（折口信夫「『後花園のまほろば』其他」、折口博士記念代研『宛所編『折口信夫全集』第十巻、中央公論社、1966.1、p.314』）と述べた。さらに、本和歌の「秋の夕暮」は、明石に移った光源氏の悲しさの強力な象徴となるのである。そうすると、定家の和歌は、風景しか写生しない和歌と異なることが、どの点まで違うかが、よく分かる。ともかく、四季の和歌において、叙情的なニュアンスは体言止めを使う和歌だけに含まれるものだというわけではない。だが、このニュアンスは、体言止めの技巧によって随分強調されると考えられるであろう。

まとめ

体言止めを取り上げ、第一章と同様、本歌集の配列に対して体言止めが与えた影響を明確にするため、次の二点を調査した。

① 『新古今和歌集』の和歌を中心とする、新古今時代の歌人の、体言止めに対する態度。特に、体言止めの技巧としての必要性和、八代集との比較による、それまでの歌人の用法との相違点。

② 『新古今和歌集』における体言止めを用いられた単語の具体的用法および体言止めを使う和歌の統語論的構造。

この調査の結果、例えば、文中の単語・語群の配列様式とその機能の調査を通じて、統語論上構造が共通する和歌が連続的に並べられる場合は単調な和歌配列になるか、あるいはダイナミックなそして感動させる和歌配列になるか、といった点が明らかになり、体言止めと和歌の配列との関係もより明らかになった。『新古今集』では、体言止めを使う和歌はほぼ全て『新古今和歌集』編纂と同時代の歌人の和歌である。さらに、体言止めと自然界には密接な関係があるということも明らかになった。

これらを証明する具体的な根拠としては、三つのデータが挙げられる。一つめは、体言止めを使う和歌の大部分は四季部に収められていることである。二つめは、一つめのデータの当然の帰結であるかもしれないが、連続的に並べられ、体言止めを使う和歌の大半も四季部に撰入されていたことである。三つめは、体言止めの語句として使われる言葉の内に、自然界（動物・植物・天象）に関する言葉が、どの巻においても圧倒的に多いということである。

注

一 モーフィング (morphing) は映画やアニメーションの中で使用される SFx のひとつで、コンピュータグラフィックスの手法のひとつ。ある物体から別の物体へと自然に変形する映像をみせる。これはオーバーラップを使った映像のすり替えとは異なり、変形していく間の映像をコンピュータによって補完して作成する。変身・変化を意味する単語「メタモルフォシス (metamorphosis)」の中間部分から命名されたという説と、move (移動) + morphology (形態) の合成語であるとする説がある (ja.wikipedia.org/wiki/モーフィング)。

第三章 『新古今和歌集』における本歌取り

はじめに

第一章と第二章では、「歌枕」と「体言止め」を中心に『新古今集』の和歌連続を考察した。より詳しく言えば、以上の二つの文学的技巧の特徴を分析したあと、それらの存在が撰者たちの選択に影響をあたえたかどうかという問題を解明した。すなわち、撰者たちが『新古今集』の和歌配列を決めることになった時に「歌枕」と「体言止め」の有無を考慮したか無視したかということを確認にした。分析の結果としては、「歌枕」も「体言止め」も『新古今集』の幾つかの和歌連続の一貫性を強める要素だということが挙げられる。

だが、鎌倉時代の和歌を特徴づける技巧の中で、特別な役割を果たしていた技巧は間違いなく「本歌取り」であると言えよう。本章の第一節でより詳しく述べるが、「本歌取り」を考察する折に、注意しなければならぬところは幾つかある。それは、当時の講評や注釈などのようなものがない時には、いわゆる「本歌」と「参考歌」との違いが随分分かりにくい場合が多いからである。よって、本歌取りを使う和歌の集計を試みると、調査の根拠によって、つじつまが少し合わない結果が得られてしまう可能性があると認めざるを得ない。それにもかかわらず、本歌取りが当時の歌人にとって欠かせない技巧だったと認めれば、『新古今集』にも大事な役割を果たしていると考えなければならない。周知のように、新古今時代には優れた歌人として認められるために秀歌を詠むことだけでは十分ではなかった。それは、当時の歌人は古歌をよく知るということを絶え間なく示さないといけなかったからである。よって、歌風の革新がある程度望ましく思われていたものを、その革新を昔の和歌の領域内に確実に実現しなければならなかった。そのようなことは、当時の歌壇の一番代表的な特徴だと言っても過言ではなからう。それ故に、本歌取りのような技巧が非常に愛されてきたことは当然であろう。従って、「歌枕」と「体言止め」とともに「本歌取り」も『新古今集』の配列に対して重要な役割を果たしていたと想像して

も良いであろう。後述するように、「本歌取り」は文学的技法としてよく理論づけられていたが、藤原俊成の『古来風躰抄』や藤原定家の『詠歌大概』などの当時の歌学書では「本歌取り」と和歌配列との関係のようなことは考察されていない。しかし、『新古今集』における「本歌取り」を調査すれば、その修辞技巧も「歌枕」と「体言止め」と同様に、和歌の配列に興味深い影響を与えていると言えるであろう。

本章では、先ず文学的技法としての「本歌取り」の基礎的な規則を分析する。それから、よく使われていた本歌の出典を割り出して調査した後、どの点まで「本歌取り」が幾つかの和歌連続の一貫性を強めているかということ を明らかにする。

第一節、本歌取りの定義

イ 文学的技法としての本歌取りの発展

当時の歌人らはなぜ古代の歌人の足跡を積極的にたどっていたか。有吉保氏の考えによると、保元の乱（一一五六年）と平治の乱（一一五九年）の頃には、貴族階級の人々は厳しい現実に直面していたが、同時に鴨長明の『方丈記』で描写されるように、彼らは理想的ロマン的な美で気晴らしをしようとしていた。そうすると、過去の作品を媒介として、せめて心の中で、宮廷の黄金時代を取り戻そうとしていた（参考 有吉保編『和歌文学辞典』桜楓社、1982年、p. 317）。もしかしたら、後鳥羽院の歌壇で本歌取が大流行の技法となった原因はこれこそだと考えられるであろう。

川平ひとし氏は次のように述べた。

（略）「本歌」は「古歌・旧歌」―「新歌」の形作る次元とは別の次元に位置する。本歌は直ちに古歌・旧歌と同一ではなく、また同次元に並ぶのでもない。本歌の実体そのものは古歌・旧歌に他ならず、新歌に裁ち入れられる（ことば）であるが、同時に「本歌」は新歌へと至る課程の中に介在して、〈想起〉されるべき詩的時空である。すなわち、〈本歌〉は二重の機能を含みもっているのだ。

（川平ひとし「本歌取と本説取」―（も）との構造―『和歌文学論集』編集委員

藤平春男氏は、技巧としての本歌取の発展の基礎的な段階を整理したので、この段階を簡潔に纏めておきたい。本歌取の最初の例は万葉時代に遡るが、認識可能な技巧となった時期は、「古今時代」である。だが、「本歌」と「本歌取」という言葉が、歌学書で始めて専門語として使われたのは、院政時代であった。

本歌取の使い方に特に注意を払ったのは藤原定家だった。ところが、彼以前に本歌取について論じていたほかの歌人もいた。例えば、鴨長明。彼は『無名抄』において、古い歌を利用し、新しい歌をどのように詠んだらいいであろうか、ということの説明する。

しかるを、古歌を盗むは一つの故実とばかり知りて、よきあしき詞をも見分かず、みだりに取りて怪しげに続けたる、口惜しき事なり。いかにもあらはに取るべし。ほの隠したるはいとわろし。

また、古歌にとりてことなる秀句をば取るべからず。なにとなく隠るへたる詞のをかくし取りなしつべきを見はからふなり。(高橋和彦『無名抄全解』双文社出版、1987、p.237)

根本的に考察すれば、本歌取の規則としては二つ挙げられる。一つは、長明が述べたように、どの歌のどの詞を取ったか、はっきり分かるように取らなければならない。もう一つは、古歌と新歌の雰囲気が変わらないといかないということである。

後者の考えは、順徳院の『八雲御抄』でも次のように明確に表現される。

一には詞を取りて心をかへ、一には心ながら取りて詞をかへたるもあり。詞を取りて風情をかへたるはよし。風情を取ることは最も見苦し。

藤平氏が注意を促したように、『無名抄』でも『八雲御抄』でも、本歌取の技巧が論じられているところには、「本歌取」という言葉が使われていない。その代わりに、鴨長明と順徳院も「古歌を取る事」という表現を使う。藤原定家の『近代秀歌』の次の文章は有名である。

詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め、及ばぬ高き姿をねがひて、寛平以往の歌にならば、自らよろしきこともなか侍らざらむ。古きをこひねがふにとりて、昔の歌の詞を改めずよみすゑたるを、即ち本歌とすと申すなり。(藤原定家『近代秀歌』橋本不美見、有吉保、藤平春樹校注) 歌『歌謡集』(日本古典文学全集)小学館 1975.4 P.271)

それだけに限らず、定家は『詠歌大概』で本歌取りについて次の通りの学説を立てた。

情以レ新為レ先求人未詠之、詞以レ旧可レ用詞不可出三代集先達之所用、新古今人歌同可レ用之。風躰可レ效七十八年以来人之歌、所詠。二不論古今遠近、見堪能先達之秀歌一、二宣歌、可效其躰。

近代之人所詠出一之心・詞雖レ為一一句一謹可レ除二棄之一。於二古人歌一者多以二其同詞

一詠レ之、已為二流例一。但、取二古歌一詠二新歌一事、五句之中及二三句一者頗過分無二珍氣一、二句

之上三四字免レ之。猶案レ之、以二同事一詠二古歌詞一頗無レ念歟以花詠花、以月詠月。以二四季歌一詠二恋・雜歌一、

以二恋・雜歌一詠二四季歌一、如レ此之時無下取二古歌一之難上歟。

あし曳の山ほととぎす、みよし野のよしのの山、ひさかたの月のかつらほととぎすなくやさ月、玉ぼこのみちゆき人のみちゆき人

如レ此事、全雖二何度一不レ憚レ之。

としのうちに春はきにけり、月やあらぬ春やむかし、さくらちる木のしたかぜ、ほのぼのとあかしのうら

如レ此類、雖二二句一更不レ可レ詠レ之。

常觀二念古歌之景氣一可レ染レ心。殊可二見習一者、古今・伊勢物語・後撰・拾遺・三十六人集之内殊上

手歌、可レ懸レ心人應、真之、忠等、伊勢、小町等之類。雖レ非二和歌之先達一、時節之景氣・世間之盛衰為レ知二物由一、白氏文集

第一・第二帙常可二握翫一深通和歌之心。

和歌無二師匠一。只以二旧歌一為レ師。染二心於古風一習二詞於先達一者、誰人不レ詠レ之哉。(藤原定家『詠歌大概』)

定家の所説をまとめると、本歌取の規則とは大体の次のようなものだったと言える。

- ① 多くのことばを取らない。(大体二句までが限度)
- ② 上の句を取ったならそれを下の句に使い、下の句を取ったなら上の句というように変化させる。
- ③ 本歌が恋の歌であれば、自分の歌では四季の歌などと、趣向を変化させる。
- ④ 誰の何という歌を本歌としているかがすぐわかるように詠む。
- ⑤ 本歌における特別の創意のことばは、たとえ一句でも取らない。

そもそも、本歌取の論議を特に繰り返すのは、順徳院と藤原定家の歌論書である。二人とも、本歌取の使い方については共通する。というのは、本歌からの表現と詞を利用するならば、間違いなく新歌のころは本歌のころと違うようにしなければならない。あるいは、利用しようとするのが本歌のころそのものであるならば、新歌で変えなければならないのは、題となる。

加えて、中古三十六歌仙の一人の藤原公任は、『新撰髓脳』で本歌取に関して次の通りに述べた。

古哥を本文にして詠める事あり。それはいふべからず。すべて我はおぼえたりとおもひたれども、人も心得がたき事はかひなくなんある。むかしの様をこのみて、今の人にことにこのみ詠む、われ一人よしとおもふらめど、なべてさしもおぼえぬは、あぢきなくなんあるべき。(久松潜一校注『歌論集』西尾實校注) 『能楽論集』岩波書店、1964年、p.169

ともあれ、本歌取というのが技巧として意味する欠かせない条件は、本歌が名作だと考えられ、ほぼすべての読者に知らなければならないというのである。(参考 藤平春男『新古今しその前』笠間書院、1983年、p.135-151)

ロ 「本歌」と「参考歌」

当然ながら、本歌取に関して論じる度に、本の歌が狭義の本歌であるか、あるいはまたはただ似ている歌であるか、ということとを分別するのはいつも困難なことであるといわざるを得ない。過言すれば、ある和歌を分析する時に、その和歌に似ている前の和歌を本歌と間違いなく見なせるであろうか。というのは、詠み人がその和歌の

句や詞を意識的に採ったかという疑問が良くあるからである。これは、古典和歌の世界がそれほど広くはない世界だからである。つまり、古典和歌で使われる詞と表現が無数ではなく、いやむしろ中世の歌人が随分限られた詞と表現しか利用できなかったことを無視してはいけない。

だからこそ、本歌取について調査をする時に落とし穴のあるところが多い。現代の歌学者は本歌取を巡って論じるときは「本歌」と「参考歌」という区別に特に注意を払う。藤平氏はこの問題点に関してきちんと述べたので、次に彼の話を引用しておきたい。

A 本歌 『八雲御抄』が「本歌取るやう」あるいは「歌を取る作法」によっていると認めるであろう範囲であるが、定家の所説はさらに厳しいことはすでに述べた如くである。『八雲御抄』の所説はかなり大ざっぱだから、実際の認定は、詞の取り方や本歌をどのように新作歌がとりいれているかを検討して、作者が意識して特定の歌を取っており、かつ取ることによって新作歌の形成する作品内世界に参与せしめられていることのあきらかな場合を本歌取と認め、取られた特定の歌（原則的に一首。二首の場合もある。）を本歌とするということになる。

B 参考歌 いわゆる「心」を取る場合はしばしばこれに属する。量的に言えばかなり多く、また広義に解すれば、これも本歌取とし取られた歌を本歌と称してもさしつかえない。参考歌とするのは、新古今撰集時代の新風に関わる本歌取技法とし、本歌と呼ぶのを基準とするからである（藤平春男『新古今とその前』後『笠間書院』1983年、214頁）。

その後で幾つかの例が続く。一番興味深いのは、次の和歌だと思う。

真菰かる淀の沢水深けれど底まで月のかげはすみけり（新古今集・二二九・大江匡房）

藤平氏によるとこの和歌は本の歌を本歌として使わず、参考歌としてだけ本の歌から着想を得た。これは次の和歌である。

真菰かる淀の沢水雨ふれば常よりことにまさるわが恋（古今集・五八七・紀貫之）

上述したように、この例は、本歌取の研究の難しさを知るうえで特に興味深いと思う。なぜなら、参考歌として藤平氏の示した右の和歌は、有吉保氏と、岩波書店と小学館の『新古今和歌集』の編者らが本歌だと判断しているからである。

第二節、『新古今集』で見られる『古今集』の痕跡

さて、もともと後鳥羽院は『新古今集』を、前の勅撰集よりも、王朝歌風の変化のしるしとして想定していたと考えられるであろう。その意味で『新古今和歌集』という題名の真意をさらに明らかにすることができると。後鳥羽院の命じた歌集のタイトルは、ただ「古い歌と新しい歌の集」という意味に過ぎないわけではない。『新古今集』とは、新歌風が二つの対立的な態度の結果だった、という意味である。つまり後鳥羽院の歌壇の歌人には、一方では伝統的な和歌に対する敬意があり、他方では歌風の変化の憧れもある。

再び言うが、撰者らが守らなければならなかった規則は、前の勅撰集と同様に、『新古今集』にもそれまでの勅撰集に採られた和歌を載せないようにということであった。言うまでもないことであるが、撰者らは院の命令を厳しく守った。しかしこれは、『新古今集』では前の七代集の痕跡が見られないということと全く違うことである。実は、その痕跡は、本歌取りの利用によって紛れもないことである。すでに述べたように、本歌取のことを調べる時に、客観的なデータを集めることは随分難しいことである。なぜなら、それぞれの和歌では本歌取りが使われているかどうか、ということも明らかにする当時の文献がないからである。とにかく、異論のない調査をすることが不可能であっても、現代の研究者の解説を合わせると、次のことが言える(本調査は、久保田淳枝注『新古今和歌集』二冊、新潮社、1973・9 / 田中祐、赤瀬信吾校注『新古今和歌集』新日本古

典文学大系岩波書店 1992 / 葦村文人校注・訳『新古今和歌集』
(日本古典文学全集 小学館 1983) という参考文献に基づいている)

『新古今集』で本歌取りを使う和歌は、五一四首に及び、全体の四分の一少し以上である(資料⑨)。その中で、二首や三首の本歌を取る和歌も何首かある。その本歌は、同じ出典からの和歌である場合もあれば、別の出

典からの和歌である場合もある。本歌の出典を中心にすれば、次のデータが挙げられる。

古今集	二六六首	古今六帖	八首	清輔本古今	二首	山家集	一首
拾遺集	六五首	詞花集	八首	重之集	二首	散木奇歌集	一首
万葉集	五〇首	金葉集	七首	元真集	二首	俊頼髓腦	一首
伊勢物語	四七首	和漢朗詠集	六首	大和物語	二首	千五百番歌合	一首
後拾遺集	四二首	千載集	五首	栄華物語	一首	日本書紀	一首
後撰集	三五首	伊勢集	三首	句題和歌	一首	遍昭集	一首
源氏物語	三〇首	狭衣物語	三首	兼盛集	一首	家持集	一首
新古今集	二七首	歌枕名寄	二首	催馬楽	一首		

右の歌数を合計すると六二三首になり、その数は本歌取りを使う和歌の数（五一四首）と一致しない。それは、二つか三つの歌集や物語に載っている和歌がたくさんあるからである。たとえば、本歌として使われる『伊勢物語』の和歌の大部分は、『古今集』にも載っているものである（資料⑩）。

前掲のデータから分かるように、『新古今集』では前の全ての勅撰集の痕跡が見つけられる（古今集・二六六首、後撰集・三五首、拾遺集・六五首、後拾遺集・四二首、金葉集・七首、詞花集・八首、千載集・五首）。当然ながら、興味を刺激することは、『古今集』に関するデータである。他の勅撰集と比較すれば、『古今集』の和歌を踏まえた和歌は非常に多い、というのは明白な事実である。このような不釣合いの利用は何であろうか。答えはそれほど難しくはない。それは、当時の歌人は『古今集』を無視できない画期的な作品と見なしていたからである。換言すれば、『古今集』とは、『新古今集』に欠かせない基準点であった。

誰にも知られることであるが、勅撰集で特に大切な箇所は「巻頭」である。巻頭に載せられた歌は「巻頭歌」と呼ばれ、巻頭歌によってその歌集全体の風格・性質が印象づけられるので、編纂上特に留意され、秀歌ないし個性のある歌が置かれ、作者が撰定される。要するに、巻頭歌は、勅撰集の一番大切な代表的な歌なのである。そのように考えると、『新古今集』の巻頭歌に本歌取を使う歌を置くということは無意味なことではないと言えるであろう。当該巻頭歌は藤原良経の和歌である。

み吉野は山もかすみて白雪のふりにし里に春はきにけり（一・藤原良経）

当然であるが、巻頭歌の歌人として良経が選ばれたというのは、彼の文学的な重要さより、彼の政権力に基いた選択であった。しかし、これにも関わらず、良経の和歌は巻頭歌として、特に興味深い和歌だと思う。良経の使った本歌は、先行研究によると、壬生忠岑の有名な和歌である。

春立つといふばかりにやみ吉野の山も霞みてけさは見ゆらむ（拾遺集・一・壬生忠岑）

本歌取りの機能は、古歌のイメージとニュアンスで新歌の世界を広げて飾り立てるということだと言えるであろう。しかし、この場合は撰者らの選択によって、良経の和歌は『新古今集』に対して特別に興味深い歌となる。それはなぜであろうか。二つの理由が挙げられると思う。一つは藤原公任がこの和歌を『和歌九品』では上品上の歌として載せたというのである。公任は、

これはことばたへにしてあまりの心さへある也

というように述べた（久松潜一校注『歌論集』西尾實校注『能楽論集』岩波書店、1963年、p.22）。

従って、撰者らは巻頭歌によって読者に『新古今集』に載せられた和歌の優秀さを最初から分からせるつもりであったと、仮定することができるであろう。同時に、本歌として使われた和歌が『拾遺集』の巻頭歌ということも無視できない。『拾遺集』とは所謂「三代集」の三部作の最後の勅撰集だ。『新古今集』の巻頭歌として『拾遺集』の巻頭歌が選ばれたのは意図的な作為であり、広義に新古今時代の王朝の歌風のマニフェストとして

考えてもよかろう。『和歌大辞典』によると、

『拾遺集』は、全体として古今集の伝統に立ち戻ろうとする勅撰集だと言われている（大養廉ほか編『和歌大辞典』明治書院 1963 年）。とある。この考えによれば、撰者らは良経のこの和歌を利用し、『新古今集』の歌風にあこがれる『拾遺集』と結び付けるようにしたと論じられるであろう。

本歌取りについて話すときには、現代のジャズが参考になる。実は、中世和歌とモダンジャズには基礎的な共通点があると思う。これは、或る「歌」を本にし、ほのめかすような幾つかのバリエーションのある新しい「歌」を作る、というテクニクである。ジャズの世界では、或る歌が特に有名になると、「スタンダード」として定義される。同様に、中世和歌の世界にもジャズの「スタンダード」のような色々な歌が出来ていたといえるであろう。言うまでもないことであるが、『新古今集』におけるそのような本歌の大部分は『古今集』の歌である。については幾つかの例を考察したい。

第三節、本歌としての『古今集』の名歌

『古今集』の次の歌は、

さむしろに衣かたしき今宵もや我を我を待つらむ宇治の橋姫（六八九・よみ人しらず）

又は、宇治の玉姫

『新古今集』の次の和歌の本歌となった。

さむしろや待つ夜の秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫（四二〇・藤原定家）

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかも寝む（五一八・藤原良経）

片敷きの袖をや霜に重ねらむ月に夜がるる宇治の橋姫（六一一・法印幸清）

橋姫の片敷き衣さむしろに待つ夜むなしき宇治のあけぼの（六三六・太上天皇）

まずは、本歌取の根本的な規則を守り、右の『新古今集』の和歌が、恋部に属する本歌と違って、すべて季節部に属する和歌であるということに注目しておきたい。それだけに限らず、『新古今集』の前掲の和歌にはもう一つの共通点がある。これは、本歌の「我」という言葉が消えてしまい、描写された場面がもつと普遍的な感じになることである。言葉の使い方注目すれば、右の和歌の中で、後鳥羽院の和歌が優雅な歌であるのに、定家の和歌の方が感動させる作品だと言えるであろうと思う。右の『新古今集』の和歌はすべて、本歌から「片敷く」という動詞を取る。この動詞の意味は、『広辞苑』の説明によると「自分の衣の片袖を敷いてひとりさびしく寝る」ということである。定家もその動詞を利用して、他の歌人と違い「良経は「衣かたしき」・幸清は「片敷きの袖」・後鳥羽は「片敷き衣」、定家は「月を片敷く」という妖艶な表現を使う。この和歌は久保田氏が述べたように「幻想的な風景をあくまで客観的に描き出しているのが、いかにも定家らしい」(久保田淳校注『新古今和歌集』上巻)と評している。しかし、後鳥羽院の和歌も本歌取の使い方方を考察すれば、随分興味深いと言える。後鳥羽院の和歌と本歌をくらべれば、共通しているのは、さむしろに衣を片敷きして待つ宇治の橋姫という点である。しかし、後鳥羽院の歌では、待つ夜の時間の流れが強調され、空しく白々と明けてゆく曙の時間が結末として設定されている。よく分かるように、本歌の雰囲気徹底的に改めるためには、少数の要素だけで足りる。当然ながら、難しいことは、その要素を巧みに利用するということであった。

当時の歌人がどの程度まで上手に本歌を生かすことが出来たかをより一層明らかにするために、もう一つの例を挙げたい。次の和歌は、壬生忠岑の名歌である。

有明のつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし　（古今・六二五・壬生忠岑）
右の和歌は次の六首の和歌の本歌となった。

季節部の歌

有明のつれなく見えし月は出でぬやまほととぎす待つ夜ながらに　（二〇九・藤原良経）

さみだれの月はつれなきみ山よりひとりも出づるほととぎすかな（二三五・藤原定家）
清見瀉月はつれなき天の戸を待たでもしむ波の上かな（二五九・源通光）

さらにまた暮をたのめと明けにけり月はつれなき秋の夜の空（四三四・源通光）

恋部の歌

つれなさのたぐひまでやはつらからぬ月をもめでじ有明の空（一一三八・藤原有家）

ちぎりきやあかぬ別れに露おきしあかつきばかり形見なれとは（一三〇一・源通具）

『古今集』の和歌は恋の歌であるが、その歌を本歌として使う『新古今集』の和歌の大部分は、季節部に属する和歌である。先ず、最初の四首を考察する。それらの共通のイメージは、「つれなき月」ということである。すなわち、「歌人の哀しさに対して無関心な月」ということ。良経は本歌の「有明のつれなく見えし」という上句を取るが、忠岑の和歌と違って良経の和歌でつれなく見えるものは、恋人からの「別」（わかれ）ということではなく、「月」ということである。同様に続きの三首の和歌でも、つれないものはいつも月なのである。実は三首とも同じ「月はつれなき」という表現を使う。しかし、興味深いのは、その月には各和歌で違う様子が認められることである。良経の詠んだ月は冷たくて美しくきちんと見えるものであるが、定家の和歌における「さみだれの月」は同様に無情でありながら、山から出てきていないので、見えないものである。それだけに限らず、その二首には注意を引かれる要素がもう一つある。それは、月と郭公との相互関係である。両首とも月と郭公を詠むが、久保田氏が論じたように、良経の和歌と比べると定家における月と郭公との相互関係は逆となる（参考 久保田淳校注『新古今和歌集』1993, p.95）^{上、新編社}。より詳しく言えば、良経の和歌では月はあるがほととぎすはいないのに対して、定家の和歌ではほととぎすの存在が感じられるものの、月はない。

さて、つれなく見える月の様子の分析に戻る。二五九番と四三四番は両首とも同じ歌人（通光）の詠んだ和歌であり、随分興味深い物だと思う。通光の二首の和歌における月も「つれなき」ものだが、二五九番と四三四番

を対照すれば、月のつれなさの理由が違々と分かる。二五九番の清見瀉月は有明まであらわれない月である。峯村氏はその和歌を次のように講評した。

あらわれない月を薄情なものとして、そういう月を待ちもしないで明けてくる波の上を、さらに薄情なものとした（峯村文人校注・訳『新古今和歌集』(日) 本古典文学全集 小学館、1974年、p.349）。

それに対して、四三四番の月は、歌人に「さらにまた暮をたのめ」ということを言うように見えるものである。結局、右の二首の和歌では、歌人の悩みは月に対する憧れによるものである。でも、最初の和歌（二五九番）では歌人は月をぜんぜん見られないが、二つ目の和歌（四三四番）では歌人は月の美しい眺めを味わうことができる。だが、こうした眺めこそ彼の悩みを深めるものである。なぜなら、秋の空に曙が来たとき、歌人はもう一度月をみるために長い一日を過ぎさなければならぬということが分かるからである。

最後の二首の和歌は恋部の和歌である。一一三八番は藤原有家の作である。ここまで考察した他の四首の和歌と比べれば、有家の和歌が壬生忠岑の詠んだ和歌の雰囲気により近い作だと言えるであろう。それは、両首とも恋の歌だからであろう。しかし、歌人が用いる表現に注目すれば、有家の和歌が忠岑の和歌と随分違々と分かる。それは、有家が本歌として忠岑の和歌だけではなく、『伊勢物語』（八八段）にも『古今集』（八七九番）にも載っている在原業平の和歌（大方は月をもめでじこれぞこの積もれば人の老いとなるもの）も採ったからである。有家の和歌は久保田氏が次のように現代語に訳した。

冷たい当のあの人だけでなく、その点では仲間といえる月までもつらくないということがあるだろうか、もう、有明の月をも賞すまいよ（久保田洋校注『新古今和歌集』(日) 集『下』新潮社、1974年、p.349）。

加え、峯村氏が述べたように、有家は

「大方は」の本歌から句を取り、「有明の」の本歌の嘆きを、月までも激しく恨む心理で屈折させ、新し

くした（峯村文人校注・訳『新古今和歌集』(日) 本古典文学全集 小学館、1974年、p.349）。

最後の和歌は源通具の作だ。その歌でも、忠岑の和歌と同様に、恋人から別れた女の悩みが詠まれている。通具は「つれなく見えし」というような表現を本歌から取らないが、曙の月を巧みに恋の形見に変化させるので、月のつれなさが強く感じられると言えるであろう。

ここまで考察したように、当時の歌人には『古今集』の和歌が必要欠くべからざる基準点であった。だが、『新古今集』で本歌として一番採られた和歌はなんだろうか。それは、調査の結果によると、『古今集』における素性の次の和歌である。

今こむと言ひし許に長月の有明の月を待ちいでつる哉（六九一）

右の和歌は、古今時代の数えきれないほどの和歌と同様に、恋人の一番辛いところ、すなわち別れの時になる有明を詠む作である。この和歌で素性は、長い夜にひたすら恋人をむなしく待っていた女の気持ちを妖艶に描写する。女は曙になると、失望の苦い味を味わい、遅い月があらわれ、もう待つ甲斐がないと分かってしまう。この濃艶な和歌を本歌として取る和歌は、『新古今集』では八首に及ぶ。それらは次である。

有明の月は待たぬに出でぬれどなほ山ふかきほととぎすかな（二一二・平親宗）

いま来むとたのめしことを忘れずはこの夕暮の月や待つらむ（一二〇三・藤原秀能）

いま来むと契りしことは夢ながら見し夜に似たる有明の月（一二七六・源通具）

忘れじといひしばかりのなごりとしてその夜の月はめぐり来にけり（一二七七・藤原有家）

思ひ出でてよなよな月に尋ねずは待てと契りし中や絶えなむ（一二七八・藤原良経）

いはざりきいま来むまでの空の雲月日へだてて物思へとは（一二九三・藤原良経）

ふりにけりしぐれは袖に秋かけていひしばかりを待つとせしまに（一三三四・藤原俊成女）

月見ばといひしばかりの人は来で真木の戸たたく庭の松風（一五一七・藤原良経）

よく分かるように、右の和歌は、夏の歌の巻における最初の和歌を除けば、すべて恋部（一二〇三番・一二七

六番・一二七七番・一二七八番・一二九三番・一三三四番）と雑部（一五一七番）の和歌であり、本歌のテーマを利用する。それは、尋ねる約束を果たさない恋人に対する女の悩みということである。同様に、右のすべての和歌が、俊成女の和歌（一三三四番）を除けば、本歌から月のイメージを取る。言うまでもないことであるが、そのイメージは、捨てられた女の寂しさの気持ちをより一層感じさせるものである。だが、以上のような共通点があっても、それぞれの和歌では、本歌のテーマが特別に扱われている。

再び述べるが、右の和歌の中で、本歌の基本的なテーマを利用しない和歌は、季節部に載っている平親宗の和歌（二一二番）だ。親宗が描写するのは、きちんと山から出てきた月と違って強情に山奥に隠れ続けるほとぎすというイメージである。それに対して、他の和歌の主なテーマは、恋人を長くむなしく待っている女ということである。秀能の和歌で、女を捨てた恋人の約束は夢のようなことになってしまふほど遠い記憶に過ぎないものである。遙か昔から残るものは、恋人と一緒に眺めていた月である。

有家の和歌（一二七七番）は、親宗の和歌によく似ている。こちらでも月が昔の恋の形見となってしまうたものである。しかし、興味深いことは、有家が本歌の上句（「今こむと言ひし許に」）を上手に「忘れじといひしばかりの」という句に変えるということであると思う。なぜなら、一つの表現だけで過去と未来を同時に感じる事が出来るからである。

良経の和歌（一二七八番）では、月は恋人と過ごしたロマンチックな夜の形見だけではない。その和歌で、月は慕う男がしてくれた約束の記憶を生き残らせるものである。続きの和歌（一二九三番）で良経は、掛け言葉（「月日」）を作るために、月のイメージに太陽のイメージを重ねた。歌人は、慕う男から逢う約束をされてから、日々が月や日を遮り隔てる雲のように、女を隔てて行ってしまったと言う。

個人的な考えに過ぎないことであるが、右の和歌の中で俊成女の和歌が一番妖艶な作だと言えるであろう。無論、涙のイメージを時雨のイメージに重ねることは、当時の和歌ではありふれた方法である。ところが、涙を通

じて時間の流れを感じることは否定できない魅力があると思う。

最後の和歌は良経の歌である。それは、他の和歌とくらべれば、一番面白くて独自のやり方で本歌のテーマを扱っている。本歌と同様に、良経の和歌にも捨てられた女と月という二つの要素があるが、本歌の月は昔の恋の形見に過ぎない物である。それに対して、良経の和歌ではその月が出る時は恋人を待っている女には随分重要な時となる。それは、彼女の待っていた人が「月の出るのを見たならばすぐにも訪れよう」と約束したからである。最後に恋人が約束を果たさないことは和歌に読者を感動させる力を与えることだと言えるであろう。なぜなら、読者は期待の不安と失望の哀しさをほぼ同時に感じることもあるからである。

結局、新古今時代の歌人はたしかに、昔の歌材を詠むとき伝統の和歌の言葉を守っても、同時にその歌材を可能な限り新しくしようとしていたということが確実に述べられるであろう。

第四節、二首の本歌を取る和歌

『新古今集』で見られる本歌の使い方に関してさらに考察すれば、当時の歌人が和歌を詠むために同時に二首の本歌を採るということは全く珍しくないことであつたと言える。実は、特異なことであるが、歌人が本歌として三首まで採る場合もある。本調査によると、本歌取りを使う『新古今集』の五一四首の中では、二首の本歌を採る和歌は七四首（つまり、ほぼ一四％）に及ぶ。それに対して、三首の本歌を採る和歌は五首だけある。

再び述べるが、本章で紹介する調査の結果は絶対異論のない客観的なものとは言えない。なぜなら、当時の歌人が和歌を詠んだ時、どの本歌を採ったかということは正確には分からないからである。だが、それにもかかわらず、調査の結果は当時の歌風の傾向を裏づけるものとして挙げられるであろう。

さて、当時の歌人がどの様に二首の本歌の詞や表現や雰囲気、一首の和歌に巧みに調和させることができたかということ明らかにするために、幾つかの例を挙げたい。当然なことであるが、二首の本歌を採るという技

巧は新古今時代だけのものではなく、平安時代にもあった。例えば、『新古今集』には、崇徳朝の代表的歌人であった藤原教長の次の和歌が載っている。

若菜つむ袖とぞみゆる春日野の飛火の野べの雪のむらぎえ（一三・藤原教長）

この和歌で歌人は『古今集』の次の二首の歌を採った。

春日野の飛火の野守いでて見よいま幾日ありて若菜摘みてむ（一八・よみ人知らず）

かすが野のわかなつみにや白たへの袖ふりはへて人の行らん（二二・紀貫之）

右の本歌は両首とも春日野のイメージを利用する。だが、よみ人知らずの和歌（一八番）は春日野の火のことを暗示するのに対して、貫之の和歌（二二番）は自分の袖を振りながら同じ春日の野辺で若菜を摘む女性を描写する。教長は、二首の本歌の要素（火と若菜を摘む人の袖）を同時に使い、妖艶な趣を感じさせると言えるであろう。だが、教長は上記の要素に限らず、もう一つ要素を利用することにした。それは雪である。雪のイメージによって好対照の印象を与える。なぜなら、火と雪のイメージを組み合わせると、紅白の対照の美を感じさせることだけではなく、熱さと冷たさの対照の微妙な印象も与えることができるからである。要するに、教長は、昔の歌の素材を利用して、新鮮な和歌が詠めたのである。

それでも、一首の和歌を詠むために二首の本歌を採ることが特に新古今歌人のよく扱った技巧なのである。例えば、藤原家隆の次の和歌がある。

さくらばな夢かうつつか白雲の絶えてつねなき峯の春風（一三九・藤原家隆）

この和歌は老若五十首歌合にあたって詠まれ、本歌として『古今集』の次の二首を採った。

風ふけば峰にわかるゝ白雲の絶えてつねなき君が心か（六〇一・壬生忠岑）

世の中は夢かうつゝかうつつとも夢とも知らずありてなければ（九四二・よみ人知らず）

家隆は二首の本歌の要素を使い、夢幻的なニュアンスがある和歌を詠むことができた。忠岑の和歌で歌人は慕

う女の無情な心を山の峰から離れて行く白雲にたとえる。周知のように、この和歌は名歌の「春の夜の夢の浮橋とだえして峯にわかるる横雲の空」（新古今・三八）を詠んだとき定家も本歌として採った和歌である。（参考第二章・第五節）だが、忠岑の和歌は、随分深遠な作である新古今時代の和歌と違い、単なるメタファーを作り、飾り気のない和歌だと言えるであろう。

それに反して、よみ人しらずの和歌（九四二番）で歌人は、より思索的傾向を示すと考えられる。それは歌人が、この世は現であるか、または単なる夢であるかという疑問を表すからである。この考えは当時随分流行していた仏教の教えに基づき、十世紀の和歌でよく扱われていた。

家隆は巧みに二首の本歌の要素の一つにし、非常に洗練された和歌を詠んだ。この和歌で、自然界に属する桜花と白雲は読者に無常感を鮮やかに感じさせるものになる。実は、よみ人しらずの本歌でも無常感という感覚が表れているが、峯村氏が述べたように、家隆の和歌は、

世の無常を詠んだ本歌の心を、峰の春風にはかなく消えた桜の花の夢幻的世界で具体化した作

である。（峯村大校注・訳『新古今和歌集』（日）
本古典文学全集、小学館、1974.3、p.25）

より興味深い例は源通具の次の和歌である。

梅の花たが袖ふれしにほひぞと春やむかしの月にとはばや（四六・源通具）

この和歌は『千五百番歌合』に詠まれた和歌であり、本歌として『古今集』に載っている次の二首を採る歌である。

色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ども（三三・よみ人知らず）

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身に（七四七・在原業平）

実は、業平の和歌は『伊勢物語』の四段（片桐洋一校注・訳『竹取物語』・福井貞助校注・訳『伊勢物語』、高橋正治校注・訳『天
和物語』清水好子校注・訳『平中物語』（新編日本古典文学全集、小学館、1981.12p.116）にも載っているし、『古今集』では次の詞書が付いている。

五条の后宫の西の対に住みける人に、本意にはあらで物いひわたりけるを、む月の十日あまりになん、ほかへ隠れにける、あり所は聞きけれど、え物も言はで、又の年の春、梅の花さかりに月のおもしろかりける夜、去年を恋ひて、かの西の対にいきて、月のかたぶくまで、あばらなる板敷にふせりてよめる。

よく分かるように、通具は自分の和歌の上の句にはよみ人知らずの和歌（三三番）から着想を得る。通具の和歌で、本歌と同様に、歌人は花の香を誰の袖から得たのかと想像する。それに対して、通具の和歌の下の句では、業平の和歌の影響のほうが随分強いといってもよからう。通具が本歌として業平の和歌を採ることにしたのは興味深いことである。なぜなら、新古今時代になると、歌人としての業平の評判が大分見直されてきたということを示すからである。（参 杉山 実、Kobun Meiji Shū, Recollected Poets.）。無論、古今時代でも業平は和歌に秀でた人と見なされていたが、貫之は『古今集』の仮名序で、業平の歌風を論じるところで次の通り述べた。

在原業平は、その心余りて、詞たらず。しばめる花の色なくて匂ひ残れるがごとし。（小沢正夫校注・訳『古今和歌集』（日）本古典文学全集 小学館 1971 p.57）

それに反して、藤原俊成は『古来風躰抄』で、業平の右の和歌を考察する箇所、次の通りに述べた。

「月やあらぬ」と言ひ、「春や昔の」など続ける程の、限りなくめでたきなり。（橋本不美男、有吉侯、藤原春男校注、訳『歌論集』小学館 1975.4 p.380）

同様に、鴨長明は『無名抄』で、他の和歌とともに業平のその和歌を考察する俊恵のコメントを引用した。

是等こそ余情内に籠り、景気空に浮かびて侍れ。させる風情もなけれど、詞よく続けければ、おのづから姿に飾られて此の徳を具する事もあるべし。（高橋和彦『無名抄全釋』二反、文社出版、1987.2 p.228）

二首の本歌を採る和歌のなかには、歌人が前の勅撰集で連続して並んでいる二首を本歌として採る場合もある。『新古今集』でこのような和歌は四首しかないのです、ある歌集で連続的に並べられた和歌二首を本歌として採ることが当時流行したとは考えにくい。しかし、次の四首の和歌を見ただけでも、前時代の和歌の知識がどれほど深かったか、想像がつくであろう。その四首の和歌は次の通りである。

谷川のうち出づる波も越えたてつうぐひすさそへ春の山風（新古今・一七・藤原家隆）

本歌

谷風にとくる氷のひまごとに打いづる波や春のはつ花（古今・一二・源当純）

花の香を風のたよりにたぐへてぞ驚さそふしるべにはやる（古今・一三・紀友則）

ほととぎすみ山出づなる初声をいづれの宿のたれか聞くらん（新古今・一九二・弁乳母）

本歌

髣髴にぞ鳴渡なる郭公み山を出づる今朝の初声（拾遺・一〇〇・坂上望城）

み山出でて夜半にや来つる郭公暁かけて声の聞ゆる（拾遺・一〇一・平兼盛）

稲葉吹く風にまかせて住む庵は月ぞまことにもりあかしける（新古今・四二八・俊成女）

本歌

秋の夜は山田の庵に稲妻の光のみこそもりあかしけれ（後拾遺・三六八・伊勢大輔）

宿近き山田の引板に手もかけで吹く秋風にまかせてぞ見る（後拾遺・三六九・源頼家）

秋をへてあはれも露も深草の里訪ふものはうづらなりけり（新古今・五一二・慈円）

本歌

年を経て住みこし里をいでいなばいとど深草野とやりなむ（古今・九七一・在原業平／伊勢物語・一

二三段）

野とならば鶉と鳴きて年は経むかりにだにやは君は来ざらむ（古今・九七二・よみ人しらず／伊勢物

語・一二三段）

右の四首は、弁乳母をのぞけば、すべて新古今時代の歌人の和歌であり、同様にすべて季節部に属する和歌である。それは、其頃の歌人が哀傷歌・羈旅歌・離別歌や恋歌などよりも季節に関する和歌の方に注意を払っていたからであろうか。

先程明らかにしたように、『新古今集』では二首の本歌を採る和歌が比較的が多いが、ここですべて挙げて考察することはできない。だが、右の少ない例だけでも、新古今時代の歌風の特徴的な態度が分かると言えるであろう。それは、昔の和歌の詞や表現やイメージや趣などを新しい和歌に調和させる場合、当時の歌人は以上の要素を互いに足すだけに限らず、進歩的な歌を詠むことができた、ということである。換言すれば、新古今時代の歌人は、成分が違う化学物質を混ぜて全く新しい化合物を得る化学者と同様に、昔の歌材を扱いながら、非常に洗練された作品を作ったのである。

ともあれ、本節で明らかにしたことは、本歌取りに見られる歌人と古歌との関係である。すなわち、新古今時代の歌人にとっては昔の和歌、とりわけ『古今集』の和歌が新風を作るにはどの点まで不可欠な歌材であったかということ明らかにした。では本歌取りが『新古今集』の和歌配列にどの程度まで影響を与えたか、について次の節で明確にする。

第五節 和歌連続の配列基準としての本歌取り

本章の「はじめに」のところすでに述べたように、第一章と第二章で、『新古今集』の和歌配列に対しての「歌枕」と「体言止め」の影響を明らかにした。残念ながら、「本歌取り」の影響を「歌枕」と「体言止め」の影響と比較すれば、前者は後者より弱いと認めざるを得ない。しかし、このような結果は、撰者たちが和歌配列を決めた時、本歌取りの存在にも注意を払っていなかったということではない。実は、『新古今集』で同じ本歌を取る和歌が二首や二首以上も連続的に並んでいる箇所は少なくない。「歌枕」と「体言止め」と違い、ある和歌に本歌の存在を認めることは即座には判断できないので、同じ本歌を使う和歌が連続的に並べられているのは、偶然のこととは考えられない。換言すれば、同じ本歌を採る和歌の連続は、『新古今集』の編纂者たちが和歌配列を決めた時に、本歌取りの存在も頭に置いていたということの証拠となるであろう。それ故、同じ本歌を採る

和歌連続とその本歌を列挙する。

窓近き竹の葉すさむ風の音にいとどみじかきうたたねの夢（新古今・二五六・式子内親王）

窓近きいささ群竹風吹けば秋におどろく夏の夜の夢（新古今・二五七・春宮大夫公継）

本歌

風生竹夜窓間臥 月照松時臺上行（和漢朗詠集・一五一・白楽天）

秋をへてあはれも露も深草の里訪ふものはうづらなりけり（新古今・五一二・慈円）

入日さすふもとの尾花うちなびき誰が秋風にうづら鳴くらむ（新古今・五一三・左衛門督通光）

本歌

年を経て住みこし里をいでていなばいとど深草野とやなりなむ（古今・九七一・在原業平／伊勢物語・

一

二三段）

笹の葉はみ山もさやにうちそよぎこほれる霜を吹くあらしかな（新古今・六一五・藤原良経）

君来ずはひとりや寝なむ笹の葉のみ山もそよにさやぐ霜夜を（新古今・六一六・藤原清輔）

本歌

笹の葉はみ山もさやにさやげども我れは妹思ふ別れ来ぬれば（万葉・一三三・柿本人麻呂）

幾夜かは月をあはれとながめ来て波に折り敷く伊勢の浜荻（新古今・九四三・越前）

知らざりし八十瀬の波を分け過ぎてかた敷く袖は伊勢の浜荻（新古今・九四四・宜秋門院丹後）

本歌

神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜辺に（万葉・五〇〇・碁壇越の妻）

筑波山は山しげ山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり（新古今・一〇一三・源重之）

われならぬ人にこころを筑波山したに通はむ道だにやなき（新古今・一〇一四・大中臣能宣）

本歌

筑波山は山しげ山茂きをぞや誰が子も通ふな下に通へわがつまは下に（重之集・三〇八）

片岡の雪間にねざす若草のほのかに見てし人ぞ恋しき（新古今・一〇二二・曾禰好忠）

跡をだに草のはつかに見てしがな結ぶばかりのほどならずとも（新古今・一〇二三・和泉式部）

本歌

春日野の雪間をわけて生ひいでくる草のはつかに見えしきみはも（古今・四七八・壬生忠岑）

ありとてもあはぬためしの名取川朽ちだにはてね瀬々の埋れ木（新古今・一一一八・寂蓮）

歎かずよいまはたおなじ名取川瀬々の埋れ木朽ちはてぬとも（新古今・一一一九・藤原良経）

本歌

陸奥にありといふなるなとり河無き名とりては苦しかりけり（古今・六二八・壬生忠岑）

あはれとて問ふ人のなどなかるらむ物思ふ宿の荻の上風（新古今・一三〇七・西行）

わが恋はいまは限りと夕まぐれ荻吹く風の音づれてゆく（新古今・一三〇八・俊恵）

本歌

いとゞしく物思やどの荻の葉に秋と告げつる風のわびしき（後撰・二二〇・よみ人しらず）

滝つ瀬に人の心を見ることは昔にいまも変らざりけり（新古今・一七二五・後朱雀院御歌）

浅からぬ心ぞ見ゆる音羽川せき入れ水の流れならねど（新古今・一七二六・周防内侍）

本歌

音羽河せき入れておとす滝つ瀬に人の心の見えもする哉（拾遺・四四五・伊勢）

右の例にもう二つの興味深い例を加えたい。この和歌の組み合わせは、本歌は違うが、『古今集』で連続的に

並べられた次の二首の和歌を採り、季節部に並べて置かれたものである。一つ目は次である。

うぐひすの鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉しろき逢坂の山（新古今・一八・後鳥羽院）

本歌

梅が枝にきゐるうぐひす春かけて鳴けどもいまだ雪はふりつゝ（古今・五・よみ人しらず）

春来ては花ともみよと片岡の松のうは葉にあは雪ぞ降る（新古今・一九・藤原仲実）

本歌

春たてば花とや見らむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく（古今・六・素性）

二つ目は、同じ本歌を採る和歌連続のところでは挙げた和歌の組み合わせである。

秋をへてあはれも露も深草の里訪ふものはうづらなりけり（新古今・五一二・慈円）

本歌

年を経て住みこし里をいでていなばいとど深草野とやりなむ（古今・九七一・在原業平／伊勢物語・一

二三段）

入日さすふもとの尾花うちなびき誰が秋風にうづら鳴くらむ（新古今・五一三・よみ人しらず）

本歌

野とならばうづらとなきて年は経むかりにだにやはきみは来ざらむ（古今・九七二・よみ人しらず／伊

勢物語・一二三段）

『新古今集』には、右のような和歌の組み合わせはこの二つしかないので、『古今集』の和歌配列が『新古今集』の和歌配列に重要な影響を与えたという理論を立てることはできない。しかし、何度も述べたように、右の和歌連続は、『新古今集』の撰者たちがどの程度、前の勅撰集を知っていたか、とりわけ『古今集』の和歌を熟知していたかということを確認にすると、言ってもよからう。

『古今集』と『新古今集』との密接な関係をより確実に明らかにするため、次の和歌を挙げておきたい。

さつきまつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖のかぞする（古今集・一三九・よみびと知らず／伊勢物語・第六十段）

『伊勢物語』の第六十段に「宮仕えに多忙であった男（業平ともいう）との夫婦生活を見限って、別の男のもとに走った女が、後にゆくりなくも再会した男からこの「さつきまつ」の歌を詠みかけられ、恥じ入って尼になつたという」とある。（参考 松田修『古今集・新古今集』の花 国際情報社、1982、122）

右の和歌は撰者らが『新古今集』の和歌配列を定めたときに、本歌取りの存在も意識していたではないかという私見を裏付けるものだと言えるであろう。

この歌は、花タチバナの香りに、昔の人の袖の香りが懐かしく甦つた、という感動を表したもので、花タチバナの香りによって昔の思い出を誘う。ヨーロッパで、右の和歌で表れるコンセプトが出されるには、十九世紀生まれのフランスの作家マルセル・プルーストによる「無意志的記憶」という概念を待たなければならなかった。『失われた時を求めて』は記憶をめぐる物語であり、その全体は語り手が回想しつつ書くというふうな記憶に基づく形式で書かれている。プルーストは意志を働かせて引き出される想起に対して、ふとした瞬間にわれしらず甦る鮮明な記憶を「無意志的記憶」と呼んで区別した。（参考 ja.wikipedia.org/wiki/失われた時を求めて）

『新古今集』では、右の和歌を本歌として取る和歌は七首に及ぶ。それは次の通りである。

たれかまたはなたちばなに思ひ出でむわれも昔の人となりなば（二三八・藤原俊成）

五月闇みじかきよはのうたゝねにはなたち花の袖にすゞしき（二四二・慈円）

尋ぬべき人は軒端のふるさとにそれかとかをる庭のたちばな（二四三・読人しらず）

郭公はなたちばなの香をとめてなくは昔の人やこひしき（二四四・読人しらず）

たちばなのほふあたりのうたたねは夢も昔の袖の香ぞする（二四五・藤原俊成女）

ことしより花咲きそむるたちばなのいかで昔の香ににほふらむ（二四六・藤原家隆）
あらざむのちしのべとや袖の香を花たちばなにとどめおきけむ（八四四・祝部成仲）

その和歌は最初（二三八番）と最後（八四四番）を除けば、すべて一つの和歌連続となるものである。この現象は撰者らの選択による偶然の結果だとは考え難い。よって、同じ本歌を取る五首の和歌を連続して並べるということには、一体どういう意味があるのだろうか。仮定に過ぎないが、撰者らがこのような反復によって本歌の懐かしい、そして寂しい趣を強調し、それを当時の読者により深く味わわせようとしていたと言えるであろう。言うまでもないことであるが、連続的に並べられた右の五首の和歌は、違うところで違う歌人から詠まれた歌である。しかし、それぞれの歌人の気持ちが一人的理想的な歌人の気持ちとなり、人間の感情の普遍的な象徴となるような強い印象を受けると言えるであろう。同じ本歌に基づくこのような再文脈化によって、右の和歌連続には非常に強い一貫性が認められる。それだけに限らず、その五首の和歌が一人の歌人から詠まれていたというような印象も受けると言っても過言ではなからう。興味深い例であるので、以下、その五首を考察する。

二四二番の和歌では歌人が夏の夜で自分の袖に花橘の匂いを感じる。より詳しくいえば、歌人の袖に感じられる香が「すずしき」、すなわち涼しく薫っている。このような表現は共感的で妖艶な表現であるが、この和歌で嗅覚感知は「無意志的記憶」というメカニズムを活性化していない。「無意志的記憶」は続きの和歌（二四三番）で利きはじめる。その後、花たちばなの香が錯覚を起こさせる要素に変化する。なぜなら、この匂いは近所に昔の恋人がいる根拠ではないか、という疑惑を歌人の心に吹き込むものであるからだ。そして二四四番歌で、歌人はほととぎすの責めさいなむ鳴き声を聞き、その声を、昔の恋のために悩んでいる自分の寂しい状態の象徴と見なしてしまう。

しかし、このような理知的な発想は短くて、すぐ夢の次元が再び発生してくる。続きの和歌（二四五番）で、歌人は二四二番の最初の状態に戻るそうだ。つまり、花橘の美しい香を味わいながら、その木の近くに再び寝つ

く。だが、もはや花橘の匂いはただの匂いではなくなる。その匂いは昔の記憶を強く促すし、ある意味で甘い痛みに移り変わってしまうのだ。

右の和歌連続の最後の和歌（二四六番）で、歌人は少し微妙な疑問を表す。彼は、花橘は若いのに一体なぜ匂いは昔の香であろうか、という疑いを抱く。当然、普通に考えると、その質問はあまり意味がないと言えよう。しかし、恋のせいで悩んでいる人の半醒半睡の状態に位置させてみれば、こうした疑問が非理論的なものであるもの、同時に歌人の人間的次元が純粋に表れると言えるであろう。

要するに、右のような連続はある程度小さなストーリーを語るものではないかと考えられるであろう。

最後に、本歌が『新古今集』の配列に対して重要な影響を与えたもう一つの例を挙げたい。

この場合も取られた本歌は、『古今集』にも載せられた伊勢物語の和歌だ。

けふ来ずはあすは雪とぞふりなまし消ずは有とも花とみましや（古今集・六三・在原業平／・伊勢物語・十
七段）

業平の和歌は、女が詠んだ和歌の返し歌だ。女の和歌は次である。

あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり（六二・よみ人知らず）

女は自分を春の桜花と比較する。桜花が無情にはかない花であるように、彼女の心もはかない。でもそれは、ただの悪い評判である。実は、彼女は外見にも関わらず、他の男に身を任さず、ずっと稀に訪れてくれる恋人を待っていたという。

この和歌に業平は、今日来なかったら明日彼女の心は間違ひなく無情に変わっていったであろうと答えている。そのようなことがあれば、女の業平を思う気持ちは理解されず、業平は昔のように女を恋することが出来なかったであろう。

その二首は、古典和歌で自然界のイメージが人間の世界のイメージのメタファーとしてよく使われていたとい

うことの良い例である。

『新古今集』で、業平の右の歌を本歌として使う和歌は三首に及び、三首とも連続的に並べられている。

さくらいろの庭の春風跡もなしとはばぞ人の雪とだに見む（一三四・藤原定家）

今日だにも庭をさかりとうつる花消えずはありとも雪かとも見よ（一三五・後鳥羽院）

返し

さそはれぬ人のためとやのこりけむあすよりさきの花の白雪（一三六・藤原良経）

最初の和歌は藤原定家の歌であるが、続きの二首は後鳥羽院と藤原良経の和歌交換である。後鳥羽院の和歌の詞書は次である。

ひととせ、忍びて大内の花見にまかりて侍りしに、庭に散りて侍りし花を、硯の蓋に入れて、撰政のもとにつかはし侍りし

良経は返し歌で自分の絶望を告白する。彼にとって後鳥羽院から花見に誘われなかったことは本当に辛く、がっかりさせられることだという。なので、雪にたとえられるそのまっ白い花は、彼を慰めるためのものではないかと考えてしまう。

言うまでもなく、良経のそのような恨みは、ただの見せかけに過ぎないものだ。歌人が冗談でも、あるいは機知を見せるためにも、和歌でよく相手を恨むという文学的な習慣は、古今時代まで遡れる。良経は、その贈物をいただいたので、後鳥羽院に対して基本的に感謝の心を抱く。だが、院とともにその花を観賞させていただいたら、もつと幸せになったであろうということを優雅に述べている。

興味深い点として、本歌と比べれば、右の三首の和歌の時間的座標はすべて違うと言うことが挙げられると思う。業平の和歌では花が雪のように落ちてしまった現在の哀しさが味わわれる。しかし、こうした悲しさは、ある意味で甘い悲しさ

であり、慰められない絶望の痕跡のようなものはまったく見られない。業平の和歌で雪のようなものとなった桜花の眺めは歌人を非常に悲しませるものであるが、定家と後鳥羽院と良経の和歌ではその景色は、新古今時代の美学的基準に沿って、歌人を深く感動させるものである。当時の歌人には花弁が落ちているところこそ花の美しさの絶頂だった。なぜなら、その時こそ無常感を完璧に感じさせるものと見なされていたからである。

右の三首の和歌連続は、藤原俊成と藤原定家が着想した有名な「詞は古きをしたい、こころはあたらしきをとめ」という概念の完璧的な例だと言ってもよからう。その和歌の句は業平の詠んだ和歌の句によく似ているものの、それに漂う雰囲気は随分違うのである。

まとめ

本章では、次の二点を論じた。

①それまでの歌集（特に私家集と勅撰集）が本歌取りによって『新古今和歌集』にどのような影響を与えたか。

②撰者たちが和歌配列を決める際、本歌取りは重要な要素であったかどうか。すなわち、本歌取りは和歌の配列にどのような影響を及ぼしたか。

周知のように、万葉時代や古今時代まで遡る本歌取りという修辞技巧は新古今時代には非常に流行した物となった。それは、『新古今集』の和歌だけに調査を限っても、よく分かることである。なぜなら、第二節で述べたように、『新古今集』で本歌取りを使う和歌は、五一四首に及び、全体の四分の一余りである。

『新古今集』における本歌取りの使い方と考察すると、本歌の出典のなかでは、当時の歌人から特に好まれたのは『古今集』だったということも明らかにした。

ともあれ、本章で紹介した研究の一番興味深い結果は、「体言止め」と「歌枕」の修辞技巧と同様に本歌取り

も、『新古今集』の少なくない箇所が決定的な要素となったということである。第五節で明らかにしたように、『新古今集』では、同じ本歌を採る和歌の組み合わせが幾つかある。無論、客観的に断言することができないものではないが、以上の和歌の組み合わせで編纂者らが組み合わせの基盤として本歌を利用したということを考えてもよいであろう。

とりわけ、本歌が同じである和歌が二四二番から二四六番まで五首も連続するという驚くべき例を考察した。同じ本歌による和歌が二首続く場合、それは偶然ではないと言えるかもしれない。しかし、同じ本歌を採る和歌が五首も続く場合は、間違いなく編纂者たちの選択の結果だと言えるであろう。

要するに、その頃の文献に根拠となる解説や解釈などがなくても、本歌取りの使い方を中心にして『新古今集』の和歌配列を詳しく分析すれば、その本歌取りは後鳥羽院の勅撰和歌集の最終的な姿に重要な役割を果たしていたと認められるであろう。

結論

本研究は、後鳥羽院が命じた八番目の勅撰和歌集、すなわち『新古今集』において、和歌がどのように配列されたかということ明らかにすることを試みた。

この問題に関しては序文でも述べたように、小西甚一氏が五〇年代に部分的に答えている。しかし、小西氏の研究は、修辞技巧の存在に注意を払わず、和歌の内容だけをよく考察したものである。

小西氏のようなアプローチはおそらく藤原俊成の歌学書『古来風躰抄』から影響を受けたと考えられるであろう。なぜなら、その書で俊成は、百首歌や和歌連続の詠み方を論じるときに、一番重要なことは四季折々の移り変わりを出来るだけ元どりに再現することだ、ということを中心としたからである。というのは、当時の歌人が百首歌を詠む時、あるいは歌集を編纂するとき、四季の順番だけに限らず、その移り変わりができるだけスムーズな印象を読者に与えるように注意しなければならなかったからである。

よって、『新古今集』の和歌を通読すると、流麗の印象を受ける。しかし、『新古今集』の編纂者たちが以上のことだけに注意を払ったのではない。本研究は、『新古今集』の和歌配列が決定された時、「歌枕」「体言止め」「本歌取り」という三つの修辞技巧の存在も見逃せない役割を果たしていた、ということ明らかにした。この修辞技巧に関するデータを集めると、三種それぞれが、『新古今集』の幾つかの和歌連続にかなり強い一貫性を与える要素であることが分かった。

まず第一章では『新古今集』における歌枕を取りあげ、どのような歌枕が詠まれているかということ調査した。さらに『新古今集』で表れる歌枕がそれぞれの使い方によって分類されることも明らかにした。この調査の結果、歌枕は基本的に二つのグループに分けられることが分かった。一つ目は、掛け言葉を作りやすい「鳴海」や「嵯峨」のような歌枕のグループであり、二つ目は地理的な特徴のある「須磨」や「吉野」などの歌枕のグループである。

特に興味深い点は、どのグループの歌枕が詠まれているかということによって、それぞれの和歌連続の調子が変わると言うことである。より詳しく言うと、一つ目のグループに属する歌枕を使う和歌連続には反復的な印象が認められる。そのため、このような和歌連続はかなり静的な連続である。それに対して、二つ目のグループに属する歌枕を詠む和歌連続は、傾向としてよりダイナミックな印象を与える。このような場合、編纂者たちは、何度も同じイメージや雰囲気を繰り返さなくても、物語の時間的な流れをきちんと感じさせることができた。それだけに限らず、そのような和歌連続では、それぞれの歌人の気持ちが一人的な理想的な歌人の気持ちとなり、その歌人の気持ちの動きと心の移り変わりも意識させられる。

第二章では体言止めを取りあげ、基本的に三つの点を明らかにした。一つ目は、『新古今集』における体言止めの配分である。調査の結果、体言止めを使う和歌の大部分は季節部に属することが明らかになった。二つめは、一つめの自然の帰結であるかもしれないが、体言止めを使う和歌が連続して並べられている例の大半も四季部に撰入されていることである。三つめは、それぞれの和歌がどの巻に収められているかに関わらず、体言止めの語句として使われる言葉には、自然界（動物・植物・天象）に関する言葉が圧倒的に多いということである。

また、第五句で同じ言葉やイメージを使う和歌が連続する場合、その連続する和歌が互いに似ているという印象は表面的な印象に過ぎないということも分かった。なぜならば、その和歌の分析によって、撰者たちは詳細な違いを巧みに生かし、第五句で現れるイメージのニュアンスを大きく変化させることができた、ということが分かったからである。

さらに、和歌の統語構造も分析した。すなわち、体言止めの和歌がどのような統語論上構造であるか、ということも明らかにした後、統語論上構造が同じである和歌の組み合わせを考察した。興味深いことは、統語論上構造が共通する和歌が連続する場合、構造的には似ているものの、言葉の使い方の詳細な違いによって感動させる和歌連続を作っているのである。

最後に第三章において、本歌取りも『新古今集』の和歌の配列に影響を与えた可能性がとても高いことを明らかにした。ただし『新古今集』で本歌取りを使う和歌の数は相当多いが（全体の四分の一ぐらい）、歌枕と体言止めに関するデータと対照すると、和歌配列に対する本歌取りの役割は歌枕や体言止めほど有力な役割ではない。それは、本歌取りを使う和歌は数多いものの、同じ本歌を採る和歌の組み合わせはそれほど夥しいものではないからである。しかしながら、その和歌の組み合わせは多くなくても、撰者たちが『新古今集』の和歌の配列を決めるとき、よく本歌取りの存在にも注目したことを明らかにした。

繰り返し述べていると、本学位論文で試みたことは、『新古今集』の和歌配列に対して、普段研究者たちから考察されない要素である歌枕・体言止め・本歌取りも、かなり重要な要素であることを解明したことである。

このように『新古今集』は非常に洗練された作品であり、今でも読者を驚かせる勅撰集だと言っても過言ではないであろう。

いそのかみ	0171	春
いそのかみ	0698	冬
いそのかみ	0993	恋
いそのかみ	1028	恋
いそのかみ	1682	雑
いちしのうら	1610	雑
いつはた	0858	離
いなば	0968	羈
いはしろ	0947	羈
いはしろ	1910	神
いはせ・やま (のもり)	1088	恋
いはたのをの	1587	雑
いはで	1785	雑
いぶき	1012	恋
いぶき	1131	恋
いるさのやま	0156	春
いるさのやま	0211	夏
いるの	0346	秋
うち	0169	春
うち	0251	夏
うち	0420	秋
うち	0494	秋
うち	0611	冬
うち	0636	冬
うち	0637	冬
うち	0742	賀
うち	0743	賀
うち	1646	雑
うち	1648	雑
うつのやま	0904	羈
うつのやま	0981	羈
うつのやま	0982	羈
うつのやま	0983	羈
うどはま	1051	恋
うりんいん	1930	釈

えぞ	1785	雑
おいそのもり	0207	夏
おきつのはま	0934	羈
おくうみ (みちのく)	1332	恋
おとなしがは	1660	雑
おとはがは	1055	恋
おとはがは	1726	雑
おとはやま (近江)	0371	秋
おとはやま (山城)	0668	冬
おふ	0231	夏
おふのうら	0281	夏
おふのうら	1472	雑
おほあらき	0375	秋
おほいがは	0253	夏
おほいがは	0555	冬
おほいがは	0556	冬
おほみがは	1194	恋
おほえやま	0503	秋
おほえやま	0752	賀
おほがはのべ	0070	春
おほはら	0690	冬
おほはら	1626	雑
おほはら	1638	雑
おほはら	1639	雑
おほよど	1432	恋
おほよど	1604	雑
おほよど	1723	雑
かへるやま	0858	離
かへるやま	1130	恋
かがみのやま	0751	賀
かぐやま	0002	春
かぐやま	0175	夏
かぐやま	0266	夏
かぐやま	0677	冬
かしはぎのもり	1046	恋

かしひのみや	1886	神
かすが	0010	春
かすが	0012	春
かすが	0013	春
かすが	0022	春
かすが	0078	春
かすが	0746	賀
かすが	0994	恋
かすが	1793	雑
かすが	1895	神
かすが	1898	神
かたをか (山城)	0191	夏
かたをか (大和)	0019	春
かたの	0114	春
かたの	0539	秋
かたの	0685	冬
かたの	0686	冬
かたの	0688	冬
かたの	1110	恋
かつらがは	0254	夏
かつらぎ	0074	春
かつらぎ	0087	春
かつらぎ	0541	秋
かつらぎ	0542	秋
かつらぎ	0561	冬
かつらぎ	0990	恋
かつらぎ	1405	恋
かみぢやま	1875	神
かみぢやま	1878	神
かみやま	0183	夏
かみやま	1484	雑
かめゐのみず	1927	積
かも	1255	恋
からさき	0656	冬
からさき	1468	雑

からさき	1505	雑
かるかやのせき	1696	雑
かなびがは	0161 イ	春
かなびやま	0194	夏
かなびやま	0285	秋
きさがた	0972	羈
きのくに	0647	冬
きのくに	1075	恋
きびのなかやま	0747	賀
きぶねがは	1141	恋
きよたきがは	0027	春
きよたきがは	0160	春
きよたきがは	0634	冬
きよみがた	0259	夏
きよみがた	0969	羈
きよみがた	1333	恋
くまの	1048	恋
くまの	1907	神
くまのがは	1908	神
くめぢのはし	1061	恋
くめぢのはし	1405	恋
くらゐやま	1814	雑
けしきのもり	0270	夏
こがらしのもり	1320	恋
こし	0914	羈
こし	1912	神
ころもがは	0865	離
さかた	0753	賀
さが	0785	哀
さが	0786	哀
さが	0787	哀
さが	1644	雑
さの	0671	冬
さほ	0529	秋
さほ	0574	冬

さほ	0642	冬
さほ	1645	雑
さほ	1896	神
さやのなかやま	0907	羈
さやのなかやま	0940	羈
さやのなかやま	0954	羈
さやのなかやま	0962	羈
さやのなかやま	0987	羈
さらしな (おぼすて)	1257	恋
さらしな (おぼすて)	1259	恋
しか	1590	雑
しが	0016	春
しが	0174	春
しが	0639	冬
しが	0656	冬
しが	1468	雑
しが	1505	雑
しきつ	0916	羈
しなの	0903	羈
しのだのもり	0213	夏
しのだのもり	0307	秋
しのだのもり	1820	雑
しのはら	0976	羈
しのぶ	0385	秋
しのぶ	0562	冬
しのぶ	0971	羈
しのぶ	1093	恋
しのぶ	1094	恋
しのぶ	1095	恋
しのぶ	1096	恋
しのぶ	1785	雑
しのぶ	1820	雑
しほがま	0820	哀
しほがま	1378	恋
しほがま	1609	雑

しほがま	1715	雑
しほがまのうら	0390	秋
しほがまのうら	0674	冬
しめぢがはら	1917	積
しらかは	1455	雑
しらやま	0666	冬
しらやま	1912	神
すがはら	0295	秋
すがはら	0476	秋
すずか	0526	秋
すずか	1611	雑
すま	1041	恋
すま	1065	恋
すま	1083	恋
すま	1117	恋
すま	1210	恋
すま	1433	恋
すま	1555	雑
すま	1596	雑
すま	1597	雑
すま	1598	雑
すみのえ	0714	賀
すみのえ	0725	賀
すみのえ	1791	雑
すみのえ	1856	神
すみよし	0396	秋
すみよし	0739	賀
すみよし	1419	恋
すみよし	1605	雑
すみよし	1606	雑
すみよし	1792	雑
すみよし	1913	神
するが	0904	羈
すゑのまつやま	0037	春
すゑのまつやま	0705	冬

すゑのまつやま	0970	羈
すゑのまつやま	1284	恋
すゑのまつやま	1473	雑
せたのながはし	1654	雑
そでのうら	0807	哀
そでのうら	1495	雑
そのはら	0913	羈
そのはら	0997	恋
たかさご	0290	秋
たかさご	0740	賀
たかのおやま	0750	賀
たかまど	0331	秋
たかまど	0373	秋
たかまど	0383	秋
たかまどのをのへ	1313	恋
たかまやま	0087	春
たかまやま	0990	恋
たけくま	0878	離
たけくま	1474	雑
たこのうら	1480	雑
たごのうら	0675	冬
たごのうら	1608	雑
ただす	1220	恋
ただす	1891	神
たつた	0085	春
たつた	0087	春
たつた	0090	春
たつた	0091	春
たつた	0302	秋
たつた	0412	秋
たつた	0451	秋
たつた	0527	秋
たつた	0530	秋
たつた	0566	冬
たつた	0984	羈

たつた	1133	恋
たつた	1686	雑
たまえ	0932	羈
つきよみのもり	1879	神
つくし	0342	秋
つくし	0901	羈
つくし	1695	雑
つくし	1960	釈
つくばやま	1013	恋
つくばやま	1014	恋
つのくに	0289	秋
つのくに	0625	冬
つのくに	1848	雑
つぼのいしぶみ	1785	雑
とをち	0266	夏
とをち	0485	秋
ときは	0370	秋
ときは	0577	冬
ときは	1615	雑
とこのやま	0514	秋
とこのやま	0967	羈
としま	0651	冬
とふのうら	0930	羈
とぶひの	0013	春
ながた	0754	賀
ながらのはし	1592	雑
ながらのはし	1593	雑
ながらのはし	1594	雑
ながらやま	1202	恋
ながらやま	1468	雑
なぐさのはま	1078	恋
なごのうみ	0035	春
なだ	1588	雑
なだ	1603	雑
なつみのかは	0654	冬

なとりがは	0553	冬
なとりがは	1118	恋
なとりがは	1119	恋
なには	0026	春
なには	0057	春
なには	0400	秋
なには	0547	秋
なには	0625	冬
なには	0626	冬
なには	0823	哀
なには	0973	羈
なには	1049	恋
なには	1063	恋
なには	1077	恋
なには	1553	雑
なには	1591	雑
なには	1595	雑
ならのおがは	1375	恋
なるたき	1860	神
なるみ	0648	冬
なるみ	0649	冬
なるみ	0650	冬
なるみ	1085	恋
なるみ	1946	積
にほのうみ	0389	秋
ぬのびきのたき	1650	雑
ぬのびきのたき	1651	雑
のじまがみね	0402	秋
のだのたまがは	0643	冬
のなかのしみづ	1406	恋
はつかやま	1569	雑
はつせがは	0261	夏
はつせがは	0703	冬
はつせやま	0157	春
はつせやま	0966	羈

はつせやま	1142	恋
ははそのもり	0531	秋
ははそのもり	0532	秋
ひばら	0020	春
ひよし	1903	神
ひら	0128	春
ひら	0656	冬
ひら	1700	雑
ふかくさ	0293	秋
ふかくさ	0374	秋
ふかくさ	0512	秋
ふかくさ	1337	恋
ふきあげのはま	0646	冬
ふきあげのはま	0647	冬
ふきあげのはま	1607	雑
ふけいひのうら	1721	雑
ふしみ(山城)	0291	秋
ふしみ(山城)	0427	秋
ふしみ(山城)	0673	冬
ふしみ(山城)	1165	恋
ふしみ(大和)	0292	秋
ふしみ(大和)	0476	秋
ふじ	0033	春
ふじ	0675	冬
ふじ	0975	羈
ふじ	1008	恋
ふじ	1009	恋
ふじ	1132	恋
ふじ	1612	雑
ふじ	1613	雑
ふじ	1614	雑
ふたみのうら	1167	恋
ふぢえのうら	1552	雑
ふはのせきや	1599	雑
ふる	0096	春

ふる	0171	春
ふる	0261	夏
ふる	0581	冬
ふる	0660	冬
ふる	0698	冬
ふる	0993	恋
ふる	1028	恋
ふる	1682	雑
ふる	1795	雑
まきむく	0020	春
まちかねやま	0205	夏
まつい	0756	賀
まつしま	0401	秋
まつしま	0933	羈
まつちのやま	0336	秋
まつちのやま	1197	恋
まつちのやま	1516	雑
まつのおやま	0726	賀
まつら	0883	離
まのの	0332	秋
みかさのやま	1011	恋
みかさのやま	1897	神
みかのほら	0996	恋
みしまえ	0025	春
みしまえ	0228	夏
みずぐきのおか	0296	秋
みずぐきのおか	0296	秋
みずのえ	1602	雑
みずのえ	1705	雑
みたらしがは	1862	神
みたらしがは	1888	神
みたらしがは	1889	神
みちのく	0643	冬
みちのく	0861	離
みちのく	1785	雑

みつ (近江)	0744	賀
みつ (近江)	1904	神
みつ (摂津)	0898	羈
みなせがは	0036	春
みののおやま	1407	恋
みむろやま	0285	秋
みむろやま	0525	秋
みもすそがは	1871	神
みもすそがは	1881	神
みやがは	1872	神
みやぎ	0300	秋
みやぎ	1346	恋
みやぎ	1564	雑
みやぎ	1819	雑
みよしの	0121	春
みわ	0890	離
みわ	0966	羈
みわ	1062	恋
みわ	1327	恋
みわ	1642	雑
むさしの	0378	秋
むさしの	0422	秋
むつたのよど	0072	春
むらさきの	1930	釈
むろのやしま	0034	春
むろのやしま	1010	恋
もるやま	0537	秋
もるやま	0749	賀
やたのの	0657	冬
やましろ	0577	冬
やましろ	1089	恋
やましろ	1218	恋
やましろ	1367	恋
やましろ	1587	雑
やまだのはら	0217	夏

やまだのはら	0526	秋
やまだのはら	1884	神
やまのい	0258	夏
ゆふはやま	1316	恋
ゆら (紀伊)	1075	恋
ゆら (丹後)	1071	恋
ゆら (丹後)	1073	恋
よがは	1716	雑
よしの	0001	春
よしの	0070	春
よしの	0079	春
よしの	0086	春
よしの	0092	春
よしの	0097	春
よしの	0100	春
よしの	0132	春
よしの	0133	春
よしの	0147	春
よしの	0158	春
よしの	0387	秋
よしの	0483	秋
よしの	0588	冬
よしの	0654	冬
よしの	0991	恋
よしの	1465	雑
よしの	1475	雑
よしの	1602	雑
よしの	1616	雑
よしの	1617	雑
よしの	1618	雑
よど	0229	夏

よど	0688	冬
よど	0876	離
よど	1218	恋
わかのうち	0741	賀
わかのうち	1504	雑
わかのうち	1554	雑
わかのうち	1601	雑
わかのうち	1759	雑
わかのみつばら	0897	羈
わたらひ	0730	賀
みで	0159	春
みで	0162	イ 春
みで	1089	恋
みで	1367	恋
みな	0910	羈
をぐら (山城)	0347	秋
をぐら (山城)	0405	秋
をぐら (山城)	0496	秋
をぐら (山城)	0603	冬
をぐら (大和)	1643	雑
をぐら (大和)	0091	春
をしほ	0727	賀
をしほ	1627	雑
をしほ	1899	神
をしほ	1900	神
をじま	0399	秋
をじま	0403	秋
をじま	0704	冬
をじま	0933	羈
をじま	0948	羈

資料 ② 歌枕を使う和歌一覽

卷第一 春歌上

- 一 一〇 二〇 二一 二二 二五 二六 二七 三三 三四 三五 三六 三七 七〇 七四 七五 七六 八七
- み吉野は山もかすみて白雪のふりにし里に春はきにけり
 ほのぼのと春こそ空に來にけらし天の香具山霞たなびく
 春といへば霞みにけりなきのふまで波間にみえし淡路島山
 春日野の下もえわたる草の上につれなくみゆる春のあは雪
 春日野の草はみどりになりけり若菜つまむとたれかしめけむ
 若菜つむ袖とぞみゆる春日野の飛火の野への雪のむらぎえ
 さざなみや志賀の浜松ふりにけりたが世にひける子の日なるらむ
 うぐひすの鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉しろき逢坂の山
 春きては花ともみよと片岡の松のうは葉にあは雪ぞ降る
 卷向の檜原もいまだくもらねば小松が原にあは雪ぞ降る
 いづれをか花とはわかむふるさとの春日の原にまだ消えぬ雪
 三島江や霜もまだひぬ蘆の葉につのぐむほどの春風ぞ吹く
 夕月夜しほ満ち來らし難波江の蘆の若葉をこゆる白波
 降りつみし高嶺のみ雪とけにけり清滝川のみづの白波
 あまの原富士のけぶりの春の色霞になびくあけぼのの空
 あさ霞深くみゆるやけぶり立つ室の八島のわたりなるらむ
 なごの海の霞のまよりながむれば入る日を洗ふ沖つ白波
 見わたせば山もと霞む水無瀬川ゆふべは秋となに思ひけむ
 かすみたつ末の松山ほのぼのと波にはなるる横雲の空
 難波湯霞まぬ波もかすみけりうつるも曇るおぼる月夜に
 み吉野の大川野べの古柳かげこそ見えね春めきにけり
 白雲の絶えまになびくあをやぎの葛城山に春風ぞ吹く
 焼かずとも草はもえなむ春日野をただ春の日にまかせたらなむ
 吉野山桜が枝に雪降りて花おそげなる年にもあるかな
 ゆかむ人來む人しのべ春がすみ立田の山の初さくらばな
 吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねむ
 葛城や高間の桜咲きにけり立田のおくにかかる白雲

- 撰政太政大臣
 太上天皇
 俊惠法師
 權中納言国信
 壬生忠見
 前参議教長
 皇太后宮大夫俊成
 太上天皇
 藤原仲実朝臣
 中納言家持
 凡河内躬恒
 左衛門督通光
 藤原秀能
 西行法師
 前大僧正慈円
 清輔朝臣
 後徳大寺左大臣
 太上天皇
 藤原家隆朝臣
 源具親
 輔仁親王
 藤原雅経朝臣
 壬生忠見
 西行法師
 中納言家持
 西行法師
 寂蓮法師

九〇 白雲の立田の山の八重桜いづれを花とわきて折りけむ
九一 白雲の春はかさねて立田山をぐらの峯に花にほふらし
九二 吉野山花やさかりににほふらむふるさとさらぬ峯の白雲
九六 いそのかみ布留野のさくらたれ植ゑて春は忘れぬ形見なるらむ
九七 花ぞみる道の芝草ふみわけて吉野の宮の春のあけぼの

道命法師
藤原定家朝臣
藤原家衡朝臣
右衛門督通具
正三位季能

卷第二 春歌下

一〇〇 いくとせの春に心をつくしきぬあはれと思へみよし野の花
一一四 またや見む交野のみ野のさくらがり花の雪散る春のあけぼの
一二一 時しもあれたのむの雁の別れさへ花散るころのみよしの里
一二八 花さそふ比良の山風吹きにけりこぎゆく舟の跡みゆるまで
一二九 逢坂やこずゑの花を吹くからにあらしぞ霞む関の杉むら
一三二 散りまがふ花のよそめは吉野山あらしにさわぐ峯の白雲
一三三 みよしのの高嶺のさくら散りにけりあらしも白き春のあけぼの
一三七 吉野山花のふるさと跡たえてむなしき枝に春風ぞ吹く
一五七 春ふかく尋ねいるさの山の端にほのみし雲の色ぞのこれる
一五七 初瀬山うつろう花に春暮れてまがひし雲ぞ峯にのこれる
一五八 吉野川岸のやまぶき咲きにけり峯のさくらは散りはてぬらむ
一五九 駒とめてなほ水かはむやまぶきの花の露そふ井出の玉川
一六〇 岩根こす清滝川のはやければ波折りかくる岸のやまぶき
一六一 イ かはづ鳴く神南備川にかげみえて今や咲くらむやまぶきの花
一六二 あしびきのやまぶきの花散りにけり井手のかはづは今や鳴くらむ
一六九 暮れてゆく春のみなどはしらねども霞に落つる宇治の柴舟
一七一 石の上布留のわさ田をうちかし恨みかねたる春の暮れかな
一七四 あすよりは志賀の花園まれにだにたれかはとはむ春のふるさと

卷第三 夏歌

一七五 春過ぎて夏きにけらし白袴の衣ほすてふ天の香具山
一八三 いかなればその神山のあふひ草年はふれども二葉なるらむ

持統天皇御歌
小侍従

一八四 野べはいまだあさかの沼に刈る草のかつみるままに茂るころかな
 一九一 ほととぎす声待つほどは片岡のもりのしづくに立ちやぬれまし
 一九四 おのが妻恋ひつつ鳴くやさつきやみ神南備山の山ほととぎす
 二〇五 夜をかさね待ちかね山のほととぎす雲居のよそに一声ぞ聞く
 二〇六 二声と聞かずは出でじほととぎす幾夜あかしのとまりなりとも
 二〇七 ほととぎすなほ一声は思ひ出でよ老曾の杜のよはの昔を
 二一一 ほととぎす鳴きているさの山の端は月ゆゑよりも恨めしきかな
 二一三 過ぎにけり信太の杜のほととぎす絶えぬしづくを袖にのこして
 二一七 聞かずともここをせにせむほととぎす山田の原の杉のむらだち
 二二八 三島江の入江のまこも雨降ればいとどしをれて刈る人もなし
 二二九 まこも刈る淀の沢水深けれど底まで月の影は澄みけり
 二三一 さみだれはおふの川原のまこも草刈らでや波の下に朽ちなむ
 二五一 鶺鴒舟あはれとぞ見るものものふの八十字治川の夕闇の空
 二五三 大井川ががりさしゆく鶺鴒舟幾瀬に夏の夜を明かすらむ
 二五四 久方の中なる川の鶺鴒舟いかに契りてやみを待つらむ
 二五五 いさり火の昔の光ほの見えて蘆屋の里に飛ぶほたるかな
 二五八 結ぶ手に影みだれゆく山の井のあかでも月のかたぶきにける
 二五九 清見湯月はつれなき天の戸を待たでもしらむ波の上かな
 二六一 すすしきは秋やかへりて初瀬川古川のべの杉のしたかげ
 二六六 とをちには夕立すらし久方の天の香具山雲がくれ行く
 二七〇 秋近きけしきの杜に鳴く蝉の涙の露や下葉染むらむ
 二八一 片枝さすをふの浦なし初秋になりもならずも風ぞ身にしむ

卷第四 秋歌上

二八五 神南備の御室の山の葛かづら裏吹きかへす秋はきにけり
 二八九 きふだにとはむと思ひし津の国の生田の杜に秋はきにけり

藤原雅経朝臣朝臣
 紫式部
 読人しらず
 周防内侍
 按察使公通
 民部卿範光
 前太政大臣
 藤原保季朝臣
 西行法師
 大納言経信
 前中納言匡房
 入道前関白太政大臣
 前大僧正慈円
 皇太后宮大夫俊成
 藤原定家朝臣
 撰政太政大臣
 前大僧正慈円
 左衛門督通光
 藤原有家朝臣
 源俊頼朝臣
 撰政太政大臣
 宮内卿
 中納言家持
 藤原家隆朝臣

二九〇 吹く風の色こそみえね高砂の尾上の松に秋はきにけり
 二九一 伏見山松のかげより見たせば明くる田の面に秋風ぞ吹く
 二九二 明けぬるか衣手さむし菅原や伏見の里の秋のはつかぜ
 二九三 深草の露のよすがを契りにて里をばかれず秋はきにけり
 二九五 しきたへの枕のうへに過ぎぬなり露をたづぬる秋のはつかぜ
 二九六 水茎の岡の葛葉も色づきてけさうらがなし秋のはつかぜ
 三〇〇 あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風たちぬ宮城野の原
 三〇二 朝霧や立田の山の里ならで秋きにけりとたれかしらまし
 三〇七 日を経つつ音こそまされ和泉なる信太の杜の千枝の秋風
 三三一 萩が花真袖にかけて高円の尾上の宮にひれ振るやたれ
 三三二 おく露もしづ心なく秋風に乱れて咲ける真野の萩原
 三三六 たれをかも待乳の山のをみなへし秋と契れる人ぞあるらし
 三四二 花見にと人やりならぬ野べにきて心のかぎり尽くしつるかな
 三四六 さを鹿のいる野のすすき初尾花いつしか妹が手枕にせむ
 三四七 小倉山ふもとの野べの花すすきほのかにみゆる秋の夕暮
 三七〇 秋くれば常磐の山の松風もうつるばかりに身にぞしみける
 三七一 秋風の上にも吹き来る音羽山なにの草木かのどけかるべき
 三七三 高円の野路の篠原末さわぎそそやこがらしけふ吹きぬなり
 三七四 深草の里の月影さびしきも住みこしままの野べの秋風
 三七五 大荒木の杜の木の間をもちかねて人だのめなる秋の夜の月
 三七八 武蔵野や行けども秋のはてぞなきいかなる風か末に吹くらむ
 三八三 敷島や高円山の雲間よりひかりさしそふゆみはりの月
 三八五 あやなくも曇らぬ宵をいとふかな信夫の里の秋の夜の月
 三八七 こよひたれす吹く風を身にしめて吉野の嶽の月を見るらむ
 三八九 にほの海や月の光のうつろへば波の花にも秋は見えけり
 三九〇 ふけゆかばけぶりもあらじ塩釜のうらみなはてそ秋の夜の月

藤原秀能
 皇太后宮大夫俊成
 藤原家隆朝臣
 摂政太政大臣
 源具親
 顕昭法師
 西行法師
 法性寺入道前関白太政大臣
 藤原経衡
 顕昭法師
 祐子内親王家紀伊
 小野小町
 大納言経信
 柿本人麻呂
 読人しらず
 和泉式部
 曾禰好忠
 基俊
 右衛門督通具
 皇太后宮大夫俊成女
 左衛門督通光
 堀河院御歌
 橘為仲朝臣
 従三位頼政
 藤原家隆朝臣
 前大僧正慈円

三九六 月はなほもらぬ木の間も住吉の松をつくして秋風ぞ吹く
 三九九 心ある雄島の海人のたもとかな月宿れとは濡れぬものから
 四〇〇 忘れじな難波の秋のよはの空異浦にすむ月は見るとも
 四〇一 松島や瀬くむ海人の秋の袖月は物思ふならひのみかは
 四〇二 言問はむ野島が崎の海人ごろも波と月とにいかがしをるる
 四〇三 秋の夜の月やをじまのあまのはら明へ方ちかき沖の釣舟
 四〇五 いづくにかこよひの月の曇るべき小倉の山も名をやかふらむ
 四一二 龍田山よはにあらしの松吹けば雲にはうとき峯の月影
 四二〇 さむしろや待つ夜の秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫
 四二二 行く末は空もひとつの武蔵野に草の原より出づる月影
 四二七 雁の来る伏見の小田に夢覚めて寝ぬ夜の庵に月を見るかな

卷第五 秋歌下

四五一 龍田山梢まばらになるままに深くも鹿のそよくなるかな
 四七六 衣うつ音はまくらに菅原や伏見の夢をいく夜のこしつ
 四八三 み吉野の山の秋風さ夜ふけてふるさとさむく衣打つなり
 四八五 ふけにけり山の端ちかく月さえてとをちの里に衣うつ声
 四九四 ふもとをば宇治の川霧たち立ちこめて雲居に見ゆる朝日山かな
 四九六 鳴く雁の音をのみぞ聞く小倉山霧たち晴る時にしなれば
 五〇三 大江山かたぶく月の影さえて鳥羽田の面に落つる雁がね
 五一二 秋をへてあはれも露も深草の里訪ふものはうづらなりけり
 五一四 あだに散る露の枕に伏しわびてうづら鳴くなるとこの山風
 五二〇 秋ふかき淡路の島の有明にかたぶく月をおくる浦風
 五二五 神南備のみむろの梢いかならむなべての山もしぐれするころ
 五二六 鈴鹿川ふかき木の葉に日かずへて山田の原の時雨をぞ聞く
 五二七 こころとやのみぢはすらむ龍田山松はしぐれに濡れぬものかは

寂蓮法師
 宮内卿
 宜秋門院丹後
 鴨長明
 七條院大納言
 藤原家隆朝臣
 大江千里
 左衛門督通光
 藤原定家朝臣
 摂政太政大臣
 前大僧正慈円
 俊惠法師
 前大僧正慈円
 藤原雅経朝臣
 式子内親王
 権大納言公実
 清原深養父
 前大僧正慈円
 前大僧正慈円
 皇太后宮大夫俊成女
 前大僧正慈円
 八條院高倉
 太上天皇
 皇太后宮大夫俊成

五二八 思ふことなくぞ見ましもみぢ葉を嵐の山のふもとならずは
 五二九 入日さす佐保の山べのははそ原くもらぬ雨と木の葉降りつつ
 五三〇 龍田山あらしや峯によわるらむ渡らぬ水も錦絶えけり
 五三一 ははそ原しづくも色や変るらむ杜の下草秋ふけにけり
 五三二 時わかぬ波さへ色に泉川ははその杜にあらし吹くらし
 五三三 ふるさとは散るもみぢ葉に埋もれて軒のしのぶに秋風ぞ吹く
 五三七 露しぐれもる山かげのしたもみぢ濡るとも折らむ秋の形見に
 五三九 うづら鳴く交野に立てるはじもみぢ散りぬばかりに秋風ぞ吹く
 五四一 飛鳥川もみぢ葉流る葛城の山の秋風吹きぞしくらし
 五四二 飛鳥川瀬々に波寄るくれなゐや葛城山のこがらしの風
 五四七 夏草のかりそめにとて来しかども難波の浦に秋ぞ暮れぬる

藤原輔尹朝臣
 曾禰好忠
 宮内卿
 摂政太政大臣
 藤原定家朝臣
 源俊頼朝臣
 藤原家隆朝臣
 前参議親隆
 柿本人麻呂
 権中納言長方
 能因法師

巻第六

冬歌

五五三 名取川やなせの波ぞさわぐなるもみぢやいとど寄りてせくらむ
 五五五 散りかかるもみぢ流れぬ大井川いづれ井堰きの水のしがらみ
 五五六 高瀬舟しぶくばかりにもみぢ葉の流れてくだる大井川かな
 五六一 うつりゆく雲にあらしの声すなり散るか正木の葛城の山
 五六二 初しぐれしのぶの山のみぢ葉をあらし吹けとは染めずやありけむ
 五六六 から錦秋の形見やたつた山散りあへぬ枝にあらし吹くなり
 五七四 神無月しぐれ降るらし佐保山のまさきのかづら色まさりゆく
 五七七 しぐれの雨染めかねてけり山城の常盤の杜の真木の下葉は
 五八一 ふかみどり争ひかねていかならむまなくしぐれの布留の神杉
 五八五 秋篠や外山の里やしぐるらむ生駒の嶽に雲のかかれる
 五八八 み吉野の山かき曇り雪降ればふもとの里はうちしぐれつつ
 六〇三 小倉山ふもとの里に木の葉散れば梢に晴るる月を見るかな
 六一一 片敷きの袖をや霜に重ぬらむ月に夜がるる宇治の橋姫

源重之
 大納言経信
 藤原家経朝臣
 藤原雅経朝臣
 七條院大納言
 宮内卿
 読人しらず
 能因法師
 太上天皇
 西行法師
 俊恵法師
 西行法師
 法印幸清

六二五 津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯れ葉に風わたるなり
 六二六 冬深くなりけらしな難波江の青葉まじらぬ蘆のむらだち
 六三四 みなかみやたえだえ氷る岩間より清滝川にのこる白波
 六三六 橋姫の片敷き衣さむしろに待つ夜むなしき宇治のあけぼの
 六三七 網代木にいさよふ波の音ふけてひとりや寝ぬる宇治のはし姫
 六三九 志賀の浦や遠ざかりゆく波間より氷りて出づる有明の月
 六四二 行く先はさ夜ふけぬれど千鳥鳴く佐保の川原は過ぎうかりけり
 六四三 夕さればしほ風越してみちのくの野田の玉川千鳥鳴くなり
 六四六 浦風に吹上の浜のはま千鳥波立ちくらしよはに鳴くなり
 六四七 月ぞ澄むたれかはここにきの国や吹上の千鳥ひとり鳴くなり
 六四八 さ夜千鳥声こそ近くなるみ潟かたぶく月に潮や満つらむ
 六四九 風吹けばよそになるみのかた思ひ思はぬ波に鳴く千鳥かな
 六五〇 浦人の日も夕暮になるみ潟かへる袖より千鳥鳴くなり
 六五一 風さゆる富島が磯のむら千鳥立ち居は波の心なりけり
 六五四 吉野なる夏美の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして
 六五六 さざ波や志賀の唐崎風さえて比良の高嶺にあられ降るなり
 六六〇 初雪のふるの神杉埋もれてしめ結ふ野辺は冬ごもりせり
 六六六 白山に年ふる雪やつもるらむよはに片敷く袂さゆなり
 六六八 音羽山さやかに見する白雪を明けぬと告ぐる鳥の声かな
 六七一 駒とめて袖うち払ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮
 六七三 夢かよふ道さへ絶えぬくれたけの伏見の里の雪の下折れ
 六七四 降る雪にたく藻のけぶりかき絶えてさびしくもあるか塩釜の浦
 六七五 田子の浦に打ち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ
 六七七 雪降れば峯のまさかき埋もれて月にみがける天の香具山
 六八五 み狩りする交野の御野に降るあられあなままだき鳥もこそ立て
 六八六 み狩りすと鳥立ちの原をあさりつつ交野の野べにけふも暮しつ

西行法師
 大納言成通
 撰政太政大臣
 太上天皇
 前大僧正慈円
 藤原家隆朝臣
 伊勢大輔
 能因法師
 子内親王家紀伊
 撰政太政大臣
 正三位季能
 藤原秀能
 左衛門督通光
 正三位季経
 湯原王
 法性寺入道前関白太政大臣
 権中納言長方
 前大納言公任
 高倉院御歌
 藤原定家朝臣
 藤原有家朝臣
 入道前関白太政大臣
 山辺赤人
 皇太后宮大夫俊成
 崇徳院御歌
 法性寺入道前関白太政大臣

六八八 狩りくらし交野の真柴折りしきて淀の川瀬の月を見るかな
六九〇 日数ふる雪げにまさる炭竈のけぶりもさびし大原の里
六九八 石の上布留野のをざさ霜を経てひとよばかりに残る年かな
七〇三 石走る初瀬の川の波まくら早くも年の暮れにけるかな
七〇四 ゆく年ををじまの海士の濡れ衣かさねて袖に波やかくらむ
七〇五 老いの波越えける身こそあはれなれことしもいまは末の松山

巻第七 賀歌

七一四 住の江の浜の真砂を踏むたづはひさしき跡を留むるなりけり
七二五 住の江に生ひそふ松の枝ごとに君が千歳の数ぞこもれる
七二六 よろづ代を松の尾山のかげ茂み君をぞ祈るときはかきはに
七二七 相生の小塩の山の小松原いまより千代のかげを待たなむ
七三〇 君が代はひさしかるべし渡会や五十鈴の川の流絶えせで
七三九 わが道をまもらば君をまもらなむよはひはゆづれ住吉の松
七四〇 高砂の松も昔になりぬべしなほゆくすゑは秋の夜の月
七四一 藻塩草かくともつきじ君が代の数によりおく和歌の浦波
七四二 うれしさや片敷く袖に包むらむけふ待ちえたる宇治の橋姫
七四三 年へたる宇治の橋守言問はむ幾代になりぬ水のみなかみ
七四四 ななそぢにみつの浜松老いぬれど千代の残りはなほぞはるけき
七四六 春日山みやこの南しかぞおもふ北の藤波春に逢へとは
七四七 ときはなる吉備の中山おしなべて千歳を松の深き色かな
七四八 あかねさす朝日の里の日影草豊のあかりのかざしなるべし
七四九 すべらぎをときはかきはに守る山の山人ならし山かづらせり
七五〇 とやかへる鷹尾山のたまつばき霜をば経とも色はかはらじ
七五一 曇なき鏡の山の月を見て明らけき代を空に知るかな
七五二 大江山こえて生野の末速み道ある代にもあひにけるかな

左近中将公衡
式子内親王
摂政太政大臣
後徳大寺左大臣
藤原有家朝臣
寂蓮法師

伊勢

前大納言隆国
康資王母
大式三位
前中納言匡房
藤原定家朝臣
寂蓮法師
源家長
前大納言隆房
清輔朝臣
清輔朝臣
撰政太政大臣
読人しらず
祭主輔親
式部大輔資業
前中納言匡房
宮内卿永範
刑部卿範兼

七五三 近江のや坂田の稲を掛け積みて道ある御世のはじめにぞ春く
七五五 立ち寄ればすずしかりけり水鳥の青羽の山の松のゆふ風
七五六 ときはなる松井の水を結ぶ手のしづくごとにぞ千代は見えける

皇太后宮大夫俊成
式部大輔光範
權中納言資実

卷第八 哀傷歌

七八五 さらでだに露けき嵯峨の野べに来て昔の跡にしをれぬるかな
七八六 かなしきは秋の嵯峨野のきりぎりすなほふるさとに音をや鳴くらむ
七八七 今はさは憂き世の嵯峨の野べをこそ露消えはてし跡としのぼめ
七九五 憂き世には今はあらしの山風にこれや馴れ行くはじめなるらむ
八〇七 いにしへのなきに流るる水茎は跡こそ袖のうらに寄りけれ
八二〇 見し人のけぶりになりしゆふべより名ぞむつまじき塩釜の浦
八二三 あはれ人今日のいのちを知らませば難波の葦に契らざらまし
八二七 有栖川おなじ流れはかはらねど見しや昔の影ぞ忘れぬ

權中納言俊忠
後徳大寺左大臣
皇太后宮大夫俊成女
女御徽子女王
紫式部
能因法師
中院右大臣

卷第九

離別歌

八五八 忘れなむ世にも越路の帰山いつはた人に逢はむとすらむ
八六一 見てだにも飽かぬ心を玉ぼこのみちのおくまで人のゆくらむ
八六二 逢坂の関にわが宿なかりせば別る人は頼まざらまし
八六五 衣川みなれし人のわかれにはたもとまでこそ波は立ちけれ
八六六 行く末に阿武隈川のなかりせばいかにかせましけふの別れを
八六七 君にまた阿武隈川を待つべきに残りすくなきわれぞかなしき
八六八 すすしきは生の松原まさるとも添ふる扇の風な忘れそ
八七六 都をば秋とともにぞ立ちそめし淀の川霧幾夜へだてつ
八七八 帰りこむほと思ふにも武隈のまつわが身こそいたく老いぬれ
八八三 たれとも知らぬ別れのかなしきは松浦の沖を出づる舟人
八九〇 別れにし人はまたもや三輪の山すぎにし方を今になさばや

伊勢
紀貫之
中納言兼輔
源重之
高階経重朝臣
藤原範永朝臣
枇杷皇太后宮
前中納言匡房
基俊
藤原隆信朝臣
祝部成仲

卷第十

羈旅歌

八九六 飛ぶ鳥の明日香の里をおきていなば君があたりは見えずかもあらむ
 八九七 妹に恋ひ和歌の松原見わたせば潮干の潟にたづ鳴きわたる
 八九八 いざ子どもはや日の本へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ
 八九九 天さかるひなの長路を漕ぎくれば明石の門より大和島見ゆ
 九〇一 ここにありて筑紫やいづこ白雲のたなびく山の西にあるらし
 九〇三 信濃なる浅間の嶽に立つ煙をちこち人の見やはとがめぬ
 九〇四 駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり
 九〇七 あづまぢの佐夜の中山さやかにも見えぬ雲居に世をや尽くさむ
 九一〇 しなが鳥猪名野をゆけば有馬山夕霧立ちぬ宿はなくして
 九一一 神風や伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜べに
 九一三 立ちながらこよひは明けぬ園原や伏屋といふもかひなかりけり
 九一四 都にて越路の空をながめつつ雲居といひしほどに来にけり
 九一六 船ながらこよひばかりは旅寝せむ敷津の波に夢は覚むとも
 九三〇 見し人もとふの浦風音せぬにつれなく澄める秋の夜の月
 九三二 夏刈の蘆のかり寝もあはれなり玉江の月の明け方の空
 九三三 立ち帰りまたも来て見む松島や雄島のとま屋波に荒すな
 九三四 言問へよ思ひおきつの浜千鳥なくなく出でし跡の月影
 九四〇 ふるさとのけふの面影さそひ来と月にぞ契る佐夜の中山
 九四三 幾夜かは月をあはれとながめ来て波に折り敷く伊勢の浜荻
 九四四 知らざりし八十瀬の波を分け過ぎてかた敷く袖は伊勢の浜荻
 九四五 風さむみ伊勢の浜荻分けゆけば衣かりがね波に鳴くなり
 九四七 行くすゑはいま幾夜とか岩代の岡のかや根にまくら結ばむ
 九四八 松が根の雄島が磯のさ夜まくらいたくな濡れそ海人の袖かは
 九五四 ふるさとに聞きしあらしの声も似ず忘れぬ人を佐夜の中山
 九五八 いたづらに立つや浅間の夕けぶり里問ひかぬるをちこちの山

元明天皇御歌
 聖武天皇御歌
 山上憶良
 柿本人麻呂
 大納言旅人
 在原業平朝臣
 在原業平朝臣
 壬生忠岑
 読人しらず
 読人しらず
 藤原輔尹朝臣
 御形宣旨
 藤原実方朝臣
 橘為仲朝臣
 皇太后宮大夫俊成
 皇太后宮大夫俊成
 藤原定家朝臣
 藤原雅経朝臣
 越前
 宜秋門院丹後
 前中納言匡房
 式子内親王
 式子内親王
 藤原家隆朝臣
 藤原雅経朝臣

九六二 岩が根の床にあらしをかた敷きてひとりや寝なむ小夜の中山
 九六六 初瀬山夕越えくれて宿問へば三輪の檜原に秋風ぞ吹く
 九六七 さらぬだに秋の旅寝はかなしきに松に吹くなりこの山風
 九六八 忘れなむ待つとな告げそなかなかいなばの山の峯の秋風
 九六九 契らねどひと夜は過ぎぬ清見瀉波に別るるあかつきの雲
 九七〇 ふるさとにたのめし人も末の松待つらむ袖に波や越すらむ
 九七一 日を経つつ都しのぶの浦さびて波よりほかの音づれもなし
 九七二 さすらふるわが身にしあれば象潟やあまのとま屋にあまたたび寝ぬ
 九七三 難波人蘆火たく屋に宿かりてすずろに袖のしほたるるかな
 九七五 道すがら富士の煙もわかざりき晴るるまもなき空のけしきに
 九七六 世の中はうきふししげし篠原や旅にしあれば妹夢に見ゆ
 九八一 旅寝する夢路はゆるせ宇津の山関とは聞かず守る人もなし
 九八二 都にもいまやころもを宇津の山夕霜はらふ薦のした道
 九八三 袖にしも月かかれとは契りおかず涙は知るや宇津の山越え
 九八四 立田山秋行く人の袖を見よ木々のこずゑはしぐれざりけり
 九八六 ふるさとへ帰らむことは飛鳥川渡らぬさきに淵瀬たがふな
 九八七 年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり佐夜の中山

藤原有家朝臣
 禅性法師
 藤原秀能
 藤原定家朝臣
 藤原家隆朝臣
 藤原家隆朝臣
 入道前関白太政大臣
 藤原顕仲朝臣
 皇太后宮大夫俊成
 前大將頼朝
 皇太后宮大夫俊成
 藤原家隆朝臣
 藤原定家朝臣
 鴨長明
 前大僧正慈円
 素覚法師
 西行法師

卷第十一 恋歌一

九九〇 よそにのみ見てややみなむ葛城や高間の山のみねのしら雲
 九九一 音にのみありと聞きこしみ吉野の滝はけふこそ袖におちけれ
 九九三 いそのかみ布留のわさ田のほには出でず心のうちに恋ひやわたらむ
 九九四 春日野のわかむらさきのすり衣しのぶの乱れかぎり知られず
 九九六 みかの原わきて流るる泉川いつみきとてか恋しかるらむ
 九九七 園原やふせ屋におふる帚木のありとは見えてあはぬ君かな
 一〇〇五 あらたまの年にまかせて見るよりはわれこそ越えめ逢坂の関
 一〇〇八 しるしなき煙を雲にまがへつつ世をへて富士の燃えなむ

読人しらず
 読人しらず
 柿本人麻呂
 在原業平朝臣
 中納言兼輔
 坂上是則
 謙徳公
 紀貫之

一〇〇九 煙たつ思ひならねど人しられずわびては富士のねをのみぞ泣く
 一〇一〇 風吹けば室の八島のゆふ煙こころの空にたちけるかな
 一〇一一 白雲の峯にしもなどかよふらむおなじ三笠の山のふもとを
 一〇一二 けふも又かくや伊吹のさしも草さらばわれのみ燃えやわたらむ
 一〇一三 筑波山は山しげ山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり
 一〇一四 われならむ人にこころを筑波山したに通はむ道だにやなき
 一〇二八 いそのかみ布留の神杉ふりぬれど色には出でず露もしぐれも
 一〇四一 須磨の海人の波かけ衣よそにのみ聞くはわが身になりけるかな
 一〇四六 ほととぎすしのぶるものを柏木のもりても声の聞えけるかな
 一〇四八 み熊野の浦よりをちにご舟のわれをばよそにへだてつるかな
 一〇四九 難波渦みじかき蘆のふしのももあはでこの世をすぐしてよとや
 一〇五一 有度浜のうとくのみやは世をばへむ波のよるよる逢ひ見てしがな
 一〇五五 ありとのみ音に聞きつつ音羽川渡らば袖に影も見えなむ
 一〇六一 いかにせむ久米路の橋の中空に渡しもはてぬ身とやなりなむ
 一〇六二 たれぞこの三輪の檜原も知らなくに心の杉のわれを尋ねる
 一〇六三 わが恋はいはぬばかりぞ難波なる蘆のしの屋の下にこそ焚け
 一〇六五 須磨の浦に海人のこりつむ藻塩木のからくも下に燃えわたるかな
 一〇七一 由良の門を渡る舟人梶を絶えゆくへも知らぬ恋のみちかな
 一〇七三 梶を絶え由良の湊にゆく舟のたよりも知らぬ沖つ潮風
 一〇七五 紀の国や由良の湊にひろふてふたまさかにだにも逢ひ見てしがな
 一〇七七 難波人いかなるえにか朽ちはてむあふことなみに身をつくしつ
 一〇七八 海人の刈るみるめを波にまがへつつ名草の浜を尋ねわびぬる

卷第十二 恋歌二

一〇八三 恋をのみ須磨の浦人藻塩たれほしあへぬ袖のはてを知らばや
 一〇八五 君恋ふと鳴海の浦の浜ひさぎしをれてのみも年をふるかな
 一〇八八 かくとだに思ふこころを岩瀬山下ゆく水の草がくれつつ
 一〇八九 もらさばや思ふ心をさてのみはえぞ山城の井手のしがらみ
 一〇九三 人しられずくるしきものは信夫山下はふ葛の恨みなりけり
 一〇九四 消えねただ信夫の山の峯の雲かかる心の跡もなきまで

清原深養父
 藤原惟成
 藤原義孝
 和泉式部
 源重之
 大中臣能宣朝臣
 撰政太政大臣
 藤原道信朝臣
 馬内侍
 伊勢
 伊勢
 読人しらず
 読人しらず
 藤原実方朝臣
 藤原実方朝臣
 小弁
 藤原清正
 曾禰好忠
 撰政太政大臣
 権中納言長方
 撰政太政大臣
 皇太后宮大夫俊成

撰政太政大臣
 源俊頼朝臣
 後徳大寺左大臣
 殷富門院大輔
 清輔朝臣
 藤原雅経朝臣

一〇九五 かぎりあれば信夫の山のふもとにも落葉が上の露ぞ色づく
一〇九六 うちはへてくるしきものは人目のみしのぶの浦の海人の袴繩
一一一〇 あふことは交野の里の笹の庵しのに露散る夜はの床かな
一一一七 須磨の海人の袖に吹きこす潮風のなるとはすれど手にもたまらず
一一一八 ありとも逢はぬためしの名取川朽ちだにはてね瀬々の埋木
一一一九 歎かずよいまはたおなじ名取川瀬々の埋れ木朽ちはてぬとも
一一三〇 たのめてもはるけかるべき還山いくへの雲の下に待つらむ
一一三一 あふ事はいつと伊吹の峯に生ふるさしも絶えせぬ思なりけり
一一三二 富士のみねの煙もなほぞ立ち昇る上なきものは思ひなりけり
一一三三 なき名のみ立田の山に立つ雲のゆくへもしらぬながめをぞする
一一四一 いく夜われ波にしをれて貴船川袖に玉ちるもの思ふらむ
一一四二 年もへぬ祈るちぎりは初瀬山尾上の鐘のよその夕暮

左衛門督通光
二條院讚岐
皇太后宮大夫俊成
藤原定家朝臣
寂蓮法師
撰政太政大臣
賀茂重政
中宮大夫家房
藤原家隆朝臣
権中納言俊忠
撰政太政大臣
藤原定家朝臣

卷第十三 恋歌三

一一六三 けさよりはいとど思ひをたきまして嘆きこりつむ逢坂の山
一一六五 かりそめに伏見の野べの草枕露かかりきと人にかたるな
一一六七 あげがたき二見の浦による波の袖のみ濡れて沖つ島人
一一九四 大井川井堰きの水のわくらばにけふはたのめし暮にやはあらぬ
一一九七 たのめずは人を待乳の山なりと寝なましものをいさよひの月
一二〇二 たのめおく人も長柄の山にだにさ夜更けぬればまつ風の声
一二一〇 なれゆくはうき世なればや須磨の海人の塩焼き衣まどほなるらむ
一二一八 山城の淀の若ごも刈りにきて袖濡れぬとはかこたざらなむ
一二二〇 いつはりを糺の杜のゆふだすきかけつつちかへわれを思はば

高倉院御歌
読人しらず
藤原実方朝臣
清原元輔
太上天皇
鴨長明
女御徽子女王
源重之
平定文

卷第十四 恋歌四

一二五五 枯れにけるあふひのみこそかなしけれあはれと見ずや賀茂の瑞垣
一二五七 更級やおぼすて山の有明のつきぎも物を思ふころかな
一二五九 更級の山よりほかに照る月もなぐさめかねつこの頃の空
一二八四 松山とちぎりし人はつれなくて袖越す波にのこる月影
一三三三 里は荒れぬ尾上の宮のおのづから待ちこしよひもむかしなりけり

読人しらず
伊勢
凡河内躬恒
藤原定家朝臣
太上天皇

一三一六 さてもなほ問はれぬ秋のゆふは山雲吹く風も峯に見ゆらむ
一三二〇 消えわびぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしの杜の下露
一三二七 心こそゆくへも知らね三輪の山杉のこずゑの夕暮の空
一三三一 つくづくと思ひあかしのうら千鳥波の枕になくなくぞ聞く
一三三二 尋ね見るつらき心の奥の海よしほひの渦のいふかひもなし
一三三三 見し人の面影とめよ清見瀉袖にせきもる波の通ひ露

藤原家隆朝臣
藤原定家朝臣
前大僧正慈円
権中納言公経
藤原定家朝臣
藤原雅経朝臣

卷第十五 恋歌五

一三四六 うちはへていやはねらるる宮城野の小萩が下葉色に出でしより
一三五一イ 思ひやるよその村雲しぐれつつ安達の原にもみぢしぬらむ
一三六七 山城の井手の玉水手にくみてたのみしかひもなき世なりけり
一三六八 君があたり見つつををらむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも
一三七五 みそぎするならの小川の川風に祈りぞわたる下に絶えじと
一三七八 塩釜のまへに浮きたる浮島のうきて思ひのある世なりけり
一四〇五 葛城や久米路にわたす岩橋の絶えにし中となりやはてなむ
一四〇六 今はとも思ひな絶えそ野中なる水の流ればゆきてたずねむ
一四〇七 思ひ出づや美濃のを山のひとつ松ちぎりしことはいつも忘れず
一四一九 住吉の恋忘草種絶えてなき世に逢へるわれぞかなしき
一四三二 大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる波かな
一四三三 白波は立ちさわぐともこりずまの浦のみるめは刈らむとぞ思ふ

読人しらず
源重之
読人しらず
読人しらず
八代女王
山口女王
大中臣能宣朝臣
祭主輔親
伊勢
藤原元真
読人しらず
読人しらず
読人しらず

卷第十六 雑歌上

一四五五 なれなれて見しはなごりの春ぞともなど白川の花の下蔭
一四六五 今はわれ吉野の山の花をこそ宿のものとも見るべかりけれ
一四六八 見せばやな志賀の唐崎ふもとなる長柄の山の春のけしきを
一四七二 さくらあさのをふの浦波立ちかへり見れどもあかず山なしの花
一四七三 白波のこゆらむ末の松山は花とや見ゆる春の夜の月
一四七四 おぼつかな霞たつらむ武隈の松のまもる春の夜の月
一四七五 世をいとふ吉野のおくによぶこ鳥深き心のほどや知るらむ
一四八〇 おのが波におなじ末葉ぞしをれぬる藤咲く多祐のうらめしの身や

藤原雅経朝臣
皇太后宮大夫俊成
前大僧正慈円
源俊頼朝臣
加賀左衛門
加賀左衛門
法印幸清
前大僧正慈円

一四八四 ほととぎすそのかみ山の旅枕ほのかたらひし空ぞ忘れぬ
 一四九五 袖の浦波吹きかへす秋風に雲の上までずしからなむ
 一五〇三 思ひ出づる人もあらしの山の端にひとりぞ入りし有明の月
 一五〇四 和歌の浦に家の風こそなけれども波吹く色は月に見えけり
 一五〇五 夜もすがら浦こぐ船はあともなし月ぞ残れる志賀の唐崎
 一五一二 都にも人や待つらむ石山の峯にのこれる秋の夜の月
 一五一三 淡路にてあはとはるかに見し月の近きこよひはとらも
 一五一六 たのめこし人をまつちの山の端にさ夜更けしかば月も入りにき
 一五五二 かもめゐる藤江の浦の沖つ洲に夜舟いさよふ月のさやけさ
 一五五三 難波潟潮干にあさる蘆たづも月かたづけば声の恨むる
 一五五四 和歌の浦に月の出で潮のさすままに夜鳴く鶴の声ぞかなしき
 一五五五 藻潮くむ袖の月影おのづからよそに明かさぬ須磨の浦人
 一五五六 明石潟色なき人の袖を見よすずろに月もやどるものかは
 一五六四 白露はおきにけらしな宮城野のもとあらの小萩末たわむまで
 一五六九 秋はつるはつかの山のさびしきに有明の月をたれと見るらむ
 一五七七 君が代にあぶくま川の埋れ木も氷のしたに春を待ちけり

卷第十七 雑歌中

一五八七 山城のいはたの小野のははそ原見つつや君が山路越ゆらむ
 一五八八 蘆の屋の灘の塩焼きいとまなみつげの小櫛も刺さず来にけり
 一五九〇 志加の海人の塩焼くけぶり風をいたみ立ちはのぼらで山にたなびく
 一五九一 難波女の衣干すとて刈りて焚く蘆火のけぶり立たぬ日ぞなき
 一五九二 年ふれば朽ちこそまされ橋柱昔ながらの名だに恋らで
 一五九三 春の日の長柄の浜に舟とめていづれか橋と問へど答えぬ
 一五九四 朽ちにける長柄の橋を来て見れば蘆の枯葉に秋風ぞ吹く
 一五九五 沖つ風夜はに吹くらし難波潟あかつきかけて波ぞ寄すなる
 一五九六 須磨の浦のなぎたる朝は目もはるに霞にまがふ海人の釣舟
 一五九七 秋風の関吹き越ゆるたびごとに声うちそふる須磨の浦波
 一五九八 須磨の関夢をとほさぬ波の音を思ひもよらで宿をかりける
 一五九九 人住まぬ不破の関屋の板びさし荒れにしのはただ秋の風

式子内親王
 中務
 法印静賢
 民部卿範光
 宜秋門院丹後
 藤原長能
 凡河内躬恒
 読人しらず
 神祇伯頭仲
 俊惠法師
 前大僧正慈円
 藤原定家朝臣
 藤原秀能
 祝部成仲
 前中納言匡房
 藤原家隆朝臣

式部卿宇合
 在原業平朝臣
 読人しらず
 紀貫之
 壬生忠岑
 惠慶法師
 後徳大寺左大臣
 権中納言定頼
 藤原孝善
 壬生忠見
 前大僧正慈円
 撰政太政大臣

一六〇〇
一六〇一
一六〇二
一六〇三
一六〇四
一六〇五
一六〇六
一六〇七
一六〇八
一六〇九
一六一〇
一六一一
一六一二
一六一三
一六一四
一六一五
一六一六
一六一七
一六一八
一六二六
一六二七
一六二八
一六二九
一六四二
一六四三
一六四四
一六四五
一六四六
一六四八

海人小舟とま吹きかへす浦風にひとり明石の月をこそ見れ
和歌の浦を松の葉ごしにながむればこずえに寄する海人の釣舟
水の江のよしのの宮は神さびてよはひたけたる浦の松風
いまさらに住みうしとてもいかげむ灘の塩屋の夕暮の空
大淀の浦に立つ波かへらずは松の変はらぬ色を見ましや
待つ人は心ゆくとも住吉の里にとのみは思はざらなむ
住吉の松は待つとも思ほえて君が千歳の影ぞ恋しき
うち寄する波の声にてしるきかな吹上の浜の秋の初風
沖つ風夜寒になれや田子の浦の海人の藻塩火焚きまさるらむ
見わたせば霞のうちも霞みけりけぶりたなびく塩釜の浦
けふとてや磯菜摘むらむ伊勢島や一志の浦の海人のをとめ子
鈴鹿山憂き世をよそにふり捨てていかになりゆくわが身なるらむ
世の中を心高くもいとふかな富士のけぶりを身の思にて
風になびく富士のけぶりの空に消えてゆくへも知らぬわが思かな
時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ
春秋も知らぬときはの山里は住む人さへや面変りせぬ
花ならでただ柴の戸をさして思ふ心の奥もみ吉野の山
吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ
いとひてもなほいとほしき世なりけり吉野の奥の秋の夕暮
世の中をそむきにとては来しかどもなほ憂き事は大原の里
身をばかつ小塩の山と思ひつつかに定めて人の入りけむ
ながらへてなほ君が代を松山の待つとせしまに年ぞ経にける
世をそむく方はいづくもありぬべし大原山は住みよかりきや
思ふこと大原山のすみがまはいとど嘆きの数をこそ積み
かざしをる三輪の繁山かき分けてあはれとぞ思ふ杉立てる門
いつとなきをぐらの山の陰を見て暮れぬと人のいそぐなるかな
嵯峨の山千世に古道あともてまた露分くる望月の駒
佐保川の流れひさしき身なれどもうき瀬に逢ひて沈みぬるかな
かかる瀬もありけるものを宇治川の絶えぬばかりも歎きけるかな
もののふの八十宇治川の網代木にいさよふ波のゆくへ知らずも

源俊頼朝臣
寂蓮法師
正三位季能
藤原秀能
女御徽子女王
後冷泉院御歌
大式三位
祝部成仲
越前
藤原家隆朝臣
皇太后宮大夫俊成
西行法師
前大僧正慈円
西行法師
在原業平朝臣
在原元方
前大僧正慈円
西行法師
藤原家衡朝臣
読人しらず
大中臣能宣朝臣
二條院讃岐
和泉式部
少将井尼
殷富門院大輔
道命法師
藤原定家朝臣
知足院入道前関白太政大臣
東三條入道前関白太政大臣
柿本人麻呂

一六五〇 水上の空に見ゆるは白雲の立つにまがへる布引きの滝
 一六五一 久方の天つをとめが夏ごろも雲居にさらす布引の滝
 一六五二 昔聞く天の河原を尋ね来てあとなき水をながむばかりぞ
 一六五三 天の川かよふ浮木に言問はむもみぢの橋は散るや散らずや
 一六五四 真木の板も苔むすばかりなりにけり幾世経ぬらむ瀬田の長橋
 一六五五 定めなき名には立てれど飛鳥川早く渡りし瀬にこそありけれ
 一六六〇 わくらばになどかかは人の問はざらむ音無川に住む身なりとも
 一六八二 いそのかみふりにし人を尋ねれば荒れたる宿にすみれ摘みけり
 一六八六 秋されば狩人越ゆる立田山立ちてもゐても物をしぞ思ふ
 一六八七 朝倉や木の丸殿にわがをれば名のりをしつゆくは誰が子ぞ

卷第十八

雑歌下

一六九五 筑紫にもむらさき生ふる野べはあれどなき名かなしづ人ぞ聞こえぬ
 一六九六 刈萱の関守にのみ見えつるは人もゆるさぬ道べなりけり
 一七〇〇 さざ波や比良山風海吹けば釣する海人の袖かへる見ゆ
 一七〇五 蘆鴨のさわぐ入江の水の江の世にすみがたきわが身なりけり
 一七一五 いにしへの海人やけぶりとなりぬらむ人目も見えぬ塩釜の浦
 一七一六 都より雲の八重立つ奥山の横川の水はすみよかるらむ
 一七二一 天つ風吹け飯の浦にゐるたづのなごか雲居に帰らざるべき
 一七二三 大淀の浦に刈り干すみるめだに霞に絶えて帰る雁がね
 一七二六 浅からぬ心ぞ見ゆる音羽川せき入れし水の流れならねど
 一七五九 和歌の浦や沖つ潮合に浮かび出づるあはれわが身のよるべ知らせよ
 一七八五 みちのくのいはでしのぶはえぞ知らぬ書きつくしてよ壺の石文
 一七九一 数ならで世に住みの江のみをつくしいつを待つともなき身なりけり
 一七九二 憂きながら久しくぞ世を過ぎにけるあはれやかけし住吉の松
 一七九三 春日山谷のうもれ木くちぬとも君に告げこそ峯の松風
 一七九五 みな人のそむきはてぬる世の中に布留の社の身をいかにせむ
 一八一四 位山あとをたづねてのぼれども子を思ふ道になほまよひぬる
 一八一九 荒く吹く風はいかにと宮城野の小萩がうへを人の問へかし
 一八二〇 うつろはでしばし信太の杜を見よかへりもぞずる葛の裏風

二條関白内大臣
 藤原有家朝臣
 撰政太政大臣
 藤原実方朝臣
 前中納言匡房
 中務
 大僧正行尊
 能因法師
 柿本人麻呂
 天智天皇御歌

菅贈太政大臣
 菅贈太政大臣
 読人しらす
 柿本人麻呂
 一條院皇后宮
 天曆御歌
 藤原清正
 藤原定家朝臣
 周防内侍
 藤原家隆朝臣
 前右大将頼朝
 源俊頼朝臣
 皇太后宮大夫俊成
 藤原家隆朝臣
 女御徽子女王
 土御門内大臣
 赤染衛門
 赤染衛門

一八四七 暮るるまも待つべき世かはあだし野の末葉の露にあらし立つなり
一八四八 津の国のながらふべくもあらぬかなみじかき蘆の世にこそありけれ

式子内親王
花山院御歌

卷第十九 神祇歌

一八五六 いかばかり年は経ぬとも住の江の松ぞふたび生ひかはりぬる
一八六〇 思ふこと身にあまるまで鳴る滝のしばしよどむをなにうらむらむ
一八六二 鏡にも影みたらしの水の面にうつるばかりの心とを
一八六七 飛びかける天の岩舟尋ねてぞ秋津島には宮はじめける
一八七一 神風や御裳濯川のそのかみにちぎりしことの末をたがふな
一八七二 ちぎりありてけふ宮川のゆふかざら長き世までもかけて頼まむ
一八七四 神風や五十鈴川波かずしらず澄むべき御代にまた帰り来む
一八七五 ながめばや神路の山に雲消えてゆふべの空を出でむ月影
一八七八 神路山月さやかなる誓ありて天の下をば照らすなりけり
一八七九 さやかなる驚の高根の雲居より影やはらぐる月詠の杜
一八八〇 やはらぐる光にあまる影なれや五十鈴川原の秋の夜の月
一八八一 立ち帰りまたも見まくのほしきかな御裳濯川の瀬瀬の白波
一八八二 神風や五十鈴の河の宮柱幾千代すめとたてはじめけむ
一八八四 神風や山田の原のさかき葉に心のしめを掛けぬ日ぞなき
一八八五 五十鈴川空やまだきに秋の声したつ岩根の松の夕風
一八八六 ちはやぶる香椎宮のあや杉は神のみそぎにたてるなりけり
一八八八 年を経て憂き影をのみみたらしの変る世もなき身をいかにせむ
一八八九 月さゆるみたらし川に影見えて氷にする山藍の袖
一八九一 君を祈るころの色を人間はばただすの宮のあけの玉垣
一八九四 石川や瀬見の小川の清ければ月も流れをたづねてぞすむ
一八九五 万年を祈りぞかくるゆふだすき春日の山の峯のあらしに
一八九六 けふ祭る神の心やなびくらむしでに波立つ佐保の川風
一八九七 天の下みかさの山の影ならで頼むかたなき身とは知らずや
一八九八 春日野のおどろの道の埋もれ水未だに神のしるしあらはせ
一八九九 千世までも心して吹けもみぢ葉を神も小塩の山おろしの風
一九〇〇 小塩山神のしるしを松の葉にちぎりし色はかへるものかは

(読人しらず)
(読人しらず)
(読人しらず)
三統理平
撰政太政大臣
藤原定家朝臣
春宮権大夫公継
太上天皇
西行法師
西行法師
前大僧正慈円
中院右大臣
皇太后宮大夫俊成
越前
大中臣明親
読人しらず
周防内侍
皇太后宮大夫俊成
前大僧正慈円
鴨長明
中納言資仲
入道前関白太政大臣
入道前関白太政大臣
皇太后宮大夫俊成
藤原伊家
前大僧正慈円

一九〇三 おしなべて日吉の影はくもらぬに涙あやしききのふけふかな
 一九〇四 もろ人の願ひを御津の浜風に心すずしきしでの音かな
 一九〇七 岩にむす苔ふみならず御熊野の山のかひあるゆくすゑもがな
 一九〇八 熊野川くだす早瀬のみなれ棹さすが見なれぬ波のかよひ路
 一九〇九 立ちのぼる塩屋のけぶり浦風になびくを神の心ともがな
 一九一〇 岩代の神は知るらむしるべせよ頼む憂き世の夢のゆくすゑ
 一九一二 年経とも越の白山忘れずはかしらの雪をあはれとも見よ
 一九一三 住吉の浜松が枝に風吹けば波のしらゆふかけぬまぞなき

前大僧正慈円
 前大僧正慈円
 太上天皇
 太上天皇
 徳大寺左大臣
 読人しらず
 左京大夫頭輔
 藤原道経

卷第二十 釋教歌

一九一七 なほ頼めしめちが原のさせも草われ世の中にあらむかぎりは
 一九二七 にごりなき亀井の水をむすびあげて心の塵をすすぎつるかな
 一九三〇 むらさきの雲の林を見わたせば法にあふちの花咲きにけり
 一九六〇 音に聞く君がりいつか生の松待つらむものを心づくしに

(読人しらず)
 上東門院
 肥後
 寂然法師

資料 ③ 新古今和歌集の歌枕 ―― 頻度・五十音順に

	地名	地名漢字	頻度	現在地方	現在都道府県	国名
1.	よしの	吉野	22	近畿	奈良県	大和
2.	なには	難波	14	近畿	大阪府	摂津
3.	たつた	立田	13	近畿	奈良県	大和
4.	うち	宇治	11	近畿	京都府	山城
5.	かすが	春日	10	近畿	奈良県	大和
6.	すま	須磨	10	近畿	兵庫県	摂津
7.	ふる	布留	10	近畿	奈良県	大和
8.	しのぶ	信夫	9	東北	福島県	陸奥
9.	ふじ	富士山	9	中部	静岡県	駿河
10.	いそのかみ	石上	7	近畿	奈良県	大和
11.	かつらぎ	葛城	7	近畿	奈良県	大和
12.	すみよし	住吉	7	近畿	大阪府	摂津
13.	いすずがは	五十鈴川	6	近畿	三重県	伊勢
14.	かたの	交野	6	近畿	大阪府	河内
15.	さやのなかやま	佐夜中山	6	九州	福岡県	遠江
16.	しが	志賀	6	近畿	滋賀県	近江
17.	しほがま	塩釜	6	東北	宮城県	陸奥
18.	あかし	明石	5	近畿	兵庫県	播磨
19.	あすか	飛鳥	5	近畿	奈良県	大和
20.	あふさか	逢坂	5	近畿	滋賀県	近江
21.	おじま	雄島	5	東北	宮城県	陸奥
22.	さほ	佐保	5	近畿	奈良県	大和
23.	すゑのまつやま	松山	5	東北	宮城県	陸奥
24.	なるみ	鳴海	5	中部	愛知県	尾張
25.	はつせ	初瀬	5	近畿	奈良県	大和
26.	みわ	三輪	5	近畿	奈良県	大和
27.	やましろ	山城	5	近畿	京都府	山城
28.	わかのうち	和歌浦	5	近畿	和歌山県	紀伊
29.	いせ	伊勢	4	近畿	三重県	伊勢
30.	うつのやま	宇津山	4	中部	静岡県	駿河
31.	おほいがは	大堰川	4	近畿	京都府	山城
32.	おほはら	大原	4	近畿	京都府	山城
33.	かぐやま	香具山	4	近畿	奈良県	大和

34.	さが	嵯峨	4	九州	佐賀県	山城
35.	すみのえ	住江	4	近畿	大阪府	摂津
36.	たかまど	高円	4	近畿	奈良県	大和
37.	つくし	筑紫	4	九州	福岡県	筑前
38.	ふかくさ	深草	4	近畿	京都府	山城
39.	ふしみ	伏見	4	近畿	京都府	山城
40.	みやぎ	宮城	4	東北	宮城県	陸奥
41.	よど	淀	4	近畿	京都府	山城
42.	みで	井手	4	近畿	京都府	山城
43.	をぐら	小倉	4	近畿	京都府	山城
44.	をしほ	小塩	4	近畿	京都府	山城
45.	あはぢ	淡路	3	近畿	兵庫県	淡路
46.	あぶくまがは	阿武隈川	3	東北	福島県	陸奥
47.	あらしやま	嵐山	3	近畿	京都府	山城
48.	おほよど	大淀	3	近畿	三重県	伊勢
49.	からさき	唐崎	3	近畿	滋賀県	近江
50.	きよたきがは	清滝川	3	近畿	京都府	山城
51.	きよみがた	清見潟	3	中部	静岡県	駿河
52.	しのだのもり	信太杜	3	近畿	大阪府	和泉
53.	つのくに	津国	3	近畿	大阪府	摂津
54.	ときは	常盤	3	近畿	京都府	山城
55.	ながらのはし	長柄橋	3	近畿	大阪府	摂津
56.	なとりがは	名取川	3	東北	宮城県	陸奥
57.	ひら	比良山	3	近畿	滋賀県	近江
58.	ふきあげのはま	吹上浜	3	近畿	和歌山県	紀伊
59.	まつちのやま	松乳山	3	関東	東京都	大和
60.	みたらしがは	御手洗川	3	近畿	京都府	山城
61.	みちのく	陸奥	3	東北	青森県とその他	陸奥
62.	やまだのはら	山田原	3	近畿	三重県	伊勢
63.	あさま	浅間	2	中部	長野県	信濃
64.	あしや	芦屋	2	近畿	兵庫県	摂津
65.	あまのかは	天川	2	近畿	大阪府	摂津
66.	いきのまつはら	生松原	2	九州	福岡県	筑前
67.	いこまやま	生駒山	2	近畿	奈良県	大和
68.	いづみがは	泉川	2	近畿	三重県とその他	山城
69.	いはしろ	岩代	2	近畿	和歌山県	紀伊

70.	いぶき	伊吹	2	近畿	滋賀県	近江
71.	いるさのやま	入佐山	2	近畿	兵庫県	但馬
72.	おとはがは	音羽川	2	近畿	京都府	近江
73.	おふのうら	苧生浦	2	近畿	三重県	伊勢
74.	おほえやま	大江山	2	近畿	京都府	山城
75.	かへるやま	帰山	2	中部	福井県	越前
76.	かみぢやま	神路山	2	近畿	三重県	伊勢
77.	かみやま	神山	2	近畿	京都府	山城
78.	かなびやま	神南備山	2	近畿	奈良県	大和
79.	きのくに	紀国	2	近畿	和歌山県	伊勢
80.	くまの	熊野	2	近畿	和歌山県	伊勢
81.	くめぢのはし	久米路橋	2	近畿	奈良県	大和
82.	こし・こしじ	越・越路	2	中部	福井県とその他	越（前 中後）
83.	さらしなやおば すてやま	更級や姨捨	2	中部	長野県	信濃
84.	しらやま	白山	2	北陸	石川県	加賀
85.	すがはら	菅原	2	近畿	奈良県	大和
86.	すずか	鈴鹿	2	近畿	三重県	伊勢
87.	そでのうら	袖浦	2	東北	山形県	出羽
88.	そのはら	園原	2	中部	長野県	信濃
89.	たかさご	高砂	2	近畿	兵庫県	播磨
90.	たかまやま	高間山	2	近畿	奈良県	大和
91.	たけくま	武隈	2	東北	宮城県	陸奥
92.	たごのうら	田子の浦	2	中部	静岡県	駿河
93.	ただす	糺	2	近畿	京都府	山城
94.	つくばやま	筑波山	2	関東	茨城県	常陸
95.	とこのやま	鳥籠山	2	近畿	滋賀県	近江
96.	とをち	十市	2	近畿	奈良県	大和
97.	ながらやま	長等山	2	近畿	滋賀県	近江
98.	なだ	灘	2	近畿	兵庫県	摂津
99.	ぬのびきのたき	布引滝	2	近畿	兵庫県	摂津
100.	ははそのもり	柞杜	2	近畿	京都府	山城
101.	ふしみ	伏見	2	近畿	奈良県	大和
102.	まつしま	松島	2	東北	宮城県	陸奥
103.	みかさのやま	三笠山	2	近畿	奈良県	大和

104.	みしまえ	三島江	2	近畿	大阪府	摂津
105.	みずのえ	水ノ江	2	近畿	京都府	丹後
106.	みつ (近江)	三津	2	近畿	滋賀県	近江
107.	みむろやま	三室山	2	近畿	奈良県	大和
108.	みもすそがは	御裳濯河	2	近畿	三重県	伊勢
109.	むさしの	武蔵野	2	関東	東京都	武蔵
110.	むろのやしま	室八嶋	2	関東	栃木県	下野
111.	もるやま	守山	2	近畿	滋賀県	近江
112.	ゆら	由良	2	近畿	京都府	丹後
113.	をぐら	小倉	2	近畿	奈良県	大和
114.	あきしの	秋篠	1	近畿	奈良県	大和
115.	あきつしま	秋津島	1	近畿	奈良県	大和
116.	あさかのぬま	安積沼	1	東北	福島県	陸奥
117.	あさくら	朝倉	1	九州	福岡県	筑前
118.	あさひのさと	朝日里	1	近畿	滋賀県	近江
119.	あさひのやま	朝日山	1	近畿	京都府	山城
120.	あだしの	化野	1	近畿	京都府	山城
121.	あだち	安達	1	東北	福島県	陸奥
122.	あふみ	近江	1	近畿	滋賀県	近江
123.	あらちやま	有乳山	1	近畿	滋賀県	越前
124.	ありすがは	有栖川	1	近畿	京都府	山城
125.	ありまやま	有馬山	1	近畿	兵庫県	摂津
126.	あをばのやま	青葉山	1	近畿	京都府	近江
127.	いくた	生田	1	近畿	兵庫県	摂津
128.	いくの	生野	1	近畿	京都府	丹波
129.	いしがはやせみの をがは	石川瀬見 小川	1	近畿	京都府	山城
130.	いしやま	石山	1	近畿	滋賀県	近江
131.	いせしま	伊勢島	1	近畿	三重県	志摩
132.	いちしのうら	一志浦	1	近畿	三重県	伊勢
133.	いつはた	五幡	1	中部	福井県	越前
134.	いづみ	和泉	1	近畿	大阪府	和泉
135.	いなば	因幡	1	中国	鳥取県	因幡
136.	いはせやま	岩瀬山	1	近畿	奈良県	大和
137.	いはたのをの	岩田小野	1	近畿	京都府	山城
138.	いはで	岩手	1	東北	岩手県	陸奥

139.	いるの	入野	1	近畿	京都府	山城
140.	うどはま	有度浜	1	中部	静岡県	駿河
141.	うりんいん	雲林院	1	近畿	京都府	山城
142.	えぞ	蝦夷	1	北海道	北海道	陸奥
143.	おいそのもり	老曾森	1	近畿	滋賀県	近江
144.	おきつのはま ¹	興津浜	1	近畿	大阪府	和泉
145.	おくうみ	奥海	1	東北	青森県とその他	陸奥
146.	おとなしがは	音無川	1	近畿	和歌山県	紀伊
147.	おとはやま	音羽山	1	近畿	滋賀県	近江
148.	おとはやま	音羽山	1	近畿	京都府	山城
149.	おふ	飢宇	1	中国	島根県	出雲
150.	おほあらき	大荒木	1	近畿	京都府	山城
151.	おほがはのべ	大川野辺	1	近畿	奈良県	大和
152.	かがみのやま	鏡山	1	近畿	滋賀県	近江
153.	かしはぎのもり	柏木杜	1	近畿	奈良県	大和
154.	かしひのみや	香椎宮	1	九州	福岡県	筑前
155.	かたをか	片岡	1	近畿	京都府	山城
156.	かたをか	片岡	1	近畿	奈良県	大和
157.	かつらがは	桂川	1	近畿	京都府	山城
158.	かめみ	亀井	1	近畿	大阪府	摂津
159.	かも	賀茂	1	近畿	京都府	山城
160.	かるかやのせき	刈萱関	1	九州	福岡県	筑前
161.	かなびがは	神南備川	1	近畿	京都府	山城
162.	きさがた	象潟	1	東北	秋田県	出羽
163.	きびのなかやま	吉備中山	1	中国	岡山県	備中
164.	きぶねがは	貴船川	1	近畿	京都府	山城
165.	くまのがは	熊野川	1	近畿	和歌山県	伊勢
166.	くらみやま	位山	1	中部	岐阜県	飛騨
167.	けしきのもり	景色杜	1	九州	鹿児島県	大隅
168.	こがらしのもり	木枯杜	1	中部	静岡県	駿河
169.	ころもがは	衣川	1	東北	岩手県	陸奥
170.	さかた	坂田	1	近畿	滋賀県	近江
171.	さざなみ	楽波	1	近畿	滋賀県	近江
172.	さの	佐野	1	関東	群馬県	紀伊

¹ 久保田淳の注釈によると、「興津の浜は藤原忠房の本歌では和泉国の地名とされている。しかし、駿河国にも同名の地があり、定家がどちらを念頭において詠んだかは不明」。

173.	しか	志珂	1	九州	福岡	筑前
174.	しきつ	敷津	1	近畿	大阪府	摂津
175.	しなの	信濃	1	中部	長野県	信濃
176.	しのはら	篠原	1	近畿	滋賀県	近江
177.	しめぢがはら	標茅原	1	関東	栃木県	下野
178.	しらかは	白河	1	近畿	京都府	山城
179.	するが	駿河	1	中部	静岡県	駿河
180.	せたのながはし	瀬田長橋	1	近畿	滋賀県	近江
181.	たかのおやま	鷹ノ尾山	1	近畿	滋賀県	近江
182.	たこのうら	多祢浦	1	中部、北陸	富山県	越中
183.	たまえ	玉江	1	中部	福井県	越前
184.	つきよみのもり	月読杜	1	近畿	三重県	伊勢
185.	つぼのいしぶみ	壺ノ碑	1	東北	青森県	陸奥
186.	としま	富島	1	近畿	兵庫県	摂津
187.	とばだ	鳥羽田	1	近畿	京都府	山城
188.	とふのうら	十布	1	東北	宮城県	陸奥
189.	とぶひの	飛火野	1	近畿	京都府	大和
190.	ながた	長田	1	近畿	京都府	丹波
191.	なぐさのはま	名草浜	1	近畿	和歌山県	紀伊
192.	なごのうみ	奈古海	1	中部	富山県	越中
193.	なつみのかは	夏身川	1	近畿	奈良県	大和
194.	ならのおがは	檜小川	1	近畿	京都府	山城
195.	なるたき	鳴滝	1	近畿	京都府	紀伊
196.	にほのうみ	鳩海	1	近畿	滋賀県	近江
197.	のじまがみね	野島崎	1	近畿	兵庫県	淡路
198.	のだのたまがは	野田玉川	1	東北	宮城県	陸奥
199.	のなかのしみず	野中清水	1	近畿	兵庫県	播磨
200.	はつかやま	羽束山	1	近畿	京都府	摂津
201.	ひはら	檜原	1	近畿	奈良県	大和
202.	ひよし	日吉	1	近畿	滋賀県	近江
203.	ふけひのうら	吹飯浦	1	近畿	大阪府	和泉
204.	ふたみのうら	二見浦	1	近畿	三重県	紀伊
205.	ふぢえのうら	藤江浦	1	近畿	兵庫県	播磨
206.	ふはのせきや	不破関屋	1	中部	岐阜県	美濃
207.	まきむく	巻向	1	近畿	奈良県	大和
208.	まちかねやま	待兼山	1	近畿	大阪府	摂津

209.	まつい	松井	1	中国	岡山県	近江
210.	まつのおやま	松尾山	1	近畿	京都府	山城
211.	まつら	松浦	1	九州	佐賀県	肥前
212.	まのの	真野	1	近畿	大阪府	大和
213.	みかのはら	甕原	1	近畿	京都府	山城
214.	みずぐきのおか	水茎丘	1	近畿	滋賀県	近江
215.	みつ（摂津）	御津	1	近畿	大阪府	摂津
216.	みなせがは	水瀬川	1	近畿	大阪府	摂津
217.	みののおやま	美濃小川	1	中部	岐阜県	美濃
218.	みやがは	宮河	1	近畿	三重県	伊勢
219.	みよしの	三芳野	1	関東	東京都	武蔵
220.	むつたのよど	六田淀	1	近畿	奈良県	大和
221.	むらさきの	紫野	1	近畿	京都府	山城
222.	やたのの	矢田野	1	近畿	奈良県	越前
223.	やまのい	山井	1	近畿	京都府	山城
224.	ゆふはやま	夕羽山	1	不明	不明	出羽
225.	ゆら	由良	1	近畿	和歌山県	紀伊
226.	よがは	横川	1	近畿	滋賀県	近江
227.	わかまつばら	和歌松原	1	近畿	三重県	伊勢
228.	わたらひ	度会	1	近畿	三重県	伊勢
229.	みなの	猪名野	1	近畿	大阪府	摂津

資料 ④ 体言止めを使う和歌

三 山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえだえかかる雪のたま水
 六 春といへば霞にけりなきのふまで波間にみえし淡路島山
 一〇 春日野の下もえわたる草の上につれなくみゆる春のあは雪
 一三 若菜つむ袖とぞみゆる春日野の飛火の野べの雪のむらぎえ
 一七 谷川のうち出づる波も声たてつうぐひすさそへ春の山風
 一八 うぐひすの鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉しろき逢坂の山
 二二 いづれをか花とはわかむふるさとの春日の原にまだ消えぬ雪
 二二 空はなほ霞もやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月
 二六 夕月夜しほ満ち来らし難波江の蘆の若葉にこゆる白波
 二七 降りつみし高峯のみ雪とけにけり清滝川のみづの白波
 二九 あづさ弓はる山ちかく家おしてたえず聞きつるうぐひすの声
 三三 あまの原富士のけぶりの春の色の霞になびくあけぼのの空
 三五 なごの海の霞のまよりながむれば入る目を洗ふ沖つ白波
 三七 かすみたつ末の松山ほのぼのと波にはなるる横雲の空
 三八 春の夜の夢の浮橋とだえして峯にわかるる横雲の空
 四〇 おほぞらは梅のにほひに霞みつつくもりもはてぬ春の夜の月
 四七 梅の花あかぬ色香もむかしにておなじ形見の春の夜の月
 五六 あさみどり花もひとつに霞みつつおぼろにみゆる春のよの月
 五八 いまはとてたのむの雁もうちわびぬおぼろ月夜のあけぼのの空
 五九 聞く人ぞ涙はおつる帰る雁鳴きてゆくなるあけぼのの空
 六一 忘るなよたのむの沢を立つ雁も稲葉の風の秋の夕暮
 六四 つくづくと春のながめのさびしきはしのぶに伝ふ軒のたま水
 七三 春風の霞吹きとく絶えまよりみだれてなびく青柳の糸
 七六 薄く濃き野べのみどりの若草に跡までみゆる雪のむらぎえ
 八〇 さくらばな咲かばまづみむと思ふまに日数へにけり春の山里
 八二 思ふどちそこともしらずゆきくれぬ花の宿かせ野べのうぐひす
 八五 ゆかむ人來む人しのべ春がすみ立田の山の初さくらばな
 八七 葛城や高間の桜咲きにけり立田のおくにかかる白雲

式子内親王
 俊恵法師
 権中納言国信
 前参議教長
 藤原家隆朝臣
 太上天皇
 凡河内躬恒
 摂政太政大臣
 藤原秀能
 西行法師
 山辺赤人
 前大僧正慈円
 後徳大寺左大臣
 藤原家隆朝臣
 藤原定家朝臣
 皇太后宮大夫俊成女
 菅原孝標女
 寂蓮法師
 皇太后宮大夫俊成
 摂政太政大臣
 大僧正行慶
 殷富門院大輔
 宮内卿
 藤原隆時朝臣
 藤原家隆朝臣
 中納言家持
 寂蓮法師

九二
九三
九四
九七
一〇〇
一一二
一一四
一一八
一二一
一二九
一三〇
一三二
一三三
一三六
一三九
一四一
一四四
一四五
一五二
一五四
一五五
一五九
一六〇
一六一
一六三
一六九
一七〇
一七三
一七四
一七五

吉野山花やさかりにほふるさとさえぬ峯の白雪
岩根ふみかさなる山を分けすて花もいくへの跡の白雪
たづねきて花にくらせる木の間より待つとしもなき山のはの月
花ぞみる道の芝草ふみわけて吉野の宮の春のあけぼの
いくとせの春に心をつくしきぬあはれと思へみよしのの花
風かよふねぎめの袖の花の香にかをる枕の春の夜のゆめ
またや見む交野のみ野のさくらがり花の雪散る春のあけぼの
やまざくら花のした風吹きにけり木のもとごとの雪のむらぎえ
時しもあれたのむの雁の別れさへ花散るころのみよしのの里
逢坂やこず多の花を吹くからにあらしぞ霞む関の杉むら
山たかみ峯のあらしに散る花の月にあまざるあけがたの空
散りまがふ花のよそめは吉野山あらしにさわぐ峯の白雪
みよしのの高峯のさくら散りにけりあらしも白き春のあけぼの
さそはれぬ人のためとやのこりけむあすよりさきの花の白雪
さくらばな夢かうつつか白雲の絶えてつねなき峯の春風
はかなさをほかにもいはじさくらばな咲きては散りぬあはれ世の中
散る花の忘れがたみの峯の雲そをだにのこせ春の山風
花さそふなごりを雲に吹きとめてしばしはにほへ春の山風
花流す瀬をもみるべき三日月のわれて入りぬる山のをちかた
思ひ立つ鳥は古巢もたのむらむなれぬる花のあとの夕暮
散りにけりあはれ恨みのたれなれば花のあととふ春の山風
駒とめてなほ水かはむやまぶきの花の露そふ井手の玉川
岩根こす清滝川のはやければ波折りかくる岸のやまぶき
かはづ鳴く神南備川にかげみえて今かさくらむやまぶきの花
かくてこそ見まくほしけれよるづ代をかけてにほへる藤波の花
暮れてゆく春のみなどはしらねども霞に落つる宇治の柴舟
来ぬまでも花ゆゑ人の待たれつる春も暮れぬるみ山べの里
柴の戸をさすや日影のなごりなく春暮れかかる山の端の雲
あすよりは志賀の花園まれにだにたれかはとはむ春のふるさと
春過ぎて夏きにけらし白栲の衣ほすてふ天の香具山

藤原家衡朝臣
藤原雅経朝臣
藤原雅経朝臣
正三位季能
皇太后宮大夫俊成
皇太后宮大夫俊成女
皇太后宮大夫俊成
康資王母
源具親
宮内卿
二条院讚岐
刑部卿頼輔
太上天皇
摂政太政大臣
藤原家隆朝臣
後徳大寺左大臣
左近中将良平
藤原雅経朝臣
坂上是則
寂蓮法師
寂蓮法師
皇太后宮大夫俊成
権中納言国信
厚見王
延喜御歌
寂蓮法師
藤原伊綱
宮内卿
摂政太政大臣
持統天皇御歌

一七九
一八二
一九四
二〇一
二〇三
二一四
二一五
二一六
二一七
二二〇
二二一
二二六
二二七
二二七
二二二
二二二
二二六
二二九
二四〇
二四三
二五一
二五二
二五五
二五七
二六〇
二六一
二六三
二六五
二六八
二六九
二七一
二七三

折りふしもうつればかへつ世の中の人の心の花染めの袖
忘れめやあふひを草に引き結びかりねの野べの露のあけほの
おのが妻恋ひつつ鳴くやさつきやみ神南備山の山ほととぎす
昔思ふ草の庵のよるの雨に涙な添へそやまほととぎす
聞かでただ寝なましものをほととぎすなかなかなりやよはの一声
いかにせん来ぬ夜あまたのほととぎす待たじと思へば村雨の空
声はして雲路にむせぶほととぎす涙やそそく宵の村雨
ほととぎすなほうとまれぬ心かな汝が鳴く里のよその夕暮
聞かずともここをせにせむほととぎす山田の原の杉のむらだち
うちしめりあやめぞかをるほととぎす鳴くやさつきの雨の夕暮
今日はまたあやめのねさへかけそへて乱れぞまさる袖の白玉
小山田に引くしめなはのうちはへて朽ちやしぬらむさみだれのころ
いかばかり田子の裳裾もそぼつらむ雲間も見えぬころのさみだれ
たまぼこの道行き人のことづても絶えてほどふるさみだれの空
ほととぎす雲のよそにすぎぬなりはれぬ思ひのさみだれのころ
行く末をたれしのべとてゆふ風に契りかおかむ宿のたちばな
帰りこぬ昔を今と思ひ寝の夢の枕ににほふたちばな
尋ぬべき人は軒端のふるさとにそれかとかをる庭のたちばな
うかひぶねあはれとぞみるものふのやそうち川の夕やみの空
鵜飼舟高瀬さしこすほどなれやむすぼほれゆくかがり火の影
窓近き竹の葉すさむ風の音にいとどみじかきうたたねの夢
窓近きいささ群竹風吹けば秋におどろく夏の夜の夢
重ねてもすずしかりけり夏衣薄きたもとにやどる月影
すずしさは秋やかへりて初瀬川古川のべの杉のしたかげ
よられつる野もせの草のかげろひてすずしくもる夕立の空
露する庭の玉笹うちなびきひとむら過ぎぬ夕立の雲
夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山にひぐらしの声
夕づく日さすや庵の柴の戸にさびしくもあるかひぐらしの声
なく蝉の声もすずしき夕暮に秋をかけたる杜のしたつゆ
ほたる飛ぶ野沢に茂る蘆の根のよなよなしたにかよふ秋風

皇太后宮大夫俊成女
式子内親王
藤原雅経朝臣
皇太后宮大夫俊成
相摸
藤原家隆朝臣
式子内親王
権中納言公経
西行法師
撰政太政大臣
皇太后宮大夫俊成
伊勢大輔
藤原定家朝臣
太上天皇
右衛門督通具
式子内親王
誦人しらず
前大僧正慈円
寂蓮法師
式子内親王
春宮大夫公継
撰政太政大臣
藤原有家朝臣
西行法師
権中納言公経
式子内親王
前大納言忠良
二条院讚岐
撰政太政大臣

二七四
二七五
二七六
二七九
二八〇
二八二
二八八
二九二
二九五
二九六
二九九
三〇〇
三〇七
三〇八
三一〇
三一七
三一七
三一九
三二〇
三二一
三二二
三二二
三二二
三二六
三二八
三三二
三三四
三三九
三四三
三四七
三五二

ひさぎ生ふるかたやまかげに忍びつつ吹きくるものを秋の夕風
白露の玉もてゆへるませのうちに光さへそふとこなつの花
白露のなさけおきける言の葉やほのぼの見えし夕顔の花
山里の峯の雨雲とだえしてゆふべすずしきまきの下露
岩井くむあたりのを笹玉越えてかつがつ結ぶ秋の夕露
夏衣かたへすずしくなりぬなり夜やふけぬらむゆきあひの空
いつもきくふもとの里とおもへども昨日にははる山おろしのかぜ
あけぬるか衣手さむしすが原やふしみの里の秋のはつかぜ
しきたへの枕のうへに過ぎぬなり露をたづぬる秋のはつかぜ
水茎の岡の葛葉も色づきてけさうらがなし秋のはつかぜ
おしなべてものを思はぬ人にさへ心をつくる秋のはつかぜ
あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風たちぬ宮城野の原
日を経つつ音こそまされ和泉なる信太の杜の千枝の秋風
うたたねの朝けの袖にかはるなりならず扇の秋のはつかぜ
朝ぼらけ萩の上葉の露みればやや肌さむし秋のはつかぜ
雲間より星会ひの空を見わたせばしづ心なき天の川波
たなばたの衣のつまはこころして吹きな返しそ秋の初風
たなばたのとわたる舟の梶の葉にいく秋書きつ露のたまづさ
ながむれば衣手すずしひさかたの天の川原の秋の夕暮
いかばかり身にしみぬらむたなばたのつま待つ宵の天の川風
星会ひの夕べすずしき天の川紅葉の橋をわたる秋かぜ
いとどしく思ひ消ぬべしたなばたの別れの袖における白露
川水に鹿のしがらみかけてけり浮きて流れぬ秋萩の花
おく露もしづ心なく秋風に乱れて咲ける真野の萩原 祐
さを鹿の朝立つ小野の秋萩に玉とみるまでおける白露
ふぢばかまぬしはたれとも白露のこぼれてにほふ野べの秋風
おきて見むと思ひしほどに枯れにけり露よりけなる朝顔の花
小倉山ふもとの野べの花すすきほのかにみゆる秋の夕暮
あけぬとて野べより山に入る鹿のあと吹きおくる萩の下風
身にとまる思ひを萩の上葉にてこのごろかなし夕暮の空

俊恵法師
高倉院御歌
前太政大臣
太上天皇
入道前関白太政大臣
前大僧正慈円
後徳大寺左大臣
藤原家隆朝臣
源具親
顕昭法師
西行法師
西行法師
藤原経衡
式子内親王
曾禰好忠
祭主輔親
小弁
皇太后宮大夫俊成
式子内親王
入道前関白太政大臣
権中納言公経
大中臣能宣朝臣
前中納言匡房
子内親王家紀伊
中納言家持
公猷法師
曾禰好忠
誦人しらず
左衛門督通光
前大僧正慈円

三五六
三五七
三五九
三六〇
三六一
三六二
三六三
三六四
三六六
三六七
三七八
三九〇
三九二
三九七
四〇三
四〇四
四一二
四一三
四一五
四一七
四二〇
四二一
四二二
四二三
四二四
四二九

荻の葉に吹けばあらしの秋なるを待ちけるよはのさを鹿の声
おしなべて思ひしことのかずかすになほ色まさる秋の夕暮
もの思はでかかる露やは袖におくながめてけりな秋の夕暮
み山路やいつより秋の色ならむ見ざりし雲の夕暮の空
さびしさはその色としもなかりけり真木立つ山の秋の夕暮
心なき身にもあはれはしられけりしぎ立つ沢の秋の夕暮
見わたせば花もみぢもなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮
たへてやは思ひありともいかがせむむぐらの宿の秋の夕暮
秋風のいたりいたらぬ袖はあらじただわれからの露の夕暮
深草の里の月影さびしさも住みこしままの野べの秋風
大荒木の杜の木の間をもちかねて人だのめなる秋の夜の月
有明の月待つ宿の袖の上に人だのめなる宵のいなづま
風わたる浅茅が末の露にだに宿りもはてぬ宵のいなづま
敷島や高田山の雲間よりひかりさしそふゆみはりの月
あやなくも曇らぬ宵をいとふかな信夫の里の秋の夜の月
ふけゆかばけぶりもあらじ塩釜のうらみなはてそ秋の夜の月
ながめつつ思ふもさびしひさかたの月の都の明け方の空
ながむればちぢに物思ふ月にまたわが身ひとつの峯の松風
秋の夜の月やをじまのあまのはら明け方ちかき沖の釣船
憂き身にはながむるかひもなかりけり心にくもる秋の夜の月
龍田山よはにあらしの松吹けば雲にはうとき峯の月影
秋風にたなびく雲のたえまよりもれいづる月の影のさやけさ
ながめつつ思ふもぬるたもとかないく夜かは見む秋の夜の月
ふくるまでながむればこそ悲しけれ思ひも入れじ秋の夜の月
さむしろや待つ夜の秋の風ふけて月をかたく宇治の橋姫
秋の夜の長きかひこそなかりけれ待つにふけぬる有明の月
行く末は空もひとつの武蔵野に草の原より出づる月影
月をなほ待つらむものか村雨の晴れゆく雲の末の里人
秋の夜は宿かる月も露ながら袖に吹きこす荻のうは風
あくがれて寝ぬ夜の塵のつもるまで月に払はぬ床のさむしろ

撰政太政大臣
撰政太政大臣
撰政太政大臣
前大僧正慈円
寂蓮法師
西行法師
藤原定家朝臣
藤原雅経朝臣
鴨長明
右衛門督通具
皇太后宮大夫俊成女
藤原家隆朝臣
藤原有家朝臣
堀河院御歌
橘為仲朝臣
前大僧正慈円
藤原家隆朝臣
鴨長明
藤原家隆朝臣
前大僧正慈円
左衛門督通光
左京大夫顕輔
殷富門院大輔
式子内親王
藤原定家朝臣
右大将忠経
撰政太政大臣
宮内卿
右衛門督通具
皇太后宮大夫俊成女

四三二
四三四
四三五
四三九
四四二
四四三
四四四
四五〇
四六一
四六三
四七四
四七五
四七七
四七九
四八五
四八七
四九一
四九二
四九三
五〇一
五〇三
五〇四
五〇五
五〇七
五〇九
五一一
五一四
五一五
五一七
五二〇

秋の色はまがきにうとくなりゆけど手枕なる閨の月影
さらになまた暮をたのめと開けにけり月はつれなき秋の夜の空
おほかたに秋の寝覚めの露けくはまたたが袖に有明の月
野分せし小野の草ぶし荒れはてて深山にふかきさを鹿の声
み山べの松の梢をわたるなりあらしに宿すさを鹿の声
われならぬ人もあはれやまさるらむ鹿鳴く山の秋の夕暮
たぐへくる松のあらしやたゆむらん尾上にかへるさを鹿の声
ひとり寝やいとどさびしきさを鹿の朝ふす小野の葛の浦風
草葉には玉と見えつつわび人の袖の涙の秋のしら露
秋といへば契りおきてや結ぶらむ浅茅が原のけさの白露
あともなき庭の浅茅にむすぼほれ露のそこなる松虫の声
秋風は身にしむばかり吹きにけり今や打つらむ妹がさごころも
衣打つね山の庵のしばしはもしらぬ夢路にむすぶ手枕
まどろまでながめよとてのすさびかな麻のさごころも月に打つ声
ふけにけり山の端ちかく月さえてとをちの里に衣打つ声
ひとり寝る山鳥の尾のしだり尾に霜おきまよふ床の月影
村雨の露もまだひぬ真木の葉に霧たちのぼる秋の夕暮
さびしきはみ山の秋の朝ぐもり霧にしをるる真木の下露
あけぼのや川瀬の波の高瀬舟くだすか人の袖の秋霧
横雲の風にわかるるしののめに山飛び越ゆる初雁の声
大江山かたぶく月の影さえて鳥羽田の面に落つる雁がね
村雲や雁の羽風に晴れぬらむ声聞く空にすめる月かげ
吹きまよふ雲居をわたる初雁のつばさに鳴らすよはの秋風
霜を待つまがきの菊の宵のまにおきまよふ色は山の端の月
今よりはまた咲く花もなきものをいたくなおきそ菊の上の露
寝覚めする袖さへ寒く秋の夜のあらし吹くなり松虫の声
あだに散る露の枕に伏しわびてうづら鳴くなりこの山風
訪ふ人もあらし吹きそふ秋は来て木の葉に埋む宿の道芝
秋ふけぬ鳴けや霜夜のきりぎりすやや影寒しよもぎふの月
秋ふかき淡路の島の有明にかたぶく月をおくる浦風

式子内親王
左衛門督通光
二条院讚岐
寂蓮法師
惟明親王
土御門内大臣
摂政太政大臣
藤原顕綱
菅贈太政大臣
恵慶法師
式子内親王
藤原輔尹朝臣
権中納言公経
宮内卿
式子内親王
藤原定家朝臣
寂蓮法師
太上天皇
左衛門督通光
西行法師
前大僧正慈円
朝恵法師
皇太后宮大夫俊成女
宮内卿
権中納言定頼
大江嘉言
皇太后宮大夫俊成女
皇太后宮大夫俊成女
太上天皇
前大僧正慈円

五二五
五四〇
五四二
五五五
五五八
五六一
五六三
五六八
五六九
五七三
五八一
五八七
五九一
五九四
五九五
五九七
五九八
五九九
六〇四
六〇五
六〇六
六〇七
六〇八
六一〇
六一一
六一七
六二七
六三一
六三四
六三六
六三七

神南備のみむろの梢いかならむなべての山もしぐれするころ
散りかかるとみぢの色は深けれど渡ればにぐる山川の水
飛鳥川瀬々に波寄るくれなるや葛城山のこがらしの風
散りかかるとみぢ流れぬ大井川いづれ井堰きの水のしがらみ
おのづから音する物は庭の面に木の葉吹きまく谷の夕風
うつりゆく雲にあらしの声すなり散るか正木の葛城の山
しぐれつつ袖もほしあへずあしびきの山の木の葉にあらし吹くころ
時しもあれ冬は葉守りの神無月まばらになりぬ杜のかしは木
いつのまに空のけしきの変はるらむはげしきけさのこがらしの風
雲晴れてのちもしぐる柴の戸や山風はらふ松の下露
ふかみどり争ひかねていかならむまなくしぐれの布留の神杉
いまはまた散らでもまがふしぐれかなひとりふりゆく庭の松風
ほのぼのと有明の月の月影にもみぢ吹きおろす山おろしの風
霜こほる袖にもかげはのこりけり露よりなれし有明の月
ながめつついくたび袖に曇るらむしぐれにふくる有明の月
いまよりは木の葉がくれもなけれどもしぐれにのこる村雲の月
晴れくもるかげを都に先立てしぐれと告ぐる山の端の月
たえだえに里分く月の光かなしぐれを送るよはの村雲
秋の色を払ひはててやひさかたの月の桂にこがらしの風
風寒み木の葉晴れゆくよなよなにのこるくまなき庭の月影
わが門の刈り田のねやにふすしぎの床あらはなる冬の夜の月
冬枯れの杜の朽ち葉の霜の上に落ちたる月の影のさむけさ
さえわびて覚むる枕にかげ見れば霜深き夜の有明の月
かげとめし露の宿りを思ひ出でて霜にあと問ふ浅茅生の月
片敷きの袖をや霜に重ぬらむ月に夜がるる宇治の橋姫
さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵ならべむ冬の山里
かつ氷かつはくだくる山川の岩間にむせぶあかつきの声
みなかみやたえだえ氷る岩間より清滝川にのこる白波
橋姫の片敷き衣さむしろに待つ夜むなしき宇治のあけぼの
網代木にいさよふ波の音ふけてひとりや寝ぬる宇治の橋姫

八条院高倉
二条院讃岐
権中納言長方
大納言経信
清輔朝臣
藤原雅経朝臣
信濃
法眼慶算
津守国基
藤原隆信朝臣
太上天皇
源具親
源信明朝臣
右衛門督通具
藤原家隆朝臣
源具親
源具親
寂蓮法師
雅経朝臣
式子内親王
殷富門院大輔
清輔朝臣
皇太后宮大夫俊成女
雅経朝臣
法印幸清
西行法師
皇太后宮大夫俊成
皇太后宮大夫俊成
太上天皇
前大僧正慈円

六三九
六四四
六五二
六六一
六六二
六六三
六六七
六七一
六七三
六七四
六七七
六八二
六八三
六九〇
七〇五
七〇八
七二〇
七三四
七四〇
七四一
七四二
七四三
七四五
七五五
七六四
七六七
七八〇
七八八
七九〇
七九四

志賀の浦や遠ざかりゆく波間より氷りて出づる有明の月
白波に羽根うちかはし浜千鳥かなしきのは夜のひと声
はかなしやさてもいく夜か行く水に数かきわぶるをしのひとり寝
ふればかく憂さのみまさる世を知らで荒れたる庭につもる初雪
さむしろのよはの衣手さえさえて初雪白し岡の辺の松
降りそむるけさだに人の待たれつるみ山の里の雪の夕暮
明けやらぬ寝ざめの床にきこゆなりまがきの竹の雪の下折れ
駒とめて袖うち払ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮
夢かよふ道さへたえぬ呉竹のふしみの里の雪の下をれ
降る雪にたく藻のけぶりかきたえてさびしくもあるか塩釜の浦
雪降れば峯のまさかき埋もれて月にみがける天の香具山
尋ね来て道分けわぶる人もあらし幾重もつもれ庭の白雪
このごろは花もみぢも枝になししな消えそ松の白雪
日数ふる雪げにまさる炭釜のけぶりもさびし大原の里
老いの波越えける身こそあはれなれことしもいまは末の松山
初春の初子のけふのたまははき手に取るからにゆらぐ玉の緒
神無月もみぢも知らぬときは木にろうづ代懸れ峯の白雲
あめのした芽ぐむ草木の目もはるにかぎりもしらぬ御代の末々
高砂の松も昔になりぬべしなほゆくすゑは秋の夜の月
藻塩草かくともつきじ君が代の数によみおく和歌の浦波
うれしさや片敷く袖に包むらんけふ待ちえたる宇治の橋姫
年へたる宇治の橋杜言問はむいくよになりぬ水のみなかみ
八百日ゆく浜の真砂を君が代のかずに取りらなむ沖つ島守
立ち寄ればすずしかりけり水鳥の青羽の山の松のゆふ風
たれもみな花の都に散りはててひとりしぐるる秋の山里
立ちのぼるけぶりをだにも見るべきに霞にまがふ春のあけぼの
別れけむなごりの袖もかわかぬにおきや添ふらむ秋の夕露
たまゆらの露も涙もとどまらずなき人恋ふる宿の秋風
秋深き寝覚めにいかと思ひ出づるはかなく見えし春の夜の夢
ふるさとを恋ふる涙やひとり行く友なき山の道芝の露

藤原家隆朝臣
重之
雅経朝臣
紫式部
式子内親王
寂蓮法師
刑部卿範兼
藤原定家朝臣
藤原有家朝臣
入道前関白太政大臣
皇太后宮大夫俊成
寂然法師
太上天皇
式子内親王
寂蓮法師
読人しらす
清原元輔
式子内親王
寂蓮法師
源家長
前大納言隆房
清輔朝臣
後徳大寺左大臣
式部大輔光範
左京大夫顕輔
前左兵衛督惟方
大弐三位
藤原定家朝臣
殷富門院大輔
前大僧正慈円

七九八
八〇四
八二〇
八二四
八三四
八三六
八六四
八七四
八八三
八八五
八九一
八九二
九二一
九二六
九三〇
九三二
九三四
九三五
九三六
九三九
九四〇
九四一
九四二
九四三
九四四
九四六
九五三
九五七
九五八

ふるさとを別れし秋をかぞふれば八年になりぬ有明の月
神無月しぐるるころもいかなれや空に過ぎにし秋の宮人
見し人のけぶりになりしゆふべより名ぞむつまじき塩釜の浦
夜もすがら昔のこを見つるかな語るやうつつありし世や夢
よもぎふにいつかおおくべき露の身はけふの夕暮あすのあけぼの
尋ね来ていかにあはれとながむらむ跡なき山の峯の白雲
これやさは雲のはたてに織ると聞きたつこと知らぬ天の羽衣
別れ路はいつも歎きの絶えせぬにいとどかなしき秋の夕暮
たれとしも知らぬ別れのかなしきは松浦の沖を出づる舟人
君いなば月待つとてもながめやらむあづまの方の夕暮の空
忘るなよ宿るたもととは変わるともかたみにしぼる夜半の月影
なごり思ふたもとにかねてしられけり別るる旅の行くすゑの露
わぎもこが旅寝の衣うすきほどよきて吹かなむよはの山風
磯馴れぬ心ぞたへぬ旅寝する蘆のまる屋にかかる白波
見し人もとふの浦風音せぬにつれなく澄める秋の夜の月
夏刈りの蘆のかり寝もあはれなり玉江の月の明方の空
言問へよおもひおきつの浜ちどりなくなく出でし跡の月影
野べの露浦わの波をかこちてもゆくへも知らぬ袖の月影
もろともに出でし空こそ忘れね都の山のありあけの月
明けばまた越ゆべき山の峯なれや空行く月の末の白雲
ふるさとのけふの面影さそひ来と月にぞ契る佐夜の中山
忘れじと契りて出でし面影は見ゆらむものをふるさとの月
あづまぢのよはのながめを語らなむ都の山にかかる月影
幾夜かは月をあはれとながめ来て波に折り敷く伊勢の浜荻
知らざりし八十瀬の波を分け過ぎてかた敷く袖は伊勢の浜荻
磯馴れで心もとけぬこもまくらあらくなかけそ水の白波
旅人の袖吹き返す秋風に夕日さびしき山のかげはし
ふるさとに聞きしあらしの声も似ず忘れぬ人を佐夜の中山
ふるさととも秋は夕べを形見とて風のみ送る小野の篠原
いたづらに立つや浅間の夕けぶり里問ひかぬるをちこちの山

久我太政大臣
相摸
紫式部
大江匡衡朝臣
前大僧正慈円
寂蓮法師
寂昭法師
中納言隆家
藤原隆信朝臣
西行法師
藤原定家朝臣
惟明親王
恵慶法師
源師賢朝臣
橘為仲朝臣
皇太后宮大夫俊成
藤原定家朝臣
藤原家隆朝臣
撰政太政大臣
藤原家隆朝臣
藤原雅経朝臣
撰政太政大臣
前大僧正慈円
越前
宜秋門院丹後
権中納言定頼
藤原定家朝臣
藤原家隆朝臣
皇太后宮大夫俊成女
雅経朝臣

九六〇
九六二
九六四
九六七
九六八
九六九
九七四
九八〇
九八二
九八七
九九〇
一〇〇五
一〇三三
一〇三六
一〇五九
一〇七三
一〇七四
一〇七九
一〇八〇
一〇八九
一〇九六
一一〇二
一一〇六
一一〇八
一一一八
一一二八
一一三五
一一三八
一一四二
一一六〇

草まくらゆふべの空を人間はば鳴きても告げよ初雁の声
岩が根の床にあらしをかた敷きてひとりや寝なむ佐夜の中山
枕とていづれの草に契らむ行くをかぎりの野べの夕暮
さらぬだに秋の旅寝はかなしきに松に吹くなりこの山風
忘れなむ待つとな告げそなかなかに因幡の山の峯の秋風
契らねどいひと夜は過ぎぬ清見瀉波に別るあかつきの雲
また越えむ人もとまらばあはれ知れわが折り敷ける峯の椎柴
袖に吹けさぞな旅寝の夢は見じ思ふかたより通ふ浦風
都にもいまやころもを宇津の山夕霜はらふ蔦のした道
年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり佐夜の中山
よそにのみ見てややみなむ葛城や高間の山のみねのしら雲
あらたまの年にまかせて見るよりはわれこそ越えぬ逢坂の関
思ひつつへにける年のかひやなきただあらましの夕暮の空
わが恋は知る人もなしせく床の涙もらすなつげのを枕
霜こほり心もとけぬ冬の池に夜ふけてぞ鳴くをしの一声
梶を絶え由良の湊にゆく舟のたよりもしらぬ沖つ潮風
しるべせよ跡なき波にこぐ舟のゆくへも知らぬ八重の潮風
逢ふまでのみるめ刈るべきかたぞなきまだ波なれぬ磯の海士人
みるめ刈る方やいづくぞ竿さしてわれにをしへよ海女の釣舟
もらさばや思ふ心をさてのみはえぞ山城の井手のしがらみ
うちはへてくるしきものは人目のみしのぶの浦の海女の袴縄
後の世をなげく涙といひなしてしぼりやせまし墨染めの袖
ながめわびそれとはなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕暮の空
山賤の麻のさごろもをさをあらみあはで月日や杉ふける庵
ありとてもあはぬためしの名取川朽ちだにはてね瀬々の埋れ木
たのめおきし浅茅が露に秋かけて木の葉降りしく宿の通い路
わが恋はあふをかぎりのたのみだにゆくへもしらぬ空のうき雲
つれなさのたぐひまでやはつらからぬ月をもめでじ有明の空
としもへぬ祈るちぎりは初瀬山尾上の鐘のよその夕暮
枕だに知らねばいはじ見しままに君かたるなよ春の夜の夢

藤原秀能
藤原有家朝臣
鴨長明
藤原秀能
藤原定家朝臣
藤原家隆朝臣
僧正雅縁
藤原定家朝臣
藤原定家朝臣
西行法師
読人しらず
謙徳公
太上天皇
式子内親王
藤原元真
撰政太政大臣
式子内親王
相摸
業平朝臣
殷富門院大輔
二条院讃岐
大宰大式重家
左衛門督通光
撰政太政大臣
寂蓮法師
前大納言忠良
右衛門督通具
藤原有家朝臣
藤原定家朝臣
和泉式部

一一六三
一一六七
一一七四
一一七六
一一八六
一一八八
一一九三
一一九七
一一九八
一二〇一
一二〇二
一二〇四
一二〇六
一二〇五
一二〇九
一二一三
一二一五
一二一七
一二二〇
一二二一
一二二二
一二二四
一二二五
一二二六
一二二七
一二二八
一二二九
一二八〇
一二八一
一二八二
一二八四
一二八五
一二八六
一二八九

けさよりはいとど思ひをたきまして歎きこりつむ逢坂の山
明けがたき二見の浦による波の袖のみ濡れて沖つ島人
思ひ出でていまは消ぬべし夜もすがらおきうかりつる聞くの上の露
みじか夜の残りすくなくふけゆけばかねてものうきあかつきの空
またも来む秋をたのむの雁だにも鳴きてぞ帰る春のあけぼの
消えかへりあるかなきかのわが身かな恨みて帰る道芝の露
有明は思ひいであれや横雲のただよはれつるしののめの空
たのめずは人を待乳の山なりと寝なましものをいざよひの月
なにゆゑと思ひもいれぬ夕だに待ち出でしものを山の端の月
いか吹く身にしむ色の変わるかなたのむる暮の松風の声
たのめおく人も長等の山にだにさ夜ふけぬれば松風の声
君まつとねやへも入らぬ真木の戸にいたくな更けそ山の端の月
帰るさのものとや人のながむらむ待つ夜ながらの有明の月
枯れにけるあふひのみこそかなしけれあはれと見ずや加茂の瑞垣
更級の山よりほかに照る月もなぐさめかねつこのごろのそら
さしてゆく山の端もみなかきくもり心の空に消えし月影
面影の忘れぬ人によそへつつ入るをぞしたふ秋の夜の月
くもれかしながむるからにかなしきは月におぼゆる人の面影
めぐりあはむ限りはいつと知らねども月なへだてそよその浮雲
恋ひわたる涙や空にくもるらむ光も変わるねやの月影
いくめぐり空ゆく月もへだてきぬ契りし中はよその浮雲
いま来むと契りしことは夢ながら見し夜に似たる有明の月
忘るなよいまは心のかわるともなれしその夜の有明の月
そのままに松のあらしも変らぬを忘れやしぬる更けし夜の月
人ぞうきたのめぬ月はめぐり来てむかし忘れぬ蓬生の宿
わくらばに待ちつるよひも更けにけりさやは契りし山の端の月
松山とちぎりし人はつれなくて袖越す波にのこる月影
ならひこしたがいつはりもまだ知らで待つとせしまの庭の蓬生
あと絶えて浅茅が末になりけりたのめし宿の庭の白露
形見とてほの踏み分けしあともなしこしはむかしの庭の荻原

高倉院御歌
実方朝臣
謙徳公
藤原清正
撰政太政大臣
左大将朝光
西行法師
太上天皇
撰政太政大臣
八条院高倉
鴨長明
式子内親王
藤原定家朝臣
読人しらず
躬恒
読人しらず
肥後
八条院高倉
撰政太政大臣
権中納言公経
左衛門督通光
右衛門督通具
藤原家隆朝臣
法眼宗円
藤原秀能
撰政太政大臣
藤原定家朝臣
皇太后宮大夫俊成女
二条院讃岐
藤原保季朝臣

一四七六
一四八六
一四九二
一四九七
一五〇三
一五〇五
一五〇六
一五〇九
一五一一
一五一二
一五一七
一五二〇
一五二一
一五二四
一五三三
一五三八
一五四三
一五四四
一五四六
一五五〇
一五五二
一五五五
一五五七
一五五九
一五六三
一五七三
一五七五
一五八三
一五九六
一五九七

をりに逢へばこれもさすがにあはれなり小田のかはづの夕暮の声
いく千代とかぎらぬ君が御代なれどなほをしまるるけさのあけぼの
よそへつつ見れど露だになぐさまずいかにかすべきなでしこの花
めぐり逢ひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜はの月影
思ひ出づる人もあらしの山の端にひとりぞ入りし有明の月
夜もすがら浦こぐ船はあともなし月ぞ残れる志賀の唐崎
山の端に思ひも入らじ世の中はとてまかくても有り明の月
心には忘るる時もなかりけり三代の昔の雲の上の月
憂き身世にながらへばなほ思ひ出でよたもとにちぎる有明の月
都にも人や待つらむ石山の峯にのこれる秋の夜の月
月見ばといひしばかりの人は来で真木の戸たたく庭の松風
山の端を出でても松の木のみより心づくしの有明の月
夜もすがらひとりみ山の真木の葉にくもるも澄める有明の月
ながめわびぬ柴のあみ戸の明け方に山の端近くのこる月影
捨つとならば憂き世をいとふしるしあらむわれ見ばくもれ秋のよの月
ながめてもむそぢの秋は過ぎにけり思へばかなし山の端の月
思ひやれなにをしのぶとなけれども都おぼゆる有明の月
有明のおなじながめは君も問へ都のほかも秋の山里
雲をのみつらきものとて明かす夜の月よこずゑにをちかたの山
すだきけむ昔の人は影絶えて宿もるものは有明の月
かもめぬる藤江の浦の沖つすに夜舟いざよふ月のさやけさ
藻塩くむ袖の月影おのづからよそに明かさぬ須磨の浦人
ながめよと思はでしもや帰るらむ月待つなみの海人の釣舟
荒れわたる秋の庭こそあはなれまして消えなむ露の夕暮
葛の葉のうらにかへる夢の世を忘れがたみの野べの秋風
うつろふは心のほかの秋なればいまはよそにぞ菊の上の露
山川の岩ゆく水もこほりしてひとりくだくる峯の上の松風
見し夢をいづれの世ぞと思ふまに折を忘れぬ花のかなしさ
須磨の浦のなぎたる朝は目もはるに霞にまがふ海人の釣舟
秋風の関吹き越ゆる度ごとに声うちそふる須磨の浦波

前大納言忠良
左衛門督家通
恵子女王
紫式部
法印静賢
宜秋門院丹後
藤原盛方朝臣
左近中将公衡
藤原経通朝臣
藤原長能
撰政太政大臣
藤原業清
鴨長明
猷円法師
西行法師
藤原道経
惟明親王
式子内親王
右大将忠経
法橋行遍
神祇伯頭仲
藤原定家朝臣
具親
皇太后宮大夫俊成
皇太后宮大夫俊成女
冷泉院御歌
読人しらず
御形宣旨
藤原孝善
壬生忠見

一五九九
 一六〇一
 一六〇二
 一六〇三イ
 一六〇七
 一六〇九
 一六一〇
 一六一六
 一六一八
 一六二六
 一六二八
 一六三六
 一六四〇
 一六四二
 一六四四
 一六五〇
 一六五一
 一六五四
 一六六三
 一六六四
 一六六六
 一六七三
 一六七四
 一六七五
 一六七九
 一六八三
 一六八九
 一七一五
 一七三〇

人住ぬ不破の関屋の板びさし荒れにし後はただ秋の風
 和歌の浦を松の葉ごしにながむればこずゑに寄する海人の釣舟
 水の江のよしのの宮は神さびてよはひたけたる浦の松風
 いまさらに住みうしとてもいかげせむ灘の塩屋の夕暮の空
 うち寄する波の声にてしるきかな吹上の浜の秋の初風
 見わたせば霞のうちもかすみけりけぶりたなびく塩釜の浦
 けふとてや磯菜つむらむ伊勢島や一志の浦の海人のをとめ子
 花ならでただ柴の戸をさして思ふ心の奥もみ吉野の山
 いとひてもなほいとほしき世なりけり吉野の奥の秋の夕暮
 世の中をそむきにとては来しかどもなほ憂きことは大原の里
 苔の庵さして来つれど君まさで帰るみ山の道の露けさ
 われながら思ふかものをとばかりに袖にしぐる庭の松風
 たれ住みてあはれ知るらむ山里の雨降りすさむ夕暮の空
 かざし折る三輪の繁山かき分けてあはれとぞ思ふ杉立てる門
 嗟峨の山千代の古道あともめてまた露分くる望月の駒
 水上の空に見ゆるは白雲の立つにまがへる布引の滝
 久方の天つをとめが夏ごろも雲居にさらす布引の滝
 真木の板も苔むすばかりなりにけり幾代経ぬらむ瀬田の長橋
 いまはわれ松の柱の杉の庵にとづべきものを苔深き袖
 しきみ摘む山路の露に濡れにけりあかつきおきの墨染の袖
 影やどす露のみしげくなりはてて草にやつるふるさとの月
 岡のべの里のあるじを尋ねれば人は答へず山おろしの風
 古畑のそばのたつ木にゐる鳩の友呼ぶ声のすぎき夕暮
 山がつの片岡かけてしむる野のせかひに立てる玉の小柳
 ふるさとは浅茅が末になりはてて月に残れる人の面影
 いにしへを思ひやりてぞ恋わたる荒れたる宿の苔の岩橋
 流れ木と立つ白波と焼く塩といづれかからきわたつ海の底
 つきもせぬ光のまにもまぎれなで老いて帰れる髪のつれなき
 いにしへの海人やけぶりとなりぬらむ人目もみえぬ塩釜の浦
 うれしきは忘れやはするしのぶ草しのぶるものを秋の夕暮

撰政太政大臣
 寂蓮法師
 正三位季能
 藤原秀能
 祝部成仲
 藤原家隆朝臣
 皇太后宮大夫俊成
 前大僧正慈円
 藤原家衡朝臣
 読人しらず
 恵慶法師
 藤原有家朝臣
 西行法師
 殷富門院大輔
 藤原定家朝臣
 二条関白内大臣
 藤原有家朝臣
 前中納言匡房
 式子内親王
 小侍従
 雅経朝臣
 前大僧正慈円
 西行法師
 西行法師
 撰政太政大臣
 恵慶法師
 菅贈太政大臣
 冷泉院太皇太后宮
 一条院皇后宮
 伊勢大輔

一七三五
一七五三
一七六一
一七七五
一七八五
一七九二
一七九三
一七九四
一八二〇
一八四六
一八四九
一八五〇
一八五四
一八七五
一八七九
一八八〇
一八八一
一八八五
一八八九
一八九一
一八九三
一八九六
一八九九
一九〇五
一九〇八
一九一〇
一九一一
一九一八
一九二二
一九二三
一九三二

露の身の消えばわれこそ先立ためおくれむものか森の小草
いたづらに過ぎにしことや歎かれむ受けがたき身の夕暮の空
君が代に逢へるばかりの道はあれど身をば頼まず行く末の空
書き流すことの葉をだに沈むなよ身こそかくても山川の水
みちのくのいはで忍ぶはえぞ知らぬ書きつくしてよ壺の石文
うきながら久しくぞ世を過ぎにけるあはれやかけし住吉の松
春日山谷のむもれ木くちぬとも君に告げこそ峯の松風
なにとなく聞けば涙ぞこぼれぬる苔のたもとにかよふ松風
うつろはでしばし信太の杜を見よかへりもぞする葛の裏風
世の中を思ひつらねてながむればむなしき空に消ゆる白雲
風早み荻のはごとにおく露のおくれさきだつほどのはかなさ
秋風になびく浅茅の末ごとにおく白露のあはれ世の中
補陀落の南の岸に堂立てていまぞさかえむ北の藤波
ながめばや神路の山に雲消えてゆふべの空を出でむ月影
さやかなる鷺の高根の雲居より影やはらぐる月詠の杜
やはらぐる光にあまる影なれ五十鈴川原の秋の夜の月
立ち帰りましたも見まくのほしきかな御裳濯河の瀬瀬の白波
五十鈴川空やまだきに秋の声したつ岩根の松の夕風
月さゆるみたらし川に影見えて氷にすれる山藍の袖
君を祈る心の色を人問はばただすの宮のあけの玉垣
大御田のうるほふばかりせきかけて井堰に落せ川上の神
けふ祭る神の心やなびくらむしでに波立つ佐保の川風
千代までも心して吹けもみぢ葉を神も小塩の山おろしの風
さめぬれば思ひあはせてねをぞ泣く心づくしのいにしへの夢
熊野川くだす早瀬のみなれ棹さすがみなれぬ波のかよひ路
岩代神は知るらむしるべせよ頼む憂き世の夢のゆくすゑ
ちぎりあればうれしきかかるとか歎く世の中はただ朝顔の花の上の露
なにか思ふなにとか歎く世の中はただ朝顔の花の上の露
しるべある時にだにゆけ極楽の道にまどへる世の中の人
願はくはしばし闇路にやすらひてかかげやせまし法の燈火

小馬命婦
前大僧正慈円
雅経朝臣
藤原行能
前右大将頼朝
皇太后宮大夫俊成
藤原家隆朝臣
宜秋門院丹後
赤染衛門
皇太后宮大夫俊成
中務卿具平親王
蟬丸
神祇歌
太上天皇
西行法師
前大僧正慈円
中院入道右大臣
大中臣明親
皇太后宮大夫俊成
前大僧正慈円
賀茂幸平
入道前関白太政大臣
藤原伊家
前大僧正慈円
太上天皇
読人しらす
太上天皇
积教歌
智証大師
前大僧正慈円

一九三五
一九三七
一九三八
一九三九
一九四五
一九四七
一九五二
一九五五
一九六一
一九六三
一九六五
一九六八
一九六九

わがこころなほ晴れやらぬ秋霧にほのかに見ゆる有明の月
色にのみそめし心のくやしきをむなしと説ける法のうれしさ
むらさきの雲路にさそふ琴の音に憂き世をはらふ峯の松風
これやこの憂き世のほかの春ならむ花のとぼそのあけぼのの空
おしなべてむなしき空と思ひしに藤咲きぬればむらさきの雲
朝日さす峯のつづきは芽ぐめどもまだ霜深し谷の陰草
道のべのほたるばかりをしるべにてひとりぞ出づる夕闇の空
闇深き木のもとごとくに契りおきて朝立つ霧のあとの露けさ
別れにしその面影の恋しきに夢にも見えよ山の端の月
浮草の一葉なりとも磯がくれ思ひなかけそ沖つ白波
花のもと露のなさはほどもあらし酔ひなすすめそ春の山風
いまぞこれ入日を見ても思ひこし弥陀の御国の夕暮の空
いにしへの尾上の鐘に似たるかな岸打つ波のあか月の声

権僧正公胤
小侍従
寂蓮法師
寂蓮法師
前大僧正慈円
先照高山
寂然法師
寂然法師
寂然法師
寂然法師
寂然法師
寂然法師
皇太后宮大夫俊成
皇太后宮大夫俊成

資料 ⑤ 体言止めを使う歌人

藤原良経・二六首

- 二二三 　そらは猶かすみもやらす風さえて雪げにくもる春のよの月
 六一 　わするなよたのむのさは立つかりもいなばの風の秋の夕暮
 一三六 　さそはれぬ人のためとやのこりけむあすよりさきの花の白雪
 一七四 　あすよりはしがの花ぞのまれにだにたれかは問はむ春のふる里
 二二〇 　うちしめりあやめぞかをる時鳥鳴くやさ月の雨のゆふぐれ
 二二六 　小山田にひくしめなはのうちはへてくちやしぬらむ五月雨の比
 二六〇 　かさねてもすずしかりけり夏衣うすき袂にやどる月かけ
 二七三 　ほたるとぶのざはにしげるあしのねのよなよなしたにかよふ秋かぜ
 三五六 　をぎの葉に吹けばあらしの秋なるをまちける夜はのさをしかのこゑ
 三五七 　おしなべておもひしことのかずかずに猶色まさる秋の夕ぐれ
 三五九 　もの思はでかかる露やは袖におくながめてけりな秋の夕ぐれ
 四二二 　ゆくすゑは空もひとつの武蔵野に草の原よりいづる月かけ
 四四四 　たぐへくる松の嵐やたゆむらん尾上にかへるさをしかの声
 九四一 　わすれじとちぎりていでし面かけはみゆらんものを古郷の月
 九三六 　もるともいでし空こそわすられね都の山の在明の月
 一一〇八 　山がつのあさのさ衣をさをあらみあはで月日やすぎふけるいほ
 一一八六 　又もこむ秋をたのむのかりだにもなきてぞかへる春のあけぼの
 一一九八 　なにゆゑとおもひもいれぬ夕だにまちいでしものを山のはの月
 一二七二 　めぐりあはむかぎりはいつとしらねども月なへだてそよそのうき雲
 一二八二 　わくらばにまちつるよひもふけにけりさやはちぎりし山のはの月
 一三〇四 　おもひかねうちぬるよひもありなましふきだにすさべ庭の松かぜ
 一三一〇 　いつもきく物とや人のおもふらんこぬゆふぐれの秋風の声
 一五一七 　月見ばといひしばかりの人はこで楨の戸たたく庭の松かぜ
 一五九九 　人すまぬふはの関屋のいたびさしあれにし後はただ秋のかぜ
 一六七九 　古郷は浅茅がすゑに成りはてて月にのこれる人の面影
 一〇七三 　かぢをたえゆらのみなどによるふねのたよりもしらぬおきつしほかぜ

慈円・二五首

- 三三 天の原ふじのけぶりの春の色のかすみになびくあけぼのの空
二五一 うかひぶねあはれとぞみるものふのやそうぢ川の夕やみの空
二八二 夏衣かたへすずしくなりぬなり夜やふけぬらむ行あひの空
三五二 身にとまる思ひををぎのうはばにてこの比かなし夕暮のそら
三六〇 深山ぢやいつより秋の色ならむ見ざりし雲の夕ぐれの空
三九〇 ふけゆかば煙もあらじしほがまのうらみなはてそ秋のよの月
四〇四 うき身にはながむるかひもなかりけり心にくもる秋のよの月
五〇三 おほえ山かたぶく月の影さえてとばたの面におつるかりがね
五二〇 秋ふかきあはぢの島の有明にかたぶく月をおくるうらかぜ
六三七 あじろ木にいざよふ浪のおとふけてひとりやねぬる宇治の橋姫
七九四 古郷をこふる涙やひとり行くともなき山のみちしばの露
八三四 よもぎふにいつかおおくべき露の身はけふの夕暮あすのあけぼの
九四二 あづまぢのよはのながめをかたらなん都の山にかかる月影
一三一 心あらばふかずもあらなんよひよひに人まつ宿の庭のまつ風
一三二 我が恋はにはのむらはぎうらがれて人をも身をも秋のゆふぐれ
一三七 心こそゆくへもしらねみわの山すぎのこずゑのゆふぐれのそら
一三八 野辺の露は色もなくてやこぼれつる袖より過ぐる萩のうは風
一六一 花ならでただ柴の戸をさして思ふ心の奥もみよしの山
一七五三 三岡のべの里のあるじを尋ぬれば人はこたへず山おろしのかぜ
一八八〇 いたづらにすぎにし事や歎かれんうけがたき身の夕暮の空
一八九一 やはらぐる光にあまる影なれやいすずがはらの秋のよの月
一九〇五 君をいのる心の色を人とはばただすの宮のあけの玉がき
さめぬればおもひあはせてねをぞなく心づくしのいにしへの夢

式子内親王・二三首

- 三 山ふかみ春ともしらぬ松のとにたえだえかかる雪の玉水
一八二 わすれめやあふひを草にひきむすびかりねののべの露の曙
二一五 こゑはして雲ぢにむせぶ時鳥涙やそくよひのむらさめ
二四〇 かへりこぬむかしをいまとおもひねの夢の枕にほふ橘

二五六 まどちかき竹のはすさぶ風のおとにいとどみじかきうたたねの夢
 二六八 夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山にひぐらしの声
 三〇八 うたたねのあさけの袖にかはるなりならずあふぎの秋のはつ風
 三二一 ながむれば衣手すずしひさかたの天の河原の秋の夕ぐれ
 四一七 ふくるまでながむればこそかなしけれおもひもいれじ秋のよの月
 四三二 秋の色はまがきにとくなり行けど手枕なるるねやの月かけ
 四七四 あともなき庭のあさぢにむすほれ露のそなる松虫の声
 四八五 ふけにけり山のはちかく月さえてとをちの里に衣うつこゑ
 六〇五 風さむみ木のは晴行くよなよなに残るくまなきにはの月影
 六六二 さむしろの夜はの衣手さええてはつ雪しろしをかのべの松
 六九〇 ひかすふる雪げにまさる炭がまの煙もさむしおほ原の里
 七三四 あめのしためぐむくさ木のめも春にかぎりもしらぬみよの末末
 一〇三六 我がこひはしる人もなしせくとこの涙もらすなつげのをまくら
 一〇七四 しるべせよ跡なきなみにこぐふねのゆくへもしらぬやへのしほかぜ
 一一〇四 君まつとねやへもいらぬまきのとにいたくなふけそ山のはの月
 一一〇九 今はただ心のほかにきくものをしらずがほなるをぎのうはかぜ
 一五四四 有明のおなじながめは君もとへ都の外も秋の山ざと
 一六六三 今はわれ松のはしらの杉のいほにとづべきものを苔深き袖

藤原家隆・二一首

一七 谷河のうちいづる浪もこゑたてつ鶯さそへ春の山かぜ
 三七 霞たつすゑの松山ほのぼのと波にはなるる横雲の空
 八二 おもふどちそこともしらず行きくれぬ花のやどかせのべの鶯
 一三九 さくら花ゆめかうつつか白雲のたえてつねなき峰の春風
 二一四 いかにせんこぬよあまたの時鳥またじとおもへばむら雨の空
 二九二 あけぬるか衣手さむしすが原やふしみの里の秋のはつ風
 三七六 有明の月まつやどの袖のうへに人だのめなるよひのいなづま
 三九二 ながめつつおもふもさびし久方の月の都のあけがたの空
 四〇三 秋の夜の月やをじまのあまのはらあけがたちかきおきのつりぶね
 五九五 ながめつついくたび袖にくもるらむ時雨にふくる有明の月

六三九 しがのうらやとほざかり行く浪間よりこほりて出づるあり明の月
 九三五 野辺の露うらわの浪をかこちても行へもしらぬ袖の月かげ
 九三九 あげば又こゆべき山のみねなれや空行く月の末のしら雲
 九五四 故郷にききし嵐のこゑもにずわすれぬ人をさやの中山
 九六九 ちぎらねど一夜はすぎぬきよみがた浪にわかるるあか月の雲
 一二七九 わするなよいまは心のかはるともなれしそのよの有明の月
 一二九四 おもひいでよたがかねごとのすゑならむきのふの雲の跡の山かぜ
 一三二五 しられじなおなじ袖にはかよふともたがゆふぐれとたのむ秋かぜ
 一三三七 おもひいる身はふかくさの秋の露たのめしすゑや木枯のかぜ
 一六〇九 見わたせば霞のうちもかすみけり煙たなびくしほがまのうら
 一七九三 春日山谷のむもれ木くちぬとも君につげこせ峰の松かぜ

藤原定家・二一首

三八 春の夜のゆめのうき橋とだえして峰にわかるる横雲のそら
 四〇 おほ空はむめのにほひにかすみつつくもりもはてぬ春のよの月
 二三二 たまほこの道行びとのことづてもたえてほどふる五月雨のそら
 三六三 見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮
 四二〇 さむしろや待つよの秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫
 四八七 ひとりぬる山鳥のをのしだりをに霜おきまよふ床の月かげ
 六七一 こまとめて袖うちらはらふかげもなしさのわたりの雪の夕暮
 七八八 玉ゆらの露も涙もとどまらずなき人こふるやどのあきかぜ
 八九一 わするなよやどるたもとはかはるともかたみにしぼる夜はの月影
 九三四 こととへよおもひおきつの浜ちどりなくいでし跡の月かげ
 九五三 旅人のそで吹きかへす秋風にゆふ日さびしき山のかけはし
 九六八 わすれなむまつとなつげそ中中にいなばの山のみねの秋かぜ
 九八〇 そでにふけさぞなたびねの夢はみじ思ふかたよりかよふ浦かぜ
 九八二 宮こにもいまや衣をうつ山の山夕しも払ふつたのしたみち
 一一四二 としもへぬいのるちぎりははつせ山をのへのかねのよそのゆふぐれ
 一二〇六 かへるさのものとや人のながむらんまつ夜ながらの有明の月
 一二八四 松山とちぎりし人はつれなくて袖こすなみにのこる月かげ

一二九一 わすれずはなれし袖もやこほるらんねぬよのこの霜のさむしろ
一三二〇 きえわびぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしのもりのした露
一五五五 もしほくむ袖の月かげおのづからよそにあかさぬすまのうら人
一六四四 さがの山千代のふるみち跡とめて又露わくるもち月の駒

寂蓮・二〇首

五八 いまはとてたのむの雁もうちわびぬおぼる月よのあけぼのの空
八七 かづらきやたかまの桜さきにけり立田のおくにかかる白雲
一五四 おもひたつとりはふるすもたのむらんなれぬる花の跡の夕暮
一五五 ちりにけりあはれうらみのたれなれば花のあととふはるの山かぜ
一六九 くれて行く春のみなどはしらねども霞におつる宇治のしばぶね
二五二 うかひ舟たかせさしこすほどなれやむすぼほれ行くかがり火の影
三六一 さびしさはその色としもなかりけり楨立つ山の秋の夕ぐれ
四三九 野分せし小野の草ぶしあれはてて深山にふかきさを鹿の声
四九一 むらさめのつゆもまだひぬ楨のはに霧立ちのぼる秋の夕暮
五九九 たえだえに里わく月のひかりかな時雨をかくる夜はのむら雲
六六三 ふりそむるけさだに人のまたれつる深山のさとの雪の夕暮
七〇五 おいのなみこえける身こそあはれなれことしも今は末の松山
七四〇 たかさごの松もむかしに成りぬべし猶ゆくすゑは秋のよの月
八三六 尋ねきていかにあはれとながむらむあとなき山の峰のしら雲
一一一八 ありとてもあはぬためしなのとり河くちだにはてねせぜの埋木
一三〇二 うらみわびまたじいまはの身なれどもおもひなれにしゆぶぐれの空
一三二一 こぬ人を秋のけしきやふけぬらむうらみによわる松虫の声
一六〇一 和歌の浦を松のはごしにながむれば杪によするあまのつり舟
一九三八 むらさきの雲ちにさそふことのねにうき世をはらふ嶺の松風
一九三九 これやこのうきよのほかの春ならむ花のとぼそのあけぼののそら

藤原俊成・一八首

五九 きく人ぞ涙はおつる帰る雁なきて行くなる曙の空
一〇〇 いくとせの春に心をつくしきぬあはれと思へみよしの花

一一四 またやみむかたののみの桜がり花の雪ちる春のあけぼの
 一五九 こまとめてなほ水かはむ款冬の花の露そふゐでの玉川
 二〇一 むかしおもふくさのいほりのよるの雨に涙なそへそ山時鳥
 二二一 けふは又あやめのねさへかけそへてみだれぞまさる袖のしら玉
 三二〇 たなばたのとわたる船のかぢのはにいく秋かきつ露の玉づさ
 六三一 かつこほりかつはくだくる山川のいはまにむすぶあか月のこゑ
 六三四 水上やたえだえこほる岩間よりきよたき河に残るしら浪
 六七七 雪ふれば峰のまさかきうづもれて月にみがけるあまのかぐ山
 九三二 夏かりのあしのかりねもあはれなりたまえの月の明がたの空
 一五五九 あれわたる秋の庭こそ哀なれまして消えなん露の夕ぐれ
 一六一〇 今日とてや礪なつむらむ伊勢島やいちしの浦のあまのをとめご
 一七九二 うきながらひさしくぞ世をすぎにけるあはれやかけし住吉の松
 一八四六 世中をおもひつらねてながむればむなしき空にきゆるしら雲
 一八八九 月さゆるみたらし河に影みえてこほりにする山あゐの袖
 一九六八 いまぞこれ入日をも思ひこし弥陀のみにくのゆふぐれの空
 一九六九 いにしへの尾上の鐘ににたるかな岸うつ浪のあか月のこゑ

西行・一七首

二七 ふりつみしたかねのみゆきとけにけりきよ滝川の水の白なみ
 二一七 きかずともここをせにせむ時鳥山田の原のすぎのむら立
 二六三 よられつる野もせの草のかげろひてすずしくもる夕立の空
 二九九 おしなべて物をおもはぬ人にさへ心をつくる秋のはつかぜ
 三〇〇 あはれいかにくさばの露のこぼるらむ秋風たちぬみやぎの原
 三六二 こころなき身にもあはれはしられけりしぎたつ沢の秋の夕暮
 五〇一 よこ雲の風にわかるるしののめに山とびこゆるはつかりのこゑ
 六二七 さびしさにたへたる人のまたもあれないほりならべむ冬の山里
 八八五 きみいなば月待つとてもながめやらむあづまのかたの夕暮の空
 九八七 としたけて又こゆべしとおもひきや命なりけりさやの中山
 一一九三 有明はおもひいであれやよこ雲のただよはれつるしののめのそら
 一三〇七 あはれとてとふ人のなどなかるらん物おもふやどの萩のうはかせ

一五三三 すすとならばうきよをいとふしるしあらむわれみばくもる秋のよの月
一六四〇 誰すみてあはれしるらむ山ざとの雨ふりすさむ夕暮の空
一六七四 ふるはたのそはの立木にゐる鳩のともよぶ声のすごきゆふ暮
一六七五 山がつの片岡かけてしむるのの堺にたてる玉のを柳
一八七九 さやかなるわしのたかねの雲ぬよりかげやはらぐる月よみのもり

藤原雅経・一六首

九三 いはねふみかさなる山をわけすて花もいくへのあとのしら雲
九四 たづねきて花にくらせる木のまよりまつとしもなき山のはの月
一四五 花さそふ名残を雲にふきとめてしばしはにほへ春の山風
一九四 おのがつま恋ひつなくや五月やみ神なび山の山ほととぎす
三六一 たへてやおもひありともいかがせむむぐらのやどの秋の夕ぐれ
五六一 うつりゆく雲に嵐のこゑすなり散るかまさきのかづらきの山
六〇四 秋の色をはらひはててや久方の月のかつらに木がらしの風
六一〇 かげとめし露のやどりを思ひ出でて霜にあととふあさぢふの月
六五二 はかなしやさてもいくよか行く水にかずかきわぶるをしのひとりね
九四〇 故郷のけふの面かげさそひこと月にぞちぎるさよのなかな山
九五八 いたづらに立つやあさまのゆふ煙さととひかぬるをちこちの山
一三一五 草枕むすびさだめむかたしらずならはぬのべのゆめのかよひぢ
一三三三 見し人の面影とめよ清見がた袖にせきもる波のかよひぢ
一四五五 なれなれてみしは名残の春ぞともなどしら河の花の下かげ
一六六六 かげやどす露のみしげく成りはてて草にやつるる古郷の月
一七六一 君が代にあへるばかりのみちは有れど身をばたのまず行末の空

後鳥羽院・一四首

一八 鶯のなけどもいまだふる雪に杉の葉しろき逢坂の山
一三三 みよしののたかねのさくら散りにけりあらしもしろき春のあけぼの
二三六 ほととぎす雲ぬのよそにすぎぬなりはれぬ思ひの五月雨の比
二七九 山ざとのみねのあまぐもとだえして夕すずしき槇のしたつゆ
四九二 さびしきは深山の秋のあさぐもり霧にしをるる槇の下露

五一七 秋ふけぬなけや霜よのきりぎりすややかげさむしよもぎふの月
五八一 ふかみどりあらそひかねていかならむまなく時雨のふるの神すぎ
六三六 はしひめのかたしき衣さむしろに待つよむなしき宇治の曙
六八三 この比は花も紅葉も枝になししばしな消えそ松のしら雪
一〇三三 おもひつつへにけるとしのかひやなきただあらましの夕ぐれのそら
一一九七 たのめずは人をまつちの山なりとねなましものをいざよひの月
一八七五 ながめばや神ぢの山に雲きえてゆふべの空を出でむ月かげ
一九〇八 くまの川くだすはやせのみなれさをさすのみなれぬ浪のかよひち
一九一一 ちぎりあればうれしきかかるをりにあひぬわするな神も行末の空

藤原俊成女・一三首

四七 梅の花あかぬ色かもむかしにておなじかたみの春の夜の月
一一二 風かよふねぎめのそでの花のかにかをるまくらの春の夜の夢
一七九 をりふしもうつればかへつ世中の人のこころの花ぞめの袖
三七五 おほあらしきのもりの木のまをもりかねて人だのめなる秋のよの月
四二九 あくがれてねぬよのちりのつもるまで月にはらはぬ床のさむしろ
五〇五 ふきまよふ雲井をわたるはつかりのつばさにならす夜はの秋風
五一四 あだに散る露の枕にふしわびてうづら鳴くなりこの山かぜ
五一五 問ふ人もあらし吹きそふ秋はきてこの葉にうづむやどのみちしば
六〇八 さえわびてさむる枕にかげみれば霜ふかきよの有明の月
九五七 古郷も秋はゆふべをかたみとて風のみおくるをのしのはら
一二八五 ならひこしたがいつはりもまだしらでまつとせしまの庭のよもぎふ
一三二六 露はらふねざめは秋のむかしにて見はてぬ夢にのこる面かげ
一五六三 葛の葉の恨にかへる夢のよをわすれがたみの野べの秋かぜ

藤原有家・八首

二六一 せずしさは秋やかへりてはつせがはふるかはのべのすぎの下かげ
三七七 風わたるあさぢがすゑの露にだにやどりもはてぬよひのいなづま
六七三 夢かよふみちさへたえぬ呉竹のふしみの里の雪の下をれ
九六二 岩がねのところに嵐をかたしきてひとりやねなんさよの中山

一一三八 つれなさのたぐひまでやはつらからぬ月をもめでし有明の空
一四三六 山陰やさらでは庭に跡もなし春ぞきにける雪のむら消
一六三六 われながら思ふか物をとばかりに袖にしぐる庭の松かぜ
一六五一 ひさかたのあまつをとめが夏衣雲井にさらす布引のたき

源通具・六首

二三九 ゆくすゑをたれしのべとて夕風に契りかおかむやどのたちばな
三七四 ふかくさのさとの月かげさびしさもすみこしままの野べの秋風
四二四 秋のよはやどかる月も露ながら袖に吹きこす荻のうは風
五九四 霜こほる袖にもかげは残りけり露よりなれし有明の月
一一三五 我がこひはあふをかぎりのたのみだにゆくへもしらぬ空のうき雲
一二七六 今こむとちぎりしことは夢ながら見しよににたる有明の月

鴨長明・六首

三六六 秋風のいたりいたらぬ袖はあらじただわれからの露の夕ぐれ
三九七 ながむればちぢに物おもふ月に又我が身ひとつのみねの松かぜ
九六四 枕とていづれの草にちぎるらん行くをかぎりののべの夕暮
一二〇二 たのめおく人もながらの山にだにさよふけぬればまつ風の声
一三一八 ながめてもあはれとおもへおほかたの空だにかなし秋の夕ぐれ
一五二一 夜もすがらひとり深山の槇の葉にくもるもすめる有明の月

宮内卿・六首

七六 うすくこき野辺のみどりの若草に跡までみゆる雪のむら消
一二九 あふ坂やこずゑの花を吹くからに嵐ぞかすむ関の杉むら
一七三 しばのとをさすやひかげのなごりなく春くれかかる山のはの雲
四二三 月をなほまつらむものかむらさめの晴行く雲の末のさと人
四七九 まどろまでながめよとのすさびかなあさのさ衣月にうつ声
五〇七 しもを待つ籬の菊のよひのまにおきまよふいろは山のはの月

源具親・六首

一二一 時しもあれたのむのかりのわかれさへ花ちる比のみよしの里
二九五 しきたへの枕のうへにすぎぬなり露をたづぬる秋の初かぜ
五八七 いまは又ちらでもまがふ時雨かなひとり行く庭の松風
五九七 いまよりは木のはがくれもなけれども時雨に残るむら雲の月
五九八 はれくもるかげをみやこにさきだてて時雨とつぐる山のはの月
一五五七 ながめよとおもはでしもやかへるらむ月まつなみの海人のつり舟

源通光・六首

三五一 あけぬとて野べより山にいる鹿のあと吹きおくる萩の下かぜ
四一二 たつた山よはにあらしのまつ吹けば雲にはうとき峰の月かげ
四三四 さらに又くれをたのめとあけにけり月はつれなき秋のよのそら
四九三 あけぼのや河せの浪のたかせぶねくだすか人の袖の秋ぎり
一一〇六 ながめわびそれとはなしにもものぞおもふ雲のはたてのゆふぐれの空
一二七五 いくめぐりそらく月もへだてきぬちぎりしなかはよそのうき雲

寂然・六首

六八二 尋ねきてみちわけわぶる人もあらしいくへもつもれ庭の白雪
一九五二 道のべのほたるばかりをしるべにてひとりぞいづるゆふやみのそら
一九五五 やみふかきこのもとごとくに契りおきてあさたつ霧のあとのつゆけさ
一九六一 別れにしその面かげの恋しきに夢にもみえよ山のはの月
一九六三 うき草のひとはなりとも磯がくれ思ひなかけそおきつしら波
一九六五 花のもとつゆのなさはほどもあらしゑひなすすめそ春の山かぜ

二条院讚岐・六首

一三〇 山たかみ嶺のあらしにちる花の月にあまぎるあけがたの空
二七一 なくせみのこゑもせずしき夕暮に秋をかけたるもりの下露
四三五 おほかたに秋のねざめの露けくは又たが袖に有明の月
五四〇 散りかかる紅葉の色はふかけれどわたればにぐる山川の水
一〇九六 うちはへてくるしき物は人めのみしのぶのうらのあまのたくなは

一二八六 跡たえてあさぢがすゑになりけりたのめしやどの庭の白露

殷富門院大輔・六首

七三 春かぜのかすみ吹きとくたえまよりみだれてなびく青柳のいと
四一五 ながめつつおもふもぬるるとかかないくよかはみむ秋のよの月
六〇六 我がかどのかり田のねやにふすしぎの床あらはなる冬のよの月
七九〇 秋ふかきねざめにいかか思ひいづるはかなく見えし春のよの夢
一〇八九 もらさばやおもふ心をさてのみはえぞ山しろのゐでのしがらみ
一六四二 かざしをる三輪のしげ山かきわけてあはれとぞおもふ杉たてる門

公経・五首

二一六 ほととぎす猶うとまれぬ心かなながなく里のよその夕ぐれ
二六五 露すがるにはの玉ざさうちなびきひとむらすぎぬ夕立の雲
三二三 星逢のゆふべすずしき天の川もみぢのはしをわたる秋かぜ
四七七 衣うつねやまのいほのしばしもしらぬゆめぢにむすぶ手枕
一二七四 こひわたるなみだやそらくもるらんひかりもかはるねやの月かげ

藤原秀能・五首

二六 ゆふづく夜しほみちくらしなには江のあしのわかばにこゆる白波
九六〇 草まくらゆふべのそらを人間はばなきてもつげよ初雁の声
九六七 さらぬだに秋の旅ねはかなしきに松にふくなりこの山風
一二八一 人ぞうきたのめぬ月はめぐりきてむかしわすれぬよもぎふのやど
一六〇三イ 今さらすすみうしともいかならむなだのしほ屋の夕暮の空

惠慶・四首

四六三 秋といへばちぎりおきてやむすぶらむあさぢが原のけさの白露
九二一 わぎもこがたびねの衣うすきほどよきてふかなむよはの山かぜ
一六二八 苔のいほりさしてきつれど君まさで帰るみやまの道の露けさ
一六八三 いにしへを思ひやりてぞこひわたるあれたるやどの苔の石ばし

相摸・四首

二〇三 きかでただねなましものをほととぎす中中なりやよはの一こゑ
八〇四 神無月しぐるるころもいかなれや空にすぎにし秋の宮人
一〇七九 あふまでのみるめかるべきかたぞなきまだ浪なれぬいそのあま
一三五三 いなづまはてらさぬよひもなかりけりいづらほのかにみえしかげろふ

藤原兼実・四首

二八〇 いは井くむあたりのをざさ玉こえてかつがつむすぶ秋の夕露
三二二 いかばかり身にしみぬらむ七夕のつままつよひの天の河かぜ
六七四 ふるゆきにたくもの煙かきたえてさびしくもあるかしほがまのうら
一八九六 けふまつる神の心やなびくらむしでに浪立つさほの河風

藤原実定・四首

三五 ながのうみのかすみのまよりながむればいる目をあらふおきつしらなみ
一四一 はかなさを外にもいはじ桜花さきては散りぬあはれ世中
二八八 いつもきくふもとの里とおもへども昨日にかはる山おろしのかぜ
七四五 やほか行く浜のまさごを君が代の数にとらなんおきつしまもり

惟明親王・三首

四四二 深山辺の松のこずゑをわたるなり嵐にやどすさをしかの声
八九二 なごりおもふたもとにかねてしられけりわかるる旅の行末の露
一五四三 おもひやれなにを忍ぶとなけれども都おぼゆる有明の月

宜秋門院丹後・三首

九四四 しらざりしやそせの浪をわけすぎてかたしく物はいせの涙をぎ
一五〇五 夜もすがら浦こぐ舟は跡もなし月ぞのこれる志賀の辛崎
一七九四 なにとなく聞けば涙ぞこぼれぬる苔のたもにかよふまつ風

紫式部・三首

六六一 ふればかくうさのみまさる世をしらであれたる庭につもるはつ雪

八二〇 　　みし人の煙になりし夕よりなぞむつまじきしほがまの浦
一四九七 　　めぐりあひてみしやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かげ

菅原道真・三首

四六一 　　草ばにはたまと見えつつわび人の袖の涙の秋のしらつゆ
一四四〇 　　谷ふかみ春の光のおそければ雪につつめる鶯の声
一六九九 　　ながれ木とたつしらなみとやくしほといづれかからきわたつみのそこ

藤原清輔・三首

五五八 　　おのづからおとする物は庭の面に木の葉ふりしく谷の夕かぜ
六〇七 　　冬がれのもりのくちばの霜の上におちたる月の影のさむけさ
七四三 　　年へたる宇治の橋もりこととはんいくよに成りぬ水のみなかみ

藤原忠良・三首

二六九 　　ゆふづくひさすやいほりのしぼのとにさびしくもあるかひぐらしの声
一一二八 　　たのめおきしあさぢが露に秋かけて木葉ふりしくやどのかよひぢ
一四七六 　　をりにあへばこれもさすがにあはれなり小田のかはづの夕暮の声

八条院高倉・三首

五二五 　　神なびのみむろのこずゑいかならむなべて野山も時雨する比
一一〇一 　　いかかふく身にしむ色のかはるかなたのむるくれの松かぜのこゑ
一二七〇 　　くもれかしながむるからにかなしきは月におぼゆる人の面影

資料⑥ 体言止として使われる言葉

① 天象二一六首（四六・八%）

三	ゆきのたまみづ	七六	ゆきのむらきえ	二二六	さみだれのころ
一〇	はるのあはゆき	八七	かかるしらくも	二二七	ころのさみだれ
一三	ゆきのむらぎえ	九三	あとのしらくも	二三二	さみだれのそら
一七	はるのやまかぜ	九七	はるのあけぼの	二三六	さみだれのころ
二二	まだきえぬゆき	一一四	はるのあけぼの	二五一	ゆふやみのそら
二三	はるのよのつき	一一八	ゆきのむらぎえ	二六〇	やどるつきかげ
二六	こゆるしらなみ	一三〇	あけがたのそら	二六三	ゆふだちのそら
二七	みづのしらなみ	一三三	はるのあけぼの	二六五	ゆふだちのくも
三三	あけぼののそら	一四四	はるのやまかぜ	二七三	かよふあきかげ
三七	よこぐものそら	一四五	はるのやまかぜ	二七四	あきのゆふかげ
三八	よこぐものそら	一五四	あとのゆふぐれ	二八〇	あきのゆふつゆ
四〇	はるのよのつき	一五五	はるのやまかぜ	二八二	ゆきあひのそら
四七	はるのよのつき	一八二	つゆのあけぼの	二八八	やまおろしのかぜ
五六	はるのよのつき	二一四	むらさめのそら	二九二	あきのはつかぜ
五八	あけぼののそら	二一五	よひのむらさめ	二九五	あきのはつかぜ
五九	あけぼののそら	二一六	よそのゆふぐれ	二九六	あきのはつかぜ
六一	あきのゆふぐれ	二二〇	あめのゆふぐれ	二九九	あきのはつかぜ

三六六	三六四	三六三	三六二	三六一	三六〇	三五九	三五七	三五二	三五一	三四七	三三四	三二六	三二三	三二二	三二一	三一九	三一七	三一	三〇八
つゆのゆふぐれ	あきのゆふぐれ	あきのゆふぐれ	あきのゆふぐれ	あきのゆふぐれ	ゆふぐれのそら	あきのゆふぐれ	あきのゆふぐれ	ゆふぐれのそら	はぎのしたかぜ	あきのゆふぐれ	おけるしらつゆ	おけるしらつゆ	わたるあきかぜ	あまのかはかぜ	あきのゆふぐれ	あきのはつかぜ	あまのかはなみ	あきのはつかぜ	あきのはつかぜ
五〇四	四九一	四六三	四六一	四四三	四三五	四三四	四二二	四二一	四一七	四一五	四一三	四〇四	三九二	三九〇	三八五	三八三	三七七	三七六	三七五
すめるつきかげ	あきのゆふぐれ	けさのしらつゆ	あきのしらつゆ	あきのゆふぐれ	ありあけのつき	あきのよのそら	いづるつきかげ	ありあけのつき	あきのよのつき	あきのよのつき	かげのさやかさ	あきのよのつき	あけがたのそら	あきのよのつき	あきのよのつき	ゆみはりのつき	よひのいなづま	よひのいなづま	あきのよのつき
六六三	六六一	六三九	六三四	六三一	六〇八	六〇七	六〇六	六〇四	五九九	五九七	五九五	五九四	五九一	五六九	五六三	五四二	五二五	五二〇	五〇五
ゆきのゆふぐれ	つもるはつゆき	ありあけのつき	のこるしらなみ	あかつきのこゑ	ありあけのつき	かげのさむけさ	ふゆのよのつき	こがらしのかぜ	よはのむらぐも	むらぐものつき	ありあけのつき	ありあけのつき	やまおろしのかぜ	こがらしのかぜ	あらしふくころ	こがらしのかぜ	しぐれするころ	おくるうらかぜ	よものあきかぜ

六六七	ゆきのしたをれ	九三四	あとのつきかげ	一二〇二	まつかぜのこゑ
六七一	ゆきのゆふぐれ	九三六	ありあけのつき	一二〇六	ありあけのつき
六七三	ゆきのしたをれ	九三九	すゑのしらくも	一二五九	このころのそら
六八二	にはのしらゆき	九四二	かかるつきかげ	一二六三	きえしつきかげ
七二〇	みねのしらくも	九四六	みづのしらなみ	一二六五	あきのよのつき
七四〇	あきのよのつき	九六四	のべのゆふぐれ	一二七二	よそのうきぐも
七四三	みづのみなみ	九六九	あかつきのくも	一二七四	ねやのつきかげ
七五五	まつゆふかぜ	九八〇	かよふうらかぜ	一二七五	よそのうきぐも
七六七	はるのあけぼの	一〇三三	ゆふぐれのそら	一二七六	ありあけのつき
七八〇	あきのゆふつゆ	一〇七三	おきつしほかぜ	一二七九	ありあけのつき
七九八	ありあけのつき	一〇七四	やへのしほかぜ	一二八〇	ふけしよのつき
八三四	あすのあけぼの	一一〇六	ゆふぐれのそら	一二八四	のこるつきかげ
八七四	あきのゆふぐれ	一一三五	そらのうきくも	一二九四	あとのやまかぜ
八八五	ゆふぐれのそら	一一三八	ありあけのそら	一三〇二	ゆふぐれのそら
八九一	よはのつきかげ	一一四二	よそのゆふぐれ	一三一〇	あきかぜのこゑ
八九二	ゆくすゑのつゆ	一一七六	あかつきのそら	一三一八	あきのゆふぐれ
九二一	よはのやまかぜ	一一八六	はるのあけぼの	一三二二	あきのゆふぐれ
九二六	かかるしらなみ	一一九三	しののめのそら	一三二五	たのむあきかぜ
九三〇	あきのよのつき	一一九七	いぎよひのつき	一三二七	ゆふぐれのそら
九三二	あけがたのそら	一二〇一	まつかぜのこゑ	一三三七	こがらしのかぜ

一七九	一四一	一一二	② 人事 四七首（一〇・一%）	一五三三	一五二四	一五二一	一五二〇	一五一二	一五一一	一五〇九	一五〇六	一五〇三	一四九七	一四八六	一四七四	一四七三	一四三六	一三五三
はなぞめのそで	あはれよのなか	はるのよのゆめ		あきのよのつき	のこるつきかげ	ありあけのつき	ありあけのつき	あきのよのつき	ありあけのつき	くものうへのつき	ありあけのつき	ありあけのつき	やはのつきかげ	けさのあけぼの	はるのよのつき	はるのよのつき	ゆきのむらきえ	みえしかげろふ
四〇三	二五七	二五六		一七九三	一七六一	一七五三	一七三〇	一六七四	一六七三	一六四〇	一六一八	一六〇七	一六〇三イ	一五九九	一五五九	一五五二	一五五〇	一五四三
おきのつりぶね	なつのよのゆめ	うたたねのゆめ		みねのまつかぜ	ゆくすゑのそら	ゆふぐれのそら	あきのゆふぐれ	すぎきゆふぐれ	やまおろしのかぜ	ゆふぐれのそら	あきのゆふぐれ	あきのはつかぜ	ゆふぐれのそら	ただあきのかぜ	つゆのゆふぐれ	つきのさやけさ	ありあけのつき	ありあけのつき
四七五	四二九	四二三		一九六九	一九六八	一九六五	一九五五	一九五二	一九四五	一九三九	一九三五	一九一一	一八九九	一八八五	一八八〇	一八七五	一八四六	一七九四
いもがさごろも	とこのさむしろ	すゑのさとびと		あかつきのこゑ	ゆふぐれのそら	はるのやまかぜ	あとのつゆけさ	ゆふやみのそら	むらさきのくも	あけぼののそら	ありあけのつき	ゆくすゑのそら	やまおろしのかぜ	あきのゆふかぜ	あきのよのつき	ゐでむつきかげ	きゆるしらくも	かよふまつかぜ

一五二	一二一	八〇	一八	六	③ 地儀 三二首 (六・九%)	一一六〇	一一〇二	一〇九六	一〇八〇	八八三	八六四	八二四	八〇四	七九〇	七四五	七三四	四八五	四七七
やまのをちかた	みよしののさと	はるのやまざと	あふさかのやま	あはぢしまやま		はるのよのゆめ	すみぞめのそで	あまのたくなは	あまのつりぶね	あまのつりぶね	あまのはころも	ありしよやゆめ	あきのみやびと	はるのよのゆめ	おきつしまもり	みよのすゑずゑ	ころもうつこゑ	むすぶてまくら
五六一	三〇〇	一七五	一七四	一七〇		一六六四	一六一〇	一六〇一	一五九六	一五五七	一四三四	一四二五	一四二四	一三二六	一三一五	一二七〇	一二五五	一一六七
かづらきのやま	みやぎののほら	あまのかぐやま	はるのふるさと	みやまべのさと		すみぞめのそで	あまのをとめご	あまのつりぶね	あまのつりぶね	あまのつりぶね	あまのつりぶね	しづのをだまき	しづのをだまき	のこるおもかげ	ゆめのかよひぢ	ひとのおもかげ	かものみづがき	おきつしまびと
七〇五	六九〇	六七七	六七四	六二七		一九三七	一九三二	一九二三	一九二〇	一九一〇	一九〇五	一八九一	一八八九	一八五〇	一八四九	一七八五	一七一一	一六七九
すゑのまつやま	おほはらのさと	あまのかぐやま	しほがまのうら	ふゆのやまざと		のりのうれしさ	のりのとしび	よのなかのひと	ゆめのゆくすゑ	いにしへのゆめ	あけのたまがき	やまあゐのそで	あはれよのなか	ほどのはかなさ	つぼのいしぶみ	かみのつれなさ	ひとのおもかげ	

七六四	あきのやまざと	九八七	さやのなかやま	一六〇九	しほがまのうら
八二〇	しほがまのうら	一〇〇五	あふさかのせき	一六一六	みよしののやま
九四〇	さよのなかやま	一一六三	あふさかのやま	一六二六	おほはらのさと
九五四	さやのなかやま	一五〇五	しがのからさき	一六九九	わたつみのそこ
九五八	をちこちのやま	一五四四	あきのやまざと	一七一五	しほがまのうら
九六二	さよのなかやま	一五四六	をちかたのやま		

④ 動物 二一首 (四・五%)

二九	うぐいすのこゑ	四三九	さをしかのこゑ	六四四	よるのひとこゑ
一九四	やまほととぎす	四四二	さをしかのこゑ	六五二	をしのひとりね
二〇一	やまほととぎす	四四四	さをしかのこゑ	九六〇	はつかりのこゑ
二〇三	よはのひとこゑ	四七四	まつむしのこゑ	一〇五九	をしのひとこゑ
二六八	ひぐらしのこゑ	五〇一	はつかりのこゑ	一三二一	まつむしのこゑ
二六九	ひぐらしのこゑ	五〇三	おつるかりがね	一四四〇	うぐいすのこゑ
三五六	さをしかのこゑ	五一一	まつむしのこゑ	一四七六	ゆふぐれのこゑ

⑤ 植物 七首 (一・五%)

七三	あおやぎのいと	一六三	ふじなみのはな	二四三	にはのたちばな
八五	はつさくらばな	二一七	すぎのむらだち	二七五	とこなつのはな
一六一	やまぶきのはな	二四〇	にほふたちばな	二七六	ゆふがほのはな

三二八	あきはぎのはな	一四七二	やまなしのはな
三四三	あさがほのはな	一四九二	なでしこのはな
六六二	をかのべのまつ	一六七五	たまのをやなぎ
一一一八	せぜのうもれぎ	一八五四	きたのふぢなみ

⑥ 植物・人事 七首（一・五％）

一〇三六	つげのをまくら	一五八三	はなのかなしさ	一六八三	こけのいしばし
一一〇八	すぎふけるいほ	一六四二	すぎたてるもん		
一二八一	よもぎふのやど	一六六三	こけふかきそで		

⑦ 植物・地儀 一首

九八二 つたのしたみち

⑧ 植物・天象 二〇首（四・三％）

一三六	はなのしらゆき	四九二	まきのしたつゆ	一一七四	きくのうへのつゆ
二六一	すぎのしたかげ	五〇九	きくのうへのつゆ	一三〇七	おぎのうはかぜ
二七九	まきのしたつゆ	五一七	よもぎふのつき	一三〇九	をぎのうはかぜ
三〇七	ちえのあきかぜ	五七三	まつのしたつゆ	一三三八	おぎのうはふう
四二四	おぎのうはかぜ	六一〇	あさぢふのつき	一四五五	はなのしたかげ
四五〇	かつのうらかぜ	六八三	まつのしらゆき	一五七三	きくのうへのつゆ

一八二〇 かつのうらかぜ 一九一八 はなのうへのつゆ

⑨ 天象・人事 六首（一・三％）

三二〇 つゆのたまづさ 五五五 みづのしがらみ 一二九一 しまのさむしろ
四七九 つきにうつこゑ 七〇八 ゆらぐたまのを 一八九三 かはかみのかみ

⑩ 天象・地儀 三首

一三三三 なみのかよひぢ 一八七九 つきよみのもり 一九〇八 なみのかよひぢ

⑪ 地儀・植物 一三首（二・八％）

一〇〇 みよしののほな 五六八 もりのかしはぎ 九五七 をのしのはら
一二九 せきのすぎむら 五八一 ふるのかみすぎ 九七四 みねのしひしば
一六〇 きしのやまぶき 九四三 いせのはまをぎ 一七九二 すみよしのまつ
三三二 まののはぎはら 九四四 いせのはまをぎ 一九四七 たにのかげぐさ

⑫ 地儀・人事 一〇首（二・一％）

一六九 うぢのしばぶね 七四二 うぢのはしひめ 一五五五 すまのうらびと
四二〇 うぢのはしひめ 九五三 やまのかけはし 一六五四 せたのながはし
六一一 うぢのはしひめ 一〇七九 いそのあまびと 一七三五 もりのしたくさ
六三七 うぢのはしひめ 一〇八九 めでのしがらみ

⑬ 地儀・天象 四四首（九・五％）

三五	おきつしらなみ	五九八	やまのはのつき	一五六三	のべのあきかぜ
九二	みねのしらゆき	六三六	うちのあけぼの	一五七五	みねのまつかぜ
九四	やまのはのつき	七四一	わかのうらなみ	一五九七	すまのうらなみ
一三二	みねのしらくも	七八八	やどのあきかぜ	一六〇二	うらのあきかぜ
一三九	みねのはるかぜ	七九四	みちしぼのつゆ	一六二八	みちのつゆけさ
一五九	ゐでのたまがは	八三六	みねのしらくも	一六五〇	ぬのびきのたき
一七三	やまのはのくも	九四一	ふるさとのつき	一六五一	ぬのびきのたき
二七一	もりのしたつゆ	九六八	みねのあきかぜ	一六六六	ふるさとのつき
三三九	のべのあきかぜ	九九〇	みねのしらくも	一七七五	やまがはのみづ
三七四	のべのあきかぜ	一一八八	みちしぼのつゆ	一八八一	せぜのしらなみ
三九七	みねのまつかぜ	一一九八	やまのはのつき	一八九六	さほのかはかぜ
四一二	みねのつきかぜ	一二〇四	やまのはのつき	一九三八	みねのまつかぜ
五〇七	やまのはのつき	一二八二	やまのはのつき	一九六一	やまのはのつき
五四〇	やまかほのみづ	一三二〇	もりのしたつゆ	一九六三	おきつしらなみ
五五八	たにのゆふかぜ	一五三八	やまのはのつき		

⑭ 地儀・動物 二首

のべのうぐいす

一六四四

もちづきのこま

⑮ 人事・植物 四首

二三九 やどのたちばな 一二八五
五一五 やどのみちしば 一二八九

にはのよもぎふ
にはのおぎはら

⑯ 人事・地儀 一首

一一二八 やどのかよひぢ

⑰ 人事・天象 一七首（三％）に及ぶ。

六四 のきのたまみづ 五一四
二二一 そでのしらたま 五八七
二五二 かがりびのかげ 六〇五
四三二 ねやのつきかげ 九三五
四八七 とこのつきかげ 九六七
四九三 そでのあきぎり 一二八六

とこのやまかぜ 一三〇四
にはのまつかぜ 一三一
にはのつきかげ 一三四二
そでのつきかげ 一五一七
とこのやまかぜ 一六三六
にはのしらつゆ

にはのまつかぜ
にはのまつかぜ
そでのうはつゆ
にはのまつかぜ

資料⑦ 体言止めの構成要素——「時」・「場」・「物」

①時 二五首（五・四％）

六一	あきのゆふぐれ	三六二	あきのゆふぐれ	一一八六	はるのあけぼの
九七	はるのあけぼの	三六三	あきのゆふぐれ	一三一八	あきのゆうぐれ
一一四	はるのあけぼの	三六四	あきのゆふぐれ	一三二二	あきのゆふぐれ
一三三	はるのあけぼの	四四三	あきのゆふぐれ	一四八六	けさのあけぼの
三二一	あきのゆふぐれ	四九一	あきのゆふぐれ	一六一八	あきのゆふぐれ
三四七	あきのゆふぐれ	七三四	みよのすゑずゑ	一六七四	すぎきゆふぐれ
三五七	あきのゆふぐれ	七六七	はるのあけぼの	一七三〇	あきのゆふぐれ
三五九	あきのゆふぐれ	八三四	あすのあけぼの		
三六一	あきのゆふぐれ	八七四	あきのゆふぐれ		

②時→場 二九首（六・二％）

三三	あけぼののそら	二八二	ゆきあいのそら	六七四	しほがまのうら
五八	あけぼののそら	三五二	ゆふぐれのそら	七六四	あきのやまざと
五九	あけぼののそら	三六〇	ゆふぐれのそら	八八五	ゆふぐれのそら
八〇	はるのやまざと	三九二	あけかたのそら	九三二	あけかたのそら
一三〇	あけがたのそら	四三四	あきのよのそら	一〇三三	ゆふぐれのそら
一七四	はるのふるさと	六二七	ふゆのやまざと	一一〇六	ゆふぐれのそら

一一七六	あかつきのそら	一三二七	ゆふぐれのそら	一七五三	ゆふぐれのそら
一一九三	しののめのそら	一五四四	あきのやまざと	一九三九	あけぼののそら
一二五九	このごろのそら	一六〇三イ	ゆふぐれのそら	一九六五	はるのやまかぜ
一三〇二	ゆふぐれのそら	一六四〇	ゆふぐれのそら		

③時→物 八一首（一七・五%）

一〇	はるのあはゆき	二七四	あきのゆうかぜ	四〇四	あきのよのつき
一七	はるのやまかぜ	二八〇	あきのゆうつゆ	四一五	あきのよのつき
二三	はるのよのつき	二九二	あきのほかぜ	四一七	あきのよのつき
四〇	はるのよのつき	二九五	あきのほかぜ	四二一	ありあけのつき
四七	はるのよのつき	二九六	あきのほかぜ	四三五	ありあけのつき
五六	はるのよのつき	二九九	あきのほかぜ	四六一	あきのしらつゆ
一一二	はるのよのゆめ	三〇八	あきのほかぜ	四六三	けさのしらつゆ
一四四	はるのやまかぜ	三一	あきのほかぜ	五〇五	よはのあきかぜ
一四五	はるのやまかぜ	三一九	あきのほかぜ	五九四	ありあけのつき
一五五	はるのやまかぜ	三七五	あきのよのつき	五九五	ありあけのつき
二〇三	よはのひとこゑ	三七六	よひのいなづま	五九九	よはのむらぐも
二一五	よひのむらさめ	三七七	よひのいなづま	六〇六	ふゆのよのつき
二二七	ころのさみだれ	三八五	あきのよのつき	六〇八	ありあけのつき
二五七	なつのよのゆめ	三九〇	あきのよのつき	六三一	あかつきのこゑ

六三九	ありあけのつき	一一六〇	はるのよのゆめ	一五一一	ありあけのつき
六四四	よるのひとこゑ	一一九七	いざよいのつき	一五一二	あきのよのつき
七四〇	あきのよのつき	一二〇六	ありあけのつき	一五二〇	ありあけのつき
七八〇	あきのゆうつゆ	一二六五	あきのよのつき	一五二一	ありあけのつき
七九〇	はるのよのゆめ	一二七六	ありあけのつき	一五三三	あきのよのつき
七九八	ありあけのつき	一二七九	ありあけのつき	一五四三	ありあけのつき
八〇四	あきのみやびと	一二八〇	ふけしよのつき	一五五〇	ありあけのつき
八九一	よはのつきかげ	一四七三	はるのよのつき	一五九九	ただあきのかげ
九二一	よはのやまかぜ	一四七四	はるのよのつき	一六〇七	あきのはつかげ
九三〇	あきのよのつき	一四七六	ゆふぐれのこゑ	一八八〇	あきのよのつき
九三六	ありあけのつき	一四九七	よはのつきかげ	一九〇五	いにしへのゆめ
九六九	あかつきのくも	一五〇三	ありあけのつき	一九三五	ありあけのつき
一一三八	ありあけのそら	一五〇六	ありあけのつき	一九六九	あかつきのこゑ
④場 三五首 (七・五%)					
六	あはぢしまやま	一五九	ゐでのたまかは	六九〇	おほはらのさと
一八	あふさかのやま	一七〇	みやまべのさと	七〇五	すゑのまつやま
一一一	みよしののさと	一七五	あまのかぐやま	八二〇	しほがまのうら
一四一	あはれよのなか	三〇〇	みやぎののほら	九四〇	さやのなかやま
一五二	やまのをちかた	五六一	かづらきのやま	九五四	さやのなかやま

九五八 をちこちのやま 一五四六 をちかたのやま 一七六一 ゆくすゑのそら

九六二 さやのなかやま 一六〇九 しほがまのうら 一八五〇 あはれよのなか

九六七 とこのやまかぜ 一六一六 みよしののやま 一九〇八 なみのかよいち

九八七 さやのなかやま 一六二六 おほはらのさと 一九一一 ゆくすゑのそら

一〇〇五 あふさかのさき 一六五四 せたのながはし 一九五二 ゆうやみのそら

一一六三 あふさかのやま 一六九九 わたつみのそこ 一九六八 ゆくすゑのそら

一五〇五 しがのからさき 一七一五 しほがまのうら 九六四 のべのゆふぐれ

⑤ 場 → 時 三首

二一六 よそのゆふぐれ 六三六 うちのあけぼの 九六四 のべのゆふぐれ

⑥ 場 → 物 九七首 (二一%)

三五 おきつしらなみ 一六〇 きしのやまぶき 三三二 まのはぎはら

八二 のべのうぐひす 一六九 うちのしばふね 三三九 のべのあきかぜ

九二 みねのしらぐも 一七三 やまのはのくも 三七四 のべのあきかぜ

九四 やまのはのつき 二四三 にはのたちばな 三九七 みねのまつかぜ

一〇〇 みよしののはな 二七一 もりのしたつゆ 四〇三 おきのつりぶね

一二九 せきのすぎむら 三〇七 ちえのあきかぜ 四一二 みねのつきかげ

一三二 みねのしらぐも 三一七 あまのかはなみ 四二〇 うちのはしひめ

一三九 みねのはるかぜ 三二二 あまのかはかぜ 四二三 すゑのさとびと

八九二	八六四	八三六	七九四	七八八	七四五	七四二	七四一	七二〇	六八二	六六二	六三七	六一一	六〇五	五九八	五八一	五六八	五五八	五〇七	四八七	
ゆくすゑのつゆ	あまのはごろも	みねのしらぐも	みちしぼのつゆ	やどのあきかぜ	おきつしまもり	うぢのはしひめ	わかのうらなみ	みねのしらぐも	にはのしらぐも	おかのべのまつ	うぢのはしひめ	うぢのはしひめ	うぢのはしひめ	にはのつきかげ	やまのはのつき	ふるのかみすぎ	もりのかしはぎ	たにのゆふかぜ	やまのはのつき	とこのつきかげ
一二七二	一二五五	一二〇四	一一九八	一一八八	一一六七	一一四二	一一三五	一一一八	一〇八九	一〇七九	一〇七三	九九〇	九七四	九六八	九五七	九五三	九四四	九四三	九四一	
よそのうきぐも	しがのみづかき	やまのはのつき	やまのはのつき	みちしぼのつゆ	おきつしまびと	よそのゆふぐれ	そらのうきぐも	せせのうもれぎ	ゐでのしがらみ	いそのあまびと	おきつしほかぜ	みねのしらぐも	みねのしひしぼ	みねのあきかぜ	をののしのはら	やまのかけはし	いせのはまをぎ	いせのはまをぎ	ふるさとのつき	
一六五一	一六五〇	一六三六	一六二八	一六〇二	一五九七	一五七五	一五六三	一五五五	一五三八	一五一七	一三二〇	一三一	一三〇四	一二八九	一二八六	一二八五	一二八二	一二七五	一二七四	
ぬのびきのたき	ぬのびきのたき	にはのまつかぜ	みちのつゆけさ	うらのまつかぜ	すまのうらなみ	みねのまつかぜ	のべのあきかぜ	すまのうらびと	にはのはのつき	にはのまつかぜ	もりのしたつゆ	にはのまつかぜ	にはのまつかぜ	にはのをぎはら	にはのしらつゆ	にはのよもぎふ	やまのはのつき	よそのうきぐも	ねやのつきかげ	

一六六六	ふるさとのつき	一八五四	きたのふぢなみ	一九四七	たにのかげくさ
一七三五	もりのしたくさ	一八八一	せせのしらなみ	一九六一	やまのはのつき
一七七五	やまかはのみづ	一八九六	さほのかはかせ	一九六三	おきつしらなみ
一七九二	すみよしのまつ	一九二三	よのなかのひと		
一七九三	みねのまつかぜ	一九三八	みねのまつかぜ		
⑦物 一六七首 (三六・二%)					
三	ゆきのたまみづ	一三六	はなのしらゆき	二六一	すぎのしたかげ
一三	ゆきのむらぎえ	一六一	やまぶきのはな	二六五	ゆうだちのくも
二二	まだみえぬゆき	一六三	ふぢなみのはな	二六八	ひぐらしのこゑ
二六	こゆるしらなみ	一七九	はなぞめのそで	二六九	ひぐらしのこゑ
二七	みづのしらなみ	一九四	やまほととぎす	二七三	かよふあきかせ
二九	うぐひすのこゑ	二〇一	やまほととぎす	二七五	とこなつのはな
六四	のきのたまみづ	二一七	すぎのむらだち	二七六	ゆふがほのはな
七三	あおやなぎのいと	二二一	そでのしらたま	二七九	まきのしたつゆ
七六	ゆきのむらぎえ	二三九	やどのたちばな	二八八	やまおろしのかぜ
八五	はつきくらばな	二四〇	にほふたちばな	三二〇	つゆのたまづさ
八七	かかるしらぐも	二五二	かかりびのかげ	三二三	わたるあきかせ
九三	あとのしらぐも	二五六	うたたねのゆめ	三二六	おけるしらつゆ
一一八	ゆきのむらぎえ	二六〇	やどるつきかげ	三二八	あきはぎのはな

四九二	四八五	四七九	四七七	四七五	四七四	四五〇	四四四	四四二	四三九	四三二	四二九	四二四	四二二	四一三	三八三	三五六	三五五	三四三	三三四
まきのしたつゆ	ころもうつこゑ	つきにうつこゑ	むすぶてまくら	いもがさごろも	まつむしのこゑ	くずのうらかぜ	さをしかのこゑ	さをしかのこゑ	さをしかのこゑ	ねやのつきかげ	とこのさむしろ	をぎのうはかぜ	ゐづるつきかげ	かげのさやけさ	ゆみはりのつき	さをしかのこゑ	はぎのしたかぜ	あさがほのはな	おけるしらつゆ
六一〇	六〇七	六〇四	五九七	五九一	五八七	五七三	五六九	五五五	五四二	五四〇	五二〇	五一七	五一四	五一一	五〇九	五〇四	五〇三	五〇一	四九三
あさぢふのつき	かげのさむけさ	こがらしのかぜ	むらぐものつき	やまおろしのかぜ	にはのまつかぜ	まつのしたつゆ	こがらしのかぜ	みづのしがらみ	こがらしのかぜ	やまかはのみづ	おくるのうらかぜ	よもぎふのつき	とこのやまかぜ	まつむしのこゑ	きくのへのつゆ	すめるつきかげ	おつるかりがね	はつかりのこゑ	そでのあききり
九八〇	九六〇	九四六	九四二	九三九	九三五	九三四	九二六	八八三	八二四	七五五	七四三	七〇八	六八三	六七七	六七三	六六七	六六一	六五二	六三四
かよふうらかぜ	はつかりのこゑ	みづのしらなみ	かかるつきかげ	すゑのしらぐも	そでのつきかげ	あとのつきかげ	かかるしらなみ	ゐづるふなびと	ありしよのゆめ	まつのゆふかぜ	みづのみなかみ	ゆらぐたまのを	まつのしらゆき	あまのかぐやま	ゆきのしたおれ	ゆきのしたおれ	つもるはつゆき	をしのひとりね	のこるしらなみ

一三二一	一三一〇	一三〇九	一三〇七	一二九四	一二九一	一二八四	一二八一	一二七〇	一二六三	一二〇二	一二〇一	一一七四	一一〇八	一一〇二	一〇九六	一〇八〇	一〇七四	一〇五九	一〇三六
まつむしのこゑ	まつかぜのこゑ	をぎのうはかぜ	をぎのうはかぜ	あとのやまかぜ	しものさむしろ	のこるつきかげ	よもぎふのやど	ひとのおもかげ	きえしつきかげ	まつかぜのこゑ	まつかぜのこゑ	きくのへのつゆ	すぎふけるいほ	すみぞめのそで	あまのたくなは	あまのつりぶね	やへのしほかぜ	をしのひとごゑ	つげのをまくら
一五八三	一五七三	一五五七	一五五二	一五二四	一五〇九	一四九二	一四七二	一四五五	一四四〇	一四三六	一四三四	一四二五	一四二四	一三五三	一三四二	一三三八	一三三七	一三二六	一三二五
はなのかなしさ	きくのへのつゆ	あまのつりぶね	つきのさやけさ	のこるつきかげ	くものへのつき	なでしこのはな	やまなしのはな	はなのしたかげ	うぐひすのこゑ	ゆきのむらぎえ	あまのつりぶね	しづのをだまき	しづのをだまき	みえしかげろう	そでのうはつゆ	をぎのうはかぜ	こがらしのかぜ	のこるおもかげ	たのむあきかぜ
一八八九	一八八五	一八七五	一八四九	一八四六	一八二〇	一七九四	一七八五	一七一	一六八三	一六七九	一六七五	一六七三	一六六四	一六六三	一六四四	一六四二	一六一〇	一六〇一	一五九六
わまあるのそで	まつゆふかぜ	ゐでむつきかげ	ほどのはかなさ	きゆるしらぐも	くずのあきかぜ	かよふあきかぜ	つぼのいしぶみ	かみのつれなさ	こけのいしばし	ひとのおもかげ	たまのをやなぎ	やまおろしのかぜ	すみぞめのそで	こけふかきそで	もちづきのこま	すぎたてるもん	あまのをとめこ	あまのつりぶね	あまのつりぶね

一八九一	あけのたたまがき	一九一八	はなのへのつゆ	一九四五	むらさきのくも
一八九三	かわかみのかみ	一九三二	のりのともしび	一九五五	あとのつゆけさ
一八九九	やまおろしのかぜ	一九三七	のりのうれしさ		

⑧ 物→時 一一首(二・三%)

一五四	あとのゆふぐれ	二三六	さみだれのころ	六六三	ゆきのゆふぐれ
一八二	つゆのあけぼの	三六六	つゆのゆふぐれ	六七一	ゆきのゆふぐれ
二二〇	あめのゆふぐれ	五二五	しぐれするころ	一五五九	つゆのゆふぐれ
二二六	さみだれのころ	五六三	あらしふくころ		

⑨ 物→場 一三首(二・八%)

三七	よこぐものそら	二六三	ゆふだちのそら	一三三三	なみのかよひぢ
三八	よこぐものそら	五一五	やどのみちしば	一八七九	つきよみのもり
二一四	むらさめのそら	九八二	つたのしたみち	一九一〇	ゆめのゆくすゑ
二三二	さみだれのそら	一一二八	やどのかよひぢ		
二五一	ゆふやみのそら	一三一五	ゆめのかよひぢ		

資料 ⑧ 体言止めを使う和歌の統語論上構造

(1) 「Aタイプ」——一つの関係節から成る和歌

- 三 山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえだえかかると雪のたま水
 一〇 春日野の下もえわたる草の上につれなくみゆる春のあは雪
 一三 若菜つむ袖とぞみゆる春日野の飛火の野への雪のむらぎえ
 一八 うぐひすの鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉しろき逢坂の山
 二三 空はなほ霞もやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月
 三七 かすみたつ末の松山ほのぼのと波にはなるる横雲の空
 二九 あづさ弓はる山ちかく家ゐしてたえず聞きつるうぐひすの声
 三三 あまの原富士のけぶりの春の色の霞になびくあけぼのの空
 三八 春の夜の夢の浮橋とだえして峯にわかるる横雲の空
 四〇 おほぞらは梅のほひに霞みつつくもりもはてぬ春の夜の月
 五六 あさみどり花もひとつに霞みつつおぼろにみゆる春のよの月
 七三 春風の霞吹きとく絶えまよりみだれてなびく青柳の糸
 七六 薄く濃き野べのみどりの若草に跡までみゆる雪のむらぎえ
 九四 たづねきて花にくらせる木の間に待つとしもなき山のはの月
 一一二 風かよふねざめの袖の花の香にかをる枕の春の夜のゆめ
 一二一 時しもあれたのむの雁の別れさへ花散るころのみよしの里
 一三〇 山たかみ峯のあらしに散る花の月にあまぎるあけがたの空
 一五二 花流す瀬をもみるべき三日月のわれて入りぬる山のをちかた
 一六九 暮れてゆく春のみなどはしらねども霞に落つる宇治の柴舟
 一七〇 来ぬまでも花ゆゑ人の待たれつる春も暮れぬるみ山べの里
 一七三 柴の戸をさすや日影のなごりなく春暮れかかる山の端の雲
 二二二 たまぼこの道行き人のことづても絶えてほどふるさみだれの空
 二四〇 帰りこぬ昔を今と思ひ寝の夢の枕にほふちちばな
 二五六 窓近き竹の葉すさむ風の音にいとどみじかきうたたねの夢
 二六三 よられつる野もせの草のかげろひてすずしくもる夕立の空
 二六八 夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山にひぐらしの声
 二七一 なく蟬の声もすずしき夕暮に秋をかけたる杜のしたつゆ
 二七三 ほたる飛ぶ野沢に茂る蘆の根のよなよなしたにかよふ秋風

- 式子内親王
 権中納言国信
 前参議教長
 太上天皇
 撰政太政大臣
 藤原家隆朝臣
 山辺赤人
 前大僧正慈円
 藤原定家朝臣
 藤原定家朝臣
 菅原孝標女
 殷富門院大輔
 宮内卿
 藤原雅経朝臣
 皇太后宮大夫俊成女
 源具親
 二条院讃岐
 坂上是則
 寂蓮法師
 藤原伊綱
 宮内卿
 藤原定家朝臣
 式子内親王
 式子内親王
 西行法師
 式子内親王
 二条院讃岐
 撰政太政大臣

二七五
二七九
二八〇
二八九
三二三
三三二
三三四
三四七
三五七
三七五
三七六
三七七
三八三
四一三
四二〇
四二四
四二九
四三二
四三九
四六一
四七七
四八七
四九一
五〇一
五〇五
五二〇
五九一
五九七
五九八
六〇五
六〇六

白露の玉もてゆへるませのうちに光さへそふとこなつの花
山里の峯の雨雲とだえしてゆふえずしきまきの下露
岩井くむあたりのを笹玉越えてかつがつ結ぶ秋の夕露
おしなべてものを思はぬ人にさへ心をつくる秋のはつかぜ
星会ひの夕べすずしき天の川紅葉の橋をわたる秋かせ
おく露もしづ心なく秋風に乱れて咲ける真野の萩原
さを鹿の朝立つ小野の秋萩に玉とみるまでおける白露
小倉山ふもとの野べの花すすきほのかにみゆる秋の夕暮
おしなべて思ひしことのかずかすになほ色まさる秋の夕暮
大荒木の杜の木の間をもりかねて人だのめなる秋の夜の月
有明の月待つ宿の袖の上に人だのめなる宵のいなづま
風わたる浅茅が末の露にだに宿りもはてぬ宵のいなづま
敷島や高円山の雲間よりひかりさしそふゆみはりの月
秋風にたなびく雲のたえまよりもれいづる月の影のさやけさ
さむしろや待つ夜の秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫
秋の夜は宿かる月も露ながら袖に吹きこす萩のうは風
あくがれて寝ぬ夜の塵のつもるまで月に払はぬ床のさむしろ
秋の色はまがきにとくなりゆけど手枕なるる閨の月影
野分せし小野の草ぶし荒れはてて深山にふかきさを鹿の声
草葉には玉と見えつつわび人の袖の涙の秋のしら露
衣打つね山の庵のしばしばもしらぬ夢路にむすぶ手枕
ひとり寝る山鳥の尾のしだり尾に霜おきまよふ床の月影
村雨の露もまだひぬ真木の葉に霧たちのぼる秋の夕暮
横雲の風にわかるるしのめに山飛び越ゆる初雁の声
吹きまよふ雲居をわたる初雁のつばさに鳴らすよはの秋風
秋ふかき淡路の島の有明にかたぶく月をおくる浦風
ほのぼのと有明の月の月影にもみち吹きおろす山おろしの風
いまよりは木の葉がくれもなければどもしぐれにのこる村雲の月
晴れくもるかげを都に先立てしぐれと告ぐる山の端の月
風寒み木の葉晴れゆくよなよなにのこるくまなき庭の月影
わが門の刈り田のねやにふすしぎの床あらはなる冬の夜の月

高倉院御歌
太上天皇
入道前関白太政大臣
西行法師
権中納言公経
祐子内親王家紀伊
中納言家持
読人しらず
撰政太政大臣
皇太后宮大夫俊成女
藤原家隆朝臣
藤原有家朝臣
堀河院御歌
左京大夫頭輔
藤原定家朝臣
右衛門督通具
皇太后宮大夫俊成女
式子内親王
寂蓮法師
菅贈太政大臣
権中納言公経
藤原定家朝臣
寂蓮法師
西行法師
皇太后宮大夫俊成女
前大僧正慈円
源信明朝臣
源具親
源具親
式子内親王
殷富門院大輔

六〇七
六一〇
六三一
六三四
六三六
六三九
六六一
六六三
六七七
七三四
七六四
七六七
八七四
九三〇
九三五
九五三
九五七
一〇七三
一一二八
一一六三
一二七六
一二八四
一二八五
一三〇二
一三〇九
一三四二
一四三四
一四四〇
一五二〇
一五五二
一五五五

冬枯れの杜の朽ち葉の霜の上に落ちたる月の影のさむけさ

かげとめし露の宿りを思ひ出でて霜にあと問ふ浅茅生の月
かつ氷かつはくだくる山川の岩間にむせぶあかつきの声
みなかみやたえだえ氷る岩間より清滝川にのこる白波
橘姫の片敷き衣さむしろに待つ夜むなしき宇治のあけぼの
志賀の浦や遠ざかりゆく波間より氷りて出づる有明の月
ふればかく憂さのみまさる世を知らで荒れたる庭につもる初雪
降りそむるけさだに人の待たれつるみ山の里の雪の夕暮
雪降れば峯のまさかき埋もれて月にみがける天の香具山
あめのした芽ぐむ草木の目もはるにかぎりもしらぬ御代の末々
たれもみな花の都に散りはててひとりしぐるる秋の山里
立ちのぼるけぶりをだにも見るべきに霞にまがふ春のあけぼの
別れ路はいつも歎きの絶えせぬにいとどかなしき秋の夕暮
見し人もとふの浦風音せぬにつれなく澄める秋の夜の月
野べの露浦わの波をかこちてもゆくへも知らぬ袖の月影
旅人の袖吹き返す秋風に夕日さびしき山のかげはし
ふるさとも秋は夕べを形見とて風のみ送る小野の篠原
梶を絶え由良の湊にゆく舟のたよりもしらぬ沖つ潮風
たのめおきし浅茅が露に秋かけて木の葉降りしく宿の通い路
けさよりはいとど思ひをたきまして歎きこりつむ逢坂の山
いま来むと契りしことは夢ながら見し夜に似たる有明の月
松山とちぎりし人はつれなくて袖越す波にのこる月影
ならひこしたがいっはりもまだ知らで待つとせしまの庭の蓬生
うらみわび待たじいまはの身なれども思ひなれにし夕暮の空
いまはただ心のほかに聞くものを知らずがほなる萩の上風
あだなりと思ひしかども君よりは物わすれせぬ袖のうは露
さしてゆくかたは湊の波高みうらみてかへる海人の釣り舟
谷深み春の光のおそければ雪につつめるうぐひすの声
山の端を出でて松の木のまより心づくしの有明の月
かもめゆる藤江の浦の沖つすに夜舟いざよふ月のさやけさ
藻塩くむ袖の月影おのづからよそに明かさぬ須磨の浦人

清輔朝臣
雅経朝臣
皇太后宮大夫俊成
皇太后宮大夫俊成
太上天皇
藤原家隆朝臣
紫式部
寂蓮法師
皇太后宮大夫俊成
式子内親王
左京大夫頭輔
前左兵衛督惟方
中納言隆家
橘為仲朝臣
藤原家隆朝臣
藤原定家朝臣
皇太后宮大夫俊成女
撰政太政大臣
前大納言忠良
高倉院御歌
右衛門督通具
藤原定家朝臣
皇太后宮大夫俊成女
寂蓮法師
式子内親王
道信朝臣
読人しらす
菅贈太政大臣
藤原業清
神祇伯頭仲
藤原定家朝臣

- 一五六三 葛の葉のうらにかへる夢の世を忘れがたみの野べの秋風
 一五七五 山川の岩ゆく水もこほりしてひとりくだくる峯の松風
 一五八三 見し夢をいづれの世ぞと思ふまに折を忘れぬ花のかなしさ
 一五九六 須磨の浦のなぎたる朝は目もはるに霞にまがふ海人の釣舟
 一五九七 秋風の関吹き越ゆる度ごとに声うちそふる須磨の浦波
 一六二六 世の中をそむきにとては来しかどもなほ憂きことは大原の里
 一六二八 苔の庵さして来つれど君まさで帰るみ山の道の露けさ
 一六三六 われながら思ふかものをとばかりに袖にしぐる庭の松風
 一六四四 嵯峨の山千代の古道あともめてまた露分くる望月の駒
 一六五一 久方の天つをとめが夏ごろも雲居にさらす布引の滝
 一六六六 影やどす露のみしげくなりはてて草にやつるるふるさとの月
 一六七四 古畑のそばのたつ木にゐる鳩の友呼ぶ声のすぎき夕暮
 一六七五 山がつの片岡かけてしむる野のせかひに立てる玉の小柳
 一六七九 ふるさとは浅茅が末になりはてて月に残れる人の面影
 一七一 つきもせぬ光のまにもまぎれなで老いて帰れる髪につれなさ
 一八四九 風早み萩のはごとにおく露のおくれさきだつほどのはかなさ
 一八五〇 秋風になびく浅茅の末ごとにおく白露のあはれ世の中
 一八七九 さやかなる鷺の高根の雲居より影やはらぐる月詠の杜
 一八八五 五十鈴川空やまだきに秋の声したつ岩根の松の夕風
 一八八九 月さゆるみたらし川に影見えて氷にすれる山藍の袖
 一九〇八 熊野川くだす早瀬のみなれ棹さすがみなれぬ波のかよひ路
 一九三五 わがこころなほ晴れやらぬ秋霧にほのかに見ゆる有明の月
 一九三七 色にのみそめし心のくやしきをむなしと説ける法のうれしさ
 一九三八 むらさきの雲路にさそふ琴の音に憂き世をはらふ峯の松風
 一九五五 闇深き木のもとごとくに契りおきて朝立つ霧のあとの露けさ
 一九六八 いまぞこれ入日を見ても思ひこし弥陀の御国の夕暮の空

(2) 「Bタイプ」——「関係節から成らない和歌」

① 「呼び掛け」を使う和歌

- 一七 谷川のうち出づる波も声たてつうぐひすさそへ春の山風
 八二 思ふどちそこもしらずゆきくれぬ花の宿かせ野べのうぐひす

- 皇太后宮大夫俊成女
 読人しらず
 御形宣旨
 藤原孝善
 壬生忠見
 読人しらず
 恵慶法師
 藤原有家朝臣
 藤原定家朝臣
 藤原有家朝臣
 藤原有家朝臣
 雅経朝臣
 西行法師
 西行法師
 西行法師
 撰政太政大臣
 冷泉院太皇太后宮
 中務卿具平親王
 蟬丸
 西行法師
 大中臣明親
 皇太后宮大夫俊成
 太上天皇
 権僧正公胤
 小侍従
 寂蓮法師
 寂然法師
 皇太后宮大夫俊成

- 藤原家隆朝臣
 藤原家隆朝臣

一〇〇
一四四
一四五
二〇一
二三九
三一九
三九〇
五〇九
六八二
六八三
七二〇
七四五
八〇四
九二一
九四二
九四六
九六〇
九六八
九八〇
一〇三六
一〇七四
一〇八〇
一一一八
一二〇四
一二八二
一三〇四
一三一一
一五一一
一五三三
一六一六
一六九九

いくとせの春に心をつくしきぬあはれと思へみよしのの花
散る花の忘れがたみの峯の雲そをだにのこせ春の山風
花さそふなごりを雲に吹きとめてしばしはにほへ春の山風
昔思ふ草の庵のよるの雨に涙な添へそやまほととぎす
行く末をたれしのべとてゆふ風に契りかおかむ宿のたちばな
たなばたの衣のつまはこころして吹きな返しそ秋の初風
ふけゆかばけぶりもあらじ塩釜のうらみなはてそ秋の夜の月
今よりはまた咲く花もなきものをいたくなおきそ菊の上の露
尋ね来て道分けわぶる人もあらじ幾重もつもれ庭の白雪
このごろは花もみちも枝になししばしな消えそ松の白雪
神無月もみちも知らぬときは木にろろづ代懸れ峯の白雲
八百日ゆく浜の真砂を君が代のかずに取らなむ沖つ島守
神無月しぐるるころもいかなれや空に過ぎにし秋の宮人
わぎもこが旅寝の衣うすきほどよきて吹かなむよはの山風
あづまちのよはのながめを語らなむ都の山にかかる月影
磯馴れで心もとけぬこもまくらあらくなかけそ水の白波
草まくらゆふべの空を人間はば鳴きても告げよ初雁の声
忘れなむ待つとな告げそなかなかに因幡の山の峯の秋風
袖に吹けさぞな旅寝の夢は見じ思ふかたより通ふ浦風
わが恋は知る人もなしせく床の涙もらすなつげのを枕
しるべせよ跡なき波にこぐ舟のゆくへも知らぬ八重の潮風
みるめ刈る方やいづくぞ竿さしてわれにをしへよ海女の釣舟
ありとてもあはぬためしの名取川朽ちだにはてね瀬々の埋れ木
君まつとねやへも入らぬ真木の戸にいたくな更けそ山の端の月
わくらばに待ちつるよひも更けにけりさやは契りし山の端の月
思ひかねうちぬるよひもありなまし吹きだにすさべ庭の松風
心あらば吹かずもあらなむよひよひに人待つ宿の庭の松風
憂き身世にながらへばなほ思ひ出でよたもとにちぎる有明の月
捨つとならば憂き世をいとふしるしあらむわれ見ばくもれ秋のよの月
花ならでただ柴の戸をさして思ふ心の奥もみ吉野の山
流れ木と立つ白波と焼く塩といづれかからきわたつ海の底

皇太后宮大夫俊成
左近中将良平
藤原雅経朝臣
皇太后宮大夫俊成
右衛門督通具
小弁
前大僧正慈円
権中納言定頼
寂然法師
太上天皇
清原元輔
後徳大寺左大臣
相摸
惠慶法師
前大僧正慈円
権中納言定頼
藤原秀能
藤原定家朝臣
藤原定家朝臣
式子内親王
式子内親王
業平朝臣
寂蓮法師
式子内親王
撰政太政大臣
撰政太政大臣
前大僧正慈円
藤原経通朝臣
西行法師
前大僧正慈円
菅贈太政大臣

一七七五
一七九二
一七九三
一八九三
一八九九
一九二二
一九六一
一九六三
一九六五

書き流すことの葉をだに沈むなよ身こそかくても山川の水
うきながら久しくぞ世を過ぎにけるあはれやかけし住吉の松
春日山谷のむもれ木くちぬとも君に告げこそ峯の松風
大御田のうるほふばかりせきかけて井堰に落せ川上の神
千代までも心して吹けもみち葉を神も小塩の山おろしの風
しるべある時にだにゆけ極楽の道にまどへる世の中の人
別れにしその面影の恋しきに夢にも見えよ山の端の月
浮草の一片なりとも磯がくれ思ひなかけそ沖つ白波
花のもと露のなさはほどもあらし酔ひなすそ春の山風

②「倒置」を使う和歌

六
六一
八五
一一四
一二九
一三六
一四一
一六〇
一六一
一六三
一七四
一七五
一七九
一八二
一九四
二〇三
二一七
二二一
二四三
二六九

春といへば霞にけりなきのふまで波間にみえし淡路島山
忘るなよたのむの沢を立つ雁も稲葉の風の秋の夕暮
ゆかむ人来む人しのべ春がすみ立田の山の初さくらばな
またや見む交野のみ野のさくらがり花の雪散る春のあけぼの
逢坂やこずゑの花を吹くからにあらしぞ霞む関の杉むら
さそはれぬ人のためとやのこりけむあすよりさきの花の白雪
はかなさをほかにもいはじさくらばな咲きては散りぬあはれ世の中
岩根こす清滝川のはやければ波折りかくる岸のやまぶき
かはづ鳴く神南備川にかけみえて今かさくらむやまぶきの花
かくてこそ見まくほしけれよろづ代をかけてにほへる藤波の花
あすよりは志賀の花園まれにだにたれかはとはむ春のふるさと
春過ぎて夏きにけらし白袴の衣ほすてふ天の香具山
折りふしもうつればかへつ世の中の人の心の花染めの袖
忘れめやあふひを草に引き結びかりねの野への露のあけぼの
おのが妻恋ひつつ鳴くやさつきやみ神南備山の山ほととぎす
聞かたただ寝なましものをほととぎすなかなかなりやよはの一声
聞かずともここをせにせむほととぎす山田の原の杉のむらだち
今日はまたあやめのねさへかけそへて乱れぞまさる袖の白玉
尋ぬべき人は軒端のふるさとにそれかとかをる庭のたちばな
夕づく日さすや庵の柴の戸にさびしくもあるかひぐらしの声

藤原行能
皇太后宮大夫俊成
藤原家隆朝臣
賀茂幸平
藤原伊家
智証大師
寂然法師
寂然法師
寂然法師

俊恵法師
撰政太政大臣
中納言家持
皇太后宮大夫俊成
宮内卿
撰政太政大臣
後徳大寺左大臣
権中納言国信
厚見王
延喜御歌
撰政太政大臣
持統天皇御歌
皇太后宮大夫俊成女
式子内親王
藤原雅経朝臣
相摸
西行法師
皇太后宮大夫俊成
読人しらす
前大納言忠良

二七四
二七六
二八八
二九五
三〇七
三〇八
三二〇
三二二
三五二
四〇三
四一五
四一七
四二二
四四二
四四四
四六三
四七四
四七五
四七九
五一五
五六八
五八一
五八七
五九四
五九五
六〇四
六一一
六三七
六五二
六六二

ひさぎ生ふるかたやまかげに忍びつつ吹きくるものを秋の夕風
白露のなさけおきける言の葉やほのぼの見えし夕顔の花
いつもきくふもとの里とおもへども昨日にかはる山おろしのかぜ
きたへの枕のうへに過ぎぬなり露をたづぬる秋のはつかぜ
日を経つつ音こそまされ和泉なる信太の杜の千枝の秋風
うたたねの朝けの袖にかはるなりならず扇の秋のはつかぜ
たなばたのとわたる舟の梶の葉にいく秋書きつ露のたまづさ
いかばかり身にしみぬらむたなばたのつまつ宵の天の川風
あけぬとて野べより山に入る鹿のあと吹きおくる萩の下風
身にとまる思ひを萩の上葉にてこのごろかなし夕暮の空
秋の夜の月やをじまのあまのはら明け方ちかき沖の釣船
ながめつつ思ふもぬるたもとかないく夜かは見む秋の夜の月
ふくるまでながむればこそ悲しけれ思ひも入れじ秋の夜の月
月をなほ待つらむものか村雨の晴れゆく雲の末の里人
み山べの松の梢をわたるなりあらしに宿すさを鹿の声
たぐへくる松のあらしやたゆむらん尾上にかへるさを鹿の声
秋といへば契りおきてや結ぶらむ浅茅が原のけさの白露
あともなき庭の浅茅にむすほほれ露のそなる松虫の声
秋風は身にしむばかり吹きにけり今や打つらむ妹がさごろも
まどろまでながめよとのすさびかな麻のさごろも月に打つ声
訪ふ人もあらし吹きそふ秋は来て木の葉に埋む宿の道芝
時しもあれ冬は葉守りの神無月まばらになりぬ杜のかしは木
ふかみどり争ひかねていかならむまなくしぐれの布留の神杉
いまはまた散らでもまがふしぐれかなひとりふりゆく庭の松風
霜こほる袖にもかげはのこりけり露よりなれし有明の月
ながめつついくたび袖に曇らむしぐれにふくる有明の月
秋の色を払ひはててやひさかたの月の桂にこがらしの風
片敷きの袖をや霜に重ぬらむ月に夜がるる宇治の橋姫
網代木にいさよふ波の音ふけてひとりや寝ぬる宇治の橋姫
はかなしやさてもいく夜か行く水に数かきわぶるをしのひとり寝
さむしろのよはの衣手さえさえて初雪白し岡の辺の松

俊恵法師
前太政大臣
後徳大寺左大臣
源具親
藤原経衡
式子内親王
皇太后宮大夫俊成
入道前関白太政大臣
左衛門督通光
前大僧正慈円
藤原家隆朝臣
殷富門院大輔
式子内親王
宮内卿
惟明親王
撰政太政大臣
惠慶法師
式子内親王
藤原輔尹朝臣
宮内卿
皇太后宮大夫俊成女
法眼慶算
太上天皇
源具親
右衛門督通具
藤原家隆朝臣
雅経朝臣
法印幸清
前大僧正慈円
雅経朝臣
式子内親王

六六七
七四一
七四二
七四三
七八〇
七九〇
七九四
八三六
八六四
八八五
八九一
九三四
九三六
九三九
九六七
九七四
九九〇
一〇〇五
一〇五九
一〇七九
一一〇二
一一〇六
一一六〇
一一六七
一一七四
一一九八
一二〇一
一二〇六
一二五五
一二五九
一二六三

明けやらぬ寝ざめの床にきこゆなりまがきの竹の雪の下折れ
藻塩草かくともつきじ君が代の数によみおく和歌の浦波
うれしさや片敷く袖に包むらんけふ待ちえたる宇治の橋姫
年へたる宇治の橋杜言問はむいくよになりぬ水のみなみ
別れけむなごりの袖もかわかぬにおきや添ふらむ秋の夕露
秋深き寝覚めにいかと思ひ出づるはかなく見えし春の夜の夢
ふるさとを恋ふる涙やひとり行く友なき山の道芝の露
尋ね来ていかにあはれとながむらむ跡なき山の峯の白雲
これやさは雲のはたてに織ると聞くとつこと知らぬ天の羽衣
君いなば月待つともながめやらむあづまの方の夕暮の空
忘るなよ宿るたもととは変わるともかたみにしぼる夜半の月影
言問へよおもひおきつの浜ちどりなくなく出でし跡の月影
もろともに出でし空こそ忘れぬ都の山のありあけの月
明けばまた越ゆべき山の峯なれや空行く月の末の白雲
さらぬだに秋の旅寝はかなしきに松に吹くなりこの山風
また越えむ人もとまらばあはれ知れわが折り敷ける峯の椎柴
よそにのみ見てややみなむ葛城や高間の山のみねのしら雲
あらたまの年にまかせて見るよりはわれこそ越えぬ逢坂の関
霜こほり心もとけぬ冬の池に夜ふけてぞ鳴くをしの一声
逢ふまでのみるめ刈るべきかたぞなきまだ波なれぬ磯の海士人
後の世をなげく涙といひなしてしほりやせまし墨染めの袖
ながめわびそれとはなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕暮の空
枕だに知らねばいはじ見しままに君かたるなよ春の夜の夢
明けがたき二見の浦による波の袖のみ濡れて沖つ島人
思ひ出でていまは消ぬべし夜もすがらおきうかりつる聞くの上の露
なにゆゑと思ひもいれぬ夕だに待ち出でしものを山の端の月
いかか吹く身にしむ色の変わるかなたのむる暮の松風の声
帰るさのものとや人のながむらむ待つ夜ながらの有明の月
枯れにけるあふひのみこそかなしけれあはれと見ずや加茂の瑞垣
更級の山よりほかに照る月もなぐさめかねつこのごろのそら
さしてゆく山の端もみなかきくもり心の空に消えし月影

刑部卿範兼
源家長
前大納言隆房
清輔朝臣
大式三位
殷富門院大輔
前大僧正慈円
寂蓮法師
寂昭法師
西行法師
藤原定家朝臣
藤原定家朝臣
撰政太政大臣
藤原家隆朝臣
藤原秀能
僧正雅縁
読人しらす
謙徳公
藤原元真
相摸
大宰大式重家
左衛門督通光
和泉式部
実方朝臣
謙徳公
撰政太政大臣
八条院高倉
藤原定家朝臣
読人しらす
躬恒
読人しらす

一二六五
一二七九
一二九四
一三一〇
一三一八
一三二五
一四七二
一四七四
一四七六
一四九二
一四九七
一五〇三
一五〇六
一五〇九
一五一一
一五二一
一五二四
一五三八
一五五七
一六〇七
一六一〇
一六四〇
一六四二
一六六四
一六八三
一七九四
一八二〇
一八五四
一八七五
一八八〇
一八八一

面影の忘れぬ人によそへつつ入るをぞしたふ秋の夜の月
忘るなよいまは心のかわるともなれしその夜の有明の月
思ひ出でよたがかねごと末ならむきのふの雲のあとの山風
いつも聞くものとや人の思ふらむ来ぬ夕暮の秋風の声
ながめてもあはれと思へおほかたの空だにかなし秋の夕暮
知られじなおなじ袖には通ふともたが夕暮とたのむ秋風
さくらあさのをふの浦波立ちかへり見れどもあかず山なしの花
おぼつかかな霞立つらむ武隈の松のくまもる春の夜の月
をりに逢へばこれもさすがにあはれなり小田のかはづの夕暮の声
よそへつつ見れど露だになぐさまずいかにかすべきなでしこの花
めぐり逢ひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜はの月影
思ひ出づる人もあらしの山の端にひとりぞ入りし有明の月
山の端に思ひも入らじ世の中はともかくても有り明の月
心には忘るる時もなかりけり三代の昔の雲の上の月
都にも人や待つらむ石山の峯にのこれる秋の夜の月
夜もすがらひとりみ山の真木の葉にくもるも澄める有明の月
ながめわびぬ柴のあみ戸の明け方に山の端近くこる月影
ながめてもむそぢの秋は過ぎにけり思へばかなし山の端の月
ながめよと思はでしもや帰るらむ月待つなみの海人の釣舟
うち寄する波の声にてしるきかな吹上の浜の秋の初風
けふとてや磯菜つむらむ伊勢島や一志の浦の海人のをとめ子
たれ住みてあはれ知るらむ山里の雨降りすさむ夕暮の空
かざし折る三輪の繁山かき分けてあはれとぞ思ふ杉立てる門
しきみ摘む山路の露に濡れにけりあかつきおきの墨染の袖
いにしへを思ひやりてぞ恋わたる荒れたる宿の苔の岩橋
なにとなく聞けば涙ぞこぼれぬる苔のたもとにかよふ松風
うつろはでしよし信太の杜を見よかへりもぞする葛の裏風
補陀落の南の岸に堂立てていまぞさかえむ北の藤波
ながめばや神路の山に雲消えてゆふべの空を出でむ月影
やはらぐる光にあまる影なれ五十鈴川原の秋の夜の月
立ち帰りまたも見まくのほしきかな御裳濯河の瀬瀬の白波

肥後
藤原家隆朝臣
藤原家隆朝臣
撰政太政大臣
鴨長明
藤原家隆朝臣
俊頼朝臣
加賀左衛門
前大納言忠良
恵子女王
紫式部
法印静賢
藤原盛方朝臣
左近中将公衡
藤原長能
鴨長明
猷円法師
藤原道経
具親
祝部成仲
皇太后宮大夫俊成
西行法師
殷富門院大輔
小侍従
恵慶法師
宜秋門院丹後
赤染衛門
神祇歌
太上天皇
前大僧正慈円
中院入道右大臣

一九一〇 岩代神は知るらむしるべせよ頼む憂き世の夢のゆくすゑ
 一九一一 ちぎりあればうれしきかかると折りに逢ひぬ忘るな神も行くすゑの空
 一九三二 願はくはしばし闇路にやすらひてかかげやせまし法の燈火
 一九四七 朝日さす峯のつづきは芽ぐめどもまだ霜深し谷の陰草
 一九六九 いにしへの尾上の鐘に似たるかな岸打つ波のあか月の声

③ 単なる叙述となる和歌

三五 ながの海の霞のまよりながむれば入る日を洗ふ沖つ白波
 四七 梅の花あかぬ色香もむかしにておなじ形見の春の夜の月
 六四 つくづくと春のながめのさびしきはしのぶに伝ふ軒のたま水
 九三 岩根ふみかさなる山を分けすてて花もいくへの跡の白雲
 一三二 散りまがふ花のよそめは吉野山あらしにさわぐ峯の白雲
 一五五 散りにけりあはれ恨みのたれなれば花のあととふ春の山風
 二一四 いかにせん来ぬ夜あまたのほととぎす待たじと思へば村雨の空
 二五七 窓近きいささ群竹風吹けば秋におどろく夏の夜の夢
 三一 朝ぼらけ荻の上葉の露みればやや肌さむし秋のはつかぜ
 三一七 雲間より星会ひの空を見わたせばしづ心なき天の川波
 三五六 荻の葉に吹けばあらしの秋なるを待ちけるよはのさを鹿の声
 三七四 深草の里の月影さびしさも住みこしままの野べの秋風
 三九七 ながむればちちに物思ふ月にまたわが身ひとつの峯の松風
 四一二 龍田山よはにあらしの松吹けば雲にはうとき峯の月影
 四二二 行く末は空もひとつの武蔵野に草の原より出づる月影
 四三五 おほかたに秋の寝覚めの露けくはまたたが袖に有明の月
 四九二 さびしさはみ山の秋の朝ぐもり霧にしをるる真木の下露
 五〇七 霜を待つまがきの菊の宵のまにおきまよふ色は山の端の月
 五四〇 散りかかると音する物は庭の面に木の葉吹きまく谷の夕風
 五五八 おのづから音する物は庭の面に木の葉吹きまく谷の夕風
 六〇八 さえわびて覚むる枕にかげ見れば霜深き夜の有明の月
 六四四 白波に羽根うちかはし浜千鳥かなしきのは夜のひと声
 八八三 たれとしも知らぬ別れのかなしきは松浦の沖を出づる舟人
 九四四 知らざりし八十瀬の波を分け過ぎてかた敷く袖は伊勢の浜荻

読人しらず
 太上天皇
 前大僧正慈円
 先照高山
 皇太后宮大夫俊成

後徳大寺左大臣
 皇太后宮大夫俊成女
 大僧正行慶
 藤原雅経朝臣
 刑部卿頼輔
 寂蓮法師
 藤原家隆朝臣
 春宮大夫公継
 曾禰好忠
 祭主輔親
 摂政太政大臣
 右衛門督通具
 鴨長明
 左衛門督通光
 摂政太政大臣
 二条院讃岐
 太上天皇
 宮内卿
 二条院讃岐
 清輔朝臣
 皇太后宮大夫俊成女
 重之
 藤原隆信朝臣
 宜秋門院丹後

一〇九六 うちはへてくるしきものは人目のみしのぶの浦の海女の袴縄
 一〇三五 わが恋はあふをかぎりのたのみだにゆくへもしらぬ空のうき雲
 一一七六 みじか夜の残りすくなくふけゆけばかねてものうきあかつきの空
 一一八八 消えかへりあるかなきかのわが身かな恨みて帰る道芝の露
 一一九三 有明は思ひいであれや横雲のただよはれつるしのめの空
 一二〇二 たのめおく人も長等の山にだにさ夜ふけぬれば松風の声
 一二七〇 くもれかしながむるからにかなしきは月におぼゆる人の面影
 一二七二 めぐりあはむ限りはいつと知らねども月なへだてそよその浮雲
 一二八九 形見とてほの踏み分けしあともなしこしはむかしの庭の萩原
 一三二二 わが恋は庭のむら萩うらがれて人をも身をも秋の夕暮
 一三二六 露はらふ寝覚めは秋のむかしにて見はてぬ夢に残る面影
 一三三七 思ひ入る身は深草の秋の露たのめし末やこがらしの風
 一三五〇 すだきけむ昔の人は影絶えて宿もるものは有明の月
 一五七三 うつろふは心のほかの秋なればいまはよそにぞ菊の上の露
 一五九九 人住ぬ不破の関屋の板びさし荒れにし後はただ秋の風
 一六〇一 和歌の浦を松の葉ごしにながむればこず多に寄する海人の釣舟
 一六五〇 水上の空に見ゆるは白雲の立つにまがへる布引の滝
 一八四六 世の中を思ひつらねてながむればむなしき空に消ゆる白雲
 一八九一 君を祈る心の色を人問はばただすの宮のあけの玉垣
 一九一八 なにか思ふなにとか歎く世の中はただ朝顔の花の上の露
 一九四五 おしなべてむなしき空と思ひしに藤咲きぬればむらさきの雲

④呼び掛けと倒置を使わず、二二つの文章になる和歌

二二 いづれをか花とはわかむふるさとの春日の原にまだ消えぬ雪
 二六 夕月夜しほ満ち来らし難波江の蘆の若葉にこゆる白波
 二七 降りつみし高峯のみ雪とけにけり清滝川のみづの白波
 五八 いまはとてたのむの雁もうちわびぬおぼろ月夜のあけぼのの空
 五九 聞く人ぞ涙はおつる帰る雁鳴きてゆくなるあけぼのの空
 八〇 さくらばな咲かばまづみむと思ふまに日数へにけり春の山里
 八七 葛城や高間の桜咲きにけり立田のおくにかかる白雲
 九二 吉野山花やさかりににほふらむふるさとさえぬ峯の白雪

二条院讃岐
 右衛門督通具
 藤原清正
 左大将朝光
 西行法師
 鴨長明
 八条院高倉
 撰政太政大臣
 藤原保季朝臣
 前大僧正慈円
 皇太后宮大夫俊成女
 藤原家隆朝臣
 法橋行遍
 冷泉院御歌
 撰政太政大臣
 寂蓮法師
 二条関白内大臣
 皇太后宮大夫俊成
 前大僧正慈円
 釈教歌
 前大僧正慈円

凡河内躬恒
 藤原秀能
 西行法師
 寂蓮法師
 皇太后宮大夫俊成
 藤原隆時朝臣
 寂蓮法師
 藤原家衡朝臣

九七
 一一八
 一三三
 一五四
 一五九
 二一五
 二一六
 二二〇
 二二六
 二二七
 二二六
 二二七
 二二六
 二二五
 二二五
 二二六
 二六五
 二八二
 二九二
 二九六
 三〇〇
 三〇一
 三二六
 三二八
 三三九
 三四三
 三五九
 三六〇
 三六一
 三六二
 三六三
 三六四

花ぞみる道の芝草ふみわけて吉野の宮の春のあけぼの
 やまざくら花のした風吹きにけり木のもとごとの雪のむらぎえ
 みよしのの高峯のさくら散りにけりあらしも白き春のあけぼの
 思ひ立つ鳥は古巢もたのむらむなれぬる花のあとの夕暮
 駒とめてなほ水かはむやまぶきの花の露そふ井手の玉川
 声はして雲路にむせぶほととぎす涙やそく宵の村雨
 ほととぎすなほうとまれぬ心かな汝が鳴く里のよその夕暮
 うちしめりあやめぞかをるほととぎす鳴くやさつきの雨の夕暮
 小山田に引くしめなはのうちはへて朽ちやしぬらむさみだれのころ
 いかばかり田子の裳裾もそぼつらむ雲間も見えぬころのさみだれ
 ほととぎす雲ぬのよそにすぎぬなりはれぬ思ひのさみだれのころ
 うかひぶねあはれとぞみるものふのやそうち川の夕やみの空
 鶉飼舟高瀬さしこすほどなれやむすぼほれゆくかがり火の影
 重ねてもすずしかりけり夏衣薄きたもとにやどる月影
 すずしさは秋やかへりて初瀬川古川のべの杉のしたかげ
 露すがる庭の玉笹うちなびきひとむら過ぎぬ夕立の雲
 夏衣かたへすずしくなりぬなり夜やふけぬらむゆきあひの空
 あけぬるか衣手さむしすが原やふしみの里の秋のはつ風
 水茎の岡の葛葉も色づきてけさうらがなし秋のはつかぜ
 あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風たちぬ宮城野の原
 ながむれば衣手すずしひさかたの天の川原の秋の夕暮
 いとどしく思ひ消ぬべしたなばたの別れの袖における白露
 川水に鹿のしがらみかけてけり浮きて流れぬ秋萩の花
 ふちばかまぬしはたれとも白露のこぼれてにほふ野への秋風
 おきて見むと思ひしほどに枯れにけり露よりけなる朝顔の花
 もの思はでかかる露やは袖におくながめてけりな秋の夕暮
 み山路やいつより秋の色ならむ見ざりし雲の夕暮の空
 さびしさはその色としもなかりけり真木立つ山の秋の夕暮
 心なき身にもあはれはしられけりしぎ立つ沢の秋の夕暮
 見わたせば花もみちもなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮
 たへてやは思ひありともいかがせむむぐらの宿の秋の夕暮

正三位季能
 康資王母
 藤原家隆朝臣
 寂蓮法師
 皇太后宮大夫俊成
 式子内親王
 権中納言公経
 撰政太政大臣
 撰政太政大臣
 伊勢大輔
 太上天皇
 前大僧正慈円
 寂蓮法師
 撰政太政大臣
 藤原有家朝臣
 権中納言公経
 前大僧正慈円
 藤原家隆朝臣
 頭昭法師
 西行法師
 式子内親王
 大中臣能宣朝臣
 前中納言匡房
 公猷法師
 曾禰好忠
 撰政太政大臣
 前大僧正慈円
 寂蓮法師
 西行法師
 藤原定家朝臣
 藤原雅経朝臣

三六六
三八五
三九二
四〇四
四二一
四三三
四四三
四五〇
四八五
四九三
五〇三
五〇四
五一四
五一七
五二五
五四二
五五五
五六一
五六三
五六九
五七三
五九九
六二七
六七一
六七三
六七四
六九〇
七〇五
七〇八
七四〇

秋風のいたりいたらぬ袖はあらじただわれからの露の夕暮
あやなくも曇らぬ宵をいとふかな信夫の里の秋の夜の月
ながめつつ思ふもさびしひさかたの月の都の明け方の空
憂き身にはながむるかひもなかりけり心にくもる秋の夜の月
秋の夜の長きかひこそなかりけれ待つにふけぬる有明の月
さらにまた暮をたのめと開けにけり月はつれなき秋の夜の空
われならぬ人もあはれやまさるらむ鹿鳴く山の秋の夕暮
ひとり寝やいとどさびしきさを鹿の朝ふす小野の葛の浦風
ふけにけり山の端ちかく月さえてとをちの里に衣打つ声
あけぼのや川瀬の波の高瀬舟くだすか人の袖の秋霧
大江山かたぶく月の影さえて鳥羽田の面に落つる雁がね
村雲や雁の羽風に晴れぬらむ声聞く空にすめる月かげ
寝覚めする袖さへ寒く秋の夜のあらし吹くなり松虫の声
あだに散る露の枕に伏しわびてうづら鳴くなりこの山風
秋ふけぬ鳴けや霜夜のきりぎりすやや影寒しよもぎふの月
神南備のみむろの梢いかならむなべての山もしぐれするころ
飛鳥川瀬々に波寄るくれなるや葛城山のこがらしの風
散りかかるもみぢ流れぬ大井川いづれ井堰きの水のしがらみ
うつりゆく雲にあらしの声すなり散るか正木の葛城の山
しぐれつつ袖もほしあへずあしびきの山の木の葉にあらし吹くころ
いつのまに空のけしきの変はらむはげしきけさのこがらしの風
雲晴れてのちもしぐるる柴の戸や山風はらふ松の下露
たえだえに里分く月の光かなしぐれを送るよはの村雲
さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵ならべむ冬の山里
駒とめて袖うち払ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮
夢かよふ道さへたえぬ呉竹のふしみの里の雪の下をれ
降る雪にたく藻のけぶりかきたえてさびしくもあるか塩釜の浦
日数ふる雪げにまさる炭釜のけぶりもさびし大原の里
老いの波越えける身こそあはれなれことしもいまは末の松山
初春の初子のけふのたまははき手に取るからにゆらぐ玉の緒
高砂の松も昔になりぬべしなほゆくすゑは秋の夜の月

鴨長明
橘為仲朝臣
藤原家隆朝臣
前大僧正慈円
右大将忠経
左衛門督通光
土御門内大臣
藤原顕綱
式子内親王
左衛門督通光
前大僧正慈円
朝恵法師
大江嘉言
皇太后宮大夫俊成女
太上天皇
八条院高倉
権中納言長方
大納言経信
藤原雅経朝臣
信濃
津守国基
藤原隆信朝臣
寂蓮法師
西行法師
藤原定家朝臣
藤原有家朝臣
入道前関白太政大臣
式子内親王
寂蓮法師
読人しらす
寂蓮法師

七五五
七八八
七九八
八二〇
八二四
八三四
八九二
九二六
九三二
九四〇
九四一
九四三
九五三
九五八
九六二
九六四
九六九
九八二
九八七
一〇三三
一〇八九
一一〇八
一一三八
一一四二
一一八六
一一九七
一二七四
一二七五
一二八〇
一二八一
一二八六

立ち寄ればすずしかりけり水鳥の青羽の山の松のゆふ風
たまゆらの露も涙もとどまらずなき人恋ふる宿の秋風
ふるさとを別れし秋をかぞふれば八年になりぬ有明の月
見し人のけぶりになりしゆふべより名ぞむつまじき塩釜の浦
夜もすがら昔のことを見つるかな語るやうつつありし世や夢
よもぎふにいつかおおくべき露の身はけふの夕暮あすのあけぼの
なごり思ふたもとにかねてしられけり別る旅の行くすゑの露
磯馴れぬ心ぞたへぬ旅寝する蘆のまる屋にかかる白波
夏刈りの蘆のかり寝もあはれなり玉江の月の明方の空
ふるさとのけふの面影さそひ来と月にぞ契る佐夜の中山
忘れじと契りて出でし面影は見ゆらむものをふるさとの月
幾夜かは月をあはれとながめ来て波に折り敷く伊勢の浜荻
ふるさとに聞きしあらしの声も似ず忘れぬ人を佐夜の中山
いたづらに立つや浅間の夕けぶり里問ひかぬるをちこちの山
岩が根の床にあらしをかた敷きてひとりや寝なむ佐夜の中山
枕とていづれの草に契らむ行くをかぎりの野べの夕暮
契らねどいひと夜は過ぎぬ清見潟波に別るるあかつきの雲
都にもいまやころも宇津の山夕霜はらふ蔦のした道
年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり佐夜の中山
思ひつつへにける年のかひやなきただあらしの夕暮の空
もらさばや思ふ心をさてのみはえぞ山城の井手のしがらみ
山賤の麻のさごろもをさをあらみあはで月日や杉ふける庵
つれなさのたぐひまでやはつらからぬ月をもめでじ有明の空
としもへぬ祈るちぎりは初瀬山尾上の鐘のよその夕暮
またも来む秋をたのむの雁だにも鳴きてぞ帰る春のあけぼの
たのめずは人を待乳の山なりと寝なましものをいざよひの月
恋ひわたる涙や空にくもるらむ光も変わるねやの月影
いくめぐり空ゆく月もへだてきぬ契りし中はよその浮雲
そのままに松のあらしも変らぬを忘れやしぬる更けし夜の月
人ぞうきたのめぬ月はめぐり来てむかし忘れぬ蓬生の宿
あと絶えて浅茅が末になりけりたのめし宿の庭の白露

式部大輔光範
藤原定家朝臣
久我太政大臣
紫式部
大江匡衡朝臣
前大僧正慈円
惟明親王
源師賢朝臣
皇太后宮大夫俊成
藤原雅経朝臣
撰政太政大臣
越前
藤原家隆朝臣
雅経朝臣
藤原有家朝臣
鴨長明
藤原家隆朝臣
藤原定家朝臣
西行法師
太上天皇
殷富門院大輔
撰政太政大臣
藤原有家朝臣
藤原定家朝臣
撰政太政大臣
太上天皇
権中納言公経
左衛門督通光
法眼宗円
藤原秀能
二条院讃岐

一二九一
一三〇七
一三一五
一三二〇
一三二一
一三二七
一三三三
一三三八
一三五三
一四二四
一四二五
一四三六
一四五五
一四七三
一四八六
一五〇五
一五一七
一五四三
一五四四
一五四六
一五五九
一六〇二
一六〇三
一六〇九
一六一八
一六五四
一六六三
一六七三
一七一五
一七三〇
一七三五

忘れずはなれし袖もやこほるらむ寝ぬ夜の床の霜のさむしろ
あはれとて問ふ人のなどなかるらむ物思ふ宿の荻の上風
草枕結びさだめむ方知らずならはぬ野べの夢の通ひ路
消えわびぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしの杜の下露
来ぬ人を秋のけしきや更けぬらむ恨みによわる松虫の声
心こそゆくへも知らね三輪の山杉のこずゑの夕暮の空
見し人の面影とめよ清見濁袖にせきもる波の通ひ路
野べの露は色もなくやこぼれつる袖よりすぐる荻の上風
稲妻は照らさぬよひもなかりけりいづらほのかに見えしかげろふ
数ならばかからましやは世の中にいとかなしきはしづのをだまき
人ならば思ふ心をいひてましよしやさこそはしづのをだまき
山陰やさらでは庭にあともなし春ぞ来にける雪のむら消え
なれなれて見しはなごりの春ぞともなど白川の花の下陰
白波のこゆらむ末の松山は花とや見ゆる春の夜の月
いく千代とかぎらぬ君が御代なれどなほをしまるけさのあけぼの
夜もすがら浦こぐ船はあともなし月ぞ残れる志賀の唐崎
月見ばといひしばかりの人は来で真木の戸たたく庭の松風
思ひやれなにをしのぶとなけれども都おぼゆる有明の月
有明のおなじながめは君も問へ都のほかも秋の山里
雲をのみつらきものとて明かす夜の月よこずゑにをちかたの山
荒れわたる秋の庭こそあはなれまして消えなむ露の夕暮
水の江のよしのの宮は神さびてよはひたけたる浦の松風
いまさらに住みうしとともいかがせむ灘の塩屋の夕暮の空
見わたせば霞のうちもかすみけりけふりたなびく塩釜の浦
いとひてもなほいとほしき世なりけり吉野の奥の秋の夕暮
真木の板も苔むすばかりなりにけり幾代経ぬらむ瀬田の長橋
いまはわれ松の柱の杉の庵にとづべきものを苔深き袖
岡のべの里のあるじを尋ねれば人は答へず山おろしの風
いにしへの海人やけぶりとなりぬらむ人目もみえぬ塩釜の浦
うれしさは忘れやはするしのぶ草しのぶるものを秋の夕暮
露の身の消えばわれこそ先立ためおくれむものか森の下草

藤原定家朝臣
西行法師
雅経朝臣
藤原定家朝臣
寂蓮法師
前大僧正慈円
雅経朝臣
前大僧正慈円
相摸
参議篁
藤原惟成
藤原有家朝臣
藤原雅経朝臣
加賀左衛門
左衛門督家通
宜秋門院丹後
撰政太政大臣
惟明親王
式子内親王
右大将忠経
皇太后宮大夫俊成
正三位季能
藤原秀能
藤原家隆朝臣
藤原家衡朝臣
前中納言匡房
式子内親王
前大僧正慈円
一条院皇后宮
伊勢大輔
小馬命婦

一七五三
一七六一
一七八五
一八九六
一九〇五
一九三九
一九五二

いたづらに過ぎにしことや歎かれむ受けがたき身の夕暮の空
君が代に逢へるばかりの道はあれど身をば頼まず行く末の空
みちのくのいはで忍ぶはえぞ知らぬ書きつくしてよ壺の石文
けふ祭る神の心やなびくらむしでに波立つ佐保の川風
さめぬれば思ひあはせてねをぞ泣く心づくしのいにしへの夢
これやこの憂き世のほかの春ならむ花のとほそのあけぼのの空
道のべのほたるばかりをしるべにてひとりぞ出づる夕闇の空

前大僧正慈円
雅経朝臣
前右大将頼朝
入道前関白太政大臣
前大僧正慈円
寂蓮法師
寂然法師

資料⑨『新古今和歌集』における本歌取

参考文献

- ① = 『新古今和歌集』二冊、久保田淳校注、新潮社、1979.3・9
 ② = 『新古今和歌集』田中裕・赤瀬信吾校注、新日本古典文学大系、岩波書店、1992.1
 ③ = 『新古今和歌集』峰村文人校注・訳者、日本古典文学全集、小学館、1974.3

巻	新 番号	詠人	本歌の 出典	本歌の 部立	出典 番号	本歌の 詠人	参考 文献
春歌上	0001	摂政太政大臣	拾遺集	春	0001	壬生忠岑	①②
春歌上	0002	太上天皇	万葉集	春の雑歌	1812	詠み人しらず	①②③
春歌上	0005	俊成	千載集	秋歌下	0302	大弐三位	①②③
春歌上	0013	前参議教長	古今集	春歌上	0018	詠み人しらず	①③
春歌上	0013	前参議教長	古今集	春歌上	0022	貫之	②③
春歌上	0015	俊成	拾遺集	賀	0285	伊勢	②
春歌上	0017	藤原家隆	古今集	春歌上	0012	源当純	①②③
春歌上	0017	藤原家隆	古今集	春歌上	0013	紀友則	①②③
春歌上	0018	太上天皇	古今集	春歌上	0005	詠み人しらず	①②③
春歌上	0019	藤原仲実	古今集	春歌上	0006	素性法師	①②
春歌上	0025	左衛門督通光	後拾遺集	春上	0042	曾禰好忠	①②③
春歌上	0026	藤原秀能	後拾遺集	春上	0049	藤原範永	②
春歌上	0028	源重之	後撰集	冬	0497	詠み人しらず	②
春歌上	0031	惟明親王	古今集	春歌上	0004	二条后	①②③
春歌上	0037	藤原家隆	古今集	東歌・陸奥歌	1093		①②③
春歌上	0038	藤原定家	古今集	恋歌二	0601	忠岑	①②
春歌上	0039	藤原定家	古今集	春歌上	0015	在原棟梁	②
春歌上	0040	藤原定家	新古今集 句題和歌	春歌上	0055	大江千里	①②③
春歌上	0046	右衛門督通具	古今集	春歌上	0033	詠み人しらず	①②③
春歌上	0046	右衛門督通具	古今集	恋歌五	0747	在原業平	③
春歌上	0047	俊成女	古今集	春歌上	0037	素性法師	①②③
春歌上	0049	大弐三位	古今集	春歌上	0033	詠み人しらず	②
春歌上	0053	藤原有家	古今集	春歌上	0032	詠み人しらず	①②③
春歌上	0054	八条院高倉	古今集	春歌上	0038	友則	②
春歌上	0058	寂蓮法師	千載集	春歌上	0036	源俊頼朝臣	①②
春歌上	0059	俊成	古今集	秋歌上	0221	詠み人しらず	①②③
春歌上	0070	輔仁親王	古今集	恋歌四	0699	詠み人しらず	②
春歌上	0071	崇徳院	日本書紀	卷十五			②
春歌上	0073	殷富門院大輔	後拾遺集	春歌上	0076	藤原元真	②
春歌上	0075	藤原有家	古今集	春歌上	0027	僧正遍昭	①②③
春歌上	0075	藤原有家	拾遺集	賀	0278	元輔	①②③
春歌上	0082	藤原家隆	古今集	春歌下	0126	素性	①②③
春歌上	0087	寂蓮法師	古今集	春歌上	0059	貫之	①②③
春歌上	0087	寂蓮法師	新古今集和 漢朗詠集	恋歌一	0990	詠み人しらず	①②

春歌上	0090	道命法師	古今集	冬歌	0337	紀友則	②
春歌上	0091	藤原定家	万葉集		1747	高橋虫麻呂	①②
春歌上	0092	藤原家衡	古今集	冬歌	0325	坂上是則	①②
春歌上	0093	藤原雅経	万葉集 拾遺集 伊勢物語	寄物陳思 恋五 七十四段	2422 0969		①②③
春歌上	0095	慈円	拾遺集	春	0049	伊勢	①②③
春歌上	0096	右衛門督通具	後撰集	春中	0049	僧正遍昭	①②③
春歌上	0097	正三位季能	万葉集	卷六	1048	田辺福麻呂	①②③
春歌上	0098	藤原有家	万葉集	卷四	0495	田部櫨子	①②③
春歌下	0099	太上天皇	拾遺集	恋三	0778	人麿	①②③
春歌下	0100	俊成	金葉集	雑部上	0521	僧正行尊	②
春歌下	0102	京極前関白太 政大臣	古今集	冬	0337	紀友則	②
春歌下	0113	藤原家隆	古今集	秋歌下	0263	忠峯	①②
春歌下	0113	藤原家隆	後撰集	雑一	1089	蟬丸	①②
春歌下	0115	祝部成仲	拾遺集	春	0049	伊勢	①②③
春歌下	0119	源重之	古今集	春歌下	0088	大伴黒主	②
春歌下	0121	源具親	伊勢物語	十段			①②③
春歌下	0124	藤原 顕輔	詞花集	春	0018	康資王母	②
春歌下	0128	宮内卿	拾遺集	哀傷	1327	沙弥満誓	①②③
春歌下	0131	崇徳院御歌	拾遺集	賀	0299	詠み人しらず	②③
春歌下	0134	藤原定家	古今集 伊勢物語	春歌上 十七段	0063	在原業平	①②③
春歌下	0135	太上天皇	金葉集	春部	0058	左兵衛督実能	①②③
春歌下	0135	太上天皇	古今集 伊勢物語	春歌上 十七段	0063	在原業平	①②③
春歌下	0136	摂政太政大臣	古今集 伊勢物語	春歌上 十七段	0063	在原業平	①②③
春歌下	0137	式子内親王	源氏物語	若紫			①②③
春歌下	0139	藤原家隆	古今集	恋歌	0601	忠峯	①②③
春歌下	0139	藤原家隆	古今集	雑歌下	0942	詠み人しらず	①②③
春歌下	0140	俊成女	古今集	雑歌下	0938	小野小町	①②③
春歌下	0144	左近中将良平	古今集	恋歌四	0717	詠み人しらず	①②③
春歌下	0146	太上天皇	古今集	春歌下	0113	小野小町	①②
春歌下	0149	式子内親王	伊勢物語	四十五段			①②③
春歌下	0150	清原元輔	拾遺集	拾遺集	0040	詠み人しらず	②
春歌下	0152	坂上是則	古今集	雑体	1059	詠み人しらず	②
春歌下	0156	権中納言公経	源氏物語	花宴			①②③
春歌下	0158	藤原家隆	古今集	春歌下	0124	貫之	①②
春歌下	0159	俊成	古今集	神遊びの歌	1080		①②③
春歌下	0162	藤原興風 イ	古今集	春歌下	0125	詠み人しらず	②
春歌下	0164	天曆御歌	古今集	雑歌上	0864	詠み人しらず	②③
春歌下	0167	藤原道信	古今集	春歌下	0118	貫之	②
春歌下	0168	大僧正行尊	詞花集	雑歌上	0276	花山院御製	②③
春歌下	0169	寂蓮法師	千載集	春歌下	0122	崇徳院御製	②③
春歌下	0169	寂蓮法師	古今集	秋歌下	0311	貫之	①②③
春歌下	0171	俊成女	後撰集	恋一	0512	詠み人しらず	①②③

春歌下	0171	俊成女	万葉集	卷九	1768	抜気大首	③
春歌下	0174	摂政太政大臣	拾遺集	春	0077	貫之	③
夏歌	0177	慈円	古今集	春下	0134	躬恒	①②③
夏歌	0179	俊成女	古今集	恋歌五	0795	詠み人しらず	①③
夏歌	0179	俊成女	古今集	恋歌五	0797	小町	①②③
夏歌	0181	大宰大弐重家	古今集	雑歌上	0911	詠み人しらず	①③
夏歌	0184	藤原雅経	古今集	恋歌四	0677	詠み人しらず	①②③
夏歌	0185	待賢門院安芸	古今集	雑歌上	0892	詠み人しらず	②
夏歌	0185	待賢門院安芸	万葉集	卷十一	2687	詠み人しらず	①③
夏歌	0191	紫式部	万葉集	卷二	0107	大津皇子	①②
夏歌	0192	弁乳母	拾遺集	夏歌	0100	坂上望城	①②
夏歌	0192	弁乳母	拾遺集	夏歌	0101	平兼盛	①②
夏歌	0194	詠み人しらず	万葉集	卷十	1938		①③
夏歌	0200	前中納言匡房	後撰集	夏歌	0148	詠み人しらず	②③
夏歌	0201	俊成	古今集	夏歌	0153	紀友則	②
夏歌	0201	俊成	和漢朗詠集	山家	0555	白	①②③
夏歌	0207	民部卿範光	後拾遺集	夏	0195	大江公資	①②③
夏歌	0209	摂政太政大臣	古今集	恋歌三	0625	壬生忠岑	①②③
夏歌	0212	権中納言親宗	古今集	恋歌四	0691	素性法師	①
夏歌	0214	藤原家隆	拾遺集	恋三	0848	人麿	①②③
夏歌	0215	式子内親王	古今集	夏歌	0149	詠み人しらず	①②③
夏歌	0216	権中納言公経	古今集	夏歌	0147	詠み人しらず	①②③
夏歌	0220	摂政太政大臣	古今集	恋歌一	0469	詠み人しらず	①②③
夏歌	0229	前中納言匡房	古今集	恋歌	0587	貫之	①②③
夏歌	0230	藤原基俊	金葉集	夏歌	0097	大納言経信	①
夏歌	0230	藤原基俊	後撰集	雑	1183	枇杷左大臣	①③
夏歌	0231	入道前関白太 政大臣	万葉集	卷十一	2703	詠み人しらず	①
夏歌	0232	藤原定家	万葉集 拾遺集	卷十一 恋歌五	2370 0936	人麿	①②③
夏歌	0235	藤原定家	古今集	恋歌三	0625	壬生忠岑	①
夏歌	0238	俊成	古今集 伊勢物語	夏歌 六十段	0139	詠み人しらず	②③
夏歌	0240	式子内親王	伊勢物語	三十二段			②③
夏歌	0242	慈円	古今集 伊勢物語	夏歌 六十段	0139	詠み人しらず	②
夏歌	0243	詠み人しらず	古今集 伊勢物語	夏歌 六十段	0139	詠み人しらず	②
夏歌	0244	詠み人しらず	古今集 伊勢物語	夏歌 六十段	0139	詠み人しらず	②
夏歌	0245	俊成女	古今集 伊勢物語	夏歌 六十段	0139	詠み人しらず	①②③
夏歌	0246	藤原家隆	古今集 伊勢物語	夏歌 六十段	0139	詠み人しらず	①②③
夏歌	0247	藤原定家	源氏物語	葵		中将の君	①
夏歌	0247	藤原定家	源氏物語	夕顔		光源氏	①②③
夏歌	0247	藤原定家	後拾遺集	夏	0214	相模	②
夏歌	0251	慈円	万葉集	卷三	0264	柿本人麿	①③
夏歌	0254	藤原定家	古今集	歌	0968	伊勢	①②③
夏歌	0255	摂政太政大臣	新古今集伊	雑歌中	1589	在原業平	①②③

			勢物語	八十七段			
夏歌	0256	式子内親王	和漢朗詠集	夏夜	0151	白	①②③
夏歌	0257	春宮大夫公継	和漢朗詠集	夏夜	0151	白	②
夏歌	0257	春宮大夫公継	古今集	秋歌上	0169	藤原敏行朝臣	①②③
夏歌	0257	春宮大夫公継	万葉集	卷十九	4291	大伴家持	①③
夏歌	0258	前大僧正慈円	古今集	羈旅歌	0404	貫之	①②③
夏歌	0259	権大納言通光	古今集	恋歌三	0625	壬生忠岑	①
夏歌	0261	藤原有家	古今集	雑体	1009	詠み人しらず	①②③
夏歌	0269	前大納言忠良	古今集	恋一	0490	詠み人しらず	①②
夏歌	0275	高倉院御歌	源氏物語	夕顔		夕顔の女君	②③
夏歌	0276	前太政大臣	源氏物語	夕顔		光る源氏	①②③
夏歌	0281	宮内卿	古今集	東歌	1099		①②③
夏歌	0282	慈円	古今集	夏歌	0168	躬恒	①②③
夏歌	0284	貫之	古今集	恋一	0515	詠み人しらず	②
秋歌上	0286	崇徳院御歌	詞花集	秋	0108	大江嘉言	③
秋歌上	0287	藤原季通	拾遺集	秋	0141	安貴王	①②③
秋歌上	0289	藤原家隆	詞花集	秋	0083	僧都清因	①②③
秋歌上	0290	藤原秀能	古今集	秋歌上	0169	藤原敏行	③
秋歌上	0293	摂政太政大臣	古今集	雑歌下	0969	業平朝臣	①③
秋歌上	0295	源具親	古今集	友則	0595	友則	②
秋歌上	0296	顕昭法師	万葉集	卷十	2193	詠み人しらず	①
秋歌上	0296	顕昭法師	万葉集	卷十	2208	詠み人しらず	②③
秋歌上	0297	越前	後撰集	雑歌四	1281	藤原のたゞく に	①②③
秋歌上	0300	西行法師	古今集	東歌	1091	詠み人しらず	①
秋歌上	0301	俊成	万葉集	卷八	1634	或者贈尼歌	①②③
秋歌上	0307	藤原経衡	古今六帖		1049	詠み人しらず	②③
秋歌上	0308	式子内親王	拾遺集	秋	0141	安貴王	①
秋歌上	0308	式子内親王	後拾遺集	秋上	237	藤原為頼	①
秋歌上	0316	藤原長能	古今集	春歌上	0002	紀貫之	②③
秋歌上	0319	小弁	古今集	秋歌上	0171	詠み人しらず	②③
秋歌上	0320	俊成	後拾遺集	秋上	0242	上總乳母	①②③
秋歌上	0322	入道前関白太 政大臣	拾遺集	秋	0142	躬恒	①
秋歌上	0323	権中納言公経	古今集	秋歌上	0175	詠み人しらず	①②③
秋歌上	0328	古今集	古今集	秋歌上	0217	詠み人しらず	①③
秋歌上	0328	前中納言匡房	古今集	秋歌下	0303	春道列樹	③
秋歌上	0328	前中納言匡房	古今六帖	第三	1633		①
秋歌上	0329	従三位頼政	万葉集	卷十	2101	詠み人しらず	②③
秋歌上	0329	従三位頼政	万葉集	卷十	2107	詠み人しらず	①
秋歌上	0330	権僧正永縁	古今集	秋歌上	0247	詠み人しらず	②③
秋歌上	0331	顕昭法師	万葉集	卷二十	4315	大伴家持	①②③
秋歌上	0335	凡河内躬恒	拾遺集	雑秋	1099	詠み人しらず	②
秋歌上	0338	左近中将良平	古今集	恋一	0516	詠み人しらず	③
秋歌上	0338	左近中将良平	後撰集	恋三	0739	かねもちの朝 臣女	①②
秋歌上	0339	公猷法師	古今集	秋歌上	0241	素性	
秋歌上	0349	式子内親王	古今集	秋歌上	0242	平貞文	①②③
秋歌上	0349	式子内親王	拾遺集	恋二	0770	勝観法師	①②③

秋歌上	0364	藤原雅経	伊勢物語	三段			①②③
秋歌上	0366	鴨長明	古今集	春歌下	0093	詠み人しらず	①②③
秋歌上	0368	式子内親王	伊勢物語	三十二段			①②③
秋歌上	0369	藤原長能	古今集	恋歌五	0772	詠み人しらず	②
秋歌上	0371	曾禰好忠	古今集	秋歌下	0256	貫之	②
秋歌上	0374	右衛門督通具	古今集 伊勢物語	雑歌下 百二十三段	0832		①②③
秋歌上	0375	俊成女	拾遺集	恋三	0796	人麿	②
秋歌上	0375	俊成女	古今集	雑歌上	0892	詠み人しらず	①
秋歌上	0380	式子内親王	古今集	雑歌下	0947	素性	①②
秋歌上	0381	円融院御歌	古今集	秋歌上	0184	詠み人しらず	②③
秋歌上	0389	藤原家隆	古今集	秋歌下	0250	文屋康秀	①②③
秋歌上	0391	俊成女	古今集	秋歌上	0194	忠峯	①②③
秋歌上	0391	俊成女	古今集	秋歌下	0262	貫之	①③
秋歌上	0393	摂政太政大臣	古今集	恋歌四	0694	詠み人しらず	②③
秋歌上	0396	寂蓮法師	古今集	秋歌上	0184	詠み人しらず	①②
秋歌上	0397	鴨長明	古今集	秋歌上	0193	大江千里	①②③
秋歌上	0399	宮内卿	後拾遺集	恋四	0827	源重之	①②
秋歌上	0412	左衛門督通光	古今集	雑歌下	0994	詠み人しらず	①②③
秋歌上	0419	摂政太政大臣	古今集	雑歌下	0878	詠み人しらず	①②③
秋歌上	0420	藤原定家	古今集	恋歌四	0689	詠み人しらず	①②③
秋歌上	0428	俊成女	後拾遺集	秋下	0368	伊勢大輔	①②
秋歌上	0428	俊成女	後拾遺集	秋下	0369	源頼家朝臣	①③
秋歌上	0429	俊成女	後拾遺集	雑一	0838	源頼家	①②
秋歌上	0431	左京大夫頭輔	後撰集	秋中	0302	天智天皇御製	①②③
秋歌上	0433	太上天皇	源氏物語	桐壺		鞆負命婦	①②③
秋歌上	0434	左衛門督通光	古今集	恋歌三	0625	壬生忠岑	①②③
秋歌上	0436	藤原雅経	後撰集	恋三	0771	詠み人しらず	③
秋歌上	0436	藤原雅経	古今集	雑上	0923	在原業平	①③
秋歌下	0437	藤原家隆	金葉集	冬部	0258	修理大夫顯季	②
秋歌下	0445	慈円	古今集	秋歌上	0214	忠岑	①②③
秋歌下	0471	太上天皇	源氏物語	紅葉賀		藤壺	③
秋歌下	0473	藤原家隆	源氏物語	桐壺		鞆負命婦	①②③
秋歌下	0473	藤原家隆	源氏物語	松風		明石尼君	①③
秋歌下	0478	摂政太政大臣	古今集	恋五	0747	在原業平	①②③
秋歌下	0483	藤原雅経	古今集	冬歌	0325	坂上是則	①②③
秋歌下	0487	藤原定家	拾遺集	恋三	0778	人麿	①②③
秋歌下	0488	寂蓮法師	古今集	冬歌	0315	源宗干	①
秋歌下	0493	左衛門督通光	後拾遺集	秋上	0324	大納言経信母	①②③
秋歌下	0494	権大納言公実	拾遺集	秋歌	0202	深養父	①②③
秋歌下	0495	曾禰好忠	源氏物語	夕霧			②
秋歌下	0495	曾禰好忠	後拾遺集	秋上	0324	大納言経信母	②
秋歌下	0508	花園左大臣室	後拾遺集	秋歌下	0351	大藏卿長房	②
秋歌下	0512	慈円	古今集 伊勢物語	雑歌下 百二十三段	0971	在原業平	②③
秋歌下	0512	慈円	古今集 伊勢物語	雑歌下 百二十三段	0972	詠み人しらず	①②③
秋歌下	0513	詠み人しらず	古今集 伊勢物語	雑歌下 百二十三段	0972	詠み人しらず	①②③

秋歌下	0515	俊成女	源氏物語	帚木		夕顔の女君	①②③
秋歌下	0515	俊成女	拾遺集	秋歌	0205	詠み人しらず	①③
秋歌下	0517	太上天皇	後拾遺集	秋歌上	0273	曾禰好忠	①②③
秋歌下	0518	摂政太政大臣	伊勢物語	六十三段			②
秋歌下	0518	摂政太政大臣	古今集	恋歌四	0689	詠み人しらず	③
秋歌下	0518	摂政太政大臣	拾遺集	恋三	0778	人麿	③
秋歌下	0518	摂政太政大臣	万葉集	卷九	1692	詠み人しらず	①
秋歌下	0522	寂蓮法師	家持集 新古今集	冬歌	0269 0620	家持	①②③
秋歌下	0525	八条院高倉	拾遺集	冬	0219	柿本人麿	③
秋歌下	0525	八条院高倉	古今集	秋歌下	0253	詠み人しらず	②
秋歌下	0525	八条院高倉	古今集	秋歌下	0284	詠み人しらず	①
秋歌下	0526	太上天皇	拾遺集	秋	0204	惠慶法師	②
秋歌下	0530	宮内卿	古今集	秋下	0283	詠み人しらず	①②③
秋歌下	0530	宮内卿	後拾遺集	秋下	0366	能因法師	②
秋歌下	0531	摂政太政大臣	拾遺集	夏	0136	忠岑	②
秋歌下	0532	藤原定家	古今集	秋下	0250	文屋康秀	①②③
秋歌下	0534	式子内親王	古今集	恋歌五	0770	僧正遍昭	②③
秋歌下	0536	春宮大夫公継	古今集	賀歌	0362	坂上是則	①②③
秋歌下	0537	藤原家隆	古今集 伊勢物語	春下 八十段	0133	業平朝臣	①②
秋歌下	0537	藤原家隆	古今集	秋下	0260	貫之	①②③
秋歌下	0538	西行法師	古今集	神遊	1077		①②③
秋歌下	0542	権中納言長方	万葉集 新古今集	卷十	2210 0541	詠み人しらず 柿本人麻呂	①②③
秋歌下	0545	権中納言兼宗	拾遺集	冬	0220	僧正遍昭	①②③
秋歌下	0549	守覚法親王	古今集	恋二	0615	友則	②③
冬歌	0555	大納言経信	古今集	秋下	0303	春道列樹	①②③
冬歌	0557	俊頼	古今集	神遊びの歌	1077		②
冬歌	0557	俊頼	後拾遺集	雑五	1145	源頼実	②③
冬歌	0566	宮内卿	拾遺集	冬	0220	僧正遍昭	①②③
冬歌	0571	前大僧正覚忠	後拾遺集	冬	0384	能因法師	②
冬歌	0574	詠み人しらず	古今集	神遊びの歌	1077		②
冬歌	0577	能因法師	万葉集 新古今集	卷十 冬	2196 0582	詠み人しらず 柿本人麻呂	①②③
冬歌	0581	太上天皇	万葉集	卷十	1927	詠み人しらず	①
冬歌	0581	太上天皇	万葉集 新古今集	卷十 冬	2196 0582	詠み人しらず 柿本人麻呂	①②③
冬歌	0586	道因法師	後撰集	冬	0445	詠み人しらず	①②
冬歌	0586	道因法師	古今集	恋五	0782	小野小町	①
冬歌	0592	中務卿具平親王	古今集	秋歌上	0184	詠み人しらず	②③
冬歌	0604	藤原雅経	古今集	秋歌上	0194	忠峯	①②
冬歌	0606	殷富門院大輔	後拾遺集	恋一	0632	藤原顕季	①③
冬歌	0607	清輔朝臣	古今集(清 輔本古今)	秋歌上	0184	詠み人しらず	①
冬歌	0610	藤原雅経	源氏物語	賢木			②③
冬歌	0611	法印幸清	古今集	恋歌四	0689	詠み人しらず	①②③
冬歌	0614	太上天皇	元具集		0198	藤原元具	①②③
冬歌	0615	摂政太政大臣	万葉集	卷二	0133	柿本人麻呂	①②③

冬歌	0616	清輔朝臣	万葉集	卷二	0133	柿本人麻呂	①②③
冬歌	0616	清輔朝臣	古今集	雑体	1047	詠み人しらず	①②③
冬歌	0617	俊成女	狭衣物語				①②③
冬歌	0617	俊成女	源氏物語	花宴			③
冬歌	0624	和泉式部	万葉集	卷十	2270		①③
冬歌	0625	西行法師	後拾遺集	春上	0043	能因法師	①②③
冬歌	0625	西行法師	古今集	冬歌	0315	源宗干	②
冬歌	0627	西行法師	後拾遺集	冬	0390	和泉式部	①
冬歌	0630	守覚法親王	万葉集	卷二	0107	大津皇子	①②③
冬歌	0631	俊成	新古今集	雑歌上	1575	詠み人しらず	③
冬歌	0635	摂政太政大臣	源氏物語	朝顔		光源氏	①②③
冬歌	0636	太上天皇	古今集	恋歌四	0689	詠み人しらず	①②③
冬歌	0637	慈円	万葉集	卷三	0264	柿本人麿	①②③
冬歌	0637	慈円	古今集	恋歌四	0689	詠み人しらず	②③
冬歌	0639	藤原家隆	後拾遺集	冬	0419	快覚法師	①②③
冬歌	0640	俊成	拾遺集	冬	0233	詠み人しらず	②
冬歌	0644	源重之	古今集	秋歌上	0191	詠み人しらず	②③
冬歌	0645	藤原実定	万葉集	卷十一	2753	詠み人しらず	②③
冬歌	0651	正三位季経	金葉集	補遺歌	0684	神祇伯頭仲	②
冬歌	0652	藤原 雅経	古今集 伊勢物語	恋一 五十段	0522	詠み人しらず	①②③
冬歌	0655	能因法師	古今集	東歌	1099		②③
冬歌	0660	権中納言長方	万葉集	卷七	1353	詠み人しらず	③
冬歌	0661	紫式部	古今集	雑歌下	0951	詠み人しらず	②③
冬歌	0666	前大納言公任	拾遺集	冬	0249	忠見	②③
冬歌	0671	藤原定家	万葉集	卷三	0265		①②③
冬歌	0674	入道前関白太 政大臣	古今集	哀傷歌	0852	貫之	①②③
冬歌	0681	曾禰好忠	古今集	冬歌	0338	躬恒	②③
冬歌	0683	太上天皇	後撰集	冬歌	0493	詠み人しらず	①②③
冬歌	0684	右衛門督通具	古今集	春歌下	0103	在原元方	③
冬歌	0688	左近中将公衡	古今集	羈旅歌	0418	業平朝臣	①
冬歌	0699	慈円	源氏物語	明石		光源氏	①
冬歌	0699	慈円	後撰集	春下	0144	詠み人しらず	①②
冬歌	0705	寂蓮法師	古今集	東歌、陸奥 歌	1093		①②③
賀歌	0719	藤原俊成	古今集	秋下	0273	素性法師	①③②
賀歌	0733	参河内侍	拾遺集	春	0054	藤原長能	①③
賀歌	0734	式子内親王	兼盛集				②
賀歌	0734	式子内親王	古今集	雑上	0868	在原業平	①②
賀歌	0735	藤原良経	古今集	春上	0009	紀貫之	①
賀歌	0736	藤原良経	万葉集		4487	藤原仲麻呂	①
賀歌	0737	式子内親王	古今集	秋下	0273	素性法師	①③
賀歌	0739	藤原定家	栄華物語				③
賀歌	0740	寂蓮法師	古今集	雑上	0909	藤原おきかぜ	①③
賀歌	0742	隆房	古今集	恋四	0689	詠み人しらず	①③②
賀歌	0742	隆房	和漢朗詠集	慶賀	0773	詠み人しらず	③
賀歌	0743	清輔	古今集	雑上	0904	詠み人しらず	①③②
賀歌	0745	藤原実定	後拾遺集	恋四	0796	相模	③

賀歌	0745	藤原実定	拾遺集	恋四	0889	詠み人しらず	①③②
賀歌	0746	藤原良経	古今集	雑下	0983	喜撰法師	①③②
賀歌	0746	藤原良経	新古今集	神祇	1854		①③
賀歌	0749	資業	古今集	大歌所御歌	1076	神遊びの歌	①③
賀歌	0752	範兼	金葉集	雑上	0550	小式部内侍	①③
賀歌	0756	資業	古今集	離別	0404	紀貫之	③
哀傷歌	0765	藤原実定の子	拾遺集	春	0059	大中臣能宜	①
哀傷歌	0765	藤原実定の子	後拾遺集	春上	0109	平兼盛	①③
哀傷歌	0797	源雅実	古今六帖		0423	紀友則	③
哀傷歌	0803	後鳥羽	源氏物語	夕顔卷		光源氏	③
哀傷歌	0829	藤原良経	源氏物語	若紫		光源氏	①③②
哀傷歌	0835	慈円	拾遺集	哀傷	1299	藤原為頼	①③②
哀傷歌	0844	祝部成仲	古今集 伊勢物語	夏 六十段	0139	詠み人しらず	①③②
哀傷歌	0856	紫式部	古今集	哀傷	0838	紀貫之	①③
離別歌	0864	寂昭法師	伊勢物語	一六		紀有常	③
離別歌	0877	御三条院	拾遺集 伊勢物語	雑上 十一段	0470	橘忠基	③①②
離別歌	0890	祝部成仲	後拾遺集	恋三	0738	皇太后宮陸奥	③
離別歌	0891	藤原定家	拾遺集 伊勢物語	雑上 十一段	0470	橘忠幹	①②
羈旅歌	0897	聖武天皇	万葉集		0271	高市黒人	①
羈旅歌	0897	聖武天皇	万葉集		3890	三野石守	①
羈旅歌	0902	詠み人しらず	伊勢物語	二十三段			②
羈旅歌	0908	女御徽子女王	古今集 伊勢物語	羈旅 九	0411	在原業平	③①②
羈旅歌	0913	藤原輔尹	新古今集	恋一	0997	坂上是則	③
羈旅歌	0924	中納言國信	万葉集		0105	大伯皇女	①
羈旅歌	0924	中納言國信	万葉集		0107	大津皇子	①
羈旅歌	0929	修理大夫顯季	金蠅集	秋	0211	修理大夫顯季	②
羈旅歌	0932	藤原俊成	後拾遺集	夏	0219	源重之	③①②
羈旅歌	0933	藤原俊成	後拾遺集	恋四	0827	源重之	②
羈旅歌	0934	藤原定家	古今集	雑上	0914	藤原忠房	③①②
羈旅歌	0943	越前	万葉集	四	0500	碁壇越の妻	③
羈旅歌	0943	越前	新古今集		0911	詠み人しらず	①②
羈旅歌	0944	宜秋門院丹後	源氏物語	賢木の巻		六条御息所の 歌	③①②
羈旅歌	0944	宜秋門院丹後	万葉集	四	0500	碁壇越の妻	③
羈旅歌	0945	前中納言匡房	古今集	秋上	0211	詠み人しらず	③①②
羈旅歌	0947	式子内親王	万葉集	一	0010	中皇命	③①②
羈旅歌	0948	式子内親王	後拾遺集	恋四	0827	源重之	③①②
羈旅歌	0958	藤原雅経	伊勢物語 新古今集	八 羈旅	0903	在原業平	③①②
羈旅歌	0959	宜秋門院丹後	古今集	恋一	0484	詠み人しらず	③①②
羈旅歌	0960	藤原秀能	古今集	恋四	0735	大友黒主	①
羈旅歌	0964	鴨長明	伊勢物語	八十三段			②
羈旅歌	0964	鴨長明	古今集	雑下	0987	詠み人しらず	③①
羈旅歌	0968	藤原定家	古今集	離別	0365	在原業平	③①②
羈旅歌	0970	藤原家隆	源氏物語	浮舟卷		薫大将の歌	③②

羈旅歌	0970	藤原家隆	後拾遺集	恋四	0770	清原元輔	③
羈旅歌	0970	藤原家隆	古今集	東歌	1093	陸奥歌	③①②
羈旅歌	0973	藤原俊成	万葉集	十一	2659	作者未詳	③①②
羈旅歌	0977	宜秋門院丹後	古今集 伊勢物語	騎旅 九	0411	在原業平	③①②
羈旅歌	0980	藤原定家	源氏物語	須磨卷		光源氏の歌	③①②
羈旅歌	0981	藤原家隆	新古今集伊 勢物語	九	0904	在原業平	③①②
羈旅歌	0986	素覺法師	古今集	雑下	0933	詠み人しらず	③①②
恋歌一	0991	詠み人しらず	古今六帖	五	2898	詠み人しらず	②
恋歌一	0994	在原業平	伊勢物語	一段			②
恋歌一	1005	謙徳公	後撰集	雑四	1303	詠み人しらず	③
恋歌一	1012	和泉式部	後拾遺集	恋一	0612	藤原実方	②
恋歌一	1013	源重之	重之集		0308	源重之	②
恋歌一	1014	大中臣能宣	重之集		0308	源重之	②
恋歌一	1015	大江匡衡	古今集	恋一	0491	詠み人しらず	②
恋歌一	1022	曾禰好忠	古今集	恋一	0478	壬生忠岑	②
恋歌一	1023	和泉式部	古今集	恋一	0478	壬生忠岑	③
恋歌一	1028	藤原良経	万葉集	十一	1927	詠み人しらず	③①②
恋歌一	1029	後鳥羽	新古今集	冬	0577	能因	②
恋歌一	1029	後鳥羽	新古今集	冬歌	0582	柿本人麻呂	①
恋歌一	1031	藤原良経	伊勢集 源氏物語	空蟬卷		伊勢	③②
恋歌一	1032	寂蓮	千五百番歌 合	千三百十番 判			②
恋歌一	1032	寂蓮	後撰集	夏	0209	詠み人しらず	②
恋歌一	1032	寂蓮	古今集	恋二	0562	紀友則	③
恋歌一	1033	後鳥羽	後撰集	恋六	1021	詠み人しらず	③①②
恋歌一	1035	式子内親王	古今集	恋二	0606	紀貫之	①②
恋歌一	1036	式子内親王	古今集	恋一	0504	詠み人しらず	③①
恋歌一	1036	式子内親王	古今集	恋三	0670	平貞文	③①②
恋歌一	1043	公任	古今集	恋一	0469	詠み人しらず	②
恋歌一	1061	藤原実方	後撰集	恋三	0774	詠み人しらず	③②
恋歌一	1062	藤原実方	古今集	雑下	0982	詠み人しらず	③②
恋歌一	1070	曾禰好忠	古今六帖	一	0782	詠み人しらず	②
恋歌一	1073	藤原良経	新古今集	恋一	1071	曾禰好忠	③①②
恋歌一	1074	式子内親王	古今集	恋一	0472	藤原勝臣	③①②
恋歌一	1075	長方	万葉集	七	1220	詠み人しらず	③①②
恋歌一	1076	師俊	拾遺集	恋四	0893	詠み人しらず	②
恋歌一	1077	後鳥羽	後撰集	恋五	0960	元良親王	①②
恋歌一	1079	相模	新古今集伊 勢物語	恋一 七十段	1080	在原業平	②
恋歌二	1081	俊成女	狭衣物語	四			②
恋歌二	1081	俊成女	狭衣物語	四		CONTROLLARE	②
恋歌二	1083	藤原良経	古今集	雑下	0962	在原行平	③②
恋歌二	1084	二条院讃岐	万葉集 拾遺集	七 恋五	1398 0967	詠み人しらず 坂上郎女	③②
恋歌二	1085	俊頼	万葉集	十一	2763	詠み人しらず	③
恋歌二	1086	前太政大臣	伊勢集			伊勢大輔	②
恋歌二	1087	藤原良経	古今集	秋下	0260	紀貫之	②

恋歌二	1088	後徳題大寺左大臣	後撰集	恋一	0557	詠み人しらず	③①②
恋歌二	1089	殷富門院大輔	万葉集	十一	2730	詠み人しらず	②
恋歌二	1093	藤原清輔	古今集	恋一	0519	詠み人しらず	②
恋歌二	1096	二条院讃岐	清輔本古今	恋一		詠み人しらず	②
恋歌二	1096	二条院讃岐	後拾遺集	雑二	0960	土御門御匣殿	③①
恋歌二	1101	藤原良経	万葉集	四	0505	柿本人麻呂	③①②
恋歌二	1104	詠み人しらず	大和物語	百十六		女の歌	③
恋歌二	1105	前大納言隆房	古今集伊勢物語	恋一 九九段	0477	女の歌 詠み人しらず	③
恋歌二	1106	左衛門督通光	古今集	恋一	0484	詠み人しらず	③①②
恋歌二	1108	藤原良経	古今集	恋五	0758	詠み人しらず	③①②
恋歌二	1112	藤原元真	新古今集伊勢物語	哀傷 六	0851	在原業平	③②
恋歌二	1114	大炊御門右大臣	新古今集	神祇歌	1855		③②
恋歌二	1115	藤原基輔	伊勢物語	百十六段		男の歌	③①②
恋歌二	1117	藤原定家	後撰集	恋三	0744	みつね	①②
恋歌二	1118	寂蓮	古今集	恋三	0628	壬生忠岑	③①②
恋歌二	1119	藤原良経	古今集	恋三	0628	壬生忠岑	①②
恋歌二	1119	藤原良経	後撰集	恋五	0960	元良親王	③①②
恋歌二	1120	二条院讃岐	源氏物語	手習			②
恋歌二	1120	二条院讃岐	古今集	恋一	0491	詠み人しらず	③
恋歌二	1120	二条院讃岐	拾遺集	恋四	0876	紀貫之	③①
恋歌二	1126	藤原良経	源氏物語	若菜下		女三宮	①②
恋歌二	1128	前大納言忠良	伊勢物語	九六段		ある女の歌	③①②
恋歌二	1131	中宮大夫家房	後拾遺集	恋一	0612	藤原実方	③①②
恋歌二	1132	家隆	拾遺集	恋四	0891	村上天皇	①②
恋歌二	1133	權中納言俊忠	拾遺集	雑下		藤原為頼	②
恋歌二	1133	權中納言俊忠	拾遺集	恋二	0699	詠み人しらず	③①
恋歌二	1134	惟明親王	古今集	恋四	0705	在原業平	①②
恋歌二	1135	右衛門督通具	古今集	恋二	0611	みつね	③①②
恋歌二	1136	俊成女	古今集伊勢物語	恋五 四段	0747	在原業平	③①②
恋歌二	1138	藤原有家	古今集	恋三	0625	壬生忠岑	③①②
恋歌二	1138	藤原有家	古今集	雑上	0879	在原業平	③①②
恋歌二	1140	越前	古今集	恋四	0703	詠み人しらず	③①②
恋歌二	1141	藤原良経	後拾遺集	神祇歌	1163	貴船明神	③①②
恋歌二	1144	八条院高倉	古今集	恋二	0615	紀友則	③①②
恋歌二	1145	殷富門院大輔	拾遺集	恋一	0646	詠み人しらず	③①②
恋歌二	1146	八条院高倉	後撰集	夏	0192	詠み人しらず	①②
恋歌三	1152	廉義公	古今集	恋二	0615	紀友則	③②
恋歌三	1153	式子内親王	万葉集 新古今集	一 雑中	0034 1586	河嶋皇子	③②
恋歌三	1156	三條院女藏人左近	古今集	恋五	0795	詠み人しらず	③②
恋歌三	1157	藤原興風	古今集	恋三	0647	詠み人しらず	③
恋歌三	1160	和泉式部	新古今集伊勢集	恋三	1159	伊勢	③②
恋歌三	1166	相模	古今集	恋五	0823	平貞文	②

恋歌三	1167	藤原実方	古今集	羈旅	0417	藤原兼輔	②
恋歌三	1174	謙徳公	古今集	恋一	0470	素性法師	③②
恋歌三	1175	清愼公	古今集	恋二	0554	小野小町	②
恋歌三	1179	赤染衛門	古今集	恋五	0761	詠み人しらず	③②
恋歌三	1190	藤原道経	万葉集	四	0597	笠女郎	②
恋歌三	1197	後鳥羽	歌枕名寄 新古今集	十 十六	2878 1516	詠み人しらず	③
恋歌三	1201	八条院高倉	後拾遺集	雑三	0991	堀河女御	③①②
恋歌三	1203	藤原秀能	古今集	恋四	0691	素性	②
恋歌三	1204	式子内親王	古今集	恋四	0693	詠み人しらず	③①②
恋歌三	1210	女御徽子女王	古今集	恋五	0758	詠み人しらず	③②
恋歌三	1212	安法法師女	後撰集	恋四	0846	中務	③
恋歌三	1218	源重之	古今集	恋五	0759	詠み人しらず	③②
恋歌三	1219	紀貫之	伊勢物語	二十一段			②
恋歌三	1224	左衛門督家通	千載集	恋三	0799	待賢門院加賀	③
恋歌三	1225	詠み人しらず	古今集	恋四	0736	藤原因香	②
恋歌三	1227	小侍従	詞花集	恋上	0198	賀茂成助	③
恋歌四	1241	伊勢	古今集	恋五	0782	小野小町	②
恋歌四	1242	右大將道綱母	古今集	墨滅歌	1110	そとほりひめ	③
恋歌四	1243	天曆御歌	古今集	恋五	0823	平貞文	②
恋歌四	1245	詠み人しらず	古今集	恋四	0695	詠み人しらず	②
恋歌四	1257	伊勢	古今集	雑上	0878	詠み人しらず	③②
恋歌四	1259	凡河内躬恆	古今集	雑上	0878	詠み人しらず	③②
恋歌四	1271	後鳥羽	後拾遺集	恋二	0704	詠み人しらず	②
恋歌四	1271	後鳥羽	古今集 伊勢物語	恋四 百七段	0705	在原業平	③①
恋歌四	1272	藤原良経	拾遺集 伊勢物語	雑上 十一段	0470	詠み人しらず	③①②
恋歌四	1273	藤原良経	古今集	恋一	0528	詠み人しらず	②
恋歌四	1275	左衛門督通光	伊勢物語 拾遺集	十一段 雑上	0470	詠み人しらず	③①②
恋歌四	1276	右衛門督通具	古今集	恋四	0691	素性	③①②
恋歌四	1277	藤原有家	拾遺集 伊勢物語	雑上 十一段	0470	詠み人しらず	①②
恋歌四	1277	藤原有家	古今集	恋四	0691	素性	①②
恋歌四	1278	藤原良経	古今集	恋四	0691	素性	②
恋歌四	1282	藤原良経	拾遺集	恋五	0992	平唯忠依	①
恋歌四	1284	藤原定家	古今集	東歌	1093	陸奥歌	③①②
恋歌四	1285	俊成女	古今集	恋五	0770	遍照	③①②
恋歌四	1286	二條院讃岐	後拾遺集	雑三	1007	和泉式部	③①②
恋歌四	1287	寂蓮法師	拾遺集	恋三	0848	人麻呂	③①②
恋歌四	1288	左衛門督通光	源氏物語	蓬生卷		源氏の歌	③①②
恋歌四	1288	左衛門督通光	源氏物語	夕顔卷		源氏の歌	③①②
恋歌四	1292	藤原家隆	古今集	恋二	0601	壬生忠岑	③①②
恋歌四	1293	藤原良経	拾遺集 伊勢物語	雑上 十一段	0470	詠み人しらず	②
恋歌四	1293	藤原良経	古今集	恋四	0691	素性	③①②
恋歌四	1300	権中納言公経	古今集	恋三	0646	在原業平	③①②
恋歌四	1301	右衛門督通具	古今集	恋三	0625	壬生忠岑	①
恋歌四	1305	藤原有家	古今集	秋上	0171	詠み人しらず	③①②

恋歌四	1306	詠み人しらず	後拾遺集	恋二	0708	詠み人しらず	②
恋歌四	1306	詠み人しらず	古今集	恋五	0757	詠み人しらず	②
恋歌四	1307	西行	後撰集	秋上	0220	詠み人しらず	②
恋歌四	1308	俊恵	後撰集	秋上	0220	詠み人しらず	②
恋歌四	1310	藤原良経	古今集	恋五	0777	詠み人しらず	③①②
恋歌四	1312	寂蓮	拾遺集	恋四	0901	詠み人しらず	③①②
恋歌四	1313	後鳥羽	万葉集	二十	4531	大原今城真人	③①
恋歌四	1314	藤原有家	千載集	秋上	0267	西行	②
恋歌四	1315	藤原雅経	古今集	恋一	0516	詠み人しらず	③①②
恋歌四	1318	鴨長明	後撰集	秋下	0423	右近	②
恋歌四	1319	右衛門督通具	古今集	恋五	0782	小野小町	③①②
恋歌四	1320	藤原定家	古今六帖	二	1047	詠み人しらず	③①
恋歌四	1322	前大僧正慈圓	拾遺集	恋一	0678	藤原朝忠	③①
恋歌四	1323	後鳥羽	古今集	恋五	0797	小野小町	③①②
恋歌四	1324	藤原定家	後拾遺集	恋四	0818	藤原長能	③①②
恋歌四	1326	後撰集	後撰集	恋三	0771	詠み人しらず	③②
恋歌四	1327	慈円	古今集	恋二	0611	みつね	③①②
恋歌四	1327	慈円	古今集	雑下	0982	詠み人しらず	①②
恋歌四	1328	式子内親王	古今集	恋五	0797	小野小町	③①②
恋歌四	1329	式子内親王	拾遺集	恋三	0799	詠み人しらず	③
恋歌四	1331	権中納言公経	源氏物語	明石		明石入道	③①②
恋歌四	1332	藤原定家	源氏物語	須磨		伊勢御息所	③①②
恋歌四	1333	藤原雅経	詞花集	恋上	0213	平祐挙	③
恋歌四	1334	詠み人しらず	伊勢物語	九六		女の歌	③①②
恋歌四	1334	俊成女	古今集	恋四	0691	素性	②
恋歌五	1351 -口	六條右大臣室	源氏物語	若菜卷上		紫の上	③②
恋歌五	1336	藤原定家	古今六帖	一	0423	詠み人しらず	②
恋歌五	1336	藤原定家	万葉集	十二	3196	詠み人しらず	③
恋歌五	1340	右衛門督通具	万葉集	十	2247	詠み人しらず	③①②
恋歌五	1350	詠み人しらず	古今集	恋二	0557	小野小町	③②
恋歌五	1352	相模	古今集	恋五	0804	紀貫之	③
恋歌五	1352	相模	拾遺集	雑秋	1116	女	②
恋歌五	1353	相模	古今集	恋一	0548	詠み人しらず	③
恋歌五	1353	相模	拾遺集	恋二	0733	詠み人しらず	③
恋歌五	1356	坂上是則	古今六帖	五	3241	人麻呂	③
恋歌五	1366	詠み人しらず	新古今集伊勢物語	恋五 百二十二段	1367	男の歌	③②
恋歌五	1379	赤染衛門	古今集	恋一	0516	詠み人しらず	③②
恋歌五	1384	大中臣能宣朝臣	古今集	秋上	0190	みつね	②
恋歌五	1385	寂蓮	新古今集元真集	恋一	1060	藤原元真	③①
恋歌五	1386	藤原家隆	古今集	恋三	0635	小野小町	③①②
恋歌五	1389	藤原定家	後拾遺集	恋三	0755	和泉式部	③②
恋歌五	1390	俊成女	狭衣物語	卷三		女二宮	①
恋歌五	1394	相模	後撰集	冬	0494	詠み人しらず	③②
恋歌五	1405	大中臣能宣	後撰集	恋五	0985	詠み人しらず	③
恋歌五	1406	祭主輔親	古今集	雑上	0813	詠み人しらず	③

恋歌五	1419	藤原元真	古今集	墨滅歌	1111	紀貫之	③
恋歌五	1420	天曆御歌	古今集	恋一	0522	詠み人しらず	③②
恋歌五	1421	謙徳公	古今集	恋二	0615	紀友則	②
雑歌上	1443	源公忠	万葉集	十	1887	詠み人しらず	②
雑歌上	1445	大貳三位	古今集	春上	0038	紀友則	③
雑歌上	1449	清原深養父	古今集	恋五	0747	在原業平	③②
雑歌上	1450	圓融院御歌	拾遺集	物名	0363	詠み人しらず	②
雑歌上	1459	藤原高光	古今集	恋五	0752	詠み人しらず	③②
雑歌上	1465	藤原俊成	古今集	雑下	0950	詠み人しらず	③②
雑歌上	1468	慈円	後拾遺集	春上	0043	能因	③②
雑歌上	1472	源俊頼	古今集	東歌	1099	伊勢歌	③
雑歌上	1473	加賀左衛門	古今集	東歌	1093	陸奥の歌	③②
雑歌上	1480	慈円	拾遺集	夏	0088	柿本人麻呂	①
雑歌上	1480	慈円	万葉集	一	4224	大友家持	③
雑歌上	1484	式子内親王	源氏物語	花散里卷		源氏の歌	③
雑歌上	1488	小弁	古今集	雑体	1007	詠み人しらず	③②
雑歌上	1490	藤原俊成	催馬楽	東屋			③②
雑歌上	1494	七條院大納言	新古今集 伊勢物語	雑上 十六段	1496	紀有常	③②
雑歌上	1505	宜秋門院丹後	拾遺集	哀傷	1327	沙弥満誓	②
雑歌上	1506	藤原盛方	俊頼髓脳 新古今集		0085 1851	蟬丸	②
雑歌上	1506	藤原盛方	新古今集和 漢朗詠集		0764	蟬丸	③
雑歌上	1514	源道濟	古今集	秋上	0190	みつね	③②
雑歌上	1517	藤原良経	古今集	恋四	0691	素性	③①②
雑歌上	1520	藤原業清	古今集	秋上	0184	詠み人しらず	③①②
雑歌上	1540	二条院讃岐	古今集 伊勢物語	恋五 四段	0747	在原業平	③①②
雑歌上	1545	藤原良経	新古今集	恋四	1260	詠み人しらず	③②
雑歌上	1548	法橋行遍	山家集		1044	西行	②
雑歌上	1550	平忠盛朝臣	後拾遺集	秋上	0253	恵慶法師	③②
雑歌上	1551	前中納言匡房	拾遺集	秋	0140	恵慶法師	③②
雑歌上	1554	慈円	万葉集	六	0924	山部赤人	③①②
雑歌上	1555	藤原定家	源氏物語	若菜下			②
雑歌上	1563	俊成女	古今集	恋五	0823	平貞文	③①
雑歌上	1564	祝部成仲	古今集	恋四	0694	詠み人しらず	③①②
雑歌上	1565	紫式部	古今集	物名	0450	高向利春	②
雑歌上	1576	土御門内大臣	源氏物語	浮舟		匂宮の歌	③①②
雑歌上	1577	藤原家隆	詞花集	賀	0161	藤原道長	③
雑歌上	1584	藤原俊成	拾遺集	別	0328	紀貫之	①
雑歌中	1597	壬生忠見	古今集	賀	0360	みつね	③
雑歌中	1597	壬生忠見	歌枕名寄	十	4314	在原行平	③
雑歌中	1605	後冷泉院御歌	古今集	雑上	0917	壬生忠岑	③
雑歌中	1607	祝部成仲	古今集	秋下	0272	菅原道真	③
雑歌中	1611	西行	散木奇歌集				②
雑歌中	1621	宜秋門院丹後	古今集	雑下	0944	詠み人しらず	③①②
雑歌中	1634	二條院讃岐	古今集	賀	0347	光孝天皇	②
雑歌中	1635	藤原俊成	後撰集	雑一	1083	在原業平	③②

雑歌中	1638	和泉式部	古今集	雑下	0944	詠み人しらず	②
雑歌中	1641	西行法師	古今集	雑下	0952	詠み人しらず	②
雑歌中	1642	殷富門院大輔	拾遺集	雑上	0491	柿本人麻呂	①
雑歌中	1642	殷富門院大輔	古今集	雑下	0982	詠み人しらず	③①②
雑歌中	1643	道命法師	古今集	秋上	0204	詠み人しらず	②
雑歌中	1644	藤原定家	後撰集	雑一	1075	在原行平	③①②
雑歌中	1652	藤原良経	古今集	羈旅	0418	在原行平	③
雑歌中	1653	藤原實方	古今集	秋上	0175	詠み人しらず	③
雑歌中	1655	中務	古今集	雑下	0933	詠み人しらず	③
雑歌中	1666	藤原雅経	古今集	秋上	0200	詠み人しらず	③①②
雑歌中	1667	賀茂重保	詞花集	雑下	0367	良暹法師	②
雑歌中	1670	慈円	古今集	雑下	0991	紀友則	③①②
雑歌中	1676	西行法師	古今集	哀傷	0853	御春有助	③①②
雑歌中	1682	能因法師	後撰集	春下	0089	詠み人しらず	②
雑歌中	1684	藤原定家	古今集	雑下	0962	在原行平	③①
雑歌中	1684	藤原定家	後撰集	恋六	1024	詠み人しらず	②
雑歌下	1695	菅贈太政	古今集	雑上	0867	詠み人しらず	③②
雑歌下	1714	和泉式部	後撰集	恋三	0758	紀長谷雄	②
雑歌下	1715	一條院皇后宮	大和物語	五十八段			②
雑歌下	1723	後朱雀院御歌	伊勢物語	七十五段			②
雑歌下	1723	後朱雀院御歌	伊勢物語	七十五段			②
雑歌下	1725	後朱雀院御歌	拾遺集	雑上	0445	伊勢	③
雑歌下	1726	周防内侍	拾遺集	雑上	0445	伊勢	③②
雑歌下	1756	右衛門督通具	古今集	秋下	0258	壬生忠岑	①②
雑歌下	1757	藤原定家	古今集	恋一	0483	詠み人しらず	③①②
雑歌下	1759	藤原家隆	古今集	雑上	0910	詠み人しらず	③①②
雑歌下	1766	守覺法親王	古今集	恋一	0517	詠み人しらず	①
雑歌下	1805	宮内卿	拾遺集	雑下	0511	詠み人しらず	③①
雑歌下	1812	和泉式部	拾遺集	恋四	0897	詠み人しらず	③②
雑歌下	1814	土御門内	後撰集	雑一	1102	藤原兼輔	③①②
雑歌下	1823	前大僧正慈圓	古今集	恋三	0638	藤原国経	①
雑歌下	1830	西行法師	古今集	雑下	0936	小野たかむら	②
雑歌下	1847	式子内親王	拾遺集	恋二	0734	壬生忠見	③
雑歌下	1849	中務卿具平親王	遍昭集 新古今集	哀傷	0015 0757	僧正遍昭	③②
神祇歌	1853	よみ人知らず	拾遺集	雑春	1006	菅原道真	③
神祇歌	1869	紀貫之	古今集	神遊びの歌	1075	取り物の歌	③
神祇歌	1907	太上天皇	古今集	誹諧歌	1067	みつね	①
神祇歌	1908	太上天皇	拾遺集	恋一	0639	詠み人しらず	①
釈教歌	1933	前大僧正慈圓	古今集	恋一	0470	素性	①
釈教歌	1938	寂蓮法師	拾遺集	雑上	0451	斎宮女御	③①②
釈教歌	1940	寂蓮法師	新古今集	哀傷	0757	遍昭	③②
釈教歌	1959	源季廣	古今集	恋二	0601	壬生忠岑	③①②

資料⑩ 本歌の出典

*がつけられる番号は、同じ出典からの二首の本歌があるということを示す。

本歌の出典	歌数	新古今集の歌番号
栄華物語	1	0739
家持集	1	0522
句題和歌	1	0040
兼盛集	1	0734
催馬楽	1	1490
山家集	1	1548
散木奇歌集	1	1611
俊頼髓脳	1	1506
千五百番歌合	1	1032
日本書紀	1	0071
遍昭集	1	1849
歌枕名寄	2	1197 1597
元真集	2	0614 1385
古今集（清輔本古今）	2	0607 1096
重之集	2	1013 1014
大和物語	2	1104 1715
伊勢集	3	1031 1086 1160
狭衣物語	3	0617 1081* 1390
千載集	5	0005 0058 0169 1224 1314
和漢朗詠集	6	0087 0201 0256 0257 0742

		1506
金葉集	7	0100 0135 0230 0437 0651 0752 0929
古今六帖	8	0307 0328 0797 0991 1070 1320 1336 1356
詞花集	8	0124 0168 0286 0289 1227 1333 1577 1667
新古今集	27	0040 0087 0255 0522 0577 0581 0631 0746 0913 0943 0958 0981 1029* 1073 1079 1112 1114 1153

		1160 1197 1366 1385 1494 1506* 1545 1849 1940
源氏物語	30	0137 0156 0247* 0275 0276 0433 0471 0473* 0495 0515 0610 0617 0635 0699 0803 0829 0944 0970 0980 1031 1120 1126 1288 1288 1331 1332 1351-口 1484 1555 1576
後撰集	35	0028 0096 0113

		0171
		0200
		0230
		0297
		0338
		0431
		0436
		0586
		0683
		0699
		1005
		1032
		1033
		1061
		1077
		1088
		1117
		1119
		1146
		1212
		1307
		1308
		1318
		1326
		1394
		1405
		1635
		1644
		1682
		1684
		1714
		1814
後拾遺集	42	0025
		0026
		0073
		0207
		0247
		0308
		0320
		0399
		0428*
		0429
		0493
		0495
		0508
		0517
		0530

		0557
		0571
		0606
		0625
		0627
		0639
		0745
		0765
		0890
		0932
		0933
		0948
		0970
		1012
		1096
		1131
		1141
		1201
		1271
		1272
		1275
		1286
		1306
		1324
		1389
		1468
		1550
伊勢物語	47	0093
		0121
		0135
		0136
		0149
		0238
		0240
		0242
		0243
		0244
		0245
		0246
		0255
		0364
		0368
		0374
		0512
		0518
		0537
		0652

		0864
		0877
		0891
		0902
		0908
		0958
		0964
		0977
		0981
		0994
		1079
		1105
		1112
		1115
		1128
		1136
		1219
		1271
		1272
		1275
		1277
		1293
		1334
		1366
		1494
		1540
		1723*
万葉集	50	0002
		0091
		0093
		0097
		0098
		0171
		0185
		0191
		0194
		0231
		0232
		0251
		0257
		0296*
		0301
		0329*
		0331
		0518
		0542
		0577

		0581*
		0615
		0616
		0624
		0630
		0637
		0645
		0660
		0671
		0736
		0897*
		0924*
		0943
		0944
		0947
		0973
		1028
		1075
		1084
		1085
		1089
		1101
		1153
		1190
		1313
		1336
		1340
		1443
		1480
		1554
拾遺集	65	0001
		0015
		0075
		0093
		0095
		0099
		0115
		0128
		0131
		0150
		0174
		0192*
		0214
		0232
		0287
		0308
		0322

		0335
		0349
		0375
		0487
		0494
		0515
		0518
		0525
		0526
		0531
		0545
		0566
		0640
		0666
		0733
		0745*
		0835
		0877
		0891
		1076
		1084
		1120
		1132
		1133*
		1145
		1277
		1282
		1287
		1293
		1312
		1322
		1329
		1352
		1353
		1450
		1480
		1505
		1551
		1584
		1642
		1725
		1726
		1805
		1812
		1847
		1853
		1908

		1938
古今集	266	0017*
		0018
		0019
		0031
		0037
		0038
		0039
		0046*
		0047
		0049
		0053
		0054
		0059
		0070
		0075
		0082
		0087
		0090
		0092
		0102
		0113
		0119
		0134
		0135
		0136
		0139*
		0140
		0144
		0146 口
		0152
		0158
		0159
		0162 彳
		0164
		0167
		0169
		0177
		0179*
		0181
		0184
		0185
		0201
		0209
		0212
		0215
		0216

	0220
	0229
	0235
	0238
	0242
	0243
	0244
	0245
	0246
	0254
	0257
	0258
	0259
	0261
	0269
	0281
	0282
	0284
	0290
	0293
	0295
	0300
	0316
	0319
	0323
	0328
	0328
	0330
	0338
	0339
	0349
	0366
	0369
	0371
	0374
	0375
	0380
	0381
	0389
	0391*
	0393
	0396
	0397
	0412
	0419
	0420
	0434

	0436
	0445
	0478
	0483
	0488
	0512*
	0513
	0518
	0525*
	0530
	0532
	0534
	0536
	0537*
	0538
	0549
	0555
	0557
	0574
	0586
	0592
	0604
	0611
	0616
	0625
	0636
	0637
	0644
	0652
	0655
	0661
	0674
	0681
	0684
	0688
	0705
	0719
	0734
	0735
	0737
	0740
	0742
	0743
	0746
	0749
	0756
	0844

	0856
	0908
	0934
	0945
	0959
	0960
	0964
	0968
	0970
	0977
	0986
	1015
	1022
	1023
	1032
	1035
	1036*
	1043
	1062
	1074
	1083
	1087
	1093
	1105
	1106
	1108
	1118
	1119
	1120
	1134
	1135
	1136
	1138
	1138
	1140
	1144
	1152
	1156
	1157
	1166
	1167
	1174
	1175
	1179
	1203
	1204
	1210

	1218
	1225
	1241
	1242
	1243
	1245
	1257
	1259
	1271
	1273
	1276
	1277
	1278
	1284
	1285
	1292
	1293
	1300
	1301
	1305
	1306
	1310
	1315
	1319
	1323
	1327*
	1328
	1334
	1350
	1352
	1353
	1379
	1384
	1386
	1406
	1419
	1420
	1421
	1445

	1449
	1459
	1465
	1472
	1473
	1488
	1514
	1517
	1520
	1540
	1563
	1564
	1565
	1597
	1605
	1607
	1621
	1634
	1638
	1641
	1642
	1643
	1652
	1653
	1655
	1666
	1670
	1676
	1684
	1695
	1756
	1757
	1759
	1766
	1823
	1830
	1869
	1907
	1933

	1959
--	------

参考文献

単行本（執筆者・五十音順）

- 浅田徹、藤平泉責任編集『古今集新古今集の方法』笠間書院、2004.10
- 阿部秋生「ほか」校注・訳『源氏物語』（日本古典文学全集）六冊、小学館、1994.3-1998.4
- 有吉保『新古今和歌集の研究——基盤と構成』三省堂、1968.4
- 有吉保編『和歌文学辞典』桜楓社、1982.5
- 有吉保責任編集『新古今集・和歌文学講座6』勉誠社、1994.1
- 石川常彦『新古今的世界』和泉書院、1986.6
- 犬養廉「ほか」編『和歌大辞典』明治書院、1986.3
- 大岡信「ほか」編集『歌枕俳枕』集英社、1989.10
- 大曾根章介、堀内秀晃校注『和漢朗詠集』新潮社、1983.9
- 大西克禮『幽玄とあはれ』岩波書店、1970.3
- 小沢正夫校注・訳『古今和歌集』（日本古典文学全集）小学館、1971
- 風巻景次郎『新古今時代』人文書院刊、1936.7
- 片桐洋一校注『後撰和歌集』（新日本古典文学大系）岩波書店、1990.4
- 片桐洋一編『歌枕を学ぶ人のために』世界思想社、1994.3
- 片桐洋一校注・訳『竹取物語』福井貞助校注・訳『伊勢物語』、高橋正治校注・訳『大和物語』清水好子校注・訳『平中物語』（新編日本古典文学全集）小学館、1994.12
- 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』笠間書院、2004.2
- 片野達郎、松野陽一校注『千載和歌集』（新日本古典文学大系）岩波書店、1993.4

- 金沢規雄『歌枕への理解―歌びとに与うる書』おうふう、1995.10
- 金子武雄『称詞・枕詞・序詞の研究』公論社、1977.10
- 川口久雄『和漢朗詠集全訳注』講談社、1982.2
- 川村晃生、柏木由夫、工藤重矩校注『金葉和歌集・詞花和歌集』（新日本古典文学大系）岩波書店、1989.9
- 岸上慎二、橋本下美男、有吉保編『校訂 新古今和歌集』、武蔵野書院刊、1992.3
- 京都新聞開発編集『歌のこころひとの心』京都アカデミア叢書2、2006.11
- 久保田淳校注『新古今和歌集』二冊、新潮社、1979.3・9
- 久保田淳『藤原定家―乱世に華あり』集英社、1984.10
- 久保田淳『藤原定家とその時代』岩波書店、1994.1
- 久保田淳、平田喜信校注『後拾遺和歌集』（新日本古典文学大系）岩波書店、1994.4
- 久保田淳、馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、1999.5
- 久保田正文、『百人一首の世界』文藝春秋、1965.11
- 小島憲之、木下正俊、佐竹昭広校注・訳『萬葉集』（日本古典文学全集）四冊、小学館、1971-1975
- 小島憲之、新井栄蔵校注『古今和歌集』（新日本古典文学大系）、岩波書店、1989.2
- 小島吉雄『新古今和歌集の研究』星野書店、1944.5
- 古典談話会編『萬葉集八代集歌末語索引』洛文社、1979.7
- 小林芳規、武石彰夫校注『梁塵秘抄』土井洋一、真鍋昌弘校注『閑吟集』橋本朝生校注『狂言歌謡』（新日本古典文学大系）岩波書店、1993.6
- 小町谷照彦校注『拾遺和歌集』（新日本古典文学大系）岩波書店、1990.1

- 後藤重郎『隠岐本新古今和歌集と研究』未刊国文資料刊行会、1972.12
- 後藤祥子編『王朝和歌を学ぶ人のために』世界思想社、1997.8
- 五味文彦『藤原定家の時代——中世文化の空間』岩波新書、1991.7
- 佐佐木幸綱、杉山康彦、林巨樹編『日本歌語事典』大修館書店、1994.7
- 佐佐木忠慧『歌枕の世界』桜楓社、1979.5
- 佐竹昭広「ほか」校注『萬葉集』（新日本古典文学大系）、四冊、岩波書店、1999.5-2003.10
- 島津忠夫編『新古今和歌集を学ぶ人のために』世界思想社、1996.3
- 鈴木日出男『古代和歌の世界』筑摩書房、1999.3
- 高橋和彦『無名抄全解』双文社出版、1987.2
- 滝沢貞夫編『新古今集総索引』明治書院、1970.8
- 田中登、山本登朗編『平安文学研究ハンドブック』和泉書院、2004.5
- 田中裕、赤瀬信吾校注『新古今和歌集』（新日本古典文学大系）岩波書店、1992.1
- 谷知子『和歌文学の基礎知識』角川選書、2006.5
- 手崎政男『有心と幽玄』笠間書院刊、1985.10
- 中里恒子『歌枕』講談社、2000.6
- 中島光風『上世歌學の研究』筑摩書房、1945.1
- 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』（縮刷版）小学館、1979.10-1981.4
- 日本文学研究資料刊行会編『新古今和歌集』有精堂出版、1980.4
- 橋本不美男、有吉保、藤平春男校注・訳『歌論集』（日本古典文学全集）小学館、1975.4
- 樋口芳麻呂『後鳥羽院——我こそは、にい島守よ』集英社、1985.1

- 樋口芳麻呂「ほか」『王朝の女流作家たち』世界思想社、1990.6
- 久松潜一校注『歌論集』西尾實校注『能楽論集』岩波書店、1961.9
- 久松潜一編校『歌論集 一』三弥井書店、1971.2
- 藤平春男『新古今歌風の形成』明治書院、1969.1
- 藤平春男『新古今とその前後』笠間書院、1983.1
- 藤平春男編『作者別年代順新古今和歌集』笠間書院、1993.3
- 松浦寿輝「ほか」『詩歌の饗宴』岩波書店、2003.11
- 松田修『古今集・新古今集の花』国際情報社、1982.1
- 丸谷才一『後鳥羽院』第二版、筑摩書房、2004.9
- 峯村文人校注・訳『新古今和歌集』（日本古典文学全集）小学館、1974.3
- 安田純生『歌枕試論』和泉書院、1992.9
- 安田純生『歌枕の風景』砂子屋書房、2000.12
- 安田章生『新古今集歌人論』桜楓社出版、1968.9
- 安田章生『藤原定家研究』至文堂、1975.6
- 築瀬一雄『無名抄全講』加藤中道館、1980.5
- 冷泉為人監修『冷泉家歌の家の人々』書肆フローラ、2004.11
- 和歌文学会編『論集藤原定家』笠間書院、1988.9
- 『和歌文学論集』編集委員会編『新古今集とその時代』風間書房、1991.5
- 渡邊裕美子『新古今時代の表現方法』笠間書院、2010.10
- Brower H. Robert, Miner Earl, *Japanese Court Poetry*, Stanford University Press, Stanford, California, 1961

- Huey N. Robert, *The Making of Shinkokinshū*, Harvard East Asian Monographs 208, Harvard University Asia Center, Cambridge, MA, 2002
- Kamens Edward, *Utamakura, Allusion, and Intertextuality in Traditional Japanese Poetry*, Yale University Press, New Heaven and London, 1997
- *Sagiyama Ikuko* (ed.) *Kokin Waka Shū – Raccolta di poesie giapponesi antiche e moderne*, 'Ariete' 2000. 3

論文（執筆者・五十音順）

- 赤瀬信吾「隠岐本「新古今和歌集」本文瞥見」『文学』6(4)号、1995.10、p.64-72
- 赤瀬信吾「隠岐本『新古今和歌集』の意味するもの」『國文學』42(13)号、1997.11、p.9-13
- 赤瀬信吾「『新古今和歌集』にみられる本歌取りの配列」『王朝文学の本質と変容』桐洋一編、和泉書院、2001.11、p.567-585
- 赤瀬信吾「本歌取りの配列をめぐる」『和漢語文研究』1号、2003.11、p.99-115
- 赤瀬信吾「新古今和歌集 精神そのものを表す「本歌取」」『歌のこころ ひとの心』、京都新聞開発編、財団法人大学コンソーシアム京都、2006、p.87-116
- 浅岡雅子「藤原定家「花月百首」——宇治の橋姫を中心にして」『古典和歌論叢』犬養廉編、明治書院、1988.4、p.423-438
- 浅岡雅子「千五百番歌合の定家の判詞——季歌における恋・物語の撰取をめぐる」『国語国文研究』95号、1994.3、p.44-57
- 浅岡雅子「定家と『千五百番歌合』（その㊦）——歌風の確立と本歌取」『北星学園大学文学部北星論集 Hokusei review / the School of Humanities』37号、2000.3、p.152-141

- 浅見徹「語彙から見た八代集」『国語と国文学』65(10)号、1988.10、p.1-12
- 安部清哉「八代集における形容詞使用頻度順対照語彙表——平安文学における形容詞資料-6」『フェリス女学院大学文学部紀要』31号、1996.3、p.69-94
- 有吉保「短歌用語の基礎知識-36-本歌取(ほんかど)り」『短歌』35(8)号、1988.8、p.276-278
- 糸井通活「地名(歌枕)の語構成——連帶助詞「の・が」をめぐる」『国語語彙史の研究』20号、2001.3、p.69-83
- 伊藤一男「八代集主要歌語・歌枕一覧」『國文學』——歌・歌ことば・歌枕——へうたくなるもの〈特集〉——34(13)号、1989.11、p.126-133
- 伊東成師「藤原良経の本歌取りについて」『学習院大学国語国文学会誌』——五味智英先生古稀記念特輯号——23号、1980.3、p.71-85
- 稲葉美樹他著・久保田淳編「歌語・歌枕辞典」『國文學』34(13)号、1989.11、p.100-125
- 今井明「本歌取りと本歌取りされる詞(和歌文学研究の問題点へ特集)」『國學院雜誌 The Journal of Kokugakuin University Kokugakuin zasshi』95(11)号、1994.11、p.88-97
- 岩坪健「歌枕と屏風絵」『國文學』——特集：旅と日記—王朝の女流を中心に——51(8)号、2006.7、p.98-106
- 上野順子「『奥入』攷——「引歌」から「本歌取」へ」『和歌文学研究』84号、2002.6、p.36-47
- 上野武「隠岐本と後鳥羽院怨霊の鎮魂——冷泉家時雨亭文庫蔵本『隠岐本 新古今和歌集』の成立について」『国語国文』68(9)号、1999.9、p.1-20
- 梅沢百合江「後鳥羽院研究—本歌取について」『学習院大学国語国文学会誌 〔大野晋先生古稀記念特輯号〕』34号、1991.3、p.52-70

- 江湖山恒明「新古今集の文法と文体」『國文學』2(9)号、1957.7、p.35-41
- 江湖山恒明「古今集・新古今集の解釈文法」『国文学』48(2)号、1983.1、p.137-166
- 及川道之「能因歌枕「国々の所々名」が意味すること」『日本文学風土学会記事』17号、1992.3、p.23-30
- 大木睦子「藤原定家と本歌取」『学習院大学国語国文学会誌』33号、1990.3、p.42-54
- 大野順子「藤原良経の『花月百首』について——初学期における本歌取りの状況を中心として」『古代文化』Cultura antiqua』57(7)号、2005.7、p.369-378
- 岡本あつ子「藤原俊成の歌風」『日本文芸研究』32(2)号1980.6、p.12-20
- 岡本あつ子「藤原俊成の美的理念——古来風体抄を中心として」『日本文芸研究』33(3)号、1981.9、p.21-32
- 尾上新太郎「藤原俊成の歌論」『大阪外国語大学学報 Journal of Osaka University of Foreign Studies』63号、1983、p.p1-10
- 折口信夫「「倭は國のまほろば」其他」、折口博士記念古代研究所編『折口信夫全集』第十卷、中央公論社、1966.1、p.305-315
- 柏木由夫「八代集の体言止」和歌文学会編『論集和歌とレトリック』笠間書院、1986.9、p.149-168
- 風巻景次郎「新古今集の歌風の変遷」『國文學』2(9)号、1957.7、p.15-22
- 片桐洋一「歌枕・吉野」『古典文学に見る吉野——桜トラスト運動記念講演録』片桐洋一ほか著、和泉書院、1996.4、p.2-30
- 加藤睦「藤原定家「正治二年院百首」覚書——本歌取と掛詞の使用を中心として（中世文学史の現在）」『国語と国文学』69(5)号、1992.5、p.124-135
- 加藤睦「藤原定家「千五百番歌合百首」覚書」『立教大学日本文学』80号、p.1998.7、p.2-12

- 金澤規雄「歌枕の伝承とその定着過程」『文藝研究』、76(1-8)号、1974.5、p.1-8
- 金子亜矢子「俊成卿女の本歌取り——『伊勢物語』の享受を中心に」『新潟大学国語国文学会誌』45号、2003.7、p.12-25
- 加納重文「兼実・良経と定家——九条家と御子左家」『女子大國文』126号、p.1999.12、p.1-21
- 加納重文「後鳥羽院と定家」『女子大國文』127号、2000.6、p.1-20
- 鎌倉暄子「「きのふこそさなへとりしか」の考察——古今和歌集における本歌取り的要素をめぐって」『文芸と思想』50号、1986、p.15-24
- 川平ひとし「「本歌取と本説取」——〈もと〉の構造——」『和歌文学論集』編集委員会編『新古今集とその時代』風間書房、1991.5、p.197-230
- 川村晃生「歌語・歌枕の成立」『國文學』——歌・歌ことば・歌枕——へうたくなるものへ特集——34(13)号、1989.11、p.81-93
- 川村晃生「古今集・歌枕の現在——破壊される現場」『文学』6(3)号、2005.5-6、p.113-119
- 菊地仁「もうひとつのへ本歌取へ形成史——へ和歌説話へからの接近」『國學院雜誌 The Journal of Kokugakuin University Kokugakuin zasshi』——和歌文学研究の問題点へ特集——95(11)号、1994.11、p.98-109
- 久保田淳・他「八代集の伝統と創意」『国文学』——花鳥風月の世界——古今集から新古今集までへ特集——50(1)号、1985.1、p.10-35
- 君嶋亜紀「『新古今和歌集』本歌取試論——後鳥羽院の春歌をめぐって」『国語と国文学』79(4)号、2002.4、p.42-55
- 君嶋亜紀「『毎月抄』の本歌取論について」『国語と国文学』83(8)号、2006.8、p.29-44

- 久曾神昇「新古今集の成立について」『國文學』号2(9) 1957.7 p.8-14
- 清原康正「新世紀文学館(5)、本歌取り、あるいは、パステイーシュー」『新刊展望』48(5)号 2004.5 p.20-23
- 倉田 実「平安朝四季歌の「…人」表現——八代集の傾向と「問ふ人」その他をめぐって」『大妻女子大学紀要 文系 Otsuma Women's University ' annual report. Humanities and Social Sciences』34号 2002.3 p.1-11
- 小原幹雄「新古今時代の歌枕」『國文學解釈と鑑賞』39(4)号 1974.4 p.53-61
- 小町谷照彦「古今集の歌枕」『日本文学』15号 1966.8 p.24-32
- 斎藤陽子「藤原定家研究——新古今集と新勅撰集とをめぐって」『日本文学』16号 1961.03 p.30-44
- 榊原照枝「後鳥羽院の研究——『遠鳥御百首』について」『語文』102号 1998.6 p.49-61
- 榊原照枝「『新古今和歌集』の天皇歌——巻頭・巻軸歌を中心に後鳥羽院の撰集意図との関わりにおいて」『語文』114号 2002.12 p.26-38
- 佐佐木忠慧「歌枕研究(その一)」『日本文学ノート』5号 1970.3 p.170-189
- 佐佐木忠慧「歌枕研究(その二)」『日本文学ノート』6号 1971.3 p.130-144
- 佐佐木忠慧「歌枕の歌論史」『研究論文集』38-39号 1972.3 p.187-207
- 佐佐木忠慧「歌枕の歌論史(二)——基俊と俊頼」『研究論文集』46号 1977 p.21-37
- 佐藤茂樹「定家の「麗様」の本質」『日本文芸研究』35(3)号 1983.9 p.8-21
- 佐藤恒雄「本文・本歌(取)・本説——用語の履歴——特集:古今集・新古今集 古今1100年/新古今800年記念——『國文學』49(12)号 2004.11 p.84-90
- 実方清「定家の歌論に於ける風姿の理念」『日本文芸研究』6(1)号 1954.03 p.1-17

- 実方清「八代集における歌風の展開」『人文論究 Humanities review The Journal of the Literary Association of Kwansai Gakuin University』7(1)号、1956.7、p.1-16
- 柴崎信子「古今集歌枕一覽表」『日本文学ノート』17号、1982.2、p.9-17
- 渋谷虎雄「勅撰名所和歌抄と五代集歌枕——その万葉歌を中心として」『学大国文』2号、1958.2、p.16-22
- 渋谷虎雄「勅撰名所和歌抄と五代集歌枕続考」『学大国文』3号、1959、p.20-29
- 島内景二・他「特集 隠されている短歌の約束事(10)「本歌取り」「歌病」「誤用」の問題」『短歌研究』63(6)号、2006.6、p.75-85
- 下西善三郎「本歌取りのくもとくとくかさねく」『上越教育大学国語研究』17号、2003.2、p.1-11
- 鈴木淳一「新古今和歌集隠岐本四季部の除棄歌について」『北海道学芸大学紀要』5(2)号、1954.12、p.1-9
- 鈴木日出男「歌枕の本性」『國語國文學論叢』——太田善麿先生古稀記念——1988.10、p.277-290
- 高木市之助「新古今集の時代環境」『國文學』号2(9)、1957.7、p.2-7
- 高橋良雄「歌枕研究序説」『学苑』313号、1966.1、p.78-88
- 武内章一・他「二十一代集における体言止めについて」『名古屋大学国語国文学』9号、1961.10、p.41-58
- 武内章一・他「続拾遺集についての一考察——体言止め、恋の歌の配列よりみて」『名古屋大学国語国文学』10号、1962.5、p.33-51
- 竹西寛子「記憶の継承——歌枕と本歌取」『群像』62(2)号、2007.2、p.140-147
- 田尻嘉信「歌枕卑見」『跡見学園国語科紀要』8号、1960.3、p.13-33

- 田尻嘉信「新古今集「名所目録稿」」『跡見学園国語科紀要』20号、1972
- 田尻嘉信「『能因歌枕』の名所記載」『跡見学園国語科紀要』33号、1985.4、p.29-64
- 田中初恵「定家における歌枕」『語文』86号、1993.6、p.27-37
- 田中初恵「藤原定家の歌枕詠における修辭」『國學院雜誌』95(11)号、1994.11、p.150-160
- 田仲洋己「藤原定家の本歌取一面」『國文學』42(13)号、1997.11、p.57-65
- 田中裕「隱岐本跋の問題」『語文』38号、1981.4、p.3-9
- 田中裕「近代秀歌から後鳥羽院御口伝へ——定家風の実体」『語文』53・54号、1990.3、p.3-11
- 谷昇「承久の乱に至る後鳥羽上皇の政治課題——承久年中「修法群」の意味」『立命館文學 The Journal of cultural sciences、the Ritsumeikan bungaku』588号、2005.2、p.401-424
- 谷山茂「新古今集の歌枕」『國文學』号2(9)、1957.7、p.42-49
- 田渕句美子「『新古今和歌集』序の成立——異文を持つ伝本による再構」『文學』4(2)号、2003.3・4、p.130-147
- 趙青「歌枕「塩釜の浦」の新古今的展開」『言語と文化 Issues in language and culture』7号、2006.3、p.179-196
- 塚田晃信「歌枕から名所和歌へ——はつせを中心に」『豊山学報』48号、2005.3、p.33-62
- 辻田弘之「後鳥羽院についての一考察——本歌取と定数歌をめぐる」『王朝文學 資料と論考』笠間書院、1992.8、p.412-428
- 寺前友美「隱岐本新古今和歌集について——後鳥羽上皇の撰歌意識に対する一考察」『武庫川国文』57号、2001.3、p.25-33
- 寺前友美、鳴尾説林「隱岐本新古今和歌集について(3)「橘」歌群における削除歌」『武庫川女子大学日

- 本文学談話会』11号、2003.12、p.21-34
- 寺前友美、鳴尾説林「隠岐本新古今和歌集について(中)削除された定家の恋歌」『武庫川女子大学日本文学談話会』12号、2005.1、p.36-48
- 寺島恒世「定家と後鳥羽院——「最勝四天王院障子和歌」をめぐる」『文学』6(4)号、1995.10、p.43-53
- 寺島恒世「定家的なものと後鳥羽院的なもの」『國文學』42(13)号、1997.11、p.38-44
- 寺島恒世「隠岐本新古今集の和歌削除——春の歌を通して」『東京医科歯科大学教養部研究紀要』36号、2006、p.1-14
- 中性哲「八代集の体言止めの歌の性格」『富山大学文理学部文学紀要 富山大学文理学部』11号、1962.2、p.40-53
- 名木橋忠大「立原道造 新古今和歌の受容——十四行詩における本歌取りと錯綜語法の再生」『国文学研究』143号、2004.6、p.62-73
- 名木橋忠大「「本歌取り」の誕生——『新古今集』定家三八番歌を通して(特集 近代)」『解釈』52(7・8)号、2006.7・8、p.45-52
- 錦仁「藤原俊成における下句への▽接続型表現の意味——「伏見の里の有明の空」などー序ー」『秋田大学教育学部研究紀要 人文科学・社会科学 Memoirs of the College of Education、Akita University. The Humanities & the social sciences』34号、1984.2、p.15-29
- 錦仁「藤原俊成の歌論と和歌史研究——へ和歌史への構想をめぐって(古典学者の群像——古代から近世まで)——(中世における古典学者)」『国文学』57(3)号1992.3、p.38-43
- 西下経一「新古今集の芸術性」『國文學』号2(9)、1957.7、p.23-28
- 長谷川權「桜の歌枕・俳枕——心の奥の吉野山」『國文學』——桜 桜花のエクリチュールへ特集——

46(5) 号、2001.4、p.94-98

- 八本木悟「新古今集の美的様式」・『日本文芸研究』36(1)号、1984.3、p.24-33
- 濱本倫子「俊成卿女の二首本歌取について」『清心語文』4号、2002.8、p.88-98
- 濱本倫子「俊成卿女の『狭衣物語』撰取について——後鳥羽院歌壇期の詠作を中心に」『和歌文学研究』86号、2003.6、p.23-33
- 樋口芳麻呂「定家」『國文學』2(9)号、1957.7、p.83-87
- 日比野浩信「『五代集歌枕』上巻の本文」『愛知淑徳大学国語國文』28号、2005.3、p.17-40
- 日比野浩信「『五代集歌枕』の古筆切」『汲古』50号、2006.12、p.29-36
- 藤井貞文「後鳥羽上皇御意志の成立」『神道宗教』13号、1956.10、p.66-73
- 藤田道也「体言止めをめぐって——万葉集・古今集・新古今集における喚体表現と述体表現」『愛媛国文研究』12号、1963.2、p.101-107
- 古橋信孝「歌枕の構造」『國語と國文學』51(5)号、1974.5、p.14-33
- 町屋洋子「新古今和歌集——本歌取について」『国文鶴見』号8、1973.3、p.19-30
- 松田豊子「歌枕「まくずがはら」の時空間——新古今時代まで」『光華女子大学研究紀要』38号、2000.12、p.35-52
- 丸山嘉信「新古今集の本歌取」『國文學』2(9)号、1957.7、p.50-55
- 峯村文人「新古今集と古今集の比較」『國文學』2(9)号、1957.7、p.56-61
- 峰村文人「『新古今集』時代の「幽玄体」」『人文科学研究 Humanities』号12、1977.12、p.1-18
- 三宅清「体言止めの分類——古今集・新古今集を資料として」『岡山大学教育学部研究集録 Bulletin of Faculty of Education Okayama University』84号、1990.7、p.33-38

- 村尾誠一「建保期の後鳥羽院——定家の本歌取方法論とのかかわりにおいて」『国語と国文学』60(11)号、1983.11、p.34-44
- 村尾誠一「古都と和歌——後鳥羽院の一首をめぐる」『古典和歌論叢』、明治書院、1988.4、p.406-422
- 村尾誠一「後鳥羽院と本歌取」『学習院大學國語國文學會誌』45号、2002.3、p.31-40
- 村田菜穂子「八代集の形容詞——語構成論的考察」『帝塚山学院大学日本文学研究』32号、2001.2、p.75-60
- 村田菜穂子「八代集の形容詞——語彙の計量的考察」『甲南国文』48号、2001.3、p.202-191
- 目崎徳衛「百人一首の作者たち」『短歌』28(3)号、1981.3、p.58-65
- 目崎徳衛「百人一首の作者たち」『短歌』28(4)号、[1981.4、p.134-140
- 目崎徳衛「史伝後鳥羽院 承の巻 その2『新古今集』成る」『短歌』44(2)号、1997.02、p.54-60
- 森本茂「歌枕と名所」『平安文学研究』53号、1975.6、p.14-20
- 矢崎祥子「本歌取の価値観——異文化共存のための模索」『言語と交流』Language and cultural exchange』9号、2006、p.43-57
- 安田章生「後鳥羽院」『國文學』2(9)号、1957.7、p.99-102
- 山口美乃「ある歌枕の変遷——万葉から新古今まで吉野の歌」『湘南文学』17号、1958.3、p.41-55
- 山崎敏夫「新古今集の体言止歌の下句構造」『愛知県立女子大学説林—— The Bulletin of the association of the Japanese Literature of Aichi Prefectural Women's College』7号、1960.12、p.1-15
- 山下雅人「藤原俊成 古来風体抄——短歌の普遍的な美学」『短歌研究』——現代感覚でよむ歴史的「歌論」へ特集——46(7)号、1989.7、p.41-45
- 山本一「『六百番歌合』判詞の「幽玄」」『国語と国文学』74(11)号、1997.11、p.52-61

- 吉田薫「新古今集の藤原俊成歌——形態面から見た特徴」『大阪信愛女学院短期大学紀要』34号 2000〕、p. 1-12
- 米沢達夫「『新古今和歌集』の構成と本歌取」『日本文学の伝統と創造 阿部正路博士還暦記念論文集』教育出版センター、1993. 6、p. 97-108
- 渡辺輝道「後拾遺集の歌枕用法——山代集との共通歌枕を通して」『高大國文』14号、1983、p. 1-23
- 渡部泰明「『千載和歌集』と本歌取り」『ソフィア——西洋文化ならびに東西文化交流の研究』45(2)号、1996. 6、p. 202-216
- Konishi Jin'ichi、Robert H. Brower and Earl Miner (ed.)、"Association and Progression: Principles of Integration in Anthologies and Sequences of Japanese Court Poetry, A. D. 900-1350"、*Harvard Journal of Asiatic Studies*、21号、1958、p. 67-127